フランス語心理動詞の認知意味論的研究
―感情動詞と感覚動詞のイベント構造について―

川上夏林

謝辞

本論文は，筆者が京都大学人間・環境学研究科の修士課程と博士後期課程を経て，単位取得満期退学後 3 年間の間にまとめたものです．

学部生のころ，図書館で偶然に手にとった書物がロラン・バルト著『モードの体系』でした．この書著は衣服を題材にしたものですが，言語がモードという意味作用を作り上げているという考え方に衝撃を受けたことを今でもよく覚えています．以来，言語に惹かれ，言語学という学問があることを知り，その道を歩むことになりました．修士課程からご指導くださった東郷雄二先生は，研究テーマが博士論文という 1 つの形になるまでの長いあいだ，筆者をいつも温かく見守り，道筋を示してくださいました．そして何より，先生からは探求することの楽しさを学びました．博士課程以降，ご指導いただいた守田貴弘先生からは，日本フランス語学会で行った初めての学会発表以来，たくさんの助言をいただき，また，既存の枠組にとらわれずに，議論の前提を問うことの意義を学びました．論文審査の折には，谷口一美先生から理論的問題点を解決するための手がかりとなる助言をいただき，堀口大樹先生は，筆者が今後取り組むべき課題を多数ご提案くださいました．

本論文は，〈私〉，〈いま・ここ〉という主観性を骨子に展開していますが，着想とその発展は，木本幸憲氏，田丸歩美氏，春日悠生氏，溝上瑛梨氏とともに行った主観性読書会での議論が基礎となっています．論文を書き進めるために，津田洋子氏，谷口永里子氏をはじめとする研究室の方々との議論にも助けられました．また，修士課程のころにお誘いいただき，参加してきた読書会では，分野を超えた書物に触れる機会を得ることができ，霜田洋介氏，小松原哲太氏，小松原記子氏，寺田晋一郎氏，寺山慧氏，佐野泰之氏，飯島雄太郎氏らとの議論は，発想力を刺激してくれるものでした．本論文の議論は，日本フランス語学会での口頭発表及び学会誌での研究発表を発展させたものですが，同学会の発表では，早稲田大学の酒井智宏先生，東京大学の渡邉淳也先生から様々な助言をいただきました．本論文は，ここに氏名を掲載した方々だけではなく，はるかに多くの人々との議論のもと執筆されたものです．以上の方々に深くお礼申し上げます．なお，本論文における不備に関しては，すべて筆者に帰するものです．

最後に，研究生活を支え，背中を押し続けてくれた家族に心から感謝します．

2022 年 1 月

川上夏林

目次

第 1 章　序論　1

1.1.　分析対象とする現象の画定　1
1.2.　問題提起　4
1.3.　先行研究の概観とその問題点　9
　1.3.1.　心理動詞研究のはじまり : POSTAL (1970, 1971)　9
　1.3.2.　感情動詞研究の流れ　11
　　1.3.2.1.　リンキング規則と感情動詞　11
　　1.3.2.2.　目的語型感情動詞のイベント構造分析　13
　1.3.3.　問題点の整理と分析の方向性　15
1.4.　動詞リスト　16
1.5.　本論文の構成　21

第 2 章　イベント構造記述の認知意味論的アプローチ　23

2.1.　動詞の意味カテゴリーとイベント構造の捉え方　23
　2.1.1.　生成文法的アプローチ　23
　2.1.2.　本研究の立場　25
2.2.　LCS 分析のイベント構造記述モデルの検討　27
　2.2.1.　意味述語を用いた記述モデル　27
　2.2.2.　問題点　28
　　2.2.2.1.　概念化者と事象の関係　28
　　2.2.2.2.　アスペクト記述の問題　31
2.3.　認知意味論的イベント構造記述モデル　33
　2.3.1.　参与者間の意味関係の記述モデル　34
　　2.3.1.1.　ステージモデル (STAGE-MODEL)　34
　　2.3.1.2.　ビリヤードボールモデル (BILLIARD-BALL MODEL)　38
　2.3.2.　アスペクトの分析モデル　40
　　2.3.2.1.　明らかにすべきアスペクトの問題　40
　　2.3.2.2.　時間，質，フレーム，プロファイル　41
　　2.3.2.3.　アスペクトタイプ　44
　　2.3.2.3.1.　状態アスペクト　45
　　2.3.2.3.2.　到達アスペクト　46
　　2.3.2.3.3.　活動アスペクト　47
　　2.3.2.3.4.　達成アスペクト　49

2.4. まとめ 50

第 3 章 心理動詞性の考察 52

3.1. 心理動詞とは何か 52
3.1.1. RUWET (1994) : 感じられることとしての心理 53
3.1.2. 文の中で生まれる心理動詞性 55
3.1.2.1. 〈私〉,〈いま・ここ〉における心理の表出 56
3.1.2.2. 〈特殊な因果関係〉 61
3.2. 行為動詞からの転用現象 63
3.3. 心理動詞性の発現の構文論的条件とそのメカニズム 67
3.4. 心理動詞性の段階性 70
3.4.1. 表出型 71
3.4.2. 描写型 72
3.4.2.1. 描写型 I 73
3.4.2.2. 描写型 II 75
3.5. まとめ 78

第 4 章 感覚動詞のイベント構造分析 80

4.1. 解決すべき問題 80
4.2. 感覚事象の特徴 82
4.3. 概念化の度合いに基づく構文タイプ 84
4.4. 構文タイプと転用可能な動詞 87
4.5. 参与者間の意味関係の考察 92
4.5.1. 行為動詞の参与者間の意味関係 92
4.5.2. 感覚動詞の参与者間の意味関係 98
4.5.2.1. 場としての全体と，原因と部分の接触関係 98
4.5.2.2. 構文タイプ A と属性解釈の関係 105
4.6. アスペクトの考察 107
4.6.1. 行為動詞のアスペクト 107
4.6.2. 感覚動詞への転用とアスペクトの変化 112
4.6.2.1. 接触による一時的状態性 113
4.6.2.2. 属性解釈とアスペクト 120
4.7. 感覚動詞への意味拡張と描写型 II の問題 121
4.8. まとめ 126

第 5 章 感情動詞のイベント構造分析 128

5.1. 解決すべき問題 128
5.2. 感情事象の特徴と共起可能な構文タイプ 130
5.3. 参与者間の意味関係の考察 133
5.3.1. LANGACKER (2009) : 認知作用 135
5.3.2. VOORST (1995) : コントロールの不在 137
5.3.3. 2 つの作用から特徴づけられる参与者間の意味関係 139
5.4. アスペクトの考察 141
5.4.1. 状態変化による一時的状態性 141
5.4.2. 状態焦点型と状態変化焦点型 149
5.4.3. アスペクトタイプと感情事象の意味タイプ 154
5.5. 描写型 II の目的語型感情動詞のイベント構造分析 160
5.5.1. アスペクトの考察 160
5.5.1.1. 状態焦点型 160
5.5.1.2. 状態変化焦点型 163
5.5.1.3. 行為動詞と描写型 II の比較 165
5.5.2. 参与者間の意味関係の考察 166
5.6. 構文タイプ D と感情動詞 169
5.7. まとめ 172

第 6 章 結論 174

6.1. 考察のまとめ 174
6.2. 本研究の貢献 179
6.3. 課題と展望 180

参考文献 184

第 1 章　序論

本論文は，フランス語の心理動詞を分析対象とし，特に経験者が主語以外に置かれる動詞を対象とする．これらの動詞のイベント構造を分析することで，心理事象がどのように概念化され，言語的に表現されるのかという問題を認知意味論的枠組から論じることを目的とする．

1.1.節では，本論文で扱う現象を画定し，1.2.節にて問題を提起する．1.3.節では，心理動詞について論じた先行研究を概観する．そして先行研究の分析では，本論文で扱う問題を明らかにできないことを述べ，分析の方向性を示す．1.4.節では分析対象とする動詞のデータの説明を行う．1.5.節では本章のまとめと第 2 章以降の考察手順を提示する．

1.1. 分析対象とする現象の画定

心理動詞は，統語的観点から大きく 2 つのタイプに分けられる．1 つは，心理の主体 (以下，経験者と呼ぶ) が主語 (主格表示) に置かれるタイプである．(1a), (2a) がこのタイプに含まれる．もう 1 つは経験者が直接目的語 (対格表示) で表されるタイプである．(1b)，(2b) がこのタイプに含まれる[1] [2].

(1)　a. Pierre méprise l'argent.　(Ruwet 1972)
　　'Pierre despises the money.'
　　b. L'argent dégoûte Pierre.　(ibid.)
　　'The money disgusts Pierre.'

(2)　a. J'ai mal à la tête.　(ibid.)
　　'I_i have pain at the $head_i$.' [3]
　　b. Ce pull me démange.
　　'This sweater itches me.'

(1)，(2) に挙げた 2 つの心理動詞のうち，本論文では，(1b)，(2b) のように，経験者が直接目的語に置かれる心理動詞について論じる．これに加えて，(3) に示すように，経験者が間接目的語 (与格表示) に置かれ，経験者と分離不可能所有関係を結ぶ身体部分を表す名詞句を直接目的語に置く現象も分析対象とする．

---

[1] 経験者が主語に置かれる心理動詞は，Ruwet (1993, 1994) では I 型，Pesetsky (1990) では ES 動詞 (Experiencer Subject verb) と呼ばれ，経験者が目的語に置かれる心理動詞は，Ruwet (1993, 1994) では II 型，Pesetsky (1990) では EO 動詞 (Experiencer Object verb) と呼ばれる．

[2] 例文には英語の逐次訳を添える．分析対象とする現象には，経験者が直接目的語 (対格) と間接目的語 (与格) に置かれるものがあるが，対格と与格は区別せずに訳す．

[3] 指標「i」が付与される名詞句同士は，分離不可能所有関係にあることを表す．

(3) Le froid m'a engourdi les doigts. (『ロワイヤル仏和中辞典』)
'The cold made me$_i$ numb in the fingers$_i$.'

フランス語では，経験者が間接目的語に置かれる心理動詞には，(4) のようなタイプもある．しかし本研究では，経験者が間接目的語に置かれる例のうち，(3) のように，直接目的語に分離不可能な身体部分をとる現象のみ扱う[4].

(4) Ce pull me plaît.
'This sweater please me.'

経験者が直接目的語に置かれる (1b)，(2b) タイプ，経験者が間接目的語に置かれ，直接目的語に分離不可能所有関係を持つ名詞句が置かれる (3) タイプの動詞をまとめて，「目的語型心理動詞」と呼ぶことにする．心理動詞をめぐる研究は，経験者が主語に置かれる心理動詞と経験者が直接目的語に置かれる心理動詞の対比の中で発展してきた．1.3.節では，経験者が主語に置かれる心理動詞にも言及することになるので，経験者が主語に置かれる心理動詞を「主語型心理動詞」と呼ぶことにする[5].

続いて，分析対象とする心理動詞の意味カテゴリーの特徴について説明する．従来の心理動詞研究では，(1) に挙げた，喜怒哀楽などの感情事象を表す心理動詞 (以下，感情動詞と呼ぶ) に議論が集中していたが，本論文では (2b)，(3) のように，身体部分で経験される痛みや痒みなどの生理的感覚を表す心理動詞 (以下，感覚動詞と呼ぶ) も分析対象に含める．第 3 章で述べるように，感覚は「どこが痛いの？」という質問に答えられるように，感覚が生じる部分を特定することができるのに対して，感情は「*頭が悲しい」と言えないことから分かるように，感情が生じる部分を特定することはできないという違いがある．

さらに，これまでの心理動詞研究では，(1) に挙げた動詞のように，感情事象を表すことに特化していると考えられる動詞を中心に分析が進めらてきたが (1.3.節にて詳述)，本論文では (5) に示す，*tanner* (to tan)，*gonfler* (to inflate) のように，典型的な用法では行為事象などの非心理的な事象を表す動詞が心理動詞

---

[4] Ruwet (1993, 1994) では (4) タイプの動詞は III 型と呼ばれる．*plaire* (to please) の他に *déplaire* (to displease)，*répugner* (to disgust) などがこのタイプに含まれる．

[5] 主語型心理動詞と目的語型心理動詞という呼称は，Pesetsky (1990) の ES (Experiencer Subject) 動詞および EO (Experiencer Object) 動詞を日本語訳したものではない (cf. 注 1)．目的語型心理動詞には，経験者が直接目的語に置かれるタイプと間接目的語 (かつ身体部分が直接目的語) に置かれるタイプが含まれるが，Pesetsky (1990) が EO 動詞として扱う動詞には，経験者が間接目的語に置かれるタイプは含まれない．

に転用される現象を中心に議論を行う[6].

(5) a. Ces histoires me tannent.
‘These stories tan[bore] me.’
b. Tes histoires nous gonflent.
‘Your stories inflate[bother] us.’

(5) は感情動詞へ転用された行為動詞の例であるが，感覚動詞に関しても行為動詞からの転用現象を分析の主軸とする．たとえば (6) のような現象である．*gratter* (to scratch)，*couper* (to cut) は，典型的な用法では行為事象を表すが，(6) では「セーターで痒い」,「風で顔がビリビリする」という感覚を表す動詞として使用されている[7].

(6) a. Ce pull me gratte.
‘This sweater scratches me.’
b. Le vent me coupe le visage.
‘The wind cuts me$_i$ at the face$_i$.’

(1b) の *dégouter* や (2b) の *démanger* のように，心理事象を表すことに特化していると考えられる動詞を「語彙型」，(5)，(6) のように心理事象以外の事象を表す動詞が感情動詞または感覚動詞として使用されている動詞を「転用型」と呼ぶことにする．感情動詞と感覚動詞をまとめて指す場合は，「心理動詞」という用語を用いることにする．同様に，感情事象と感覚事象の上位カテゴリーとして「心理事象」を位置づける．表 1 に本研究で扱う心理動詞の統語的，意味的分類をまとめる．分析対象としない現象は斜線表示とする[8] [9].

---

[6] 非心理的な事象を表す動詞が心理動詞として使用される例の英訳には，転用前の意味と転用後の意味 (カギ括弧で括る) を併記する．例 : *gonfler* (to inflate[to bother])．動詞の英語表記の詳細については 1.4.節でまとめる．

[7] 生理的感覚を表す文には，身体部分が主語，経験者が間接目的語に置かれる次のような現象がある．e.g. *La tête lui tourne.* ‘The head$_i$ turns him/her$_i$.’「(彼/彼女は) 頭がクラクラする」(cf. 井口 2005)．このタイプの現象は本論文では扱わない．

[8] 1.3.1.節で見るように，Postal (1970, 1971) は，*think, seem* などの思考を表す動詞，*perceive* などの認識を表す動詞，*smell* などの知覚を表す動詞を心理動詞に含めている．本論文ではこれらの動詞については論じないので表には含めていない．

[9] 本文で述べたように，感情事象は身体部分が関与しにくい現象なので，(3) のような構文を取りにくいが，目的語型の感情動詞には，*Tu me casses les pieds !* ‘You break me$_i$ in the feet$_i$.’(=You bother me.)，*Ça me réjouit le cœur.* ‘It delight me$_i$ on the heart$_i$.’ など，経験者が間接目的語に置かれ，分離不可能所有関係にある名詞句を直接目的語に取る例が少数ながら存在する．このような現象については第 5 章で論じる．「*」は後ほど扱う現象であることを示す．

		心理動詞			
		感情動詞		感覚動詞	
		語彙型	転用型	語彙型	転用型
主語型		*mépriser*			
目的語型	直接目的語	*dégoûter*	*gonfler*	*démanger*	*gratter*
	間接目的語／身体部分直接目的語	*	*	*engourdir*	*couper*

表 1 本研究で扱う心理動詞の統語的分類と意味的分類

1.2. 問題提起

(5), (6) のような転用型を軸にして，心理動詞の広がりとその振る舞いを観察してみると，大きく 2 つの問題が浮かび上がってくる．1 つずつ見ていこう．

まず，主語型の心理動詞に比べて，目的語型の心理動詞は，行為動詞を中心にして，心理事象以外の事象を表す動詞からの転用が多く，増加傾向にある (cf. Ruwet 1972, 1995, Bouchard 1995)．Ruwet (1972) は，行為動詞が目的語型感情動詞として振る舞う動詞として実に 148 もの動詞を列挙している．また，現在の用法から見ると語彙型に分類される目的語型感情動詞も，通時的変化に目を向けると，心理事象以外の事象を表す動詞からの転用であることが多い．たとえば，*navrer* (to upset) は，現在では「悲しませる」という意味で使用されることが多いが，古い用法では「負傷を追わせる」という行為動詞として使用されていた．また，*atterrer* (to shock)も共時的には「唖然とさせる」という用法を持つが，以前は「地面に投げ倒す」という意味で使用されていた．目的語型感覚動詞に関しては，*démanger* (to tich) や *engourdir* (to numb) のように語彙型と呼び得る動詞はあるものの，それ以上に *couper* (to cut) などの行為動詞からの転用であることが多い (1.4.節に動詞リストを提示する).

これまでの心理動詞研究では，ある動詞が心理動詞であるかどうかは，レキシコンの問題，つまり，動詞にアプリオリに備わる語彙情報であるという (暗黙の) 前提の上で議論が進められてきた．しかし，転用型に目を向けて，共時的，通時的観点から心理動詞の存在を捉えると，動詞が心理動詞のステイタスを持つかどうかは—以下，動詞が心理動詞のステイタスを持つことを「心理動詞性を持つ」と呼ぶ—，少なくとも目的語型に関しては，動詞にあらかじめ備わる語彙情報としてではなく，具体的な文における使用 (usage) の中で発現する現象として捉えたほうが妥当であると考えられる．

転用型の目的語型心理動詞が多いこと，心理動詞性が文レベルにおいて発現すると考えられることを踏まえて，次の問いを提起する．

問 1　a. 行為動詞から転用によって目的語型心理動詞が増加するのはなぜか.
　　b. 心理動詞性はどのような構文論的条件の下で発現するのか.

以上 2 つ問いに答えるためにまずは，心理動詞がどのような意味カテゴリーであるかを検討する必要がある．心理動詞とは，心理事象を表す動詞カテゴリーであり，それ以上説明すべきことはないように思われる．しかしこの定義には検討すべき問題がある．というのも，「心理事象を表す」ことの内実を明らかにしなければ，例えば，*blinder* (to armor)，*dénaturer* (to denature) のような動詞も，心理動詞として扱うことが可能になってしまうからである (cf. Gross 1975). この 2 つの動詞は，順に「装甲する」,「変質させる」という物理的な事象を表す用法を持つが，比喩的に使用することで，*blinder* は「人を鍛える，強くする」，*dénaturer* は「性格を変える」という人間に関わる抽象的な事態を表すことができる．抽象的な事柄を表すという点では，「うんざりさせる (5)」,「(顔を) ビリビリさせる (6b)」という表現と共通点を持つかもしれない．しかし,「うんざりさせる」,「(顔を) ビリビリさせる」などと，*blinder*，*dénaturer* の比喩的用法を同じように扱うことには抵抗を覚えざるを得ない．「人を鍛える」,「性格」を変えるという出来事は，喜怒哀楽，生理的感覚のように内面で感じられる出来事とは性質が大きく異なると考えられるからである．このような混乱を回避するためには，心理事象とは何か，心理事象を言語的に表すとはどのような機能的価値を持つのかという問題まで掘り下げて心理動詞の定義を考えなければいけない．以上の観点から心理動詞の定義を論じることによって，転用による目的語型心理動詞の増加，そして，心理動詞性を発現させる構文論的条件の考察が可能になると考えられる[10].

転用現象から見える 2 つ目の大きな問題は，動詞の振る舞いに関するものである．(5)，(6) において *tanner*，*gonfler*，*gratter*，*couper* が心理動詞性を獲得するとき，それに連動して動詞の振る舞いも変化する．*gonfler*，*couper* を例にしてその変化を見てみよう[11].

(7)　a. ?? Paul a gonflé le ballon pendant une heure.

---

[10] 以上の論理に従うと，心理動詞の定義を検討した上でないと，(5)，(6) に含まれる動詞が心理動詞である言うことはできないが，ここでは結論を先取りして，(5)，(6) に含まれる動詞は心理動詞性を持つものとして議論を進めることにする．以下の考察においても，文に含まれない動詞を心理動詞 (あるいは感情動詞，感覚動詞) と名指す場合は，「潜在的に心理動詞性を持つ可能性があり，かつ，心理動詞性を持っている場合」という前提があるものとする．

[11] 本文 (7a)，(8a) は目的語 ballon，peau を定冠詞ではなく不定冠詞複数，あるいは部分冠詞で限定すると容認される．ただしその場合の解釈は，何個もの風船を膨らませ続けた，皮を鞣し続けたという行為の反復解釈を持ち，(7b)，(8b) のような状態の継続解釈にはならない．

‘Paul inflated the balloon for one hour.’

b. Tes histoires nous ont gonflés toute la journée.

‘Your stories inflated[bothered] us all day.’

(8) a. *Paul a coupé le bois toute la journée.

‘Paul cut the wood all day.’

b. Le vent m’a coupé le visage durant le trajet.

‘The wind cut me$_i$ in the face$_i$ during the journey.’

gonfler，*couper* が行為動詞として振る舞う場合，(7a)，(8a) から，複合過去形では継続時間副詞句を付加することはできないことが分かる．ところが，これらの動詞が心理動詞性を持つ場合，(7b)，(8b) から継続時間副詞句を付加できることが分かる．1.3.2.2.節で述べるように，時間を表す副詞句との共起関係は，動詞のアスペクトの問題と関わるので，以上の結果から，*gonfler*，*couper* は心理動詞性を獲得することでアスペクトが変化していると考えられる．

副詞句との共起関係や，後ほど検討する受動文などの現象も含めて，動詞の統語的意味的振る舞いを分析する文法理論の 1 つに語彙概念構造分析 (Lexical Conceptual Structure Analysis，以下，LCS 分析) という分析モデルがある．語彙概念構造分析とは，各動詞の特性を概念的な意味構造―以下，イベント構造と呼ぶ―に分解し，意味構造から動詞の様々な振る舞いを説明しようとする分析枠組である (第 2 章で詳述する). この考え方に注目すると, (7a) と (7b), (8a) と (8b) の対比は，*gonfler*，*couper* が心理動詞性を獲得することに連動して，イベント構造が変化することを示す現象として捉えることができる．そこで次の問いを提起する．

問 2　心理動詞性の獲得によって動詞のイベント構造はどのように変化するのか．行為動詞との対比において，目的語型心理動詞のイベント構造はどのような特異性を持つのか.

動詞の振る舞いに関する問題はこれだけではない．目的語型心理動詞の間の振る舞いを観察すると，問 2 はさらに 2 つの問題に分化する．1 つ目は，感情動詞と感覚動詞の相違に関わる問題である．(7b)，(8b) が示すように，感情動詞も感覚動詞も，継続時間副詞句と共起可能であるが，受動化においてこれらの動詞は異なる振る舞いをする．(9) は *Tes histoires nous gonflent*. (=5b) の受動文，(10) は *Le vent me coupe le visage*. (=6b) の受動文である．

(9) a. Nous sommes gonflés par tes histoires.

‘We were inflated[bothered] by your stories.’

b. Nous sommes gonflés avec tes histoires.

‘We were inflated[bothered] with your stories.’

(10) a. ?? Le visage m’est coupé par le vent.

‘The face$_i$ is cut me$_i$ by the wind.’

b. ?? Le visage m’est coupé avec le vent.

‘The face$_i$ is cut me$_i$ with the wind.’

(9) から目的語型感情動詞は，能動文の主語が前置詞 par によって導入される受動文と，par 以外の前置詞によって導入される受動文への置き換えが可能であることが分かる．前者は動的受動文，後者は形容詞的受動文と呼ばれる (cf. 平田 2001，丸田 1998)．これに対して目的語型感覚動詞は，(10) から分かるように，いずれの受動文にも置き換えることができない．

(5b) と (6b) は，統語的特徴が異なるので，目的語型感情動詞と目的語型感覚動詞の受動化の違いは，双方の統語構造の違いに起因すると思われるかもしれない．しかし，以下 2 つの現象からそうではないと言うことができる．

(11) a. Paul m’a envoyé le colis.

‘Paul sent me the parcel.’

b. Le colis m’a été envoyé par Paul.

‘The parcel was sent me by Paul.’

(12) a. Ce pull me gratte. (=6a)

b. ?? Je suis gratté par ce pull.

‘I was scratched by this sweater.’

c. ?? Je suis gratté avec ce pull.

‘I am scratched with this sweater.’

(11a) は受益動詞の例で，(6b) と同じように直接目的語と間接目的語を取るが，(11b) から，(動的) 受動文への置き換えが可能であることが分かる．そして，経験者が間接目的語ではなく，直接目的語に置かれる感覚動詞の例 (12a) を見てみると，(12b, c) の結果が示すように，動的受動文にも形容詞受動文にも置き換えることができない．ここから，(6b)，(12a) が受動文へ置き換えることができないことには，これらの文において *couper*，*gratter* が感覚動詞として使用されているという意味的特徴が関与していると考えられる．以上の観察から次の問いを立てる．

問 2　a.目的語型の感情動詞と感覚動詞のイベント構造は，どのような共通点および相違点を持つのか.

感情事象も感覚事象も，人間の内面で経験される出来事であるが，感覚事象は，身体部分で知覚される刺激を経験者 (全体) が痛みや痒みとして経験する事象であるのに対して，感情事象にはこのような全体―部分の区別が関与しない．本論文では，このような現象面での違いが感情動詞と感覚動詞のイベント構造の相違に関与すると考える．

問 2 の 2 つ目の問題は，目的語型感情動詞内部の問題である．(7) において *gonfler* は感情動詞へ転用されることで，継続時間副詞句と共起可能になることを示した．ところが，*gonfler* と同じように行為動詞用法を持つ *frapper* (to strike) が感情動詞へ転用されると，(13) に示すように継続時間副詞句と共起しにくい．

(13)　?? Ses paroles m'ont frappé toute la journée.
'His/her words struck me for all day.'

(13) の結果だけを見ると，目的語型感情動詞 *frapper* は，(7a)，(8a) の行為動詞と同じ振る舞いをする．ところが，以下に示す (14a) と (14b, c) の対比から，所要時間副詞句の共起関係においては，転用型の目的語型感情動詞 *frapper* は，行為動詞とではなく，(7b) の *gonfler* と同じ振る舞いをすることが分かる．

(14)　a. Paul a gonflé le ballon en dix minutes.
'Paul inflated the balloon in ten minutes.'
b. ?? Tes histoires nous ont tannés en dix minutes.
'Your stories tanned[bored] us in ten minutes.'
c. ?? Ses paroles m'ont frappé en dix minutes.
'His/her words struck me in ten minutes.'

以上の結果は，*frapper* だけに認められる特徴ではなく，*foudroyer* (to strike down)，*surprendre* (to catch[to surprise])，*déchirer* (to tear[to hurt]) などの転用型や，語彙型の目的語型感情動詞 *étonner* (to surprise)，*estomaquer* (to astound) などにも共通する．ここから，目的語型感情動詞は，その振る舞いにおいて均一な動詞カテゴリーではないことが予想される．そこで以下の問いを提起する．

問 2　b. 感情動詞のイベント構造は 1 つしかないのか. それともいくつかのタイプに分かれるのか.

先行研究を概観する 1.3.節に示すように，部分的にではあるが，目的語型感情動詞が行為動詞とは異なるイベント構造を持つことが明らかにされつつある．しかし，目的語型感覚動詞の問題 (問 2-a)，目的語型感情動詞内の問題 (問 2-b) は手つかずのままである．

また，問 2 を考察するためには，イベント構造の記述モデルが必要となるが，LCS 分析で使用されるモデルは十分な記述枠組を提供するものではない．LCS 分析のモデルが抱える問題と本研究の分析モデルについては第 2 章で論じる．

1.3. 先行研究の概観とその問題点

1.3.1.節では，心理動詞研究の嚆矢となった Postal (1970, 1971) を取り上げて，その中で心理動詞として扱われた動詞の意味的特徴を確認し，論点をまとめる．Postal (1970, 1971) 以後の感情動詞研究では，目的語型の感情動詞に議論が集中することになるが，1.3.2.節では，そのように心理動詞研究がシフトすることになった理論的背景を確認する．そして，目的語型感情動詞のイベント構造に関してどのような見解が提示されているのかをまとめる．1.3.3.節では，1.2.節で提起した問題と照らし合わせながら，先行研究の問題を整理し，分析の方向性を示す．

1.3.1. 心理動詞研究のはじまり：Postal (1970, 1971)

Postal (1970, 1971) では，(15)，(16) のような例に含まれる動詞が心理動詞と見なされた[12]．斜体表示は経験者を表す．

(15) a. *I* think that vampires have large livers. (Postal 1970)
b. *I* perceive that Max has a large liver. (ibid.)
c. *I* was disgusted with Max. (ibid.)
d. *I* tasted the meat. (ibid.)

(16) a. It seems to *me* that vampires have large livers. (ibid.)
b. It strikes *me* that Max has a large liver. (ibid.)
c. Max disgusted *me*. (ibid.)
d. That monkey smells to *me* as if it were dying. (Postal 1971)
e. My foot itches. (ibid.)

表される事象の意味タイプに注目してみると，「思う，思われる」などの思考事象，「見える」，「臭う」などの知覚事象，「驚く」，「嫌悪を抱かせる」などの喜怒

[12] Postal (1970, 1971) では (15c) は形容詞文として扱われているが，本論ではこの例は能動文 *Max disgusts me.*の受動文として位置づける．

哀楽に関わる感情事象，そして「痒い」などの感覚事象を表す動詞が心理動詞の現象として扱われていることが分かる．

Postal (1970, 1971) では，経験者は論理的主語 (logical subject) であると考えられた．そのため，経験者が主語以外の統語的位置に実現される (16) の現象をどのように説明するかが問題にされた．(16c) を例にして Postal (1970, 1971) の主張をまとめる．まず (16c) は，基底構造 (17) を持ち，論理的主語 me はもっとも高い位置に置かれると仮定される ((17) の表記は Ruwet (1972) の表記を参考にしたものである).

(17) me ― disgust ― Max

次に基底構造 (17) に対して，PSYCH-MOVEMENT という変形規則が適用される．この規則が適用されることで，論理的主語は主語位置から移動し，表層構造 (16c) が完成する．以上が Postal (1970, 1971) の概要である[13].

その後の研究では，変形規則という操作自体が問題視されるようになったため，Postal (1970, 1971) 以降の心理動詞研究で，PSYCH-MOVEMENT という仮説が踏襲されることはなかった．ここでは，Postal (1970, 1971) が抱えた問題点には触れず，Postal (1970, 1971) とそれ以降の心理動詞研究の共通点と相違点を述べておきたい.

共通点は，Postal (1970, 1971) 以後の研究においても，経験者が主語以外の統語的位置 (主に直接目的語) に実現される現象が注目されたことである．換言すると，経験者は主語に置かれるべきであるにも拘らず，主語位置以外の統語的位置に経験者が実現される心理動詞が存在するのはなぜか，という共通の問いがあった.

相違点は，Postal (1970, 1971) では，様々な意味タイプの動詞が心理動詞の現象として扱われたが，それ以後の研究では，感情動詞が注目を集め，さらにその中でも，語彙型の感情動詞に議論が集中した．その結果，心理動詞研究は一面的なものになる．フランス語では，(18)，(19) のような動詞を対象にして心理動詞研究が進められることになる．(18) は主語型感情動詞，(19) は目的語型感情動詞の例である[14].

---

[13] (16e) は，その他の例文とは異なり，論理的主語の資格を持つ項が統語的に実現されていない．しかし Postal (1971) では，この例は，*My foot itches to me.*の me が削除されたものだと考えられている．フランス語では (16e) に相当する，*La tête lui tourne.* ‘The head$_i$ turns him/her$_i$.’「(彼／彼女は) 頭が回る」では，経験者は統語的に実現される (cf. 注 5)

[14] Ruwet (1972) は Postal (1970, 1971) の PSYCH-MOVEMENT を検討する際に，感覚動詞について次のように述べた上で，感情動詞に限定して議論を進めている．‘J’en parlerai moins, dans la mesure où, apparemment plus encore en français qu’en anglais, ces prédicats présentent des caractères très

(18) mépriser (to despise), aimer (to like), adorer (to love), admirer (to admire), apprécier (to appriciate), détester (to dislike), redouter (to fear), etc.

(19) dégoûter (to disgust), amuser (to amuse), agacer (to annoy), ennuyer (to bore), terrifier (to terrify), étonner (to surprise), préoccuper (to worry), etc.

(Ruwet 1972 : 189)

心理動詞研究が一面的になったことによって，1.3.3.節で述べるように，感覚動詞の問題，さらには感情動詞内部に観察される統語的意味的振る舞いの違いは等閑視されるようになる．

1.3.2. 感情動詞研究の流れ

ここからは Postal 以降の研究の流れを確認する．1.3.2.1.節では，目的語型感情動詞がリンキング規則という理論的枠組の下で注目を集めたことを述べる．「本当ならば主語位置に実現するはずの経験者が目的語位置に実現する」という問題を解決するために，統語分析，意味分析が行われ，この問題はひとまず解決される．ところがそれに代わって，行為動詞を典型とする使役動詞との対比から，目的語型感情動詞のイベント構造が注目されるようになった．1.3.2.2.節では，目的語型感情動詞のイベント構造に関する先行研究に共通する主張をまとめる．なお，1.3.2.1.節の議論は，英語の感情動詞について論じた丸田 (1998) を参考にしてまとめたものである．

1.3.2.1. リンキング規則と感情動詞

リンキング規則とは，項が担う意味役割が特定の統語的位置と結びつくと仮定する一般的仮説である (cf. Baker 1988，Perlmutter and Postal 1984)．当初，主語型感情動詞と目的語型感情動詞は，どちらも経験者 (experiencer) と主題 (theme) という同じ 2 つの項を選択すると考えられた．(20)，(21) の下線表示は主題役割，斜体表示は経験者役割を担う項を表す．

(20) a. *Pierre* méprise <u>l'argent.</u> (=(1a))
b. <u>L'argent</u> dégoûte *Pierre.* (=(1b))

(21) a. *Mary* fears <u>big dogs</u>. (丸田 1998)
b. <u>Big dogs</u> frighten *Mary.* (ibid.)

---

idiosyncractiques'「フランス語では英語以上にこれらの述語 (感覚述語) はかなり特殊な特徴を示すということを考慮に入れ，これら (感覚述語) についてあまり述べないことにする」 (ibid. : 191，訳及び括弧内の補足は筆者によるものである)

(20) と (21) では，経験者役割と主題役割はそれぞれ異なる統語的位置に実現しており，項が担う意味役割が特定の統語的位置と強く結びつくという仮説に違反する．この問題はリンキングパラドックスと呼ばれ，これを解決するために 2 つのアプローチが採られた．1 つは，主語型感情動詞と目的語型感情動詞は，異なる統語構造を持つと仮定する統語分析である．もう 1 つは，主語型感情動詞と目的語型感情動詞が取る 2 つの項は同じ役割を持たないと考える意味分析である．2 つのアプローチを順に見てみよう．

統語分析には Belletti and Rizzi (1988) がある．Belletti and Rizzi (1988) は，目的語型感情動詞に対して，表層構造で目的語位置に置かれる経験者は，深層構造では主題よりも上位に置かれると仮定する．一方，主語型感情動詞に対しては，表層構造で主語に置かれる経験者は，深層構造でも主題よりも高い位置に置かれると仮定する．以上のように仮定すると，主語型感情動詞も，目的語型感情動詞も，深層構造では，経験者は主題よりも高い位置に置かれることになるので，リンキングパラドックスは解消される．しかし，Belletti and Rizzi (1988) の分析には問題点があったために支持されることはなかった[15]．

続いて意味的説明を採る Pesetsky (1990, 1995) を見てみよう．Pesetsky (1990, 1995) は，主題役割が付与されてきた (22a) の前置詞句内の下線表示の名詞句と，(22b) の主語の名詞句が異なる意味役割を持つことに注目する．

(22) a. Bill was very angry at <u>the article in the Times</u>. (Pesetsky 1995)
b. <u>The article in the Times</u> angered Bill greatly. (ibid.)

Pesetsky (1990, 1995) によると，(22a) の下線表示のように，主語以外に置かれる名詞句は感情のターゲット (Target of Emotion) や感情の題材 (Subject Matter of Emotion) という意味役割を担うのに対して，(22b) の下線表示のように，主語に置かれる名詞句は感情を引き起こす原因 (Cause) 役割を担うという．主題役割を付与されてきた感情動詞の名詞句は Cause と Target/Subject Matter に分けられることになる．(22a) の下線表示の名詞句と同じように，心的経験の対象を直接目的語にとる主語型感情動詞の項構造は (23a)，(22b) の下線表示の名詞句と同

[15] Belletti and Rizzi (1988) によって仮定された目的語型感情動詞の統語構造は非対格動詞の統語構造に類似するものであった．つまり目的語型感情動詞は非対格動詞の 1 つであるというのが彼らの仮説であった．しかし目的語型感情動詞は，典型的な非対格動詞とは異なる統語的振る舞いを示すことからこの仮説は効力を失った．例えばフランス語では，非対格動詞は，非人称主語 il の選択，複合過去形において être を選択するという特徴を持つが，目的語型感情動詞は非人称主語 il を取ることはできず，また，複合過去では助動詞 être ではなく avoir を選択し，非対格動詞とは異なる振る舞いを示す．

じように原因を主語にとる目的語型感情動詞の項構造は (23b) とそれぞれ改められる．さらに，特定の意味役割は，(24) の階層関係に基づいて統語構造へ結びつけられるとして新たなリンキング規則が仮定される．

(23) a. 主語型の感情動詞の項構造：(Exp, Target/Subject Matter)
b. 目的語型の感情動詞の項構造：(Causer, Exp)
(24) Causer＞Exp＞Target/Subject Matter

(24) は，2 つの項があった場合，階層関係上，より上位の意味役割を持つ項がより高い統語的位置に実現されることを表す．主語型感情動詞は，経験者と感情の対象をとるので，経験者が感情の対象よりも上位の統語的位置に置かれる．これに対して目的語型感情動詞は，原因と経験者をとるので，原因が経験者よりも上位の統語的位置に実現することになる．以上の分析によりリンキングパラドックスは解決されることになる．

ところが，リンキングパラドックスに代わって新たな問題が生じる．目的語型感情動詞の主語が原因役割を担うということは，目的語型感情動詞が表す事象は，原因―結果に特徴づけられることを意味し，同じく原因―結果を表す *Paul a cassé la vitrine.* ‘Paul broke the show window.’における *casser* (to break) のような使役を表す行為動詞と共通する．ところが，目的語型感情動詞は，受動化の問題，時間を表す副詞句と共起関係などにおいて，*casser* (to break) のような行為動詞とは異なる振る舞いを持つ．そのため今度は，行為動詞と目的語型感情動詞の違いが注目されるようになる．そして，行為動詞とは異なる目的語型感情動詞の統語的意味的振る舞いは，イベント構造の特異性の問題として議論されるようになった．次節では，イベント構造の概要を説明したのち，目的語型感情動詞のイベント構造に対する先行研究の最大公約数的見解をまとめる．

1.3.2.2. 目的語型感情動詞のイベント構造分析

イベント構造は大きく 2 つの意味側面からなる．1 つ目は，主語や目的語などに実現される項と項の間の意味的関係からなる側面で，受動化の現象がこの側面に関わる．2 つ目は，事象の内的時間展開の特徴を表すアスペクトであり，時間を表す副詞句との共起関係などがこの側面に関わる (第2章で詳しく述べる).

行為動詞と目的語型感情動詞の受動化の違いから確認する．1.1.節で述べたように，転用型の目的語型感情動詞は，動的受動文と形容詞的受動文へ置き換えることができるが，この特徴は語彙型の目的語型感情動詞にも共通する．(25b) は (25a) の受動文である．

(25) a. Tes histoires nous emmerdent.
‘Your stories annoy us.’
b. Nous sommes emmerdés {par/avec} tes histoires.
‘We are annoyed {by/with} your stories.’

(25) に対して，(26a) に示す行為動詞は (26b) のように前置詞 par をとる動的受動文は容認されるが，(26c) が示すように par 以外の前置詞をとる形容詞的受動文に置き換えることができない．

(26) a. Paul a cassé la vitrine.
‘Paul broke the window.’
b. La vitrine a été cassée par Paul.
‘The window was broken by Paul.’
c. *La vitrine a été cassée avec Paul.
‘The window was broken with Paul.’

(25) と (26) の対比は，目的語型感情動詞の項と項の間の意味関係が行為動詞のそれとは異なる構造であることを示唆している．実際，先行研究では，目的語型感情動詞の項と項の間の意味関係に対して特異な構造が提案されてきた (平田 2001，中村 2003, Voorst 1995, Langacker 2008, Croft 2012)．詳細は第 5 章で述べる．

次に，副詞句との共起関係から見えるアスペクトに関する先行研究の主張をまとめる．1.1.節にて，*gonfler* が心理動詞性 (感情動詞) を持つときに継続時間副詞句と共起できることを示した．語彙型の目的語型感情動詞について論じた丸田 (1998) も，目的語型感情動詞がこの副詞句と共起可能であると述べる．そして丸田 (1998) は，行為動詞が継続時間副詞句と共起できないことに注目する．(27) は語彙型の目的語型感情動詞の例，(28) は行為動詞の例である[16]．(27b), (28b) は筆者によるフランス語の訳文である．

(27) a. That television program amused me for an hour. (丸田 1998)
b. Cette émission télévisée m’a amusé pendant une heure.
(28) a. *He broke the glass for three years. (ibid.)
b. *Il a cassé le verre pendant trois ans.

[16] 行為動詞の中には継続時間副詞句と共起可能なタイプもある．行為動詞の分類と特徴について第 4 章で論じる．

丸田 (1998) は，継続時間副詞句との共起関係は，動詞が状態性というアスペクトを持つかどうかに関わる現象であると論じる．そして，(27a) と (28a) の対比から，目的語型感情動詞は状態性を持つのに対して，*break* を代表とする典型的な使役動詞は状態性を持たないと結論する．目的語型感情動詞と状態性の結びつきは，丸田 (1998) 以外の研究でも報告されている (cf. Arad 1999，中村 2003，Pylkkänen 2000).

まとめると，先行研究では，目的語型感情動詞は，項と項の間の意味関係においても，アスペクトにおいても，典型的な使役動詞 (行為動詞) とは異なるイベント構造を持つと考えられてきたということである．

1.3.3. 問題点の整理と分析の方向性

1.1.節で提起した問題 (以下に再掲) に沿って先行研究の問題を整理し，本研究の分析の方向性を示す．

問 1　a. 行為動詞から転用によって目的語型心理動詞が増加するのはなぜか.
　　b. 心理動詞性はどのような構文論的条件の下で発現するのか.

問 2　心理動詞性の獲得によって動詞のイベント構造はどのように変化するのか．行為動詞との対比において，目的語型心理動詞のイベント構造はどのような特異性を持つのか.
　　a. 目的語型の感情動詞と感覚動詞のイベント構造は，どのような共通点，及び相違点を持つのか.
　　b. 感情動詞のイベント構造は 1 つしかないのか. それともいくつかのタイプに分かれるのか.

まず問 1 について見てみよう．Postal (1970, 1971) をはじめ，従来の心理動詞研究は，アプローチこそ異なるが，その多くが語彙型の心理動詞を中心にした議論であった．そのため，転用型の心理動詞に視点を置かないと見えてこない問 1 のような問題が提起されることはなかった．1.1.節で述べたように，この問題を論じるためには心理動詞の定義にせまる必要があると筆者は考える．しかし従来の研究では，ある動詞が心理動詞であるかどうかは語彙情報としてアプリオリに決まっているものであるという (暗黙の) 前提に立って議論が進められ，心理動詞の定義に言及されることはほとんどなかった．Voorst (1992) は分析の冒頭で心理動詞の定義に言及しているが，その記述を見てみると，‘denoting psychological events…(ibid. : 65)’ という簡素なものである．このように心理動詞を定義すると，心理事象 (psychological events) の捉え方の数だけ心理動詞が存在することになってしまう．この問題に対して唯一関心を寄せていた研究に

Ruwet (1994) がある．Ruwet (1994) は，心理動詞とは，主体によって感じられる (éprouvé ‘to be felt’) 事象を表す動詞であると論じる．本研究では，Ruwet (1994) の議論を踏まえながら，主体によって感じられる事象を表すことが〈いま・ここ〉の〈私〉に規定されることに着目して心理動詞の再定義を試みる．その定義に基づいて問 1 の答えを探る．

続いて問 2 について検討しよう．1.3.2.2.節にまとめたように，目的語型感情動詞のイベント構造の問題 (問 2-a) に関しては，先行研究の分析は有益な手かがりを与えてくれると言える．しかしイベント構造の解明には，項と項の間の意味関係に関わる現象 (e.g. 受動文の問題) とアスペクトに関わる現象 (e.g. 時間副詞句との共起関係) を包括的に論じる必要があるが，先行研究ではどちらか一方の現象に絞った議論が多く，体系的な考察には至っていない．また目的語型感情動詞は，均一な動詞カテゴリーとして扱われる傾向にあったので，目的語型感情動詞内の問題 (問 2-b) に関してはほとんど検討されていない．本研究では，継続時間副詞句との共起関係や，特定の時制に置かれたときに得られるアスペクト解釈を手がかりにして感情動詞内部のイベント構造にどのようなタイプがあるかを明らかにする．

そして繰り返しになるが，これまでの研究は，Postal (1970, 1971) で扱われた動詞の中でも感情動詞にスポットが当てられていたために，目的語型感覚動詞の問題は手つかずの状態である．1.2.節と 1.3.2.2.節で示した受動化の現象から，目的語型感覚動詞は行為動詞とも目的語型感情動詞とも異なる項と項の間の意味関係を持つと考えられるが，それは一体どのような構造を持つのだろうか．また，1.3.2.2.節で概観した丸田 (1998) の論理に従うと，継続時間副詞句との共起関係から，目的語型感情動詞だけではなく，目的語型感覚動詞も状態性と結びつくと考えられるが，果たして 2 つの心理動詞の状態性は同じ性質を持つのだろうか．もし異なるとするならばその違いはどのようなものだろうか．本研究では，感覚事象の現象面の特徴—全体と部分の関係—に着目して，目的語型感覚動詞のイベント構造は，項と項の間の意味関係においてもアスペクトにおいても，行為動詞とも目的語型感情動詞とも異なる構造を持つことを明らかにする．

1.4. 動詞リスト

動詞データの説明と分析対象とする心理動詞のリストを提示する．

まず目的語型感情動詞の収集基準について説明する．リストに挙げる感情動詞の多くは，フランス語の動詞の統語的振る舞いを体系的に記述した Gross (1975) において目的語型感情動詞に分類されている動詞リストから抜粋したものである．

Gross (1975) は，目的語型感情動詞と見なされる動詞を 2 つのタイプに分けている．感情事象を表すことに特化したタイプと，感情事象以外の事象を表す用法を持つタイプである．前者のタイプは本論文の語彙型，後者のタイプは転用型におおよそ一致する[17]．Gross (1975) が感情動詞と見なす動詞のうち以下のものは除外する．

・社会的身分や人格，容姿に関わる事象を表す動詞：*anoblir* (to ennoble) (高貴にする)，*civiliser* (to civilize) (文明化させる，行儀良くさせる)，*dépersonnaliser* (to depersonalize) (個性を失わせる)，*rajeunir* (to make somebody look younger) (若く見せる)，*amollir* (to soften) (柔らかくする)，*blinder* (to armor) (装甲する)，*charpenter* (to carpenter) (骨組みを作る)，*dénaturer* (to denature) (変質させる)，*grandir* (to magnify) (大きくする) などである．第 3 章の議論を先取りすることになるが，本論文では身分，性格，容姿などに関わる事柄を表す動詞を感情動詞と見なすことはできないと考える．

・使用頻度が低く，統語的意味的振る舞いの判断が難しい動詞：*affrioler* (to entice), *commotionner* (to concuss[to shake]), *contrister*(to grieve), *déconforter*(to discourage), *délecter* (to delight)，*émotionner* (to upset)，*enfiévrer* (to excite)，*galvaniser* (to galvanize)，*lénifier* (to soothe)，*outrager* (to offend)，*rembrunir* (to darken)，*supplicier* (to touture)，*allumer* (to arouse).

・代名動詞用法が典型的な動詞：*désillusionner* (to disillusion)，*régaler* (to regale somebody with)，*renfrogner* (to become sullen)，*ressaisir* (to seize again)，*formaliser* (to formalize).

・経験者を主語に取る用法が一般的な動詞：*abuser* (to fool)，*contenter* (to satify), *désenchanter* (to disillusion)，*impatienter* (to irritate)，*navrer* (to upset)，*chavirer* (to overwhelm).

・疲労事象を表す用法が一般的な動詞：*claquer* (to exhaust)，*exténuer* (to exhaust), *harasser* (to exhaust)).

・人間に対して使用しにくい動詞：*exacerber* (to exacerbate).

・音韻的特徴から発音しにくく，それにより使用頻度が低い動詞：*obnubiler* (to obsess)，*vivifier* (to invigorate).

・1 人称目的語人称代名詞を選択しにくい動詞：*asticoter* (to needle)，*désobliger* (to offend)，*effaroucher* (to frighten)[18].

---

[17] Gross (1975) の分類で転用型のタイプに分類されている感情動詞の中には，語彙型とみなしたほうが妥当だと思われる動詞もある．そのような動詞は筆者の判断により語彙型に再分類してある．

[18] 第 3 章で論じるように，1 人称は感情動詞性を左右するパラメータであると考えられる．1 人称経験者をとれない動詞は本来的に感情動詞性が低いことになるので，目的語に 1 人称代名詞をとりにくい動詞は除外することにした．

(29), (30) のリストは，以上の基準に従って Gross (1975) から抜粋した動詞に加えて，Ruwet (1972) で取り上げられた動詞と筆者が独自に選択した動詞から構成されている．

(29) a. 語彙型感情動詞

affliger (to afflict), affoler (to terrify), agacer (to annoy), ahurir (to stun), alarmer (to worry), allécher (to tempt), amuser (to amuse), angoisser (to worry), apeurer (to frighten), assagir (to quiet), atterrer (to shock), attrister (to sadden), barber (to bore), brimer (to hurt), captive (to enthrall), chagriner (to grieve), charmer (to charm), choquer (to shock), consterner (to consternate), courroucer (to anger), décevoir (to disappoint), déconcerter (to disconcert), décontenancer (to disconcert), décourager (to discourage), démoraliser (to demoralize), dépiter (to upset), désappointer (to disappoint), désemparer (to throw somebody into confusion), désoler (to depress), diverter (to amuse), ébahir (to astonish), éberluer (to dumbfound), effarer (to alarm), effrayer (to frighten), embêter (to bother), émerveiller (to fill with wonder), emmerder (to annoy), émoustiller (to exhilarate), émouvoir (to move), enchanter (to delight), ennuyer (to bore), enthousiasmer (to fill with enthusiam), épater (to amaze), époustoufler (to amaze), épouvanter (to terrify), estomaquer (to astound), étonner (to surprise), exaspérer (to exasperate), exciter (to excite), fâcher (to make angry), fasciner (to fascinate), hébéter (to surprise), horrifier (horrify), humilier (to humiliate), importuner (to bother), impressionner (to impress), indigner (to outrage), inquiéter (to worry), interloquer (to stun), lasser (to bore), méduser (to dumbfound), offenser (to offend), offusquer (to shock), passionner (to fascinate), peiner (to distress), préoccuper (to worry), rebuter (to shock, to discourage), réconforter (to comfort), réjouir (to delight), requinquer (to buck somebody up), révolter (to revolt), satisfaire (to satisfy), scandaliser (to outrage), séduire (to captivate), sidérer (to astonish), stupéfier (to astonish), surexciter (to overexcite), tarabuster (to bother), terrifier (to terrify), terroriser (to terrorize), tracasser (to bother), tranquiliser (to reassure), turlupiner (to bother), ulcérer (to sicken), vexer (to upset) (85)

b. 転用型感情動詞

abasourdir (to deafen), abattre (to slaughter[to demorilize]), abrutir (to stupefy), absorber (to absorb), accabler (to overcome), accaparer (to hoard[to preoccupy]), accrocher (to hang[to catch attention]), achever (to finish[to finish off]), adoucir

(to soften[to ease]), affaiblir (to weaken), affecter (to affect), agiter (to wave[to trouble]), aigrir (to make sour[to embitter]), anéantir (to annihilate[to overwhelm]), animer (to lead[to brighten up]), apaiser (to calm), appâter (to lure), assombrir (to darken[to sadden]), assommer (to knock out[to bore somebody to tears]), atteindre (to reach[to affect]), attendrir (to tenderize[to move to tears]), attirer (to attract), aveugler (to blind), bassiner (to moisten[to bore]), bercer (to cradle[to soothe]), blesser (to hurt), bouleverser (to turn upside down[to hurt]), briser (to break), calmer (to calm), chambouler (to mess), chatouiller (to tickle), chiffonner (to rumple[to bother]), combler (to fill[to satisfy]), confondre (to mix up[to astound]), conquérir (to conquer[to win]), contrarier (to impede[to annoy]), couper (to cut[to shut somebody up]), crisper (to tense[irritate]), déchaîner (to unleash), déchirer (to tear[to hurt]), décomposer (to decompose[to make somebody stricken]), défoncer (to break up[to astonish]), démolir (to demolish[to shatter]), démonter (to dismantle[to take aback]), dépayser (to give a change of surrounding[to disorient]), déprimer (to indent[to depress]), dérégler (to disturb), dérider (to unwrinkle[to cheer up]), dérouter (reroute[to disconcert]), déranger (to mix up[to bother]), désarçonner (to unhorse[to throw]), désarmer (to disarm), désaxer (to unhinge), déséquilibrer (to throw off balance[to disturb balance of somebody's mind]), désorganiser (to disrupt), désorienter (to disorient[to confuse]), détraquer (to damage[to addle]), détruire (to destroy), dévorer(to devour), distraire (to distract), doucher (to shower[to surprise, to shock]), éblouir (to dazzle), ébranler (to shake), échauder (to scald[to disappoint]), échauffer (to warm up[to stir]), écraser (to crush), égayer (to brighten up[to cheer up]), emballer (to pack[to thrill]), embarrasser (to obstruct[to embarrass]), embrouiller (to tangle up[to muddle]), empoisonner (to poison[to bother]), endormir (to send to sleep[to bore]), énerver (to irritate, enflammer (to light[to excite]), enivrer (to intoxicate), ensorceler (to bewitch), entortiller (to twist[to embarrass]), envoûter (to bewitch), éprouver (to experience[to suffer]), étouffer (to smother[to embarrass]), étourdir (to stun), excéder (to exceed[to exahust]), fatiguer (to tire[to annoy]), figer (to congeal[to strike somebody dumb]), flatter (to flatter[to delight]), foudroyer (to strike down), frapper (to strike), froisser (to crease[to hurt]), gêner (to block[to bother]), glacer (to freez[to transfix]), gonfler (to inflate[to bother]), hanter (to haunt), harceler (to harass), hérisser (to bristle[to get one's back up]), heurter (to strike), horripiler (to somebody goose bumps), hypnotizer (to hypnotyze[to fascinate]), incommoder (to make somebody feel uncomfortable[to bother]), indisposer (to

upset[to annoy]), intimider (to intimidate), intriguer (to intrigue), irriter (to irritate), marquer (to mark[to make an impression on]), meurtrir (to bruise[to hurt]), miner (to undermine), oppresser (to opress), opprimer (to oppress), outrer (to exaggerate[to shock]), perturber (to perturb), piquer (to prick[to excite]), poignarder (to stab), pomper (to pump[to annoy]), provoquer (to cause[to arouse]), raser (to shave[to bore]), ravager (to ravage[to devastate]), ravigoter (to buck up), ravir (to rob somebody of something[to delight]), refroidir (to cool[to dampen]), regonfler (to blow up[to buck up]), remonter (to pull up[to cheer up]), remuer (to move), renverser (to knock over[to astound]), retaper (to do up[to put somebody on his feet again]), retourner (to turn[to shake]), ronger (to gnaw[to make somebody careworn]), ruiner (to ruin), saisir (to catch[to strike]), scier (to saw[to astonish]), secouer (to shake), sonner (to ring[to stun]), souffler (to blow up[to stagger]), subjuguer (to captivate), suffoquer (to choke), surprendre (to catch[to surprise]), survolter (to boost[to excite]), tanner (to tan[to bore]), tarauder (to thread[to torture]), tenailler (to gnaw), tenter (to try[to tempt]), terrasser (to strike down[to shatter]), tirailler (to tug[to plague]), tonifier (to tone up[to stimulate]), torpiller (to torpedo[to confuse]), torturer (to torture), toucher (to touch), tourmenter (to torment), travailler (to work[to worry]), troubler (to blur[to trouble]), tuer (to kill[to amaze]) (148)

感覚動詞には既存のリストは存在しないので，筆者の調査により感覚動詞性が確認できた動詞を分析対象とする．

(30) a. 語彙型感覚動詞
engourdir (to numb), étourdir (to make dizzy), démanger (to itch), paralyser (to paralyse) (4)
b. 転用型感覚動詞
barbouiller (to daub), blesser (to hurt), burler (to burn), casser (to break), chatouiller (to ticke), cingler (to lash), couper (to cut), crisper (to tense), cuir (to burn), déchirer (to tear), durcir (to harden), frapper (to strike), gratter (to scratch), glacer (to freeze), meurtrir (to bruise), mordre (to bite), percer (to pierce), picoter to peck), pincer (to pinch), piquer (to prick), raider (to stiffen), soulever (to lift), taper (to hit), tirailler (to tug), tordre (to twist), tuer (to kill) (26)

感情動詞，感覚動詞に言及する際に併記する英語の訳語について説明する．語彙型の動詞には，対応する英語の語彙型の感情動詞，感覚動詞を添える．転用型

の感情動詞に関しては，転用前の用法のみを問題にする場合には，転用前の用法に対応する英語の動詞を添える．感情動詞用法を問題にする場合は，転用前の用法に対応する英語の動詞と，感情動詞へ転用されたときに表される意味に対応する英語の動詞を併記する．例えば *gonfler* ならば *gonfler* (to inflate[to bother]) と表記する．転用型の感情動詞の中には，転用前に表される意味に対応する英語の動詞と，転用後に表される意味に対応する英語の動詞が一致するものがある．例えば *frapper* (to strike) のような動詞である．このような動詞の訳語は 1 つにする．転用型の感覚動詞は転用前に表される意味に対応する英語の動詞のみを添える[19].

最後に例文について説明する．例文は作例と実例を用いる．出典のない作例は，筆者によるものであり，それらはネイティブスピーカー1 名に容認度判断を依頼した．実例に関しては，小説とコーパスによって筆者が収集した例を用いる．小説の作品名，コーパス名は参考文献と合わせて記載する．

1.5. 本論文の構成

本論文はこの序論に続き，以下のように構成される．第 2 章ではまず，動詞の意味カテゴリーおよびイベント構造と動詞の関係に関して，従来の心理動詞研究が立脚する理論的枠組を確認し，本論文ではそれらとは異なる枠組から動詞の意味カテゴリーおよびイベント構造を捉えることを示す．そして LCS 分析で使用されるイベント構造分析モデルの問題点をまとめ，項と項の間の意味関係とアスペクトの記述に用いる認知意味論的枠組に基づいた 2 つのモデルの説明を行う．

第 3 章では，心理事象の現象面での特徴と心理事象を言語的に表現することの機能面での特徴に注目して，心理動詞の定義を行う．それを踏まえて，目的語型心理動詞と行為動詞の意味的関係を考察し，転用による目的語型心理動詞の増加に関する問題に答える (問 1-a). 次に行為動詞が目的語型心理動詞へ転用されるメカニズムの分析から，心理動詞性の発現を支える構文論的条件を明らかにする (問 1-b). 以上の考察を通して，心理動詞の存在が文レベルで発現する現象であることが示されるとともに，心理動詞であるかどうかという問題は段階性を持つ現象であることも論じる．その中で心理動詞性の大きさには，主語の意味的特徴が 1 つのパラメータとなることを明らかにするが，目的語型感情動詞では行為者主語を取ることができるのに対して，目的語型感覚動詞ではこれを

[19] 感覚動詞の転用型には，動詞一語の訳語を添えにくいものが多い．例えば *soulever* (to lift) は「(胃が) ムカムカする」という感覚事象を表すことができるが，これに対応する英語は，feel sick to one's stomach であり，一語で訳すことは難しい．またこの例では経験者が主語に置かれるという違いもある．感覚動詞の転用型にはこのようなケースが多いので，転用前の英訳のみ添える．表される感覚の意味は本文中で説明することにする．

取ることができないという事実が見えてくる．そこで問 2-a に加えて，目的語型感情動詞と目的語型感覚動詞の相違に関わる問題として行為者主語の選択可否に関する問題を第 4 章で論じることを述べる．

第 4 章では，行為動詞から目的語型感覚動詞へ転用されるときに起こる統語的意味的振る舞いの変化を，項と項の間の意味関係とアスペクトの観点から分析を行い，目的語型感覚動詞のイベント構造を明らかにする (問 2-a)．具体的には，行為動詞は力の連鎖によって特徴づけられる項と項の間の意味関係を持つのに対して，目的語型感覚動詞は接触関係という力の連鎖とは異なる項と項の間の意味関係を持つこと，また，目的語型感覚動詞は行為動詞には見られない状態性というアスペクトを持ち，さらにこの状態性が接触状態という特殊な状態性であることを明らかにする (問 2-a)．以上の考察に加えて，行為動詞が目的語型感情動詞と目的語型感覚動詞に意味拡張される際に観察される拡張メカニズムの違いに着目して第 3 章で追加した行為者主語選択の問題を考察する．

第 5 章では，先行研究の検討を通して，目的語型感情動詞の項と項の間の意味関係を考察し，目的語型感情動詞の項と項の間の意味関係は，目的語型感覚動詞のそれとは大きく異なる特徴を持つこと，また，行為動詞の項と項の間の意味関係と共通点を持ちつつも，行為動詞にはない特異な構造も持つことを明らかにする．続いて，目的語型感情動詞のアスペクトについて考察を行い，目的語型感情動詞の一部は，目的語型感覚動詞と同じように状態性を特徴とするが，その状態性が状態変化の結果状態という特徴を持つことを明らかにする (問 2-a)．さらに，目的語型感情動詞には，状態性とは結びつかない動詞もあり，アスペクトにおいて目的語型感情動詞は 2 つのタイプに分化していること，また，アスペクトタイプの分化が表される感情事象の意味タイプと相関していることを論じる (問 2-b)．最後に，第 3 章で明らかにする心理動詞性がもっとも低くなる行為者主語の目的語型感情動詞の統語的意味的振る舞いに注目して，このタイプの目的語型感情動詞が主語に非行為者を取る目的語型感情動詞とは異なるイベント構造を持ち，イベント構造の特徴が心理動詞性の大きさと連動していることを明らかにする．

第 6 章では第 5 章までの考察をまとめ，心理動詞研究に対する本研究の貢献を示す．最後に，今後の課題と展望を述べて本研究を締めくくる．

第 2 章　イベント構造記述の認知意味論的アプローチ

本章では，イベント構造の記述方法を検討する．2.1.節では，従来の心理動詞研究が依拠してきた理論的前提を概観し，動詞の意味カテゴリーおよびイベント構造の捉え方に関する本論の立場を述べる．2.2.節では，LCS 分析の中で用いられてきた意味述語を用いたイベント構造記述モデルの特徴を概観し，その問題点を提示する．2.3.節では，イベント構造を特徴づける 2 つの意味側面―項と項の間の意味関係とアスペクト―に対して，前者の側面の記述にはステージモデルとビリヤードボールモデル (Langacker 1990a 1991, 2008) を用いること，後者の側面の記述には二次元モデル (Croft 2012) を使用することを述べ，それぞれのモデルについて説明する．2.4.節では本章の内容をまとめる．

2.1. 動詞の意味カテゴリーとイベント構造の捉え方

2.1.1. 生成文法的アプローチ

心理動詞を巡る問題は，生成文法的アプローチに基づいた語彙意味論の中で発展してきた (Postal 1970, MaCawley 1971, Pinker 1989, Belletti and Rizzi 1988, Grimshaw 1990, Pesestsky 1995, Jackendoff 1990, Levin and Rappaport Hovav 1995, 影山 1996b，丸田 1998，中村 2003)．語彙意味論では基本的に，動詞の統語的意味的振る舞いは，動詞に予め書き込まれた語彙情報によってもたらされるものと考えられる．同じように動詞の意味カテゴリーも，動詞にアプリオリに備わっているものとして捉えられる．以上の前提の上で，第 1 章で述べたように，心理動詞と見なされた一部の動詞 (語彙型の目的語型感情動詞) を対象にして，その統語的意味的振る舞いを左右する語彙意味を明らかにすることが当面の課題となってきた．

心理動詞と見なされた動詞に対して仮定される特定の語彙意味から説明できない現象が観察された場合，その現象は，当該動詞の派生的 (derivational) な振る舞いとして位置づけられる．この派生的な振る舞いは，何らかの意味規則によって生成される新たな語彙意味から説明される現象として位置づけられる．このような語彙意味論の流れを汲む分析の 1 つが LCS 分析である．LCS 分析では，動詞の振る舞いに関与する語彙情報は，語彙概念構造や意味構造と呼ばれる．以下では本論文の用語に合わせてこれをイベント構造と呼ぶことにする．

LCS 分析の枠組から英語の目的語型感情動詞について論じた丸田 (1998) の考察を通して，動詞の意味カテゴリーの捉え方と派生現象が具体的にどのように分析されるのかをまとめる[1]．まず丸田 (1998) は，目的語型感情動詞に含まれ

[1] 丸田 (1998) は目的語型感情動詞ではなく「EO 動詞」という用語を使用しているが，本論の用語に合わせて「EO 動詞」は目的語型感情動詞と呼ぶことにする．また，丸田 (1998) では「意味

る動詞として (1) の動詞を列挙し，これらの動詞が目的語型感情動詞であることは自明のことであるかのように議論を始める．

(1) amaze, amuse, anger, annoy, appall, astonish, astound, bother, comfort, console, content, depress, disappoint, distress, enchant, encourage, enrage, enrapture, enravish, …

(丸田 1998)

その上で丸田 (1998) は，第 1 章でまとめたように，行為を表す典型的な使役動詞 (e.g. break) と対比させながら目的語型感情動詞の特異性に目を向け，継続時間副詞句との共起関係から目的語型感情動詞は状態性というアスペクトを持つと主張する．目的語型感情動詞に共通するイベント構造の鋳型を (2a) のように仮定する．x，y は，主語，目的語に実現される項を表し，[x ACT ON y] は主語の目的語への働きかけを表す．CAUSE 以下の構造はこの働きかけの結果，目的語に何らかの感情状態 (*PSYCHOLOGICAL* STATE) が引き起こされることを表す． *PSYCHOLOGICAL* STATE の斜体部分は，各動詞によって意味指定される部分で，*frighten* という動詞ならば (2b) のように，*PSYCHOLOGICAL* STATE の部分が *IN-A-FRIGHT* によって意味指定される (記述モデルの詳細について 2.2. 節で述べる).

(2) a. [x ACT ON y] CAUSE [BE [y *PSYCHOLOGICAL* STATE]]
b. [x ACT ON y] CAUSE [BE [y *IN-A-FRIGHT*]]

(2) のようにイベント構造が規定されるとき，結果状態部分がそれぞれの動詞の意味によって埋められることになるので，結果を表す項が統語的に実現されることはないと丸田 (1998) では主張される．結果を表す項 (of another tornado, at the government) が実現される (3) のような現象は非文とされるが，それは結果部分が動詞の意味によってすでに埋められていることによると説明される[2].

(3) a. *The distant rumbling frightened Mary of another tornado. (丸田 1998)
b. *The article in the *Times* angered Bill at the government. (ibid.)

構造」という用語が使用されるが，こちらも本論の用語に合わせてイベント構造と表記することにする．

[2] (3) に含まれる of another tornado, at the government は Mary，Bill が意識を向ける対象 (Target/Subject matter, cf. 第 1 章，例 (23)) を表すが，丸田 (1998) はこのような要素も結果を表す項として扱っている (ibid. : 41).

ところが以上の仮説に反して，*frighten* には結果を表す項が統語的に実現される現象がある. (4a) では, Sam が Bob を追い出すという結果状態 (out of the house) が表されている．この統語構造は (2a) では説明できないので，これを説明するために丸田 (1998) は，結果状態が統語的に実現されるイベント構造 (4b) に注目する．そして，(4b) の [ACT 〈MANNER〉 (ON y)] 部分に *frighten* の意味表示 FRIGHTEN が埋め込まれることで，イベント構造 (4c) が生成されると仮定し，(4a) のような現象は (4c) のイベント構造によって生まれると論じる．

(4) a. Sam frightened Bob out of the house.
b. [x ACT 〈MANNER〉 (ON y)] CAUSE [BECOME [y STATE/AT-PLACE]]
c. [x *FRIGHTEN*] CAUSE [BECOME [y STATE/AT-PLACE]]
(丸田 1998)

加えて，(4c) のような新たなイベント構造が生成される過程で，丸田 (1998) は，(4a) に含まれる *frighten* は，「正確には心理動詞とはいえないものである。(…) その中核的意味は非心理的な状態変化を表す (…) (111b, c) (=(4a)) に関わる心理的出来事はあくまで，非心理的な結果状態を引き起こす使役出来事として機能しているのである (ibid. : 58)」と述べる．つまり新しいイベント構造が派生する中で *frighten* の意味カテゴリーが変化すると論じている[3].

2.1.2. 本研究の立場

本論文では使用依拠モデル (usage-based model) から，動詞の意味カテゴリーを規定する (cf. Langacker 1987). ある動詞が心理動詞であるかどうかは，具体的な文の中で心理事象を表すかどうかによって決まるものと考える．丸田 (1998) の言葉を借りると，ある文の中で心理的な状態変化を表す場合，当該動詞は心理動詞のステイタスを持つ (=心理動詞性を持つ) と考える．もちろん，「心理事象を表す」，あるいは「心理的な状態変化を表す」ことの内実を明らかにしない限り，どのような動詞を心理動詞と見なしてよいかを定めることはできず，循環論になってしまう可能性がある．心理動詞の定義については第 3 章で論じる．また動詞がどのようなイベント構造を持つかという問題も，本論文では動詞が置かれる文中の要素との関係の中で決まるものと考える．

[3] 丸田 (1998) は目的語型感情動詞が (2a) のイベント構造を鋳型とするという主張を維持するために，(4a) の *frighten* を「正確には心理動詞」ではないと論じる．しかし丸田 (1998) では，「正確な心理動詞」が具体的にどのようなものであるか定義されていない．そのため，(4a) のような現象を説明するために導入される組み込みという操作に基づいたイベント構造の生成はアドホックな分析となっている．この論理を成立させるためにはまず，心理動詞の定義を明らかにしておく必要がある．

動詞の意味カテゴリーとイベント構造を文レベルで規定するということは，文に置かれる以前の段階において動詞は潜在的に，様々な意味カテゴリーやイベント構造と結びつく可能性を持つことになる．しかし例えば，*frapper* (to strike) が行為動詞 (e.g. *Paul frappe sur la porte.* 'Paul nocks on the door.') と感情動詞 (e.g. *Cette nouvelle m'a frappé.* 'This news struck me.') のステイタスを持つことができるのに対して，*manger* (to eat) は行為動詞のステイタスを持ちうるが (e.g. *Paul a mangé une pomme.* 'Paul ate an apple.')，感情動詞のステイタスを持つことがないように，動詞によって結びつき得る意味カテゴリーは異なる．それに相関して動詞が持ちうるイベント構造の潜在性も動詞によって異なる．Croft (2012) は，動詞のアスペクトに関して問題にすべきことは，動詞がどのアスペクトタイプに分類されるかではなく，問題となっている動詞がどのようなアスペクトタイプを取り得るかという可能性 (potential) であると論じる (ibid. : 37). この考え方に倣い本論文でも，動詞がどのような意味カテゴリーのステイタスを持ち得るのか，また，どのようなイベント構造と結びつくのかというその潜在性が個々の動詞の特徴として明らかにするべき問題であると考える．

動詞が持ちうる意味カテゴリー同士の関係，イベント構造同士の関係は，使用頻度の観点から見ると平等なパラディグマティックな関係にはない．*gonfler* (to inflate) が持ちうる意味カテゴリーを例にしてみよう．*gonfler* には「膨らませる」という行為動詞用法と「うんざりさせる」という感情動詞用法があり，この 2 つの意味カテゴリーの選択可能性が *gonfler* の特性としてある．しかし，2 つの用法は均等に *gonfler* と結びつくのではない．通時的に見ても共時的に見ても，「膨らませる」という行為動詞用法のほうが「うんざりさせる」という感情動詞用法よりも定着 (entrenched) していると考えられ，「うんざりさせる」は「膨らませる」から拡張 (extended) した用法だと言える．*gonfler* のように行為動詞用法を持つ動詞が感情動詞のステイタスを持つときに，これを転用型の感情動詞と呼ぶのは，2 つの用法の間に定着と拡張という非対称的な関係があると考えることによる．加えて動詞の意味カテゴリーの変化とそれに連動するイベント構造の変化は，埋め込みなどの意味規則によって起こるのではなく，動詞が共起する構文自体が持つ意味スキーマとの相関関係によって起こるものと考える[4].

以上の枠組から前節で紹介した *frighten* の意味カテゴリーの変化とイベント構造の変化を捉えると，(4a) のような現象は次のようなステップで説明される

[4] 構文論的アプローチには，動詞には 1 つのイベント構造が本来的に備わっているが，ある特定の構文に入力されることで，別のイベント構造が出力される，という派生的な考え方に基づくものも存在する．そのようなアプローチでは，coersion, fuse といった概念によって動詞の意味論的特徴の変化が分析される (cf. Michaelis 2004, Goldberg 1995)．本論では派生的な考え方は採らないので，構文自体が持つ意味的特徴と，動詞が潜在的に持つ意味的特徴との相関関係の中で，動詞のイベント構造が決まるものと考える (cf. Croft 2012).

ことになるだろう．まず意味カテゴリーについては，*frighten* は感情状態の変化を表す用法と (e.g. *Sam frightened Bob*.)，物体の移動を表す用法を潜在的に持つが，より使用頻度が高い前者の用法が定着した用法で，使役的な移動動詞の用法 (例 (4a)) は定着した用法からの拡張として捉えられることになる．そして，動作主主語，結果を表す前置詞句が含まれる構文が持つスキーマが支えとなってイベント構造が変化すると分析されることになる．なお，(4a) の現象を取り上げたのは，LCS 分析の理論的枠組の特徴と使用依拠モデルに基づいた分析の違いを示すためであり，以降の考察では (4a) のような現象に言及することはない．

2.2. LCS 分析のイベント構造記述モデルの検討

2.2.1.節では，LCS 分析で用いられた記述モデルの特徴を説明する．2.2.2.節では，このモデルでは心理動詞のイベント構造記述において重要となる事象と事象を概念化・言語化する主体 (以下，概念化者) の関係を捉えることができないこと，また，共起する構文タイプによって変化するアスペクト解釈の相違を捉えることができないことを述べる．

2.2.1. 意味述語を用いた記述モデル

イベント構造は，主語や目的語に実現される項と項の間の意味関係を表す側面と，事象の時間的展開を表すアスペクトを表す側面からなる．意味述語を用いたイベント構造の記述モデルでは，項と項の間の意味関係は ACT ON (働きかけ), CAUSE (使役関係) などの意味述語によって表され，アスペクトは BE, BECOME という意味述語で表される．イベント構造はこれら 2 つのタイプの意味述語の組み合わせから記述されることになる[5]．

意味述語を用いた記述モデルでは，イベント構造は Vendler (1967) の 4 つのアスペクトタイプ—状態動詞，活動動詞，到達動詞，達成動詞—を基準にして 4 つのタイプに分けられてきた．(5) から (8) は，影山 (1996b) の表示方法によって 4 つのイベント構造を表したもので，各イベント構造の特徴を持つ例文を (b) に挙げている．

(5) 状態動詞 (stative verb)

---

[5] 影山 (1996a) では，ACT ON は活動動詞の特徴を表すための意味述語として提示される．つまり，アスペクトを表すための意味述語として規定されるが，ACT ON は同時に主語に置かれる項と目的語に置かれる項が意味的に関係を持つことも表す．ACT ON が項と項の間の意味関係を表す意味述語であるという本論の分類は，後者の特徴を基準にしたものであるが，ACT ON がアスペクトに無関係な意味述語であると述べているわけではない．項と項の間の意味関係とアスペクトは密接に関係しているので，ACT ON のように 2 つの意味側面の特徴が混在する述語もある．

a.［y BE［AT z］］
b. Paul est sur le lit.
‘Paul is on the bed.’

(6) 活動動詞 (activity verb)
a.［x ACT ON y］
b. Paul touche la porte.
‘Paul touches the door.’

(7) 到達動詞 (achievement verb)
a.［BECOME［y BE［AT z］］］
b. Le train est arrivé à la gare.
‘The train is arrived at the station.’

(8) 達成動詞 (accomplishment verb)
a.［x ACT ON y］CONTROL［BECOME［y BE AT z］］
b. Paul a cassé le verre.
‘Paul broke the vase.’

x，y，z は変項を表し，x は外項 (external argument)，y は内項 (internal argument) を表す．z は前置詞句などに実現される要素を表す．ACT ON を含む構造は上位事象，BECOME，BE を含む構造は下位事象と呼ばれ，下位事象を含む例では内項に置かれる要素の状態や状態変化が表される．(5) の状態動詞は，主語に実現する内項の状態を表し，(7) の到達動詞は，主語に実現する内項の状態・位置変化を表す．(8) の達成動詞は，外項に実現される要素によって内項に実現される要素の位置・状態変化が引き起こされることを表す．(8) の上位事象と下位事象を結びつける CONTROL は，位置・状態変化が引き起こされるという使役関係を表す[6]．CONTROL は CAUSE と表示されることもある (cf. McCawley 1971，丸田 1998，中村 2003)．(6) の活動動詞は上位事象からなる構造を持ち，主語に実現する外項は目的語に置かれる内項に働きかけるが，内項は位置・状態変化しない要素として位置づけられる[7]．

2.2.2. 問題点

2.2.2.1. 概念化者と事象の関係

第 3 章では，心理事象が〈いま・ここ〉の〈私〉に規定される主体 (感じる主

[6] 影山 (1996b) は，達成動詞のイベント構造として，主語に実現する外項の存在 (働きかけはない) によって，目的語に実現する内項の位置・状態変化が引き起こされることを表す次のようなイベント構造も仮定している．x CONTROL［BECOME［y BE AT z］］.

[7] 活動動詞に分類される動詞には，対象への働きかけを表さない動詞もある．例えば，Je chante. ‘I sing.’ という例である．このような動詞のイベント構造は，[x ACT] と規定される．

体と呼ぶことになる) を含む事象であることに注目して，心理動詞を定義し，このような主体を含むかどうかによって心理動詞としてのステイタス (＝心理動詞性) が変化することを論じる．心理動詞性の変化を捉えるためには，事象と概念化者の関係を記述するための分析枠組が必要となるが，意味述語を用いたモデルではこの関係を捉えることができないことを以下で示す．

まず Paul が花瓶に力を与え，それによって花瓶が割れたという物理的な事象を言語化してみよう．この状況は (9) のように表現できる．意味述語を用いたモデルを用いると，(9) の *casser* のイベント構造は (10) のように記述される．使役関係を表す意味述語は丸田 (1998) の記述モデルに合わせて CAUSE を用いる．

(9) Paul a cassé le vase.
‘Paul broke the vase.’

(10) [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y *cassé*]]

Paul が花瓶を割ったという事象とそれを概念化する概念化者の関係を見てみると，概念化者と事象は完全に分離されていて，概念化者は事象を捉える主体に徹しているので，その存在をイベント構造上に表示する必要はない．

続いて感情事象を表す (11) を見てみよう．

(11) a. Thunder frightened John.
b. That television program amused me for an hour.
c. [x ACT ON y] CAUSE [BE [y *PSYCHOLOGICAL* STATE]]

(丸田 1998)

(11a) は (9) と同じように，概念化者は事象を捉える主体に徹しており，そのイベント構造は (11c) に基づいて記述できる．(11b) はどうだろうか．ここでは目的語が 1 人称であるので，概念化者自身が事象に含まれていることを意味する．しかし (11b) は，概念化者が発話時に感じる心理を表しているわけではなく，この 1 人称は〈いま・ここ〉において何かを感じる主体を指すわけではない．つまり (11b) に含まれる 1 人称は，概念化者と同一指示対象であるが，概念化者から切り離された要素として存在し，その意味において (11b) の 1 人称代名詞は，(11a) の John と同じ意味論的ステイタスを持つ．そのため (11b) の目的語を John に入れ替えることもできる．つまり，(11b) に含まれる *amuse* のイベント構造を (11a) と同じ鋳型 (11c) で記述しても問題はない．

ところが，目的語型感情動詞と目的語型感覚動詞の例には，概念化者自身が発

話時点において感じる心理を表す場合があり，そのような表現に含まれる経験者は 3 人称へ置き換えることができないという特徴を持つ.

(12) a. Ça pique !
‘It pricks!’
b. Ça m’énerve !
‘It annoys me!’
(13) ?? Ça l’énerve !
‘It annoys him/her!’

(12a) は，たとえば裁縫の針に指が刺さってしまい，概念化者が発話時に感じる「痛み」を表す．経験者は言語化されていないが，経験者を言語化するならば 1 人称目的語代名詞しか容認されない (e.g. *Ça me pique !* ‘It pricks me !’/ ?? *Ça le pique !* ‘It pricks him!’)．同じように (12b) は，概念化者が発話時に感じる「いらいらするなぁ」という感情を表す. 概念化者は事象に含まれる一要素で，かつ，言語化されている点において (11b) と共通点を持つ．しかし先述したように，(11b) の 1 人称代名詞は 3 人称と交代させることができるが, (13) に示すように (12b) の経験者は 1 人称，つまり概念化者自身に限定される[8]．(12a, b) に含まれ

[8] Langacker (2008) は，言語化されない主体を含む例として，(a) のような現象を挙げる．(a) は命令文ではなく，(b) の主語 I が省略されただけのものであるが，Langacker (2008) によると，これは単なる省略ではないという．
(a) Don’t trust him.
(b) I don’t trust him.
Langacker (2008) によると (a) は，実際に私 (＝主体) が状況を経験していることを表し，私は態度や気持ちの概念化の主体であると同時に，態度・気持ちを表す文の概念化の主体として機能しているという (‘ (…) it presents the situation as I actually experience it. I am really a single individual, functioning as subject of conception for both the attitude and the sentence describing it.’, ibid.:468)．つまり，言語化されない 1 人称は，状況をその内部から捉える主体としての側面と，その状況内で感じる心理を発露する主体としての 2 つの側面を持つことがここでは示唆されていると考えられる．前者の側面は，見る／見られる関係で捉えられる主体であるのに対して，後者の側面は，本論文の用語を用いると，感じる主体であるかどうか (表出機能を持つかどうか) によって捉えられる主体となる (第 3 章)．状況に埋没して見る主体に徹し，かつ内面で感じる状態を表している点において，(a) の言語化されない 1 人称代名詞 I は，〈いま・ここ〉において主体が感じる感情，感覚を表す (12) の言語化されない 1 人称代名詞 me と共通すると考えられる．ただし，言語化されない 1 人称すべてが，内面で何かを感じる主体として解釈されるわけではない．
(c) Vanessa is sitting across the table. (Langacker 1990a)
(c) は，概念化者の眼前の状況を描写している解釈を持つ．概念化者が〈いま・ここ〉において事態を観察している点において (c) は，上記の例 (a) と本文内の例 (12) と同じ特徴を持つ (cf. 中村 2016)．しかし (c) では，(a) や (12) のように概念化者の心的態度や気持ちなどは表されていない．また，2.3.1.節で示すように，1 人称には，言語化されながらも感じる主体のステイタスを持つものもある．1 人称代名詞に関する意味論的分析では，主に認知文法において，見る／見られる関係を中心にして多くの議論がなされてきたが，感じる主体という心理的側面も重要な

る動詞のイベント構造を意味述語モデルで表すと，それぞれ (14a, b) のようにしか表すことができない.

(14) a. [x ACT]
b. [x ACT ON y] CAUSE [BE [y *énervé*]]

(14a) では痛みを感じている経験者 (=概念化者) の存在を捉えることができないし，(14b) の y は (10) の y，(11c) の y となんらか変わらず，(12b) の 1 人称代名詞が (11) の目的語と異なる意味論的ステイタスを持つことを捉えることができない.

以上の問題を解決するために本論文では，事象と概念化者の関係から動詞が表す事象の特徴を記述するステージモデル (stage model) に基づいて，心理動詞の項と項の間の意味関係の記述を試みる (Langacker 1987, 1991, 2008). モデルの詳細は 2.3.1.節で述べる.

以下の分析では，事象に含まれる対象や要素を「参与者 (participant)」とし，項と項の間の意味関係を参与者と参与者の間の意味関係 (以下, 参考者間の意味関係) と呼ぶことにする.

2.2.2.2. アスペクト記述の問題

続いてアスペクト記述に関する意味述語モデルの問題点を示そう.

意味述語モデルでは，位置・状態変化は BECOME，状態は BE などの述語関数で表示され，これらはそれ以上分解できない原子的な意味素として規定される．しかしここで，丸田 (1998) において位置・状態変化を表すとされる BECOME とその他の研究で使用される BECOME の定義を比較してみると，意味述語が原子的なものであるという前提に問題があることが見えてくる．丸田 (1998) では, BECOME は「一定の時間的経過の中で展開し, ある頂点(culmination) を迎える出来事」を表す意味述語として定義される．このように定義される BECOME を含む動詞として丸田 (1998) は *The acid dissolved the metal.* という例を挙げる. 酸が金属などを溶かす場合，通常，それは一瞬で終わるものではなく徐々に達成されるものである．丸田 (1998) はこのように徐々に展開する変化 (以上の例では融解) を BECOME によって捉えている. ところがその他の研究では，BECOME は瞬間的に終わる出来事を表す起動相 (inchoative) として定義される (cf. Jackendoff 1990，影山 1996b). 例えば *The train arrived.* という場合，到着するという出来事は一瞬で達成される．BECOME が起動相と見なされる場合

パラメータになると考えられる.

は，BECOME によって特徴づけられる動詞は *arrive* のような動詞となる．位置・状態変化を表す意味述語に対して 2 つの定義が与えられてきたということは，位置・状態変化はそれ以上分解できないものではないことを意味する．

この問題は時間パラメータを加えて，意味述語を細分化させることで解決を図ることができる．実際，中村 (2003) では，時間的違いを考慮に入れて BECOME を (15) のように 2 つの下位タイプに分ける．<temporal>は「瞬間性」を表し，<non-temporal>は「非瞬間性」を表す．(15a) は起動相として定義される BECOME に相当し，(15b) は丸田 (1998) の BECOME に対応する．

(15) a. BECOME<temporal>
b. BECOME<non-temporal>

時間パラメータを導入することによって 2 つの BECOME の違いを示すことができたとしても，特定の時制や共起する副詞句によって生まれるアスペクト解釈の相違を捉えることができないという問題が残る．典型的な使役動詞の 1 つとされる *construire* (to construct) が含まれる 3 つの例を比較してみよう．意味述語を用いると *construire* のイベント構造は (16) のように記述されるだろう．

(16) [x ACT ON y] CONTROL [BECOME [y *construit*]]
(17) a. Paul a construit une maison l'an dernier.
'Paul constructed a house last year.'
b. Paul a construit une maison en dix jours.
'Paul constructed a house in ten days.'
c. Paul construit une maison.
'Paul is constructing a house.'

(17a) と (17b) は，どちらも事象の完了 (=竣工) が含意されるが，その解釈が異なる．(17b) では，所要時間副詞句の存在によって家が竣工するまでの過程がフォーカスされる解釈を持つ．これに対して (17a) では，去年，家を建てたことを表し，竣工までにかかった時間は解釈上，前景化していない．(17c) に関しては，建設途中であることを表すので，他 2 つの例とは異なり事象の完了は含意されない．このように同じ動詞でも，構文環境によって様々なアスペクト解釈を持ちうるが，(16) の構造から以上 3 つの解釈がどのように生まれるのかを説明することは難しいだろう．特定の構文環境に置かれる場合に (16) の BECOME は BECOME<temporal>となり，別の構文環境では BECOME<non-temporal>となり，さらにまた別の構文環境では BECOME が背景化するという条件をつけること

で，(17) の 3 つの解釈に対して説明を与えることができるかもしれない．しかしこのような解決策を採る場合，動詞のアスペクトは実質的に共起する文タイプによって決まるものであるという，使用依拠モデル的な立場をとることを意味し，本来的語彙意味とそこからの派生という LCS 分析の理論的前提を崩すことになると考えられる[9].

行為動詞である *construire* の記述に関わる以上の問題は，心理動詞の分析には関係がないと思われるかもしれない．しかし転用現象に焦点を当てて，心理動詞のイベント構造を論じるためには，行為動詞から心理動詞への転用過程で起こる動詞のイベント構造変化の詳細な記述が重要となる．そのためには様々な構文環境に置かれたときに生まれるアスペクト解釈を比較するための枠組が必要となる．以上の理由により本論文では，可能性 (potential) として動詞のアスペクトを位置づけ，アスペクトの内部構造を詳細に記述できる Croft (2012) のアスペクトモデルを用いることにする[10]．詳細は 2.3.2.節にて論じる．

2.3. 認知意味論的イベント構造記述モデル

本節では，本論文で用いるイベント構造の記述モデルの説明を行う．2.3.1.節ではまず，感じる主体という概念を加えて，概念化者の関わり方を組み込んだ事象記述を行うステージモデルの説明を行う．次にステージモデルを土台として，参与者間の意味関係をビリヤードボールモデル (billiard-ball model) によって記述することを述べる (Langacker 1990a, 1991, 2008)．2.3.2.節では，Croft (2012) の二次元分析 (two-dimensional geometric analysis) モデル (以下，二次元モデル) に基づいてアスペクトを記述することを述べる．

---

[9] 本文で述べた問題以外にも意味述語モデルでは捉えることができない現象がある．(a) は事象達成 (家の竣工) に向けて，漸次的に事態が進行している解釈を持ち，事象達成は含意されない．(b) も事象達成 (投獄する) が含意されない点において，(a) と同じ特徴を持つ．しかし，(b) は漸次的に事態が進行しているという解釈はなく，投獄寸前であるという解釈を持つ (cf.「間一髪の半過去」，渡邊 2007)．このような違いは，BECOME<temporal>，BECOME<non-temporal>では捉えることができない．

(a) Paul construisait une maison. (=(16c))

(b) Paul emprisonnait Marie. ‘Paul was jailing Marie.’

[10] 2.2.2.節で提示した問題以外にも，意味述語を用いたモデルの問題はある．意味述語を用いたモデルでは，参与者間の意味的関係とアスペクトの特徴が 1 つのモデルで記述される．つまり，参与者間の意味関係を表す意味述語とアスペクトの特徴を表す意味述語は同じ価値を持つものとして特徴づけられる．参与者間の意味関係とアスペクトの特徴は密接に関係しているが，本質的に異なる意味側面であり，アスペクトの構造性を詳細に記述するためには，参与者間の意味関係とアスペクトの記述には，それぞれ異なるモデルを用いる必要があると考えられる (cf. Croft 2012: 212).

2.3.1. 参与者間の意味関係の記述モデル

2.3.1.1. ステージモデル（stage model）

認知文法では，言語表現が表す意味は概念化者 (conceptualizer) と言語化される対象との間の見る／見られるという関係 (viewing arrangement) を基盤にして，概念化者の捉え方 (construal) から言語表現の意味記述が行われる (Langacker 1991, 2008)[11]．見る／見られる関係は次のように表される[12].

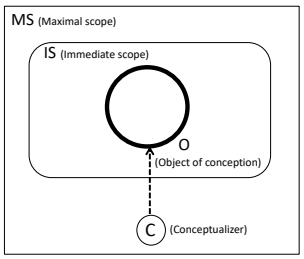


図 1 見る／見られる関係

C (conceptualizer) は概念化者を表す．O (object of conception) は概念化の対象を表す．太線表示は O が言語化される対象であることを表している．出来事の中から特定の対象を概念化し，言語化することをプロファイル (profile) するという．図 1 は概念化者と対象の関係を表したものであり，言語化の対象となる事象の構造記述については 2.3.1.2.節にて説明する．破線矢印は概念化者から対象へ向けられた注意 (attention) や心的走査 (mental scanning) を表す．概念化の対象が含まれる領域は IS (immediate Scope) と呼ばれる．以上の要素の関係を劇場にたとえると, O は演じ手で, IS はステージを表す. IS はオンステージ (onstage) とも呼ばれる (cf. Langacker 1991)．概念化者は演技を眺める視点 (perspective) を担う観客として位置づけられる. IS と概念化者を含む MS (maximal scope) は，ステージと観客を含む劇場全体で, 言語表現の解釈を支える意味領域を表す. 本論文では，IS，MS に加えて OC という意味領域を含むステージモデルを用いるが，OC については具体例を見ながら後ほど説明する.

見る／見られる関係に基づいて, 概念化者が事象に含まれるかどうか, 概念化者自身が事象に含まれる場合に概念化者が言語化されるかどうかを基準にした

---

[11] 事象の捉え方は，視点 (viewing point)，際立ち (saliency, prominence) ，事象を捉える粒度 (speficity)，捉える事象の範囲 (focusing, scope) という 4 つの認知作用から構成される (cf. Langacker 1990a, 1991, 2008, Croft and Cruse 2004，中村 2016)．本論で扱う現象記述のためにもっとも問題となる認知作用は，視点，際立ち，粒度の 3 つである．視点と際立ちについては本章で述べる．粒度は感覚動詞，感情動詞のアスペクトについて論じる第 4 章，第 5 章で述べる．

[12] 図中の C (conceptualizer) は，S (speaker)，G (ground) と表記されることもあるが，本論では C と表記する．G とは発話の場を指す.

区別に加えて，本論文では，経験者が感じる主体として事象に組み込まれているかどうかという区別も含める．すると本論文で扱う現象に関して事象と概念化者の関係は，大きく 4 つのタイプに区別されることになる．以下順に見てみよう．

1 つ目は概念化者が事象に含まれないタイプで，(18) として再掲する (11a) がこのタイプに含まれる．

(18) Thunder frightened John. (=(11a))

(18) では見られる対象である事象は，IS 内に置かれ，見る主体に徹する概念化者は IS の外，MS 内に置かれる．これらの関係は図 2 の構造を持つ．

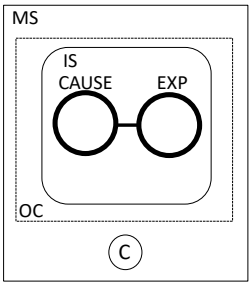


図 2　(18) の事象と概念化者の関係

CAUSE とラベル付けされた参与者は主語にプロファイルされる原因，EXP とラベル付けされた参与者は目的語にプロファイルされる経験者を表す．2 つの参与者を結ぶ実線の性質については，次節で紹介するビリヤードボールモデルに基づいて第 4 章，第 5 章にて検討する．

2 つ目と 3 つ目は概念化者が事象に含まれ，かつ，言語化されるタイプである．このタイプには (19a)，(19b) として再掲する (11b)，(12b) が含まれる．

(19) a. That television program amused me for an hour. (=(11b))
　　b. Ça m’énerve ! (=(12b))
(20) a. That television program amused him for an hour.
　　b. ?? Ça l’énerve ! (=(13))

見る／見られる関係においては，(19a) の 1 人称も (19b) の 1 人称も，概念化者自身から見られる参与者として同じステイタスを持つ．しかし 2.2.2.1.節で述べたように，この 2 つの経験者は意味論的ステイタスが異なる．(19a) の 1 人称は，概念化者と同一指示関係を持つ点において (18) の John とは異なるが，(20a) に

示すように 3 人称にも入れ替えることができ，この点において (18) の John と同じステイタスを持つといえる．これに対して発話者 (概念化者) が発話時において感じる心理を表す (19b) の 1 人称は，(20b) から分かるように，他の人称と範列関係になく，この点において (19a) の 1 人称とは異なる．本論文では，概念化者が発話時に感じる心理を表す (19a) のような 1 人称を「感じる主体」と規定し，その他の経験者から区別することにする．以上の特徴を以下 2 つの認知図式に表す．感じる主体によって区別される以下 2 つの認知図式は筆者独自のものであることを予め断っておく[13].

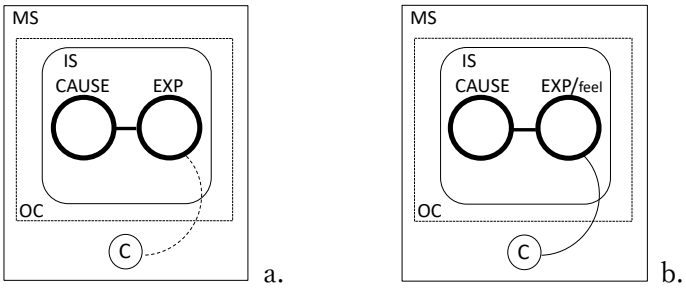


図 3 （19）の事象と概念化者の関係

図 3a は (19a) の認知図式である．経験者を表す EXP は概念化者と同一指示関係を結ぶが (点線表示)，図 2 の EXP と同じステイタスを持つ．図 3b は (19b) の認知図式である．EXP は発話時の概念化者自身であり，かつ，感じる主体 (EXP/feel) のステイタスを持ち単なる EXP とは区別される．C と EXP/feel を結ぶ実線は概念化者が感じる主体として事象に組み込まれていることを表す.

4 つ目は概念化者が事象に含まれ，かつ，言語化されないタイプである．このタイプには (21) に再掲する (12a) が含まれる.

(21) Ça pique ! (=(12a))

(21) において概念化者は言語化されていないので，IS の外に置かれることになる．ところがこの概念化者は，直接目的語のスロットを埋める参与者の資格を持

[13] 管見の限り Langacker (1990a, 1990, 2008) では「感じる主体」に類する 1 人称の存在はその他の 1 人称からは区別されていない (cf. 注 8)．中村 (2016) では，(21) に相当する日本語の現象を記述するために，ステージモデルとは別に認知モードというモデルを導入する．(21) や (19) のような現象の記述には見る／見られる関係に基づいたステージモデルよりも，認知モードという考え方のほうが有効かもしれない．しかし本論文で扱う現象には，見る／見られる関係に基づいた意味記述も重要な側面を持つので，本論文ではステージモデルに「感じる主体」を導入したモデルで記述を行うことにする.

つ．(21) に類似する現象の意味記述のために Langacker (2008) は，MS と IS の間に OC (objective content) という意味領域を導入する．中村 (2016) によると，「OC の情報量は動詞の語彙としての情報量に等しく，語彙情報の範囲」であるという．語彙の情報には様々なタイプがあるが，(21) の現象に関わる動詞の情報量は項の選択であると考えられる．典型的な用法において他動詞 *piquer* は，2 つの参与者をプロファイルし，一方は主語に，もう一方は目的語に置かれる．動詞によってプロファイルされることが (典型的な用法において) 要求される参与者が含まれる領域が OC であると考えられる[14]. (21) において言語化されない概念化者は 1 人称以外の人称で埋めることはできず，感じる主体のステイタスを持つ．以上の特徴を図 4 の認知図式に表す.

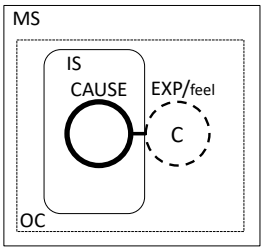
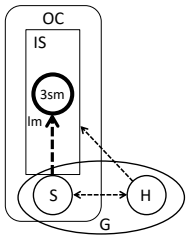


図 4　(20) の事象と概念化者の関係

感じる主体である概念化者 (EXP/feel) は，事象を見る主体として IS の外に置かれるが，目的語スロットを埋める参与者でもあるので OC 内に置かれる．EXP/feel が点線表示となっているのはこれが，動詞がプロファイルする作用に含まれる

[14] Langacker (2008) は‘Don’t trust him’を例にして，IS との対比から OC の特徴を次のように述べる．‘There is thus a discrepancy between the objective content (OC) and the expression’s immediate scope (IS). The former, representing the situation described, included me in my guise as trajectory of the process profiled by the verb. Linguistically, however, I present myself merely as the subject of conception—or rather I do not present myself at all, preferring not to venture onstage within the scope of viewing arrangement.’ (ibid. : 468-469). ‘Don’t trust him.’ の認知構造を以下のように図示する (ibid. :468). この図では話し手 (S) と聞き手 (H) が区別され，両者は発話の場 (ground) に含まれている．本文内で C と表記してものは，おおよそこの G に対応する．S から 3sm/lm に伸びる点線矢印は trust によってプロファイルされる作用を表し，IS の外に置かれる S は主語にプロファイルされ得る参与者，3sm/lm は目的語としてプロファイルされる参与者を表す (lm については次節で説明する)．以下の図には MS は表示されていないが MS は OS の外側に位置すると考えられる．



参与者であるが，言語化されていないことを表す[15] [16].

2.3.1.2. ビリヤードボールモデル（billiard-ball model）

続いて参与者間の意味関係を記述するモデルを提示する．

ある事象が言語化されるとき，事象に関わるすべての参与者が言語化されるわけではなく，事象を構成する参与者の中で，際立ち (saliency) の高い参与者がプロファイルされる．プロファイルされる参与者の中でもっとも際立ちの高い参与者はトラジェクター (trajector, tr) ，その次に際立ちの高い参与者はランドマーク (landmark, lm) として特徴づけられる (Langackcer 1990a, 1991, 2008)．主語はトラジェクター，目的語はランドマークをプロファイルする文法カテゴリーとして位置づけられる．文法にカテゴリーは，従来の文法研究では意味とは切り離されたものとして扱われてきたが，認知文法では抽象的な意味を持つ記号として考えられる．

トラジェクターやランドマークは高度に抽象化された参与者の特徴を表すが，実際に主語，目的語にプロファイルされる参与者間の意味関係はより具体的な関係を持つ．その意味関係の一つが力の連鎖によって捉えられる関係である．この関係をモデル化したものがビリヤードボールモデルである．第 3 章で論じるように，力の連鎖によって特徴づけられる参与者間の意味関係が他動詞文のプ

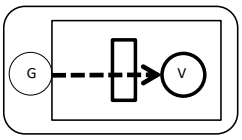
---

[15] 図 2〜4 では主語と目的語を表す要素しか含めていないが，経験者が間接目的語に置かれ，身体部分が直接目的語に置かれる構文の記述では円がもう 1 つ追加されることになる．

[16] 概念化者が IS 外，OC 内にある図 4 のような認知図式で記述される例において，概念化者はすべて感じる主体のステイタスを持つわけではない．

(a) Vanessa is sitting across the table.

中村 (2016) の説明を参考にすると，以上の例は発話者自身が眺めている状況を表したもので，言語化されない発話者／概念化者は，Vanessa の位置関係を特定するための参照点として機能している．across NP はその語彙情報として参照点 (reference point) を必要とするので，発話者は言語化されないが，語彙情報として OC 内に置かれる．中村 (2016) は (a) の認知図式を以下のように記述する．G (Ground) は C を含む発話の場を表す．



(中村 2016 : 21)

内側の横長の長方形は IS，外側の丸い長方形が OC である．この図には描かれていないが，OC の外側に MS が置かれると考えられる．G と V (Vanessa) の間にある縦長の長方形がテーブルを表す．(21) と同じように (a) においても，概念化者は IS 外，OC 内に含まれるが，(a) の解釈からも分かるように言語化されない概念化者は何らかの心理を感じる主体として組み込まれているのではない．その証拠に Look, Vanessa is sitting acroos the table.と述べることで，G に話し手だけではなく聞き手も含むことができ，この場合 G は 1 人称に限定されない．これに対して (21) は，**Regarde, ça pique !* ‘Look, it pricks!’のように，聞き手を含むような文を作ることはできず，言語化されない参与者は 1 人称に限定されるという特徴を持つ．

ロトタイプ的な意味構造として規定される．つまり (22) のような例が典型的な他動詞文と見なされる．図 5 は (22) の参与者間の意味関係を表す．

(22)　Paul a cassé le vase. (=(9))

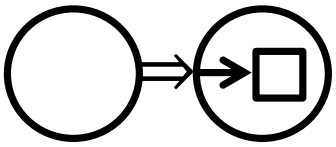


図 5　(22) の参与者間の関係 (cf. Langacker 2008)

左の円が Paul，右の円が花瓶 vase を表す．(22) は Paul から花瓶 vase への力の伝達を表し，力の始発点となる Paul は事象の中でもっとも認知的際立ちが高いトラジェクターとして主語にプロファイルされ，力を受ける花瓶 vase はその次に認知的際立ちが高いランドマークとして目的語にプロファイルされる．二重矢印は参与者の間で力が伝達されることを表す．花瓶を表す円内部の実線矢印と四角は力の発散と花瓶の状態変化を表し，これはアスペクトに関わる特徴を表している．本論文ではビリヤードボールモデルを参与者間の意味関係記述のみに用い，アスペクトの記述には 2.3.2.節で説明するモデルを使用するので，次章以降の分析では図 5 のような円内部の矢印や四角に触れることはない[17]．

図 5 に事象と概念化者の関係を組み込むと，(22) の参与者間の関係は図 6 の構造を持つことになる．

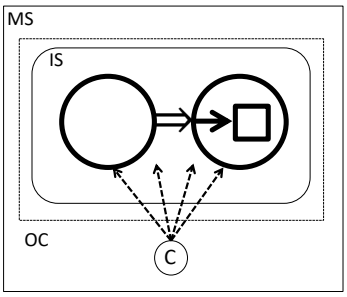


図 6 ステージモデルを含めた (22) の参与者間の意味関係 (cf. Langacker 2008)

第 4 章，第 5 章では，図 6 によって記述される行為動詞の参与者間の意味関係を軸にして，目的語型感情動詞と目的語型感覚動詞がどのような参与者間の意味関係に特徴づけられているのかを分析する．

[17] ビリヤードボールモデルの主軸は参与者の間の意味的関係の記述にあり，アスペクトの詳細な記述は目的とされていないと考えられる．

2.3.2 アスペクトの分析モデル

2.1.節で述べたように，本論文では，動詞が特定の構文環境の中でどのようなアスペクトタイプを取るかという問題を動詞のアスペクトの問題として位置づける．2.3.2.1.節では具体例から以上の点を確認する．2.3.2.2.節では二次元モデルの説明を行い，2.3.2.3.節では従来のアスペクト分析で区別されてきた 4 つのアスペクトタイプがさらにいくつかの下位タイプに分けられることを述べる[18].

2.3.2.1. 明らかにすべきアスペクトの問題

丸田 (1998) の分析に再度目を向けてみよう．丸田 (1998) では，目的語型感情動詞と状態性の結びつきを示す証拠として，(23a) に示すように継続時間副詞句の共起関係が提示された．(23b) は (23a) に対応するフランス語の例である．

(23) a. That television program amused me for an hour. (丸田 1998)
b. Cette émission télévisée m'a amusé pendant une heure.

丸田 (1998) の分析枠組に従うと，(23) において for an hour，pendant une heure を付加しても非文とならないのは，*amuse*，*amuser* が状態性を語彙情報として持つことによる．

これに対して本論文では，継続時間副詞句との共起関係は目的語型感情動詞が状態性を語彙情報として持つことを示す証拠ではなく，状態性を持ち得る可能性を示す現象として位置づける．継続時間副詞句以外の副詞句との共起関係や特定の時制に置かれたときに，どのようなアスペクトを持つかを検討し，様々な構文環境の中で取るアスペクトタイプのパターンを目的語型感情動詞のアスペクトとして捉える．

次のような現象が，動詞が取りうるアスペクトの相違に関わる．

(24) Le Shérif de Nottingham a emprisonné Robin Hood pendant trois ans.
'The sheriff of Nottingham jailed Robin Hood for three years.' (丸田 1998)

(25) a. Cette émission télévisée m'amusait.
'This television program amused me.'
b. Le Shérif de Nottingham emprisonnait Robin Hood.
'The sheriff of Nottingham was jailing Robin Hood.'

---

[18] 本論の動詞のアスペクトの捉え方，アスペクトの記述方法は基本的に Croft (2012) の枠組に従うものである．しかし Croft (2012) の分析を完全に踏襲するわけではなく，動詞のアスペクトに対して文中の要素がどのように関与するかという点において，Croft (2012) とは異なる考え方を取る場合がある (cf. 注 20，30，31).

(23b) と (24) から位置変化を表す使役動詞 *emprisonner* (to jail) は，目的語型感情動詞 *amuser* と同じように継続時間副詞句と共起可能であり，(24) も状態解釈を持つ．しかし半過去形の例 (25) では，目的語型感情動詞の例 (25a) は (23b) と同じように「楽しんでいた」という状態解釈を持つが，*emprisonner* の例 (25b) は投獄寸前であるという解釈を持ち，状態解釈はない．以上の結果から目的語型感情動詞と *emprisonner* は，同じアスペクトを取ることはあるが，取り得るアスペクトタイプの可能性において 2 つの動詞のアスペクトは同じではないと言うことができる[19].

2.3.2.2. 時間，質，フレーム，プロファイル

続いて，特定の構文環境において動詞が持つアスペクトを記述する Croft (2012) の二次元モデルについて説明しよう．

伝統的なアスペクト分析では，動詞のアスペクトタイプは状態動詞，到達動詞，活動動詞，達成動詞に分類されてきた (cf. Vendler 1967)．これら 4 つのアスペクトタイプは，stative/dynamic，durative/punctual，bounded/unbounded の意味対立から区別される．

	stative	dynamic	durative	punctual	bounded	unbounded
状態	○		○			○
到達		○		○	○	
活動		○	○			○
達成		○	○		○	

表 1　4 つのアスペクトタイプの特徴

二次元モデルでは，4 つのアスペクトタイプは，時間と質という 2 つのパラメータとプロファイル，及び，フレームという概念から記述される[20]．see/voir を例に

[19] 丸田 (1998) は，(23a) と The sheriff of Nottingham jailed Robin Hood for three years.が共通することから，目的語型感情動詞は *jail* タイプの使役動詞と同じアスペクトタイプを持つと論じる．しかし，少なくともフランス語の現象に関しては，(25a) と (25b) から目的語型感情動詞と *emprisonner* は同じ解釈を持たず，両者のアスペクトを同じように扱うことはできない．

[20] Croft (2012) では，事象に参与するすべての参与者がそれぞれ独自のアスペクト構造を持ち，文のアスペクトはそれら個別のアスペクトの総和として捉えられる．例えば *Jack broke the vase.* という文は，Jack のアスペクトの構造と vase のアスペクトの構造の 2 つからなると分析される．各参与者のアスペクトは事象の下位イベント (subevent) として規定され，各下位イベントは使役関係で結ばれる．以下に示す図中の Impact が使役関係を表すものと考えられる．Croft (2012) では，アスペクトは時間次元と質次元の二次元からなり，各参与者のアスペクト構造を結びつける使役関係 (本論文の参与者間の関係に相当) はこれとは異なる次元に属すも

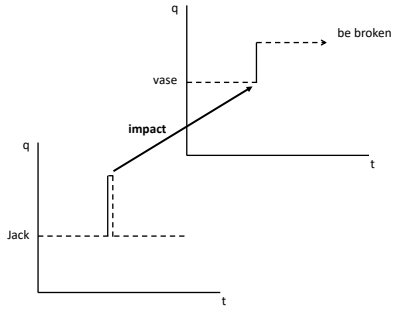
して，表 1 の 3 つの意味対立が二次元モデルでどのように記述されるのかを説明する．二次元モデルに基づいて動詞が持つアスペクトタイプを指すときは，状態動詞，到達動詞，活動動詞，達成動詞ではなく，状態アスペクト，到達アスペクト，活動アスペクト，達成アスペクトという用語を用いることにする．

まず，see/voir が完了時制 (複合過去形) に置かれる例を見てみよう．

(26) a. I reached the crest of the hill and I saw Mount Tamalpais. (Croft 2012)
b. J'ai atteint la crête de la colline et j'ai vu le mont Tamalpais.

(26) は視界に入っていなかったタマルパイス山が見えたことを表す．つまり，タマルパイス山が「見えていない状態（pas vu）」から「見える状態（vu）」に変化したことがアスペクト解釈上，活性化される．このように意味解釈上で活性化されるアスペクト解釈をプロファイルされるアスペクト側面と呼ぶ[21]. (26) では，「見えていない状態（pas vu）」から「見える状態（vu）」への移行に要する時間は問題にされていないので，(26) においてプロファイルされる状態変化は瞬間的（punctual）な特徴を持つ．以上の特徴は図 7 のように記述される．

のと規定される．使役関係も含めたモデルは三次元 (Three demensional representation) モデルと呼ばれる (Corft 2012 : 212)．三次元モデルによってより緻密なアスペクト分析が可能となる．



(Croft 2012 : 212)

しかし，心理動詞の主語と目的語の間の心的なコンタクトの特徴分析には，アスペクト構造の記述を軸とする三次元モデルよりも，Langacker (1990a, 1991, 2008) のビリヤードボールモデルのほうが適していると考えられるため，本論文ではアスペクトと使役関係をそれぞれ別のモデルで記述する．Croft (2012) が提案するモデルのうち，アスペクトを記述する二次元モデルのみ使用する (ibid. :53).

[21] 影山 (1996b) は意味述語を用いたモデルから動詞のイベント構造を分析し，特定の意味述語に対して「認知的際立ち」という概念を導入する．この概念は，解釈上活性化するアスペクト解釈をフレームの中でプロファイルされる側面として捉える二次元モデルの概念に大凡対応する概念である．しかし認知的際立ちという概念を導入しても，例 (25b) のような「寸前」解釈の特徴を捉えることはできない．

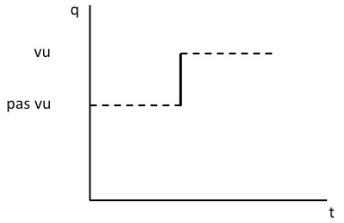


図 7　(26) see/voir のアスペクト

x 軸は時間軸，y 軸は質（状態）軸を表す．実線表示の側面がプロファイルされるアスペクト側面を表す[22]．状態変化の瞬間性は，プロファイルされるアスペクト側面の時間軸上の点が 1 点であることによって表される[23]．表 1 の punctual/durative の対立は，プロファイルされるアスペクト側面の時間軸の点が 1 点であれば punctual，2 点以上であれば durative として記述される．次に質に関わる特徴では, (26) では「見えていない状態（pas vu）」から「見える状態（vu）」へ状態変化することを表すので, プロファイルされるアスペクト側面の質軸は 2 点以上を含むことになる．表 1 の stative/dynamic の対立は，プロファイルされるアスペクト側面の質軸の点が 2 点以上の場合は dynamic, 1 点のみの場合は stative として記述される．続いてフレームについて説明する．(26) は状態変化側面がプロファイルされる解釈を持つが，この解釈が成り立つとき，変化前の「見えていない状態」と変化後の「見ている」という知覚状態がフレーム知識として含まれるため，この 2 つのアスペクト側面はアスペクトフレームとしてプロファイルされるアスペクト側面を支えることになる．図 7 の点線表示がアスペクトフレームを表す．そして (26) では，「見る」という事象が達成された (=完了) したことが含意されるので，bounded/unbounded の意味対立では bounded を特徴とする．この特徴はプロファイルされるアスペクト側面に続いて，それとは別のアスペクト側面がフレームとして含まれることによって表される．つまり，プロファイルされる側面とそれに続くフレーム側面の接合点が含意される事象の終了点 (完了点) を表す[24]．(26) のようにプロファイルされるアスペクト側面が時間軸を 1 点のみ含むアスペクトは，到達アスペクトと見なされる．2.3.2.3.節で述べるように，到達アスペクトはいくつかの下位タイプに分けられる．

---

[22] アスペクトが時間と質からなる構造物であることは，Timberlake (1985)，Jackendoff (1996) でも指摘されている．また高橋 (2008) も，アスペクトは質と時間の 2 つの意味次元からなることを到達動詞の分類をめぐる議論の中で説得的に示している．

[23] 質軸の変化側面は個々動詞の特徴に関わる側面である．意味述語を用いたモデルで ROOT/constant（ルーツ・定項）として規定されていたものに大凡対応する（Levin and Rappaport 2005）．ROOT /constant は STATE や BE として表示される述語関数に対応する．

[24] bounded/unbounded は quality bounded と time bounded に分けられる．quality bounded とはプロファイルされる側面の質軸が終点を含むことを表す．time bounded とはプロファイルされる側面の時間軸が終点を含むことを表す．

次に，see/voir が未完了時制 (現在形) で取るアスペクト解釈を二次元モデルで示す.

(27) a. I see Mount Tamalpais. (Croft 2012)
b. Je vois le mont Tamalpais.

(27) では,「見えていない状態（pas vu)」から「見える状態（vu)」への変化が問題になっているのではなく，タマルパイス山を「見ている，見える」という状態側面がプロファイルされている．何かを見るという事態は一生涯続く事態ではないことから分かるように，(27) が表す状態は恒常的な状態ではなく，一時的な状態として解釈される．したがって (27) の see/voir のアスペクトは図 8 の構造を持つ.

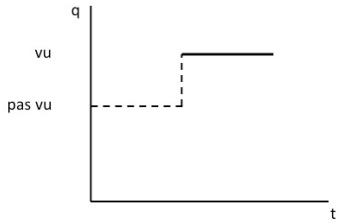


図 8　(27) see/voir のアスペクト

プロファイルされるアスペクト側面が質軸 1 点のみを含むアスペクトは，状態アスペクトと見なされる．2.3.2.3.節で示すように，プロファイルされるアスペクト側面を支えるフレーム側面がどのような特徴を持つかによって，状態アスペクトもいくつかの下位タイプに分けられる.

2.3.2.3. アスペクトタイプ

Croft (2012) では，状態アスペクト，到達アスペクト，活動アスペクト，達成アスペクトを上位カテゴリーとして，(28)〜(31) に示す 11 のアスペクトタイプが区別される.

(28) 状態 (state) アスペクト
transitory state, acquired state, inherent state, point state

(29) 到達 (achievement) アスペクト
reversible directed achievement, irreversible directed achievement, cyclic (semelfactive)

(30) 活動 (activity) アスペクト

directed activity, undirected activity

(31) 達成 (accomplishment) アスペクト
incremental accomplishment, non-incremental accomplishment

第 4 章，第 5 章では，行為動詞からの転用現象に焦点を当てて目的語型感覚動詞と目的語型感情動詞のアスペクトの特徴を記述する．行為動詞のアスペクトも考察対象となるため，状態アスペクトから達成アスペクト至るすべてのアスペクトタイプが問題になる．以下では各アスペクトタイプの特徴を順に説明する．

2.3.2.3.1. 状態アスペクト

状態アスペクトは stative，durative，unbounded を特徴とする．状態アスペクトとその他のアスペクトタイプの相違は stative の有無にある．前節で述べたように，状態アスペクトではプロファイルされるアスペクト側面は質軸が 1 点のみとなる．この条件の下で状態アスペクトは 4 つの下位タイプに分けられる．(32) から (35) の例は，順に図 9 で表されるアスペクト解釈を持つ例である．

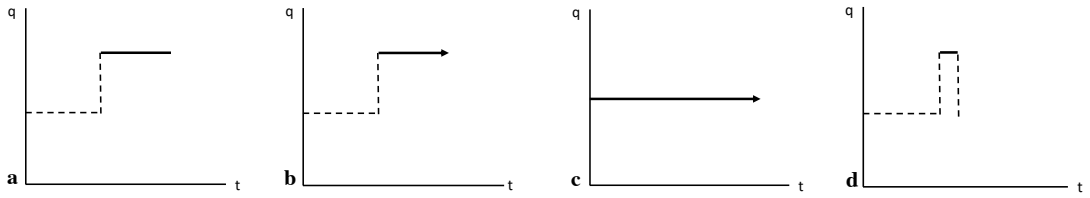


図 9　状態アスペクトの下位タイプ

(32) a. The door is open. (Croft 2012)
b. La porte est ouverte.

(33) a. The window is shattered. (ibid.)
b. La fenêtre est cassée.

(34) a. She is French. (ibid.)
b. Elle est française.

(35) a. The sun is at its zenith. (ibid.)
b. Le soleil est à l'apogée.

以上の例はすべて状態解釈を持つが，その特徴が異なる．(34) は she/elle の恒常的な状態を表す (inherent state)．これに対して (32)，(33) が表す状態は，恒常的な状態ではなく一時的な状態である．活性化される状態解釈以前の状態 ((32) では「ドアが開いていない状態」，(33) では「窓が壊れていない状態」) がフレ

ーム知識として含まれる．図 9a や図 9b では，「ドアが開いていない状態」，「窓が壊れていない状態」がアスペクトフレームに含まれるのに対して，図 9c では主語 she/elle がフランス人ではない状態はアスペクトフレームに含まれない．(32) と (33) は「ドアが開いた結果」，「窓が壊れた結果」の状態が継続することを表すが，「ドアが開いていること」は一般的に一時的にしか継続しないのに対して (transitory state)，モノが壊れた場合，修理するという特別な状況が想定されないかぎり，壊れた状態は半永久的に継続することになる (acquired state)．図 9a と図 9b の結果状態の矢印の有無は，状態が一時的なものか半永久的なものかを表す[25]．(35) は太陽が天頂にあることを表しているが，一般的に太陽が天頂にあるのは一瞬のことで，その後すぐに天頂にない状態に戻るので (point state)，天頂に達した後で再び天頂にない状態を表すアスペクト側面がアスペクトフレームに含まれる (図 9d)[26]．

2.3.2.3.2. 到達アスペクト

到達アスペクトは dynamic，punctual，bounded を特徴とする．到達アスペクトは，プロファイルされるアスペクト側面の質軸は 2 点で，時間軸が 1 点のみであることを特徴とする．この条件の下，3 つの到達アスペクトが区別される．(36) から (38) は，順に図 10 の各図で表されるアスペクト解釈を持つ例である．

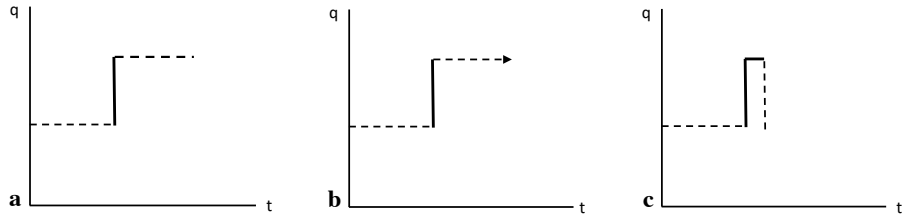


図 10 到達アスペクトの下位タイプ

(36) a. The door opened. (Croft 2012)
b. La porte s’est ouverte.

(37) a. The window shattered. (ibid.)
b. La fenêtre s’est cassée.

(38) a. The train whistled.
b. Le train a sifflé.

---

[25] 状態性の一時性の有無は，Carlson (1977) の stage-level/object-level の違いに相当するものである．

[26] 状態アスペクトは durative を特徴とするが，(35) が表す point state は状態の継続性はほとんどないので，この点においてその他の状態アスペクトタイプとは性質が異なる．

(36), (37) では「ドアが開いていない状態」から「ドアが開いた状態」への変化，「窓が割れていない状態」から「窓が割れた状態」への変化がプロファイルされる．加えて (36)，(37) では，変化が完了するまでの時間は問題にされていないので，プロファイルされる状態変化は瞬間的に達成される特徴を持つ．開けられたドアは通常，再び閉められるものとして解釈されるので，開かれたドアの状態は一時的にしか継続しない (directed activity[reversible])．これに対して割れたモノが元に戻るということは，「割れる」という事象のフレーム知識には含まれないので，窓が破損した後の結果状態は半永久的に継続する (directed actvity[irreversible])．図 10a と図 10b のアスペクトフレームの矢印の有無は，以上の 2 つの結果状態の違いを表す．(38) は汽車が一度汽笛を鳴らしたことを表すものとする．すると (38) では，音が放出されていない状態から音が放出された状態へ変化することが解釈上プロファイルされる．しかし音の放出は持続性を持たず，一瞬の出来事である．したがって (38) に含まれる *whistle*，*siffler* のアスペクトフレームには，放出後，放出前の状態へ戻る側面が含まれる (cyclic/semelfactive)[27] [28]．

2.3.2.3.3. 活動アスペクト

活動アスペクトは dynamic，durative，unbounded を特徴とする．活動アスペク

---

[27] 図 10c は時間軸に 2 点含まれるような表示となっているが，実際は 1 点のみである．1 点表示にすると，プロファイルされる状態変化の側面と元の状態へ戻るフレーム側面が一致してしまい，2 つの側面を視覚的に表示することができないので 2 点表示となっている．

[28] 従来のアスペクト研究では到達動詞を 1 つのアスペクトタイプと見なすべきか，語用論の問題とすべきかが議論されてきた（cf. 高橋 2008，Verkuyl 1993，三原 2004，中右 1994）．高橋（2008）は，到達動詞と達成動詞の違いに関する Verkuyl（1993）の議論を以下のようにまとめる．「例えば Verkuyl (1993) は (10) の用例を挙げ，一般に手紙をタイプするのは一定の時間幅が必要であるのに対し，“P” という文字を打つ動作は瞬時的であることから，Vendler の主張に従うならば (10a) は達成動詞の例に，また (10b) は到達動詞の例に，それぞれ分類されるはずだと述べる．

(10) a. type / write a business letter
　　b. type / write the letter P

その上で Verkuyl は，こうした分類が世界知識に依存したものに過ぎないことを指摘し，文脈次第では (10a) 及び (10b) の分類が上述のものと正反対になることさえあり得ることを説得的に論じている」(高橋 2008 : 30-31)

本論の枠組では，手紙をタイプすることと，P という文字をタイプすることの時間幅が問題にされるかどうかは，言語表現上，時間幅がプロファイルされる構文環境であるかによって決まるものと考える．*John wrote a business lett*er.，*John wrote a letter P.* という場合，どちらも手紙，文字 P がタイプされるまでの時間幅は言語表現上，問題にされていないので，双方のアスペクトタイプは瞬時的に終了する事態を表す到達アスペクトになると考える．これに対して *John wrote a business letter in five minutes*., *My son was writing a letter P so carefully,* という構文環境では，いずれも手紙，文字 P が完成するまでの過程がプロファイルされるので達成アスペクトを持つことになる．

トでは，プロファイルされるアスペクト側面は質軸を 2 点以上含み，かつ，表される事象の完了性が含意されないので，プロファイルされるアスペクト側面の後にはアスペクトフレームが含まれない特徴を持つ．この条件の下で活動アスペクトは，2 つの下位タイプに分けられる．(39)，(40) は，順に図 9a，9b で表されるアスペクト解釈を持つ例である．

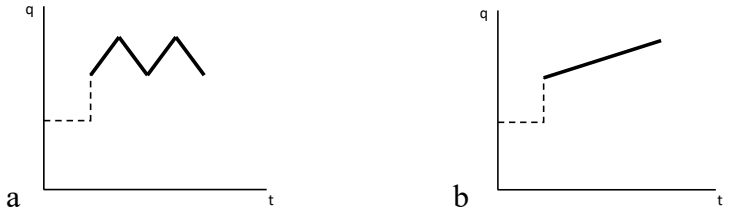


図 11　活動アスペクトの下位タイプ

(39) a. Marie dances.
b. Marie danse.

(40) a. The soup cools.
b. La soupe refroidit.

(39) は Marie の継続する運動を表す．継続性を持つ点は状態アスペクトと同じだが, 継続しているのは Marie の状態ではなく dynamic な身体動作の変化を伴う活動である．この特徴はプロファイルされるアスペクト側面の質軸が上昇と下降を繰り返す形で表される (図 11a) (undirected activity)．(40) も dynamic な事象を表すが，スープが冷める過程は漸次的（incremental）に進行するという特徴を持つ (directed activity)．漸次的変化はプロファイルされるアスペクト側面が右肩上がりとなっていることによって表される (図 11b) [29]. フランス語の例に限定してみると，漸次的な変化を表すかどうかは副詞句 peu à peu「少しずつ」を付加することで確かめることができる．以下の結果から分かるように，(39b) にはこの副詞句を付加できないが (40b) は可能である．

(41) La soupe refroidit peu à peu.
‘The soup is cooling little by little.’

(42) *Marie danse peu à peu.
‘Marie is dancing little by little.’

[29] 温度の低下という点からすると，図 11b においてプロファイルされるアスペクト側面は右肩上がりではなく右肩下がりのほうが適切だと思われるが，この図は状態変化の漸次性を表す図であり，実際の状態変化を忠実に表したものではない．

以上の違いから，(39b) に含まれる *danser* と (40b) に含まれる *refroidir* は異なる活動アスペクトを持つものとして分析される．

2.3.2.3.4. 達成アスペクト

達成アスペクトは dynamic，durative，bounded を特徴とする．達成アスペクトは，一定時間ののち完了する事象を表すので，プロファイルされるアスペクト側面の質軸と時間軸は両方とも 2 点以上を含む．事象完了後の結果状態の側面がフレームとして含まれる特徴を持つ．この条件の下，達成アスペクトは 2 つの下位タイプに分けられる．(43)，(44) は，順に図 12a，12b によって表されるアスペクト解釈を持つ例である．

図 12　達成アスペクトの下位タイプ

(43)　a. I ate a pancake in ten minutes.
　　b. J’ai mangé une crêpe en deux minutes.
(44)　a. Harry repaired the computer in ten minutes.
　　b. Harry a réparé l’ordinateur en deux minutes.

(43)，(44) では所要時間副詞句の存在により，クレープを食べ切るまでの時間，パソコンが修理されるまでの時間がプロファイルされている．しかし (43) と (44) では，事象が完了するまでの過程の質が異なる．「食べる」という事象は一般的に漸次的に進む事象である．その証拠に「10 分でクレープを半分食べた」，「10 分でクレープを 3 分 1 食べた」ということができる．図 12a においてプロファイルされるアスペクト側面が右肩上がりであることがこの漸次的変化を表す (incremental accomplishment)．これに対して修理する事象は，試行錯誤を繰り返しながら行われる．そのため「?パソコンを半分修理した」とは言いにくい．図 12b においてプロファイルされるアスペクト側面が上昇と下降を繰り返していることがこの特徴を表す (non-incremental accomplishment)．ちなみに所要時間副詞句を伴う構文環境において，*manger* と *réparer* は異なるアスペクトになるが，副詞句のない複合過去形の文ではいずれも directed achievement 解釈となる

(e. g. *Harry a réparé l'ordinateur*. 'Harry repaired the computer.', e.g. *J'ai mangé une crêpe*. 'I ate an pancake.')[30] [31].

2.4. まとめ

本章の内容をまとめる．動詞の意味カテゴリーとイベント構造の位置づけに対する本論文の立場に関しては以下のように述べた．従来の心理動詞研究では，生成文法的アプローチの流れを汲む語彙意味論の中で論じられてきた．このアプローチの前提には，動詞の意味カテゴリーやイベント構造は，動詞にアプリオリに備わる語彙情報としてあるという考え方がある．この考えの下では，文は動詞の語彙情報が投射された結果物として見なされる．そして，語彙情報として備わるイベント構造の特徴を明らかにすることが考察課題として位置づけられることになる．これに対して本論では，動詞の意味カテゴリーやイベント構造の特徴は動詞に本来的に備わるものではなく，具体的な使用 (usage) の中で文中の要素との相関関係の中で決定されるものと考える．その上で，動詞が取り得る意味カテゴリーの可能性とイベント構造の特徴を明らかにすることが重要な問題であると考える．文レベルで心理動詞の存在を規定する場合，第 1 章で提起したように，心理動詞の定義と心理動詞性を支える構文論的特徴を明らかにする必要がある．この問題は第 3 章で議論する．

---

[30] Croft (2012) では incremental accomplishment，non-incremental accomplishment の例として，順に副詞句のない以下の例を挙げる (ibid. : 62).
(a) I ate an puncake.
(b) Harry repaired the computer.
副詞句のない例において (a)，(b) が accomplishment であると見なされているということは，「食べる」，「修理する」という事象が現実において持つ特性―食事をすることは一定時間かかる出来事であり，修理するということも通常，ある程度の時間を要する―がアスペクトタイプ判断の根拠になっていることを意味する．しかしここで (a)，(b) が発話される状況を考えてみたい．(a) は What did you have for lunch ?に対する応答，(b) は What did Harry do yesterday ? のような質問への応答だと考えられる．このとき，食べる，修理するという事象が達成されるまでの過程がプロファイルされているとは考えにくい．(a)，(b) ではクレープを食べたこと，パソコンを修理したことに解釈の焦点があり，その過程は捨象されており，アスペクトは以下に示す (c) と同じように (directed) achievement であると考えられる．
(c) I reached the crest of the hill and I saw Mount Tamalpais. (本文例 (26a))
本論文では位置・状態変化が含意される例では，その過程が言語的にプロファイルされるかどうかが当文における動詞のアスペクトを決定すると考える．

[31] Croft (2012) では incremental accomplishment を持つ例として進行相に置かれる以下 (a) を挙げる (ibid. : 97)．しかし同じく進行相に置かれる (b) の例は，結果状態がアスペクトフレームに含まれない directed activity だとされており，アスペクトタイプの判断に揺れがあるように思われる (ibid. : 81).
(a) The bridge is collapsing.
(b) I was writing a letter.
2 つの例では状態変化 (橋が崩壊したこと，手紙を書き終えること) が含意されないので，本論では (b) だけではなく (a) も directed activity になると考える．

イベント構造の記述方法については次のように論じた．イベント構造は参与者間の意味関係とアスペクトからなるが，LCS 分析の記述モデルでは概念化者と事象の関係を記述することができないこと，動詞のアスペクトタイプが共起する構文タイプによって左右されるという動的な関係を捉えることができないという問題がある．以上の問題を踏まえて，概念化者と事象の関係に対して，見る／見られるという関係から動詞の意味記述を行うステージモデルを使用することを述べた．ただし見る／見られる関係からでは，〈いま・ここ〉において心理を感じる主体の存在を捉えることができない．そこで，単なる経験者から区別される「感じる主体」という意味役割を加えたステージモデルを用いることを示し，本論文で扱う現象は 4 つのステージモデルから記述されることを論じた．ステージモデルを土台として参与者間の意味関係の記述には，力の連鎖として参与者間の意味関係を記述するビリヤードボールモデルを用いることを述べた．アスペクトに関しては Croft (2012) の二次元モデルに基づいて，時間，質，プロファイル，フレームという概念からアスペクトの構造を記述することを示した．これらのモデルを用いて第 4 章，第 5 章では，行為動詞からの転用現象に注目して目的語型感覚動詞と目的語型感情動詞のイベント構造の特性を明らかにする．

第 3 章　心理動詞性の考察

目的語型の心理動詞の多くは，行為動詞からの転用によって生産され，増加傾向にある．この特徴を切り口にして提起した問いが，転用によって目的語型心理動詞が増加するのはなぜか，という問いであった．そして目的語型心理動詞の多くが転用型であるということは，ある動詞が心理動詞であるか―心理動詞性を持つか―は予め決まっているものではなく，文の中で発現する特性であると考えられる．そこで，心理動詞性はどのような構文論的条件の下で発現するのか，という問いも合わせて提起した．以上の問題を明らかにするために，心理動詞とは何か，という定義に関わる問題に着目する．この問いは一見すると陳腐な問いのように思われる．感情動詞ならばそれは感情事象を表す動詞であり，感覚動詞ならばそれは感覚事象を表す動詞である，と答える以外に言いようがないと思われるからである．実際，従来の心理動詞研究では，心理動詞がいかなる動詞であるかどうかは自明のこととして議論が進められ，その定義に触れられることはほとんどなかった．本章では，心理事象の現象面での特徴と心理事象を言語的に表すことがどのような発話機能を持つのかという機能面の特徴に注目して，心理動詞の定義し，以上 2 つの問題を論じる．またこれらの考察を通して，心理動詞性は二分法的に分けられるものではなく，グレイディエンスを持つカテゴリーであることも論じる．

3.1.節では，心理動詞の定義問題に関心を寄せた Ruwet (1994) の議論に注目して，心理動詞が 3 つの意味特徴によって特徴づけられることを論じる．3.2.節では，行為動詞と文法カテゴリー (主語，目的語) が持つスキーマ的意味と 3.1.節で明らかにする心理動詞の意味特徴の関係から 1 つ目の問題を論じる．3.3.節では，行為動詞の目的語型心理動詞への転用メカニズムの分析を通して，心理動詞性の発現に関与する構文論的条件を明らかにし，2 つ目の問いに答える．3.4.節では，構文論的条件が解除されるに従って，心理動詞性が除々に低下することを論じる．その中で目的語型感情動詞と目的語型感覚動詞の間には，主語に置かれる名詞句の特性において相違点があることを述べ，その違いが生まれる要因を明らかにすることをもう 1 つの問題として提起する．3.5.節で以上の考察をまとめる．

3.1.　心理動詞とは何か

3.1.1.節では，心理が感じられる事象であることに注目して，心理動詞の存在を捉えようとする Ruwet (1994) の議論を検討する．3.1.2.節では，感じるという作用が〈いま・ここ〉，〈私〉，〈特殊な因果関係〉からなることと，感じる心理を表すことが表出 (expressive) という機能を持つことに着目して心理動詞を定義

する．

3.1.1. Ruwet (1994)：感じられることとしての心理

第 1 章で述べたように，心理事象を表すことの内実を検討しない限り，様々な事象を表す動詞が心理動詞として扱われることになる．事実，これまでの心理動詞研究では人間の社会的地位や気質，容姿に関わる事象を表す *anoblir* (to ennoble)「高貴にする」，*civiliser* (to civilize)「文明化させる，行儀良くさせる」，*rajeunir* (to make somebody look younger)「若く見せる」などの動詞が心理動詞に含められたこともあり，共通基盤のない状態で研究が進められてきたと言える (cf. Gross 1975, Legendre 1989)．このような状況を危惧した Ruwet (1994) は，心理動詞とは何か，という問題に関心を寄せる．Ruwet (1994) は，心理とは人間によって「感じられる « éprouvé »」事象であると論じる．具体例と合わせて (1) に Ruwet (1994) の考察を引用する．引用文内の「V φ」は目的語型感情動詞を指す．邦訳，例文番号，英訳と括弧内の補足はすべて筆者によるものである．

(1) J'essaierai de montrer que, depuis les débuts des études transformationnelles et/ou génératives sur les verbes de sentiment, beaucoup de linguistes d'obédiences diverses ont assimilé aux V φ des verbes qui, à strictement parler, n'expriment pas un sentiment (…)

(i) a. La lecture d'Homère passionne Maxime.
'The reading of Homer fascinates Maxime.'
b. L'accroissement du chômage inquiète Alfred.
'The growth of unemployment worries Alfred.'

(ii) a. Ses déclarations intempestives discréditent le ministre.
'His untimely statements discredit the minister.'
b. Le scandale de Valenciennes déconsidère Bernard Tapis.
'The scandal of Valenciennes discredit Bernard Tapis.'

Intuitivement, le contraste entre (i) et (ii) est assez clair : (ia) et (ib) expriment un sentiment éprouvé par Maxime ou par Alfred (…) Quant à (iia)-(iib), ces phrases expriment des jugements négatifs, publics, émis par des personnes, des journaux, etc., (…) ceux-ci (le ministre, Tapis) peuvent ne pas se rendre compte du discrédit ou de la déconsidération où ils sont tombés. (Ruwet 1994 : 45-46)

「私は，感情動詞に関する変形文法的及び/または生成文法的な研究の当初から，様々な影響下にある言語学の多くが，厳密に言うと，感情を表さない動詞を感情動詞と同一視してきたことを示してみる (…) 直感的に (i) と (ii) の対比は明確である：(ia) と (ib) Maxime あるいは Alfred

によって感じられた感情を表す．(…) (iia)-(iib)に関しては，これらの文は人々や新聞などによって述べられた公の否定的な判断を表しており (…) それらは (大臣，Tapis)，自分が陥った不評あるいは不信に気づいていなくてもよい」

passionner (to fascinate), *inquiéter* (to worry) と, *discréditer* (to discredit), *déconsidérer* (to discredit) は，目的語に人間 (humain) を表す項を選択する点において共通点を持つ．しかし Ruwet (1994) は，前者 2 つの動詞では目的語の人間は心理を感じる主体であるのに対して，後者 2 つの動詞では目的語の人間が何かを感じているかどうかは表されないので，後者 2 つの動詞は心理動詞 (感情動詞) とは呼べないと論じる．つまり選択される人間が「感じる主体」であることが心理動詞認定の要として考えられていることを意味する．心理動詞が心理事象という漠然とした事象を表す動詞ではなく，「感じられること」を表す動詞であるという Ruwet (1994) の指摘は示唆に富むものである．本研究でも感じられる心理を表すかどうか，つまり文の中に含まれる人間を表す項が感じる主体のステイタスを持つかどうかが心理動詞の定義を考える上で重要な要素であると考える．

Ruwet (1994) の分析は，真の心理動詞とそうではない動詞の混同を避けるために，感じる主体に着目している点においてそれまでの心理動詞研究と大きく異なる．一方で Ruwet (1994) は，心理動詞は語彙レベルで決まるもの，つまり心理動詞であるか否かは動詞にアプリオリに備わる性質であることをほのめかしており (ibid : 24, 注 4)，この点に関しては従来の心理動詞研究と同じ前提に立っていると考えられる．そして真の心理動詞とそうではない動詞の混同を避けるべきであると述べるも，Ruwet (1994) は心理動詞であることを調べるための適切なテストがないことにも触れている (ibid. : 48).

感じられる心理を表すかどうかという点から見るならば，*Ça me bassine*. ‘It moistens me.’「退屈させる」，*Ça me pompe*. ‘It pumps me.’「退屈させる」という文も目的語に置かれる人間が感じる感情を表すが，これらの文に含まれる *bassiner* (to moisten)，*pomper* (to pump) は，いずれも「濡らす」，「ポンプで水を汲み上げる」という行為動詞用法を持ち，行為動詞用法では人間が感じる心理を表すわけではない．心理動詞であることが語彙項目に書き込まれている特性であるならば，*bassiner*，*pomper* には 2 つの異なる語彙項目があり，心理動詞として機能する *bassiner*，*pomper* と行為動詞として機能する *bassiner*，*pomper* は同音異義語として処理されることになる．しかし 3.2.節で論じるように，心理動詞 *bassiner*，*pomper* と行為動詞 *bassiner*，*pomper* の間には同音異義語の問題としては片付けることのできない意味的関連性があると考えられる．興味深いことにこのことは Ruwet (1972) で示唆されていることで，心理動詞の存在をどのレベルで認め

るべきかという点に関して Ruwet の立場には揺れがあるように思われる．*bassiner* や *pomper* のような共時的転用現象だけではなく，通時的転用現象，つまり現在の用法では語彙型だと考えられる心理動詞もその多くが歴史的には行為動詞からの転用であるという事実を踏まえると (cf. 第 1 章), 感じられる心理を表すかどうかは Ruwet (1994) が暗示したように語彙項目に登録された特性と見なすよりも，文レベルで発現する意味効果として捉えたほうが妥当だと考えられる．

ここで 1 つ補足しておく．引用 (1) の後で Ruwet (1994) は，心理を感じる人間を志向主体 (sujet intensionnel) と名付ける．志向主体とは感情事象に関わる主体であり, 感情を引き起こす対象へ意識を向ける主体を表す. 悲しいと感じるとき, その悲しさはたとえば親しい人間の別れを知らされて, その訃報を意識するという作用が伴うことで生じる. 感情を感じることは, 何らかの出来事を意識, 認識するということと不可分な関係にあると考えられる．しかし, 自己の内側で何かを感じることと，ある対象に意識を向けることは同じ現象ではないと考えられる．Ruwet (1994) では取り上げられていないが, 感覚事象に目を向けてみると，煙が目に入って「痛い」と感じることや熱いフライパンに触れて「熱い」と感じることもまた感じられる (éprouvé ‘to be felt’) 出来事だと言えるだろう．しかし「痛い」,「熱い」という感覚において，煙に意識を向ける，フライパンを認識するという作用が働くとは考えにくく，感覚を感じる主体には意識を向ける志向主体としての側面はないと考えられる．Ruwet (1994) では同じような概念として扱われている感じること (éprouvé ‘to be felt’) と意識を向けること (intentionnel ‘intentionality’) を本論文では区別することにする．Ruwet (1994) の関心は心理動詞の中でも感情動詞 (verbe de sentiment ‘verb of emotion’) に向けられているので，2 つの概念が同じように扱われていても問題はない．しかし本章では, 感覚動詞を含む心理動詞の定義を模索しているので, 志向主体に関する議論はひとまず伏せて，感じられることとしての心理という側面にのみに注目する．感情事象を特徴づける志向主体の問題に関しては第 5 章で詳論する．

3.1.2. 文の中で生まれる心理動詞性

3.1.2.1.節では，心理を感じることの現象面の特徴とそのことを言語的に表すことの機能面の特徴に注目して，心理を感じることを言語的に表現することが〈いま・ここ〉の〈私〉の内面で起こる出来事を表出するという特徴を持つことを示す. またこれらの特徴が, 行為を表す文には見られないことを論じる. 3.1.2.2.節では，心理を感じることが〈いま・ここ〉の〈私〉だけではなく，何らかの原因によって起こる出来事であることに注目して，物理的な因果関係と対比させながら，心理事象は〈特殊な因果関係〉にも特徴づけられていることを論じる．

3.1.2.1. 〈私〉,〈いま・ここ〉における心理の表出

感情や感覚を感じるという状況を考えてみよう．仕事の山を目の前にしたときに我々はイライラという心理状態を感じるだろうし，熱せられたフライパンに触れたときには熱いと感じるだろう．これらの経験は現象レベルで見ると〈いま・ここ〉の〈私〉においてのみ経験される特徴を持つ．そのためこのような経験は，「あ，飛行機雲！」と指差すように「*あ，悲しみ！」，「*あ，痛み！」と言って聞き手と共有することはできない．さらに発話時の発話者自身の内面で起こる出来事は，*Ah, ça m'énerve !* 'Oh, it irritates me!' (「ああ，イライラするなぁ」), *Ah, ça brûle !* 'Oh, it burns!' (「熱っ！」) といった文によって言語的に表現されるが，これらの表現は〈いま・ここ〉の〈私〉から切り離された事態を表す表現，たとえば *Hier, ma mère a cassé une assiette.* 'Yesterday, my mother broke a dish. 'のような客観的な事態を表す表現とは異なる発話機能を持つ[1]．もっとも一般的な発話機能は，出来事を描写し，話し手から聞き手に伝えるという機能だと考えられる．*Hier, ma mère a cassé une assiette.* はこのような描写機能を担う．これに対して *Ah, ça m'énerve !* 'Oh, it irritates me! 'や *Ah, ça brûle !*'Oh, it bruns!' と言う表現は，内面で起こるできる出来事を描写し，相手に伝えることに主眼が置かれるわけではない．*Ah, ça m'énerve !* に類似する日本語の表現，「ああ，腹が立つ」という表現について論じた山岡 (1998) は，この文が発話者の発話時に内面で起こる変化を表出する機能を持つことに注目して，この文に含まれる「腹が立つ」を感情表出動詞と呼ぶ．山岡 (2008) の考察に注目すると，*Ah, ça m'énerve !* や *Ah, ça brûle !* も「ああ，腹が立つ」と同じように，〈いま・ここ〉の〈私〉が感じる心理を表出する機能を担い，この文に含まれる *énerver*，*brûler* は，「腹が立つ」と同じように，表出型の動詞の資格を持つと考えることができる[2]．「ああ，腹が立つ」，*Ah, ça m'énerve !*，*Ah, ça brûle !* などの表現は独り言として使用することができることからも，これらの表現が出来事を描写し，出来事を他者に伝達する機能を持たないことを示すことができる．これに対して *Hier, ma mère a cassé une assiette.*という文は，特殊な状況を想定しないかぎり独り言で使用することは難

---

[1] 山岡 (2008) では，発話機能は「話者がある発話を行う際に，その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの」と定義し，発話機能の原初的分類として Bühler (1934) の分類を挙げる．Bühler (1934) では表出，演述，訴えという 3 つに基本的機能が区別されている．Bühler (1934) の 3 分類に照らし合わせると，本論文で扱う現象では表出と演述が問題となる．表出とは話し手自身の内的事象の言語化の機能を指し，演述とは対象・事態の言語化の機能を指す．演述を本論文では「描写」と呼ぶ．

[2] 表出機能を担う一般的言語記号は，Ah 'oh'，Aïe 'ouch'のような感嘆詞や間投詞などであるが，本研究では山岡 (1998) の感情表出動詞という考え方に着想を得て〈いま・ここ〉の〈私〉が感じる感情，感覚を表す動詞文も表出機能を担うものと考える．3.4.2.節で提示する「描写型心理動詞」も山岡 (2002) の議論に着想を得たものである．

しい.

心理事象の現象面での特徴が言語表現上の問題と関わることは日本語ではよく知られている．(3) から分かるように，日本語の心理述語では非過去形では 1 人称のみが容認される (寺村 1971, 西尾 1972, 益岡 1997, Kuroda1973, Togo 2006)[3] [4].

(3) a. (私は) とても悲しい.
b. *花子はとても悲しい.

フランス語の心理動詞ではどうだろうか．感情動詞を例に見てみると，(4) として再掲する例 (1-ia) は，経験者が 3 人称に置かれているものの (3b) のように容認度が低いということはない．また (5) のように，経験者を 1 人称に変えても容認度は低下しない.

(4) a. La lecture d'Homère passionne Maxime. (=(1-ia))
b. L'accroissement du chômage inquiète Alfred. (=(1-ib))
(5) a. La lecture d'Homère me passionne.
'The reading of Homer fascinates me.'
b. L'accroissement du chômage m'inquiète.
'The growth of unemployment worries me.'

ところが機能的観点から見ると，(4)，(5) は異なる特徴を持つ．(5) ではホメロスの作品で〈いま・ここ〉の〈私〉が楽しいと感じていること，あるいは失業者の上昇に不安を感じていることを表す．これに対して (4) は，Maxime，Alfred が楽しい，不安を感じているだろうという発話者 (概念化者) の判断を表し，機能的に見ると (4) は内面状態の表出ではなく，他者が経験している出来事を概念化者が描写しているという機能を持つ．つまり Maxime，Alfred が〈いま・ここ〉

[3] (3) は益岡 (1997) の例を参考にしたものである．益岡 (1997) は「(私は)とても悲しいよ」という例を上げるが，終助詞「よ」の存在によって，聞き手へ心情を伝達することに重きが置かれ，表出性が低下すると考えられたので終助詞は除くことにした.

[4] 日本語の心理述語の非過去形で人称制約が取り上げられるとき，多くの場合「主観性」の問題のみが問題にされる．本論でも主観性，つまり〈私〉性は心理動詞の定義を考える上で重要であると考える．しかしこれに加えて〈いま・ここ〉も重要な要素であると考える．主観性に限定するならば，機能性，つまり表出か描写かという違いは問題にならないが，ここでは感情や感覚の現象上の特徴だけを問題にしているのではなく，それらを言語化することを問題にしている．感情や感覚を経験することとその言語化を論じるためには，感情や感覚を表すことが「昨日，母がお皿を割った」という事態の描写とは異なる機能を持つことに注目する必要があると筆者は考える.

で感じる感情を表出しているのではない. (4) と (5) の違いは感嘆符の解釈からも確かめることができる．(6) と (7) を比較しよう.

(6) a. #La lecture d'Homère passionne Maxime !
b. #L'accroissement du chômage inquiète Alfred !
(7) a. La lecture d'Homère me passionne !
b. L'accroissement du chômage m'inquiète !

(7) では〈いま・ここ〉の〈私〉がわくわくしていること，不安に感じていることが感嘆符によって強調されている．ところが (6) の感嘆符は，Maxime，Alfred が感じる感情状態を強調しているのではなく，「Maxime がホメロスの作品に夢中みたいよ！」，「失業者の上昇が Alfred を不安にさせているみたい！」という話し手の驚きが強調されており，この驚きは発話態度にのみ (あるいは感嘆符にのみ) あり，*passionner*，*inquiéter* などの語彙要素に認められるわけではない．「#」は (6) が〈いま・ここ〉で感じる感情を表出する文としては容認されにくいことを表す[5] [6].

主体によって「感じられる」事象を表すかどうかによって真の心理動詞とそうでない動詞を区別すべきだと論じる Ruwet (1994) の主張に異論はない．しかし，心理を感じることの現象面の特徴とそのことを言語的に表すことの機能面の特徴から心理動詞の存在を見ると，もっとも心理動詞らしい動詞とは〈いま・ここ〉の〈私〉に感じられる内的状態を表出する文に含まれる動詞だと考えられる．このように考えると *passionner* や *inquiéter* は，主体が感じる感情を表す可能性を潜在的に持つと言えるが，他者の感情を表現する (4) は表出機能を持たず，この意味において (4) に含まれる *passionner* や *inquiéter* の心理動詞性は低くなる

---

[5] Ruwet (1994) は (a) と (b) の対比から，人称制約がかかる目的語型感情動詞の例に言及している．しかしそれに続けて，主観性の問題が関わる現象を感情動詞の問題に持ち込むべきではないと主張する (ibid. : 51).
(a) Ce film m'amuse. 'This movie amuses me.'
(b) ? Ce film l'amuse. 'This movie amuses him/her.' (Ruwet 1994，英訳は筆者による)
なお 2 人称単数の例も 3 人称単数と同じように容認度が低い (e.g. ? Ce film t'amuse. 'This movie amuses you.')．2 人称単数が容認されないのは，主観性の問題とは別の語用論的問題によるものだと考えられるが，本論文ではこの問題について論じない (cf. Dhorne 1998).

[6]〈いま・ここ〉の〈私〉の心理を表出するという点から見ると，経験者が主語に置かれる主語型心理動詞のうち，以下 (a) に含まれる動詞を心理動詞として扱ってよいかは検討の余地がある．(a) は現在形に置かれているが，発話時に限定された〈いま・ここ〉において〈私〉が感じる感情を表すのではなく，主体が「青色を好む」という属性を持っていることを表す.
(a) J'aime le bleu. 'I like the blue.'
(b) Elle aime le bleu.'She likes the blue.'
主語型心理動詞 *aimer* のような動詞の扱いについては今後の課題とする．この問題については第 6 章の結論にて改めて述べる.

と本論では考える．

以上の特徴は感覚動詞にも共通する．

(8) a. Ce pull me démange !
‘This sweater itches me!’
b. ?? Ce pull le démange !
‘This sweater itches him!’

(9) a. Le vent me pince !
‘The wind pinches me!’
b. ?? Le vent le pince !
‘The wind pinches him!’

経験者が〈いま・ここ〉において感じる感覚を表出する現象では，(8a)，(9a) と (8b), (9b) の対比が示すように目的語人称代名詞に 3 人称を置くと容認度は低くなる．

心理事象の表現が〈いま・ここ〉の〈私〉に縛られるのに対して，行為事象は〈いま・ここ〉の〈私〉に縛られることない．そのことに関連して，行為事象を表す文が表出機能を持つことはなく，行為事象の言語表現は描写機能を持つと考えられる．*piquer* (to sting), *tirailler* (to tug) が行為動詞として使用される (10), (11) と，これらの動詞が目的語型心理動詞として使用される (12)，(13) を比較してみよう．

(10) a. Paul me pique le bras.
‘Paul stings me$_i$ at the the arm$_i$.’
b. Paul lui pique le bras.
‘Paul stings him/her$_i$ at the arm$_i$.’

(11) a. Paul me tiraille par la manche.
‘Paul tugs me by the sleeve.’
b. Paul le tiraille par la manche.
‘Paul tugs him by the sleeve.’

(12) a. Ça me pique.
‘It stings me.’
b. ?? Ça le pique.
‘It stings him.’

(13) a. Ça me tiraille.
‘It tugs[bothers] me.’

b. ?? Ça le tiraille.
‘It tugs[bothers] him.’

(10a), (11a) と (12a), (13a) を比較してみると，どちらも発話時に起こっている事態を表し，発話者 (概念化者) 自身がその事態に含まれているが，事象との関わりにおける概念化者の意味的ステイタスは異なる．行為を表すことが描写的機能を持つことに相関して，行為事象に含まれる参与者はすべて，1 人称の場合でも，行為を受ける被動作主の意味役割を持ち，描写対象としてのステイタスを持つ．行為事象を表す文に含まれる参与者は，内的状態を表出する「感じる主体」のステイタスを持たないと考えられる．感じる主体は 1 人称に限定されるので，(10a), (11a) の目的語が (10b), (11b) のように 3 人称に置き換えることができることからも，(10), (11) の参与者は感じる主体のステイタスを持たないということができる．これに対して (12a), (13a) は，発話者が発話時に感じる心理を表出し，これらの主体は「感じる主体」として事象に組み込まれている．そのためこれらの主体は，(12b), (13b) に示すように 3 人称置き換えることができない．ステージモデルを用いると (10), (11) と (12a), (13a) の事象と概念化者の関係の違いは次のように表すことができる．

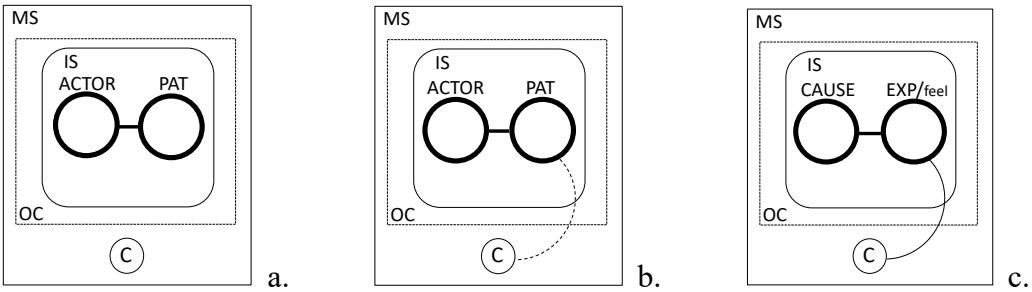


図 1　(10), (11), (12a), (13a) の事象と概念化者の関係

図 1a は (10b), (11b), 図 1b は (10a), (11a) の事象と発話者 (概念化者) の関係を表す．図中の 2 つの円のうち，左側の円が主語にプロファイルされる参与者で，右側の円が目的語にプロファイルされる参与者を表す (参与者間の関係は第 4 章，第 5 章で考察する)．(10), (11) の目的語に置かれる参与者は，行為者 (ACTOR) から行為を受ける被動作主 (Patient, PAT) のステイタスを持つ．(10a), (11a) の 1 人称目的語代名詞は概念化者と同一指示関係にあるが，この 1 人称は感じる主体のステイタスは持たないので，(10b), (11b) の 3 人称目的語人称代名詞とそのステイタスは基本的に同じである．図 1c は (13a), (14a) の認知図式を表す．これらの例に含まれる 1 人称目的語代名詞は，概念化者と同一指示関係

を持ち，言語化されている点において (10a)，(11a) の 1 人称と共通する．しかし (12a)，(13a) の 1 人称は，心理を感じる主体として他の人称と範列関係にはないので，(10a)，(11a) の 1 人称とはステイタスが異なる．EXP/feel は感じる主体を表し, 図 1b の EXP とは区別される. 実線は概念化者が感じる主体 (EXP/feel) として事象に組み込まれていることを表す.

3.1.2.2.〈特殊な因果関係〉

心理を感じるという経験は，何らかの原因によって引き起こされるという因果的な側面も持つ. ある知らせを受けて悲しいと感じたり, 氷点下の外気触れて寒いと感じるように，心理を感じることは何らかの原因が伴う事象である.

因果関係を表す言語現象は，使役 (causation) の問題としてこれまで様々に議論されてきた．その中でオンセット使役 (onset causation) と同延使役 (extended causation) という 2 つの使役タイプが区別されてきた (cf. Talmy 1985, McCawaley 1976)[7]．丸田 (1998) を参考にして 2 つの使役タイプの特徴をまとめる．オンセット使役とは, 使役者が被使役者に一撃となるような作用を加えた結果, その作用によって被使役者に起こる出来事が自立的に展開するような使役タイプである．オンセット使役の例として丸田 (1998) は *The hot water melted the ice.* という文を挙げる (ibid. :114)．熱湯が氷にかけられると氷はひとりでに融解することから分かるように，熱湯は氷の融解を引き起こすことに対して責任を持つが, 氷が溶けること自体は氷の内在的な性質によって自立的に展開する．これに対して同延使役は，被使役者に起こる出来事が使役者が加える作用から独立することなく，結果事象が完了するまで使役者の作用が同伴するような使役タイプである．丸田 (1998) は同延使役の例として *He built a new house.* という文を挙げる (ibid. :114)．家がひとりでに建つということがないことから分かるように, *build* が表す事態において原因 (行為者) は結果事象に対して全面的に責任を負う.

第 4 章と第 5 章の議論を先取りすると，感情事象に関わる原因は感情事象に対して全面的に責任を持つことはなく，感情を引き起こすきっかけとして存在するため, オンセット使役に近い特徴を持つと考えられる. たとえば小説の言葉に感動を覚えるという場面を想定してみると，小説の言葉は感動を引き起こす原因になっているが，感動が始まってから終わるまでの過程全体に言葉の存在が関わることはなく，感動すること自体は言葉から自立して展開すると考えられる．これに対して感覚事象に関わる原因は, 感覚事象に対して全面的な責任を持ち, 同延使役に近い性質を持つと考えられる. たとえば煙が目に入って痛いと

[7] McCawley (1976) では，オンセット使役は ballistic causation，同延使役は continuous causation と呼ばれる.

感じるとき，煙が目に作用し続ける限りにおいて痛いという感覚は継続するが，煙がなくなると目の痛みも同時に消える．

このように感情事象と感覚事象の対比に注目すると，両者は異なる因果関係に特徴づけられると考えられる．しかし本章では，感情事象と感覚事象の相違点はひとまず置いておいて，感情事象と感覚事象を特徴づける因果関係がともに *The hot water melted the ice.* や *He built a new house.*が表すような物理的因果関係には観察されない特異性を持つことに焦点を当てる．*The hot water melted the ice.* が表す物理的因果関係と感情事象の違いから示そう．*The hot water melted the ice.* が表す事態において，氷が溶けること自体は自立的に展開するが，熱湯は氷の融解を引き起こすことに対して責任を持ち，熱湯と氷の融解の間には一意的な因果関係があると言える．これに対して小説の言葉に感動を覚えるという状況では，小説の言葉は感動を引き起こすきっかけにすぎず，経験者の内的変化自体は何者にもコントロールできない自発的な側面を持つ．小説の言葉に感動を覚えることもあれば，悲しさがこみ上げてくるということもあり，原因と結果は一意的な関係にはない．これに加えて感情事象の成立には，原因を知覚・認識するという認知作用も働く (cf. 3.1.1.節)．紙面に印刷されたインクそれ自体が感動を引き起こすことはなく，インクによって具現化される言葉が感動を引き起こすためには，経験者がその言葉を知覚・認識する必要がある．このような認知作用は熱湯による氷の融解という物理的因果関係に関与することはない．

次に，*He built a new house.*が表す物理的因果関係と感覚事象の違いを示す．煙が目に入って痛いと感じるとき，煙と目は接触関係を持つ必要があり，この接触関係が痛みの成立を支える．これに対して *He built a new house.*という出来事において，主語に置かれる行為者は家を建てることに対して責任を持つが，家の建設過程で，行為者と家が接触関係を持つ必要はない．以上の観察から，物理的因果関係を基準とすると，感情事象と感覚事象の因果関係はいずれも特異なものであると考えることができる．感情事象と感覚事象を特徴づける因果関係を本論文では〈特殊な因果関係〉として規定する．

本節の議論をまとめる．心理動詞とは，内面で起こる出来事を主体が感じることを表す動詞である．「感じる」という事態は，現象面においては〈いま・ここ〉の〈私〉によって経験されるものであり，このような経験の言語化は表出的な機能を持つ．また心理を感じるという経験は，何らかの原因によって経験されるものであるが，それは物理的因果関係とは異なる〈特殊な因果関係〉に特徴づけられている．心理動詞性を持つ動詞とは以上 3 つの意味的特徴を満たす文の中に含まれる動詞であると本論文では考える．

3.2. 行為動詞からの転用現象

本節では，心理動詞性が因果関係に特徴づけられることに着目して，行為動詞からの転用によって目的語型心理動詞が増え続ける理由を明らかにする．先行研究とのつながりの点から，主に感情動詞を例として議論を進めるが，感覚動詞でも通用する議論であることを本節の最後で示す．

まず，目的語型心理動詞が行為動詞と関連を持つことについて論じた Ruwet (1972) の議論を見てみよう．Ruwet (1972) は，目的語型感情動詞の用法を持つ行為を表す動詞の例として 148 もの動詞を列挙する．(14) から (18) の例文のうち，例 (a) は行為を表す例，例 (b) は感情事象を表す例である．(17b) 以外は Ruwet (1972) からの引用である．

(14) a. Brutus a frappé César d'un coup de poignard au visage.
'Brutus struck César$_i$ of a stab at the face$_i$.'
b. Brutus a frappé César par son ambition.
'Brutus struck César by his ambition.'

(15) a. Le serpent a fasciné sa proie puis lui a sauté dessus.
'The snake fascinated his prey$_i$ then jumped him$_i$ on.'
b. La beauté d'Ava Gardner fascinait les spectateurs.
'The beauty of Ava Gardner was fascinating the audience.'

(16) a. Hagen a tué Siegfried d'un coup de lance.
'Hagen killed Siegfried of a spear.'
b. Personnellement, ça me tue de devoir écouter l'intégrale de la *Tétralogie* par *Furtwängler*.
'Personally, it kills me to have to listen to the complete *Tétralogie* by *Furtwängler*.'

(17) a. La fumée troublait l'atmosphère de la pièce.
'The smoke was troubling the atmosphere of the room.'
b. Je suis très troublé de cette coïncidence.
'I was very troubled of this coincidence.'

(18) a. En voulant dépasser dans le virage, la Ferrari a heurté la roue de la Lotus.
'Wanting to overtake in the curve, the Ferrari hit the wheel of the Lotus.'
b. Cette idée a heurté Paul.
'This idea hit Paul.'

frapper (to strike) は「叩く」と「驚かせる」，*fasciner* (to fascinate) [8]は「すくませる」と「魅了する」，*tuer* (to kill) は「殺す」と「うんざりさせる」，*troubler* (to blur) は「 (空気を) 汚す，曇らせる」と「動揺させる」，*heurter* (to hit) は「ぶつかる」と「 (感情を) 傷つける」という事象を表している．Ruwet (1972) は各例 (a) と (b) の間で観察される意味の関係は，例えば *voler* という動詞に見られる「盗む (to steal) 」と「飛ぶ (to fly) 」という 2 つの意味の間に観察される関係とは同じではないと述べる．「盗む」と「飛ぶ」の間に何らかの関連性を見出すことが難しいことから分かるように，*voler* に認められる 2 つの意味は同音 (形) 異義 (homonyme) の関係にあると言える．これに対して (14) から (18) に挙げた動詞，*frapper*，*fasciner*，*tuer*，*troubler*，*heurter* で観察される 2 つの意味の間には，規則的な意味的対応 (correspondance sémantique systématique) があると Ruwet (1972) は論じる．各例における (a) と (b) の関係について Ruwet (1972) は以下のように分析する．引用内の用法 A とは物理的行為を表す各例 (a) を指し，用法 B は感情事象を表す各例 (b) を指す．

(19) Les relations grammaticales déterminant un aspect fondamental de l'interprétation sémantique, il n'est pas étonnant qu'il y ait quelque chose de commun entre l'interprétation sémantique de la relation entre le verbe et l'objet dans les cas A et l'interprétation sémantique de cette même relation dans les cas B.

「文法関係は意味解釈の重要な側面を決定するので，A の用法の動詞と目的語の関係の意味解釈と，B の用法の動詞と目的語の関係の意味解釈の間に何らかの共通点があることは驚くことではない」

(Ruwet 1972 : 233，邦訳は筆者による)

では，各例 (a) と (b) の動詞と目的語の間にはどのような共通点があるのだろうか．Ruwet (1972) は，行為動詞と目的語型感情動詞の間の関連性が具体的にどのようなものであるかについては論じていない．以下では行為動詞と目的語型感情動詞の関係を認知意味論的枠組から分析する．

まず行為動詞の主語，目的語の文法関係から検討する．従来の文法研究では，主語や目的語などの文法関係は統語的な概念であり，意味的に規定されるものではないと考えられてきた．しかし認知意味論的枠組では，あらゆる言語的要素は意味極と音韻極からなる記号として捉えられ，主語や目的語などの文法関係も意味を持つ記号として扱われる．主語や目的語が持つ意味は，主語，目的語に

[8] 本論では *fasciner* (to fascinate) は語彙型感情動詞に分類しているが，(15) では Ruwet (1972) にしたがって転用型感情動詞として提示している．

もともと備わるものではなく，実際に使用される具体例 (instance) に基づいて抽象化 (schematization) されるものとして捉えられる (Langacker 1991, 2008). 人間を取り巻く状況には実に様々なタイプの出来事があるが，その中でもっとも基本的な出来事が，行為者が何らかの事物に働きかける出来事であると考えられる．そのような事象を表す例に含まれる主語と目的語が担う意味が，主語，目的語のプロトタイプ的意味の資格を持つ (cf. 谷口 2005). つまり主語のプロトタイプ的意味は行為者，目的語のプロトタイプ的意味は移動物・被動作主となる．機能的に見ると行為者はもっとも主題性 (topicality) の高い存在として位置付けられる．行為者と移動物・被動作主をより抽象度の高い観点から捉えると，行為者は事象の中でもっとも際立ち，焦点化されやすい参与者であり，目的語はその次に際立つ第 2 の焦点として捉えられる．この際立ちの関係が主語，目的語のスキーマ的意味として特徴づけられる．(20)，(21) は以上の特徴を表す[9].

(20) 主語
  a. プロトタイプ：動作主，話題 (topic)
  b. スキーマ：最も際立つもの (トラジェクター)，第 1 の焦点 (initial focus)

(21) 目的語
  a. プロトタイプ：移動物 (mover)，被動作主
  b. スキーマ：第 2 に際立つもの (ランドマーク)，第 2 の焦点 (secondary focus)

(谷口 2004 : 57)

主語と目的語がそれぞれ (20), (21) の特徴を持つとき，他動詞文は動作主 (行為者) から被動作主へのエネルギー連鎖をそのプロトタイプ的意味として持つことになる．これらの関係を図式化したものが第 2 章で提示したビリヤードボールモデル (billiard-ball model) である (図 2). 左のボールが行為者，中央のボールが行為者からエネルギーを受ける移動物，被動作主を表す.

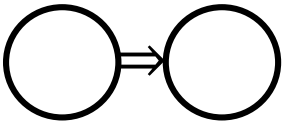


図 2 ビリヤードボールモデル

[9] (20a) の「話題」は 3.3.節にて示す主題性 (topicality) と同じ概念であると考えられる.

以上のように物理的行為を軸に規定される主語，目的語の意味的特徴を踏まえると，行為動詞から目的語型感情動詞への転用には次のような意味的動機づけが働いていると考えられる．3.1.2.節で論じたように心理事象は，何らかの原因に引き起こされるものである．しかしこの因果関係は，人間の内面で起こる抽象的で捉えにくい因果関係である．抽象的な事態は，具体的な事態の理解に類似した認知作用によって理解される (cf. Lakoff and Jonson 1980)．心理的な因果関係の理解にも同じような認知作用が働くと考えられる．つまり行為動詞における行為者を，心理を引き起こす原因に，移動物・被動作主を，心理を感じる主体にそれぞれ見立てることによって抽象的な因果関係が理解されるのである．因果関係という意味的特徴が行為事象と心理事象の共通点であり，これが行為動詞の目的語型感情動詞への転用を支えていると考えられる[10].

以上の考察は目的語型感覚動詞にも当てはまる．目的語型感覚動詞はその絶対数が感情動詞に比べて少ないが，語彙型と転用型の比率でいうと，感覚動詞はそのほとんどが (22) に示すように *piquer*，*brûler* のような行為動詞からの転用である．

(22) a. Le froid me pique le visage.
‘The cold pricks me$_i$ in the face$_i$.’
b. La fumée me brûle les yeux.
‘The smoke burns me$_i$ in the eyes$_i$.’

(『ロワイヤル仏和中辞典』)

感覚事象も感情事象と同様に抽象的な因果関係によって特徴づけられる．(22) では，「突き刺す (22a)」，「焼く (22b)」という行為になぞらえることで抽象的で捉えにくい感覚的な因果関係が理解されていると考えられる．

---

[10] Bouchard (1995) は，転用現象は目的語型だけではなく，主語型にも見られる現象であると論じる．主語型の転用現象として次のような例を挙げる．斜体表示が経験者である．
(a) *Elle* débordait de joie. ‘She was overflowing with the joy.’
(b) *Il* ne pouvait plus contenir sa rage. ‘He could not no longer contain his rage.’
(c) *Marie* ne revient pas de l’horreur de ce spectacle. ‘Marie does not come over the horror of that scene.’

(Bouchard 1995，斜体と下線は筆者による)

(a)〜(c) の解釈を観察してみると，これらの例が持つ感情事象解釈は *déborder* (to overflow)，*contenir* (to contain)，*revenir* (to come) が持つスキーマ的意味によってではなく，下線表示の要素が表す感情概念によって支えられていると言える．つまりこれらの文の感情事象解釈は，*déborder* (to overflow)，*contenir* (to contain)，*revenir* (to come) の多義として位置づけることは難しく，本節で検討した目的語型感情動詞の転用現象と同じように扱うことはできない．

3.3. 心理動詞性の発現の構文論的条件とそのメカニズム

本節では，行為動詞からの転用によって心理動詞性が発現するメカニズムの考察を通して，心理動詞性を特徴づける〈いま・ここ〉，〈私〉，〈特殊な因果関係〉がどのような構文論的特徴に支えられているのかを考察する．

tanner，*piquer*，*tirailler* が行為動詞として使用される (23)，(24)，(25) の構文論的特徴から確認する．

(23) a. Paul tanne la peau.
‘Paul tans the skin.’
b. Paul a tanné la peau.
‘Paul tanned the skin.’

(24) a. Le docteur le pique.
‘The doctor pricks him.’
b. Le docteur l’a piqué.
‘The doctor pricked him.’

(25) a. Paul le tiraille par la manche.
‘Paul tugs him by the sleeve.’
b. Paul l’a tiraillé par la manche.
‘Paul tugged him by the sleeve.’

主語には行為者が置かれる．行為を受ける参与者がプロファイルされる目的語には，(23) のような非有情者や，(24)，(25) のような有情者を置くことができ，目的語に置かれる参与者には基本的に意味的制約はない．各例の (a) と (b) から分かるように，行為動詞は現在形に置くことも複合過去形に置くこともでき，時制の違いによって行為動詞のステイタスが左右されることはない．行為動詞を支える構文論的特徴は (26) にまとめることができる[11]．

(26) a. 主語：行為者
b. 時制：制約なし
c. (直接・間接) 目的語人称代名詞：制約なし

tanner, *piquer*, *tirailler* が心理動詞性を獲得するためには，まず〈いま・ここ〉，〈私〉を満たす必要がある．これは，現在形，1 人称目的語代名詞によって満た

[11] 動詞によっては *tanner* のように目的語に有情者を選択することができない動詞もある．しかしこの問題は，各動詞の語彙的特徴に関わる問題である．(26) は行為動詞の一般的特徴として位置づける．

すことができる．*piquer*，*tirailler* の例 (24) と (25) の時制と人称に制約を加えた例が (27a)，(27b) である．

(27) a. Le docteur me pique.
‘The doctor pricks me.’
b. Paul me tiraille par la manche.
‘Paul tugs me by the sleeve.’

注射を打たれるという事態や袖をひっぱられるという事態では，注射は痛みを与えるものであるし，袖をひっぱりあげられるときに起こる摩擦は何らかの感覚を伴うものである．現実世界では，行為とそれによって引き起こされる感覚的な出来事は切り離すことはできない．しかし言語レベルで見ると，(27) では主語に置かれる医者と Paul が行う行為が切り出されている．(27) の文解釈の焦点，つまり主題 (topic) は医者とポールにあるため，〈いま・ここ〉の〈私〉が何かを感じているという局面はこの文においては背景化されている．現在形と 1 人称目的語代名詞によって〈いま・ここ〉の〈私〉は満たされているが，(27) に含まれる *piquer*，*tirailler* が心理動詞性を獲得しているとは言えない．

〈いま・ここ〉の〈私〉が感じる心理を表すためには，1 人称目的語代名詞の主題性を高める必要がある．そのためには主語の行為者性を低下させなければいけない．(23)〜(25) の時制を現在形にして，目的語を 1 人称代名詞に変えて，さらに主語を非行為者主語にすると，(28) に示すように〈いま・ここ〉の〈私〉が感じる心理を表出する文として解釈できるようになる．この文において *tanner*，*piquer*，*tirailler* は心理動詞性を獲得していると言うことができる．

(28) a. Ses histoires me tannent !
‘His/her stories tan[bother] me!’
b. Le vent me pique !
‘The wind pricks me!’
c. Le repas me tiraille l’estomac !
‘The meal tugs me_i in the $stomach_i$!’

文に含まれる名詞句の主題性に関して Givón (1979) は表 1 にまとめるパラメータを示している．表 1 に照らし合わせてみると，(28) の目的語は有情者 (human)，1 人称 (1st person) を満たしているのに対して，主語は主題性が高くなるパラメータを definite 以外満たしていない．この点からも，(28) では主語よりも目的語の主題性が高いと言うことができる．

high ＞ low
human ＞ non-human
definite ＞ indefinite
more involved participant ＞ less involved participant (AGENT ＞ DATIVE ＞ ACCUSATIVE)
1st person ＞ 2nd person ＞ 3rd person

表 1　主題性のパラメータ (cf. Givón 1976)

フランス語や英語では，他動詞の能動文は典型的に，主語がもっとも高い主題性を担う (cf. 3.2.節)．主語の行為者性の低下によって (28) において，主題性が主語から (直接・間接) 目的語にシフトしているということは，(28) は一般的な他動詞文とは異なる特性を持つことを意味する．このことは他動性 (transitivity) の問題とも密接に関わっている．他動性とは他動詞をプロトタイプ的カテゴリーとして捉える概念であり，行為者による物理的な影響を表す他動詞がプロトタイプ的な他動詞と見なされる．Hopper and Thompson (1980) は他動性を左右するパラメータとして表 2 にまとめる意味特徴を挙げる．

	high transitivity	low transitivity
participants	2 or more participants	1 participant
kinesis	action	non-action
aspect	telic	atelic
punctuality	punctual	non-punctual
volitionality	volitional	non-volitional
affirmation	affirmative	negative
mode	realis	irrealis
agency	A high in potency	A low in potency
affectedness of O	O totally affected	O not affected
individuation	O highly individuated	O non-individuated

表 2　他動性のパラメータ[12]

行為者性 (agency) のパラメータを見てみると，(23)〜(25) には行為者が含まれ

[12] 表 2 の他動性のパラメータは，Hopper and Thompson (1980) によって提示されたものである．このうち volitionality と agency は重複する概念であるが (cf. 山梨 1995)，Hopper and Thompson (1980) の表記をそのまま掲載する．

るので high in potency となるが, (28) には行為者が含まれないので low in potency となる．ここから (28) に含まれる他動詞は，(23)〜(25) に含まれる他動詞よりも他動性が低下していると言うことができる．行為者性 (agency) の低下に連動して活動性 (kinesis) のパラメータにも変化が起こる. (23)〜(25) は行為 (action) を表しているが，(28) は非行為 (non-action) を表している．(28) が非行為を表すということは，(28) において表される因果関係は (23)〜(25) が表す物理的因果関係とは異なるものへと変化していることを意味する．つまり主語の行為者性の低下は，主語から目的語へ主題性をシフトさせるだけではなく，心理事象を特徴づける〈特殊な因果関係〉を生み出す構文論的特徴にもなっていると考えられる．

まとめると心理動詞性は，次の 3 つの構文論的特徴を満たすことによって発現すると言うことができるだろう．

(29) a. 主語：非行為者
b. 時制：現在形
c. (直接・間接) 目的語人称代名詞：1 人称

さらに心理動詞性の成立において忘れてはならない条件は，動詞の意味拡張である．(28a) は「(皮を) なめす」ことを表すのではなく，なめされるような感情状態に置かれているという比喩的な意味を表している．(28b), (28c) においても「刺す」,「ひっぱる」という意味を表すのではなく, 刺されるような感覚状態, ひっぱりあげられるかのような感覚状態が比喩的に表されている. ただし第 4 章で論じるように，行為動詞の意味拡張に関与するメカニズムは感情動詞と感覚動詞で異なる．

本節の議論をまとめる．心理動詞性は，主題性のシフト，他動性の低下，比喩的意味拡張というメカニズムに基づいて生まれ，主題性のシフトと他動性の低下を支えるものが，現在形，1 人称目的語代名詞，非行為者主語という 3 つの構文論的特徴である．

3.4. 心理動詞性の段階性

本節では，非行為者主語，1 人称目的語代名詞，現在時制が心理動詞性の大きさを左右するパラメータとなっており，これらのパラメータが満たされないと，自己が内面で感じる心理を表出する文から，出来事としての心理を描写する文へとシフトし，それに連動して文に含まれる動詞の心理動詞性も低下することを論じる．

3.4.1. 表出型

心理動詞性がもっとも高くなるのは，3.3.節で示した 3 つの構文論的パラメータがすべて満たされる場合である．〈いま・ここ〉の〈私〉が感じる心理を表出するこのタイプの目的語型心理動詞を表出型と呼ぶことにする．

表出型には，主語に具体的な名詞が置かれる場合と，漠然とした指示対象を指す ça が置かれる場合があるが，ça を主語とする場合，(30) に示すように目的語型感覚動詞では目的語は明示されないことがある．(30) は「痛い (30a), (30c)」，「寒い (30b)」という感覚を表している[13].

(30) a. Ah, ça pique !
‘Oh, it pricks!’
b. Ah, ça pince !
‘Oh, it pinches!’
c. Des morceaux de papier frottent ma joue. Ça gratte. (*Appel du pied*)
‘Pieces of paper rub my cheek. It scratches.’

(30) において言語化されない参与者は，(28a, b, c) に含まれる言語化される感じる主体と同じステイタスを持つ．(30) の事象と概念化者の関係は図 3b の認知図式で表すことができる．3.1.2.節で提示した，感じる主体が言語化されるタイプ (e.g. *Ah, ça me pique!* ‘Oh, it pricks!’) の認知図式を図 3a として再掲する．

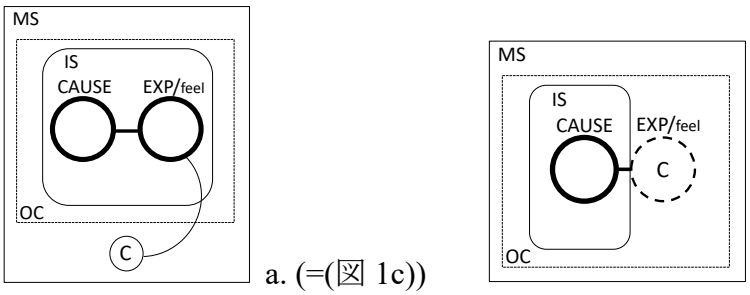


図 3 表出型の事象と概念化者の関係

OC は (定着した用法において) 動詞によってプロファイルされる参与者と作用が含まれる意味領域である．言語化される参与者と作用は IS 内に置かれる．感

[13] 表出型の感覚動詞のすべての例において一人称代名詞の非表示が許されるわけではない．例えば *Ah, ça me coupe !* ‘Oh, it cuts me!’「寒い !」では，代名詞を省略すると容認度が低下する (e.g. ?? Ah, ça coupe !)．第 4 章では，目的語人称代名詞を言語化しない構文と共起可能な感覚動詞を列挙する．

じる主体が言語化される例では，参与者と動詞が表す作用はすべて IS 内に置かれるが，(30) タイプの例では目的語スロットを埋める感じる主体 (かつ概念化者) は言語化されていないので，OC 内に含まれるが，IS の外に置かれる．

ところで目的語型感情動詞は，目的語人称代名詞が明示されないと非文になる．以下 (31) は〈いま・ここ〉の〈私〉が「イライラする」という感情を感じていることを表すが，(32) が示すように，1 人称目的語代名詞を明示しないと容認度が大きく低下する．

(31) a. Ah, ça m'embête !
'Oh, it bothers me!'
b. Ah, ça m'énerve !
'Oh, it annoys me!'
c. Ah, ça me gonfle !
'Oh, it inflates[bothers] me!'

(32) a. ?? Ah, ça embête !
'Oh, it bothers!'
b. ?? Ah, ça énerve !
'Oh, it irritates!'
b. ?? Ah, ça gonfle !
'Oh, it inflates[bothers]!'

目的語型感覚動詞と目的語型感情動詞の間で見られるこのような構文選択の違いは，感覚事象と感情事象の概念化の違いに起因すると考えられる．詳細は第 5 章で論じる．

3.4.2. 描写型

〈いま・ここ〉の〈私〉から離れた主体に起こる心理的事象を表す場合，その文は心理を表出する文ではなく，心理を描写する文になる．そのことに連動して心理を経験する主体は，感じる主体の資格を失い，描写対象／経験者へと変化する．〈いま・ここ〉の〈私〉から離れるということは，現在形と 1 人称目的語代名詞の制約が解除されることを意味する．このタイプの目的語型心理動詞を描写型と呼ぶことにする．描写型の事象と概念化者の関係の特徴は図 4 の認知図式で表すことができる．具体例は 3.4.2.1.節，3.4.2.2.節で提示する．

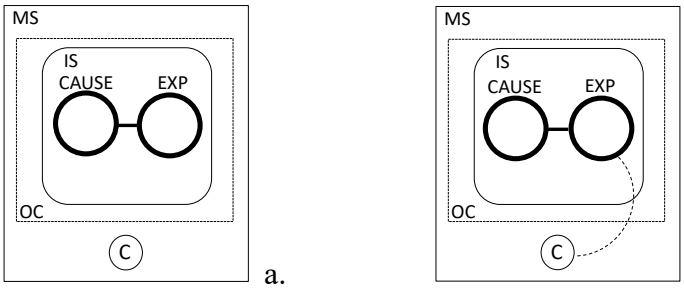


図 4 描写型の事象と概念化者の関係

図 4a は経験者が 1 人称以外の場合の認知図式で，経験者は概念化者から完全に切り離された客体として捉えられる．図 4b は経験者が 1 人称の例である．1 人称なので概念化者と同一指示関係を持つが (点線表示)，この 1 人称は感じる主体の資格を持たないので，図 4a の経験者と実質的には同じステイタスを持つ．

〈いま・ここ〉の〈私〉を軸にすると，描写型の目的語型心理動詞は感じる主体に張り付く心理事象を表さないので，表出型よりも心理動詞性は低下することになる．さらに描写型は，主語名詞句のパラメータ (非行為者主語) を満たすかどうかによって 2 つのタイプに分化する．1 つは非行為者主語を満たすタイプ，もう 1 つは非行為者主語を満たさないタイプである．前者を描写型 I，後者を描写型 II と呼ぶことにする．3.4.2.1.節にて描写型 I，3.4.2.2.節にて描写型 II の特徴を説明する．

3.4.2.1. 描写型 I

時制制約と人称制約の解除が連動することは日本語の心理述語ではよく知られている (cf. 寺村 1971, 益岡 1997)．(33) と (34) の対比が示すように，非過去形では 1 人称に制限されるが，過去形では 3 人称を取ることができる．

(33) a. (私は) とても悲しい．
　　 b. *花子はとても悲しい．
(34) a. 私は悲しかった．
　　 b. 花子は悲しかった．

フランス語の目的語型心理動詞でも (34) と同じような現象が起こる．これまで述べてきたように，〈いま・ここ〉で感じられる心理を表出する (35)，(36) では，目的語は 1 人称に限定されるが，過去時制にすると (37)，(38) が示すように人称の制約は解除される．

(35) a. Ça me tiraille, ce travail !
'It tugs[bothers] me, this work!'
b. ?? Ça le tiraille, ce travail !
'It tugs[bothers] him, this work!'

(36) a. Ce pull me démange !
'This sweater itches me!'
b. ??Ce pull le démange !
'This sweater itches him!'

(37) a. Ça m'a tiraillé, ce travail.
'It tugged[bothered] me, this work.'
b. Ça l'a tiraillé, ce travail.
'It tugged[bothered] him this work.'

(38) a. Ce pull m'a démangé.
'This sweater itched me.'
b. Ce pull l'a démangé.
'This sweater itched him.'

(37), (38) では目的語人称代名詞が 1 人称であっても，1 人称は〈いま・ここ〉の〈私〉から切り離されているので，心理を表出する主体，つまり感じる主体として解釈されることはない. 感じる主体ではない点において (37a), (38a) の 1 人称目的語代名詞は, (37b), (38b) の 3 人称目的語代名詞と同じステイタスを持ち，両者はともに描写の対象／経験者として位置づけられる[14] [15]. 出来事を描写するということは (37), (38) は，*Paul a gonflé le ballon*. 'Paul inflated the balloon.' など，行為動詞文と同じ発話機能を持つことを意味する．ただし第 4 章，5 章で明らかにするように, イベント構造において描写型 I の目的語型心理動詞と行為動

[14] 主観性 (1 人称性) の問題に限定して比較すると (37a), (38a) と (37b), (38b) は同じ価値を持たないと考えられる．心理とは私以外には知り得ないものである．そのため，他者が過去に経験した心理は推測や伝聞に基づいて発せられるものであるが，自己が経験した心理を表す場合には推測や伝聞が介入することはない．例えば「昨日，太郎はとても楽しそうだった」とは言えるが，「*昨日，私はとても楽しそうだった」とは言えない．しかし心理を感じることが，主観的な制約だけではなく，いま・ここという時空間的にも制約される現象であり，かつ，それらの特徴を言語的に表すことが表出機能を持つことを基準に考えると，(37a), (38a) も (37b), (38b) も過去に起こった出来事を描写する．この点において (37a), (38a) と (37b), (38b) は同じ価値を持つと考えられる．

[15] 主語が非行為者で，経験者の心理を描写する描写型 I には，過去時制の例だけではなく，3.1. 節で取り上げた次の現象も含まれるが，以降の分析では過去時制の描写型 I (本文例 (37a), (38a)) に絞って議論を進めることにする．
(a) La lecture d'Homère passionne Maxime.
(b) L'accroissement du chômage inquiète Alfred.

詞は大きく異なる特徴を持つ.

3.4.2.2. 描写型 II

表出型は感じる心理を表出するのに対して, 描写型 I は経験された心理を描写するという違いがある. しかしどちらのタイプも, 主語よりも目的語の主題性が高く, 感じる主体／経験者の心理状態に文解釈の焦点が置かれる. これを支えるのが非行為者主語である. ところが, 主語に意図性を持つ行為者が置かれると, 主語の主題性が上昇することになので, 主語にプロファイルされる参与者の動きや状態を表す文として解釈されるようになる. そのため, そのような文に含まれる動詞は, 目的語に置かれる人間の感情状態やその変化を表しているとしても, 心理動詞性は表出型や描写型 I よりも低くなると考えられる.

具体例を見てみよう. まず状況を設定する. 一人の園児 Marie が遊具で遊んでいたとしよう. そこに別の園児 Paul がやってきて Marie が使っていた遊具をわざと取り上げ, Marie を邪魔したとする. 以下の例はそのことに腹を立てた Marie が側にいた保育士に向けて発したものである.

(39) Madame, Paul m'embête !
'Madam, Paul bothers me!'

(39) では, 表出型の文と同じように 1 人称目的語代名詞と現在形が選択されているが, 意味解釈は表出型の文とは異なる. 表出型の例 (40) と比較してみよう.

(40) Ah, ça m'embête !

(40) では, 発話者である〈いま・ここ〉の〈私〉が「イライラ」という感情を感じていることに文解釈の焦点がある. (39) も, (40) と同じように, 発話者である Marie が「イライラ」という状態に置かれていることを表すが, (39) では目的語に置かれる人間の心理状態よりも, 感情を引き起こす原因となっている主語の Paul に焦点が置かれている. Paul に解釈の焦点が置かれるので, (39) は Marie の感情を表出する機能よりも主語の Paul の行為を第 3 者 (保育士) に伝えるという機能をより強く持つ.

以上の特徴は目的語が 3 人称であっても基本的に同じである[16].

(41) Madame, Paul l'embête !

[16] (41) に含まれる感嘆符は, Paul が Sylvie を邪魔している状況を見た Marie の驚きや戸惑いを表していて, 文中の l'(=Sylvie)の心理を表出しているのではない.

‘Madam, Paul bothers her!’

(41) は，園児 Paul が園児 Sylvie が遊んでいるのを邪魔しているときに，それを園児 Marie が目撃し，Marie がその状況を側にいる保育士に伝えようとして発した文であるとする．するとこの発話は (39) と同様に，Paul の働きを描写する機能を持つ．(39) と (41) の容認度に違いはなく，主語が行為者として解釈される限り，表出型のように人称制約がかかることはない．

描写型 II では時制制約もない．(42)，(43) は (39)，(41) を現在形から過去形に置き換えた例であるが，描写される事象が発話時から過去時に移動するだけで，主語 Paul の行為に解釈の軸があることに変わりはない．

(42) Madame, Paul m’a embêtée.
‘Madam, Paul bothered me.’
(43) Madame, Paul l’a embêtée.
‘Madam, Paul bothered her.’

なお，描写型 II の主語は意図的に働きかける主体を表す点において，行為動詞の主語に置かれる行為者と共通する．しかし描写型 II の主語と行為動詞の主語は，まったく同じステイタスを持つわけではない．*gonfler* や *tanner* が「膨らませる」,「なめす」という行為を表す行為動詞として使用されるとき，主語に置かれる行為者は，物理的な行為を行う参与者として解釈される．これに対してこの 2 つの動詞が，目的語型感情動詞として使用される (44)，(45) に示す描写型 II の例では，主語の Paul は，「膨らませる」,「なめす」という物理的行為を表す主体として解釈されることはなく，Paul は「うるさがらせる」,「困らせる」という状態を引き起こそうと働かきかけている主体として解釈される．行為動詞の主語と描写型 II の主語の間にこのような相違があることを認めた上で，本論文では意図性を共通点として描写型 II の主語を行為者と呼ぶことにする．

(44) Madame, Paul me tanne !
‘Madam, Paul tans[bothers] me!’
(45) Madame, Paul me gonfle !
‘Madam, Paul inflates[bothers] me!’

描写型 II は，表出型と描写型 I に比べて心理動詞性が大きく低下するだけではなく，統語的意味的振る舞いにおいても表出型と描写型 I とは異なる特徴を示す．つまり心理動詞性の低下に連動して，イベント構造自体が変化すると考えら

れるのである．詳細は第 5 章で論じるが，主語の行為者性の上昇によって起こる統語的意味的振る舞いの変化を 2 例ほど確認しておく．1 つ目の現象は継続時間副詞句との共起関係である．(46) に示すように，描写型 I は継続時間副詞句と共起できるが，副詞 délibérément によって主語の行為者解釈が強化される (47a) は，(47b) が示すように継続時間副詞句を付加すると容認度が低下する．

(46) Cette émission télévisée m'a amusé toute la journée.
'This television program amused me all day.'

(47) a. Jean a délibérément amusé Pierre. (Ruwet 1972)
'Jean deliberately amused Pierre.'
b. ? Jean a délibérément amusé Pierre toute la journée.
'Jean deliberately amused Pierre all day.'

仮に (47b) が容認可能だとしても，その解釈は目的語に置かれる経験者の状態の継続ではなく，Jean が経験者を何度も遊ばせたという反復解釈になる．同じような現象が英語の目的語型感情動詞について論じた中村 (2003) でも報告されている (ibid.: 75)．継続時間副詞句と共起しにくいということは，描写型 II の目的語型感情動詞のアスペクトタイプが行為動詞のアスペクトタイプに近いものに変化していることを意味する．

2 つ目の現象は参与者間の関係に関するものである．第 1 章で述べたように目的語型感情動詞は，動的受動文と形容詞的受動文に置き換えることができる．ところがこの現象は，表出型と描写型 I だけに観察され，描写型 II では動的受動文にしか置き換えることができない．(48) は (47a) を受動文に置き換えたものであるが，前置詞は par しか容認されない．

(48) Pierre a été délibérément amusé {par/ ??avec} Paul.
'Pierre was deliberately amused {by/with} Paul.'

第 5 章では，行為動詞と，表出型および描写型 I のイベント構造と対比させながら，描写型 II のイベント構造の特徴を明らかにする．

ところで，以上で検討してきた描写型 II の例はすべて目的語型感情動詞の例であった．目的語型感情動詞と異なり，目的語型感覚動詞は行為者を主語に置くことができない．具体例を見ながら確かめよう．

(49) a. Le vent me coupe le visage.
'The wind cuts me$_i$ at the face$_i$.'

b. Le vent m'a coupé le visage.
'The wind cut me$_i$ at the face$_i$.'

(50) a. # Paul me coupe le visage.
'Paul cuts me$_i$ at the face$_i$.'
b. # Paul m'a coupé le visage.
'Paul cut me$_i$ at the face$_i$.'

表出型と描写型Ⅰの例 (49) は, 風で顔がひりひりする／したという感覚を表す. ところが行為者主語の (50) は, Paul の物理的行為を表す文として解釈されやすく, 目的語型感情動詞の描写型Ⅱの例 (39), (42), (44), (45) のように, 行為者の働きかけによって経験者が何らかの心理状態に置かれている／置かれたという解釈を持ちにくい. 目的語型感情動詞は描写型Ⅱを取ることができるのに対して, 目的語型感覚動詞が描写型Ⅱを取りにくいのはなぜだろうか. この問題には, 目的語型感情動詞と目的語型感覚動詞の意味拡張のメカニズムの違いが関与すると考えられる. この問題は第 4 章で論じることにする.

3.5. まとめ

本章の議論をまとめる. まず心理動詞とは, 主体によって感じられる事象を表す動詞であり, 心理を感じるという経験は〈私〉,〈いま・ここ〉,〈特殊な的因果〉の 3 つの意味特徴を持つ. 加えて, 発話時における発話者自身が内面で感じる心理を表す言語表現は表出機能を持つ.

認知意味論的観点から見ると, 行為動詞はエネルギー連鎖に基づく因果関係を表し, エネルギー連鎖は他動詞文のプロトタイプ的意味となっている. 心理を感じるという経験は, 何らかの原因よって起こる因果的側面を持つが, この因果関係は人間の内面で起こる抽象的なもので, 捉えにくい特性を持つ. このような事態を捉えるために, 具体的な事柄によって抽象的な事柄を理解するという認知作用が働く. すなわち, 行為動詞が表す具体的な因果関係になぞらえるかたちで抽象的な心理的因果関係が理解されるようになるのである. 心理が因果関係に特徴づけられる事象であることと, 行為動詞が具体的な因果関係を表すことが, 行為動詞の転用による目的語型心理動詞の増加を動機付けていることを明らかにした.

心理動詞性を特徴づける〈いま・ここ〉,〈私〉,〈特殊な的因果〉が発現するためには, まず現在形と 1 人称目的語代名詞という構文論的特徴を満たす必要がある. しかしこれだけでは,〈いま・ここ〉の〈私〉が何らかの心理を感じていることを表す文として十分に解釈されない. 主語に非行為者主語が置かれることで主語から目的語への主題性のシフトが起こり, これによって〈いま・ここ〉

の〈私〉が感じる心理を表す文として解釈されるようになる．さらに非行為者主語の選択は，他動性の低下も促す．これによって動詞が表す因果関係は，典型的な物理的因果関係ではなくなる．非行為者主語は目的語の主題性を上げるだけではなく，〈特殊な因果関係〉を生み出す構文論的特徴にもなっていることを論じた．

心理動詞性が 1 人称目的語代名詞，現在形，非行為者主語に支えられるとき，これら 3 つの構文論的特徴は心理動詞性を左右するパラメータになっていることも明らかにした．1 人称目的語代名詞，現在形，非行為者主語が満たされる場合，問題となる文は〈私〉が〈いま・ここ〉で感じる心理を表出するので，この文に含まれる動詞の心理動詞性はもっとも高くなる (表出型)．人称制約と時制制約が解除されると，文は心理事象を発話者 (概念化者) が描写する機能を担うようになる．このような文に含まれる動詞の心理動詞性は，表出型よりも低くなる (描写型 I)．さらに非行為者主語の制約が解除されると，文解釈の焦点は目的語に置かれる経験者ではなく，主語に置かれる行為者の行為に置かれるので，このような文に含まれる動詞の心理動詞性は，表出型，描写型 I よりも低くなる (描写型 II)．心理動詞性の 3 つのタイプをまとめたものが表 3 である[17]．

心理動詞性	タイプ	主語	人称	時制
高	表出型	非行為者	1 人称	現在形
	描写型 I	非行為者	制約なし	制約なし
低	描写型 II (感情動詞のみ)	行為者	制約なし	制約なし

表 3 心理動詞性の 3 つの段階

第 4 章では，行為動詞と対比させながら，表出型と描写型 I の目的語型感覚動詞のイベント構造の特徴を明らかにする．加えて，目的語型感覚動詞が描写型 II をとることができない要因についても第 4 章で論じる．第 5 章では目的語型感情動詞について論じる．まず，表出型と描写型 I のイベント構造の分析を行い，その次に描写型 II の目的語型感情動詞のイベント構造の特徴を明らかにする．

[17] 「1 人称・現在形」は表出型になるので，描写型 I の人称・時制は「制約なし」であるが，これは「1 人称・現在形」以外の例に限るという意味においてである．本節で取り上げなかった「1 人称以外・現在形」の例には *La lecture d'Homère passionne Maxime*. (=(1-ia)) のような例がある．この例は他者が経験している心理を発話者が描写する機能を持つ (cf. 3.1.節，注 15).

第 4 章　感覚動詞のイベント構造分析

本章では，目的語型感覚動詞が抱える 2 つの問題を論じる．1 つは，目的語型感覚動詞はどのようなイベント構造に特徴付けられているのかという問題である．もう 1 つは，第 3 章で提起した，なぜ目的語型感覚動詞は描写型 II を取ることがないのかという問題である．4.1.節では問題となる現象を確認し，本章の構成を述べる．

4.1. 解決すべき問題

イベント構造の問題に関わる 1 つ目の現象は受動化の問題である．(1a)，(2a) は，*gratter* (to scratch)，*brûler* (to burn) が行為動詞として使用される能動文で，(1b)，(2b) はそれらを受動文へ置き換えた例である．(3a)，(4a) は以上 2 つの動詞が感覚動詞として使用される例である. (3b), (4b) の結果が示すように, *gratter*, *brûler* は感覚事象を表す場合に受動文へ置き換えることができない.

(1)　a. Paul gratte le mur.
　　‘Paul scratches the wall.’
　　b. Le mur est gratté par Paul.
　　‘The wall is scratched by Paul.’

(2)　a. Paul brûle la photo.
　　‘Paul burns the picture.’
　　b. La photo est brulée par Paul.
　　‘The picture is burned by Paul.’

(3)　a. Ce pull me gratte.
　　‘This sweater scratches me.’
　　b. *Je suis gratté par ce pull.
　　‘I am scratched by this sweater.’

(4)　a. Le soleil me brûle les yeux.
　　‘The sun bruns me$_i$ in the eyes$_i$.’
　　b. *Les yeux me sont brûlés par le soleil.
　　‘The eyes$_i$ were to me$_i$ burned by the sun.’

受動文へ置き換えられるかどうかは，参与者間の意味関係に関わる現象である．以上の対比から，*gratter*，*brûler* が行為動詞から感覚動詞へ意味拡張すると，参与者間の意味関係が変化することが窺われるが，その変化とは具体的にどのようなものなのだろうか．これがイベント構造に関わる 1 つ目の問題である．

イベント構造に関わるもう 1 つの現象はアスペクトに関わる問題である．継続時間副詞句を伴う複合過去形との共起関係を見てみよう．

(5) a. Paul a gratté le mur toute la journée.
‘Paul scratched the wall all day.’
b. *Paul a brûlé la photo pendant une heure.
‘Paul burned the picture all day.’

(6) a. Ce pull m’a gratté toute la journée.
‘The sweater scratched me all day.’
b. Le soleil m’a brûlé les yeux durant le trajet.
‘The sun burned me$_i$ in the eyes$_i$ during the journey.’

brûler は行為動詞として機能する場合，(5b) から分かるように，継続時間副詞句と共起できない．ところが (6b) が示すように，目的語型感覚動詞として働く場合は，継続時間副詞句と共起できる．目的語型感覚動詞への転用によって動詞のアスペクトが変化していることが窺われるが，*brûler* のアスペクトは具体的にどのように変化しているのだろうか．*gratter* は (5a) と (6a) が示すように，行為動詞として機能する場合も，感覚動詞として機能する場合も，継続時間副詞句と共起可能である．この共起関係だけに注目するならば，行為動詞 *gratter* も目的語型感覚動詞 *gratter* も同じ特徴を持つことになるが，そのほかの構文環境において両者は同じアスペクトを取るのだろうか．異なるとするならば，行為動詞 *gratter* と目的語型感覚動詞 *gratter* のアスペクトはどのような点で相違するのだろうか．以上の問題を念頭において目的語型感覚動詞のアスペクトの分析を行う．

次節以降の分析では，位置・状態変化を含意しない *gratter* のようなタイプを行為動詞 I と呼ぶことにする．位置・状態変化を含意し得る *brûler* のようなタイプを行為動詞 II と呼ぶことにする[1]．行為動詞 I と II の違いを問題にしない場合は合わせて行為動詞と呼ぶことにする．本章では，(8) に列挙する動詞を対象にして分析を進める．

[1] 従来の研究では，行為動詞 I は接触や打撃を表す例が多いことからは接触・打撃動詞，行為動詞 II は状態変化動詞と呼ばれてきた (影山 1996b, 丸田 1998)．状態変化動詞という場合，表される状態変化が物理的なものであるか心理的なものであるかは区別されない．実際，丸田 (1998) では感情動詞は状態変化動詞の 1 つと見なされている．本論では動詞が表す事象の性質から動詞の意味カテゴリーを規定し，物理的事象を表す動詞と感情動詞の混同を避けるため，行為者によって引き起こされる物理的状態変化を表す動詞を行為動詞 II と呼ぶことにする．これに合わせて接触・打撃動詞は行為動詞 I と呼ぶことにする．

(8) a. 行為動詞 I

chatouiller (to tickle), gratter (to scratch), taper (to hit), cingler (to lash), frapper (to strike), mordre (to bite), picoter (to peck), pincer (to pinch), piquer (to prick), tirailler (to tug)

b. 行為動詞 II

barbouiller (to daub), blesser (to hurt), brûler (to burn), casser (to break), couper (to cut), crisper (to tense), cuire (to burn), déchirer (to tear), durcir (to harden), glacer (to freeze), meurtrir (to bruise), percer (to pierce), raidir (to stiffen), soulever (to lift), tordre (to twiste), tuer (to kill)

次に描写型 II の問題を確認しよう．(3a)，(4a) および (6) から，目的語型感覚動詞は表出型と描写型 I を取ることができることがわかる．ところが (7) に示すように，描写型 II を取ることはない．(7) は Paul の Marie に対する行為を表す文として解釈可能であるが，Marie が感じた感覚を表す文として解釈することは難しい (「#」は感覚事象を表す文として解釈できないことを表す)．この問題に対して本章では，行為動詞の比喩的意味拡張に着目して，(7) のような現象が起こる理由を探る．

(7) # Paul lui a gratté le dos.

‘Paul scratched her_i at the $back_i$.’

本章は次のように構成される．4.2.節では感覚事象の特異性を分析する．4.3.節では感覚事象を表す例を構文ごとに整理し，4.4.節では概念化の観点から構文の特徴を考察する．4.5.節では行為動詞の参与者間の意味関係と対比させながら，目的語型感覚動詞の参与者間の意味関係を分析する．4.6.節では行為動詞 I, II のアスペクトを分析する．その次に目的語型感覚動詞のアスペクトの記述を行い，その特徴を認知的観点から分析する．4.7.節では意味拡張のメカニズムに注目して，描写型 II の問題について考察する．4.8.節で本章の分析をまとめる．

初出の例文には表される感覚内容の日本語訳を添えることにする．主語に ça を取る例では，ça が指す対象 (原因) が特定される場合がある．そのような例の訳には原因となる対象を明記する．

4.2. 感覚事象の特徴

第 3 章では，何らかの感情あるいは感覚を感じるという出来事は，〈いま・ここ〉の〈私〉において経験される現象であり，それは〈特殊な因果関係〉に基づくことを述べた．しかし感覚を感じることは，感情を感じる経験にはない固有の

特徴を持つ.

1 つ目の特徴は全体―部分関係である．感覚事象は，原因がもたらす作用が身体部分に及び，その作用によって身体部分に何らかの感覚が生じるという特徴を持つ．加えて，身体部分に及ぶ作用が感覚として経験されるためには，それを感じる主体の存在が不可欠である．この感じる主体の役割を担うのが身体全体である．身体全体は，身体部分が受ける作用を感覚として成立させる場の役割を担うと考えられる．以下の発話を見てみよう．

(9) a. Ah, ça me chatouille ! 「痒い」
‘Oh, it tickles me!’
b. Brrr, ça me pince ! 「寒い」
‘Brr, it pinches me!’
c. Ah, ça me pique ! 「チクチクする」
‘Oh, it pricks me!’
d. Ah, ça me brûle ! 「熱い」
‘Oh, it burns me!’
e. Ah, ça me barbouille… 「ムカムカする」
‘Oh, it daubs me…’

(9c) を例にして考えてみると，この例では「*私がチクチクする」ということを表しているのではなく，文脈の中で特定される身体部分で生じる感覚が表されている (「目がチクチクする」,「腕がチクチクする」など). 身体全体 me は「チクチクする」という作用が生じる対象ではなく，明示されない身体部分に及ぶ作用を感じる場として存在する[2]．感覚が生じる部分を明示すると，例えば次のような文が出来上がる．

(10) a. Ah, ça me chatouille dans le dos !
‘Oh, it tickles me_i in the $back_i$!’
b. Ah, ça me pince le visage !
‘Oh, it pinches me_i at the $face_i$!’
c. Ah, ça me pique les lèvres !
‘Oh, it pricks me_i in the $lips_i$!’
d. Ah, ça me brûle le doigt !

[2] 寒さを感じるという事態は，身体全体で感じることもあり，この場合，作用の局所化という概念は当てはまらないと思われるかもしれない．しかし寒さを感じることは，皮膚という１つの感覚器官で感じることであり，目や鼓膜といった感覚器官で感じるわけではない．

‘Oh, it burns me$_i$ in the finger$_i$!’
e. Ah, ça me barbouille l’estomac !
‘Oh, it daubs me$_i$ at the stomach$_i$!’

感覚事象を特徴づけるもう 1 つの特徴は因果関係に関わる特徴である．第 3 章で述べたように感覚事象は，*Il a construit une nouvelle maison.* ‘He built a new house.’いう文が表す物理的な使役的事態と同じように, 原因となる出来事は結果出来事の成立に全面的な責任を持つ．しかし感覚事象の成立には, 物理的な使役的事態には見られない接触関係という条件が加わる．具体例を見てみよう．

(11) Des morceaux de papier frottent ma joue. Ça gratte.
‘Pieces of paper rubs my cheek. It scratches.’
「顔に紙の角が当たって痛い」 (*Appel du pied*)

(11) では「痛い」という感覚が 2 文目で表されている．1 文目の内容を踏まえると，その痛みは紙と頬の接触によってもたらされていることが分かる．紙の角が頬に触れて，その後で痛みを感じているのではなく，紙の角が頬に接触することと痛みを感じることが同時に起きているのである．先に例示した (10) が表す現象でも，ça の指示対象が背中，指，顔，唇，胃に接触することと「痒い」,「しびれる」,「痛い」,「熱い」,「ムカムカする」という感覚が同時に起こっているという特徴を持つと考えられる．

4.5.節，4.6.節では，以上 2 つの特徴を踏まえながら，目的語型感覚動詞のイベント構造の特徴を考察する．4.3.節では，目的語型感覚動詞が共起する構文タイプの特徴を概念化の観点から検討する．4.4.節では，行為動詞 I と行為動詞 II が目的語型感覚動詞として機能するときに共起可能な構文タイプの整理を行う．

4.3. 概念化の度合いに基づく構文タイプ

感覚動詞が共起する構文タイプは，身体部分とその所有者である経験者の表し方によって大きく 4 つのタイプに分けられる．1 つ目は身体部分と経験者が言語化されないタイプである．このタイプを構文タイプ A と呼ぶことにする．構文の特徴と例を以下に示す．CAUSE は ça が担う意味役割 (原因), NOM は ça の格関係 (主格) をそれぞれ表す．

(12) 構文タイプ A：Ça $_{\text{CAUSE/NOM}}$ V
a. Oh, ça chatouille !
‘Ah, it tickles!’

b. Brrr, ça pince !
‘Brr, it pinches!’

chatouiller (to tickle), *pincer* (to pinch) は典型的な用法では，2 つの参与者の関係をプロファイルし，2 つの参与者は主語と目的語に言語化される．ところが，構文タイプ A では 1 つの参与者しか言語化されていない．このことは構文タイプ A の使用がほぼ〈いま・ここ〉の〈私〉が感じる感覚を表す表出型に限定されていることと密接に関わる. (13) に示すように過去時制を選択する描写型 I は構文タイプ A とは馴染みにくい.

(13) a. ? Ça a chatouillé.
‘It tickled.’
b. ? Ça a pincé.
‘It pinched.’

我々が何らかの事象を知覚し，概念化して，それらを言語化するとき，事象の知覚・概念化・言語化は同時に行われるわけではなく，そこにはわずかながら時間差が生じる．〈いま・ここ〉の瞬間に起こる感覚を表現しようとすると，感覚を引き起こす原因と刺激を受ける身体部分，そして感覚を経験する〈私〉が十分概念化されない状態で言語化されることになる．(12) において漠然とした指示対象を指す ça が主語に置かれ，感覚を感じる〈私〉と刺激を受ける身体部分が言語化されないのは，このタイプの発話がある感覚を感じるその瞬間に発話されるからだと考えられる.

2 つ目の構文タイプは，経験者が直接目的語に言語化されるタイプである．このタイプを構文タイプ B と呼ぶことにする．経験者が言語化されるということは, 構文タイプ A よりも概念化された感覚事象を表すことになる. そのため (14c, d) に示すように，十分概念化されている過去に起こった感覚事象を表す描写型 I の目的語型感覚動詞も取ることができる．EXP は経験者役割を表し，ACC は対格を表す.

(14) 構文タイプ B：Ncause/nom Nexp/acc V
表出型
a. Ah, ça me chatouille ! (=(9a))
b. Ah, le vent me pince ! 「風でビリビリする」
‘Oh, the wind pinches me!’
描写型 I

c. Le pull {m’/l’} a chatouillé.
‘The sweater tickled {me/him}.’
d. Le vent {m’/l’} a pincé.
‘The wind pinched {me/him}.’

構文タイプ A よりも概念化された感覚事象を表すので，主語には漠然とした指示対象を指す ça だけではなく，具体的な名詞句も置かれる．

3 つ目と 4 つ目の構文タイプは，身体部分と経験者がどちらも言語化されるタイプである．3 つ目の構文タイプでは，経験者が直接目的語 (対格表示) に置かれ，定冠詞に限定された身体部分が前置詞句に置かれる (以下，構文タイプ C)．4 つ目の構文タイプでは，経験者が間接目的語 (与格表示) に置かれ，定冠詞に限定された身体部分が直接目的語に置かれる (以下，構文タイプ D)．PART は身体部分，DAT は与格，PREP は前置詞，ART は冠詞，DEF は定，下付きの i は身体部分と経験者が分離不可能所有関係にあることを表す．

(15) 構文タイプ C：$N_{NOM/CAUSE}$ N_{EXP/ACC_i} V PREP ART_{DEF} N_{PART_i}
表出型
a. Ah, ça me chatouille dans le dos. (=(10a))
‘Oh, it tickles me_i in the $back_i$.’
描写型 I
b. Le pull {m’/l’} a chatouillé dans le dos.
‘The sweater tickled $\{me/him\}_i$ in the $back_i$.’

(16) 構文タイプ D：N_{NOM} N_{EXP/DAT_i} V ART_{DEF} N_{PART_i}
表出型
a. Ah, le vent me pince le visage ! (=(10b))
‘Oh, the wind pinches me_i in the $face_i$!’
描写型 I
b. Le vent {m’/l’} a pincé le visage.
‘The wind pinched $\{me/him\}_i$ in the $face_i$!’
‘

構文タイプ C，D では身体部分と全体が言語化されているので，もっとも概念化が進んだ感覚事象を表すと考えられる．(15b, 16b) から構文タイプ C，D も，描

写型 I を取ることができることが分かる[3] [4].

(17) は 4 つの構文タイプを概念化の観点から整理したものである.

(17)　構文 A　<　構文 B　<　構文 C，D

構文タイプ A はもっとも概念化の度合いが低く，続いて構文タイプ B，そして構文タイプ C，D がもっとも概念化の進んだ事象を表す構文タイプとなる.

4.4. 構文タイプと転用可能な行為動詞

行為動詞 I と II が目的語型感覚動詞に転用されるとき，すべての動詞が等しく 4 つの構文タイプと共起するわけではない. (18)，(19) に示すように，行為動詞 I は，*frapper* (to strike) を除く，すべの動詞が構文タイプ A と共起できるが，行為動詞 II は *barbouiller* (to daub)，*brûler* (to burn)，*cuire* (to burn)，*glacer* (to freeze) の 4 つを除いて構文タイプ A とは共起できない.

(18)　構文タイプ A と共起可能な行為動詞 I
a. Ah, ça chatouille ! (=(12a))
b. Ah, ça tape !　「(陽射しで) 暑い」
'Oh, it hits!'
c. Ah, ça gratte !　「チクチクする」
'Oh, it scratches!'
d. Ah, ça pique !
'Oh, it pinches!'
e. Ah, ça tiraille !　「ムカムカする」
'Oh, it tugs!'
f. Ah, ça cingle !　「(冷たい風で) 痛い」
'Oh, lashes!'
g. Ah, ça mord !　「(冷たい風で) 痛い」
'Oh, it bites!'

---

[3] 表出型は本質的に概念化と相容れない特徴を持つため，いずれの構文タイプでも原因は具体的な指示対象を持つ名詞句よりも漠然とした指示しかもたない ça のほうが馴染みやすいと考えられる．これに対して描写型は十分概念化された過去に起こった感覚事象を表すので，感覚を引き起こした原因は具体的指示対象を指す名詞句が選択されやすいと考えられる.

[4] 間投詞や感嘆符の有無も一つの構文として扱うことも可能であり，表出型の心理動詞を考える上でこれらの言語記号は重要な役割を担うと考えられる．しかし本論文では主語，動詞，目的語，前置詞句などの言語記号が持つ意味側面に限定して分析を進めることにする．間投詞や感嘆符の問題については今後の課題とする.

h. Ah, ça picote ! 「ひりひりする」
‘Oh, it pecks!’
i. Ah, ça pince !
‘Oh, it pinches!’

(19) 構文タイプ A と共起可能な行為動詞 II
a. Ah, ça barbouille !
‘Oh, it daubs!’
b. Ah, ça brûle ! 「焼け付くようだ」
‘Oh, it burns!’
c. Ah, ça cuit ! 「熱い」
‘Oh, it burns!’
d. Ah, ça glace ! 「こごえる」
‘Oh, it freezes!’

構文タイプ B に関しては (20) に示すように，行為動詞 I では半数以上が共起可能であるのに対して，(21) の結果から行為動詞 II では半数以上が共起できないことが分かる[5].

(20) 構文タイプ B と共起可能な行為動詞 I
a. Ah, ça me chatouille ! (=(9b))
b. Ah, ça me gratte !
‘Oh, it scratches me!’
c. Ah, ça me pique !
‘Oh, it pinches me!’
d. Ah, ça me tiraille !
‘Oh, it tugs me!’
e. Ah, ça me picote !
‘Oh, it pecks me!’
f. Ah, ça me pince !
‘Oh, it pinches me!’

(21) 構文タイプ B と共起可能な行為動詞 II

[5] 構文タイプ B と共起するとき行為動詞 II の例には，感覚事象ではなく感情事象を表す文として解釈した場合に容認される例がある．例えば次のような動詞は構文タイプ B では感情動詞のステイタスを持つ．*blesser*，*crisper*，*déchirer*，*meurtrir*，*raidir* (Ah, ça me V ! タイプの発話は口語的表現であるため，文語的表現で使用されやすい *meurtrir* はやや不自然な表現になる)．以上の傾向は，感情事象が部分に及ぶことのない全体に作用する事象であることに関わると考えられる．詳細は第 5 章で論じる．

a. Ah, ça me barbouille !
‘Oh, it daubs me!’
b. Ah, ça me brûle !
‘Oh, it burns me!’
c. Ah, ça me cuit !
‘Oh, it burns me!’
d. Ah, ça me glace !
‘Oh, it freezes me!’

続いて構文タイプ C との共起関係を見てみると，(22) と (23) の対比から行為動詞 I では半数以上が共起可能であるのに対して，行為動詞 II では *brûler* を除いてすべて共起不可となることが分かる．

(22) 構文タイプ C と共起可能な行為動詞 I
a. Ah, ça me chatouille dans le dos ! (=(10a))
‘Oh, it tickles me$_i$ at the back$_i$!’
b. Ah, ça me gratte au dos !
‘Oh, it scratches me$_i$ at the back$_i$!’
c. Ah, ça me pique aux lèvres !
‘Oh, it pricks me$_i$ at the lips$_i$!’
d. Ah, ça me tiraille à l’estomac !
‘Oh, it tugs me$_i$ at the stomach$_i$!’
e. Ah, ça me picote au visage !
‘Oh, it pecks me$_i$ at the face$_i$!’

(23) 構文タイプ C と共起可能な行為動詞 II
Ah, ça me brûle aux yeux !
‘Oh, it burns me$_i$ at the eyes$_i$!’

構文タイプ D に関しては (24)，(25) に示すように，行為動詞 I では *taper* (to hit) を除くすべての動詞が共起可能であり，行為動詞 II ではすべての動詞が共起できる．

(24) 構文タイプ D と共起可能な行為動詞 I
a. Ah, ça me chatouille le dos !
‘Oh, it tickles me$_i$ in the back$_i$!’
b. Ah, ça me gratte le dos !

‘Oh, it scratches me$_i$ in the back$_i$!’

c. Ah, ça me pique les lèvres !

‘Oh, it pricks me$_i$ in the lips$_i$!’

d. Ah, ça me tiraille l’estomac !

‘Oh, it tugs me$_i$ at the stomach$_i$!’

e. Ah, ça me cingle le visage !

‘Oh, it lashes me$_i$ at the face$_i$!’

f. Ah, ça me frappe les tympans !

‘Oh, it strikes me$_i$ at the eardrums$_i$!’

g. Ah, ça me mord le visage !

‘Oh, it bites me$_i$ at the face$_i$!’

h. Ah, ça me picote le visage !

‘Oh, it pecks me$_i$ at the face$_i$!’

i. Ah, ça me pince les doigts !

‘Oh, it pinches me$_i$ at the fingers$_i$!’

(25) 構文タイプ D と共起可能な行為動詞 II

a. Ah, ça me barbouille le ventre !

‘Oh, it daubs me$_i$ at the stomach$_i$!’

b. Ah, ça me blesse les yeux ! 「目が痛い」

‘Oh, it hurts me$_i$ at the eyes$_i$!’

c. Ah, ça me brûle les yeux !

‘Oh, it burns me$_i$ at the eyes$_i$!’

d. Ah, ça me casse les tympans ! 「鼓膜がガンガンする」

‘Oh, it breaks me$_i$ at the eaydrums$_i$!’

e. Ah, ça me coupe le visage ! 「顔がひりひりする」

‘Oh, it cuts me$_i$ at the face$_i$!’

f. Ah, ça me crispe les doigts ! 「指がビリビリする」

‘Oh, it tenses me$_i$ at the fingers$_i$!’

g. Ah, ça me cuit les yeux !

‘Oh, it burns me$_i$ at the eyes$_i$!’

h. Ah, ça me déchire les tympans ! 「鼓膜がガンガンする」

‘Oh, it tears me$_i$ at the eardrums$_i$!’

i. Ah, ça me durcit les doigts ! 「悴む」

‘Oh, it hardens me$_i$ at the fingers$_i$!’

j. Ah, ça me glace les jambes !

‘Oh, it freezes me$_i$ at the feet$_i$!’

k. Ah, ça me meurtrit le visage！「顔がひりひりする」
‘Oh, it bruises me$_i$ at the face$_i$!’
l. Ah, ça me perce les oreilles！「耳をつんざかれる」
‘Oh, it pierces me$_i$ at the ears$_i$!’
m. Ah, ça me raidit les doigts！「悴む」
‘Oh, it stiffens me$_i$ at the fingers$_i$!’
n. Ah, ça me soulève le cœur！「旨がムカムカする」
‘Oh, it lifts me$_i$ at the heart$_i$!’
o. Ah, ça me tord le ventre！「胃が捩れる」
‘Oh, it twists me$_i$ at the stomach$_i$!’
p. Ah, ça me tue les pieds！「足が痛い」
‘Oh, it kills me$_i$ at the feet$_i$!’

各構文タイプと行為動詞 I と II の共起関係を以下の表にまとめる．「◯」は半数以上の動詞が共起可能であること，「△」は半数以下の少数の動詞のみ共起可能であること，「×」はほとんどの動詞が共起できないことを表す．

構文タイプ	行為動詞 I	行為動詞 II
A : Ça$_{CAUSE/NOM}$ V	◯	△
B : N$_{CAUSE/NOM}$ N$_{EXP/ACC}$ V	◯	△
C : N$_{NOM/CAUSE}$ N$_{EXP/ACC_i}$ V PREP ART$_{DEF}$ N$_{PART_i}$	◯	×
D : N$_{NOM}$ N$_{EXP/DAT_i}$ V ART$_{DEF}$ N$_{PART_i}$	◯	◯

表 1 行為動詞 I，II と構文タイプの共起関係の傾向

行為動詞 I はどの構文タイプとも共起しやすいが，行為動詞 II は D 以外の構文タイプとは共起しにくい傾向にあると言える．次節以降の考察では，各構文タイプと共起可能な動詞を例に分析を進める[6]．

構文タイプ D に含まれる与格について補足する．*donner* (to give) のように間接目的語 (与格) が基本的に要求される動詞とは異なり，構文 D と共起する *piquer*，*frapper* などは，(26) に示すように，基本的には直接目的語のみを選択し，間接目的語 (与格) は取らない．

[6] 行為動詞 I は目的語に置かれる参与者の位置・状態変化を表さないが，行為動詞 II は目的語参与者の位置・状態変化を含意する．この相違は影響性 (affectedness) の大小に関わる．行為動詞 I と行為動詞 II の間に観察される構文タイプとの共起関係の違いには影響性の相違が関与していると考えられるが，この問題については今後の検討課題とする(cf Tsunoda 1999, Hopper and Thompson 1980, Barnes 1985).

(26) a. Paul a piqué une bûche.
‘Paul pricked a log.’
b. Paul a frappé la porte.
‘Paul hit the table.’

piquer, *frapper* が (24c), (24f) のように間接目的語 (与格) を取る場合，この与格はこれらの動詞の典型的な用法に照らし合わせると余分な項として存在する．このような与格は「拡大与格 (extended dative)」や「非語彙的与格 (non-lexical dative)」などと呼ばれてきた(cf. Leclère1978, Herslund1990，井口 2000，Shibatani1996). 拡大与格は，主語―動詞―直接目的語が表す事象とどのような関わりを持つかによって「利害の与格」,「受益の与格」,「認識与格」,「心性与格」など様々なタイプに分けられてきた．与格表示の人間と直接目的語に置かれる対象が分離不可能所有 (inalienable possession) 関係を表す与格は「部分の与格」と呼ばれる (cf.武本 2002)．武本 (2002) の用語にならい，以下の考察では身体部分を直接目的語に取る拡大与格を部分の与格と呼ぶ.

4.5. 参与者間の意味関係の考察

4.5.1.節では，行為動詞の参与者間の意味関係を分析する．4.5.2.節では，行為動詞が目的語型感覚動詞として機能する際に観察される意味的統語的振る舞いに注目しながら，目的語型感覚動詞の参与者間の意味関係を明らかにする.

4.5.1. 行為動詞の参与者間の意味関係

第 3 章で論じたように，行為事象は〈いま・ここ〉の〈私〉という意味的特性に縛られず，表出機能が前面に出ることはない．(27a) に示すように，行為を受ける参与者が人間であり，その人間が概念化者自身 (=1 人称) であっても，概念化・言語化のレベルにおいてその人間は，感じる主体としてではなく描写対象としてのステイタスを持つ．意味役割では被動作主のステイタスを持つ．描写対象／被動作主という点では，(27b), (27c) の目的語も同じ特徴を持つ．(27) の事象と概念化者の関係は図 1 で捉えることができる (cf. 3.1.2.節)．図 1a は (27b, c), 図 1b は (27a) の図である．ACTOR は主語にプロファイルされる行為者を表す．図 1b の被動作主 (Patient, PAT) と概念化者 (C) を結びつける点線は，両者が同一指示関係にあることを表す.

(27) a. Paul me gratte au dos.
‘Paul scratches me$_i$ at the back$_i$.’

b. Paul le gratte au dos.
‘Paul scratches him_i at the back_i.’
c. Paul gratte le mur.
‘Paul scratches the wall.’

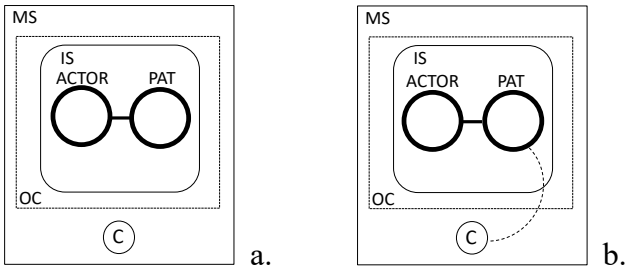


図 1 行為動詞の事象と概念化者の関係

行為事象は〈いま・ここ〉に縛られることはないので，過去形の例でも事象と概念化者の関係は図 1 と基本的には同じ構造を持つと考えられる．

行為動詞において行為者と被動作主が具体的にどのような関係にあるのかを検討しよう．行為が非有情物に及ぶことを表す (27c) から検討する．行為動詞 I *gratter*，行為動詞 II *casser* を例にする．

(28) a. Paul gratte le mur. (=(27a))
b. Paul a gratté le mur.
‘Paul scratched the wall.’
(29) a. Paul casse la vitrine.
‘Paull breaks the show window.’
b. Paul a cassé la vitrine.
‘Paul broke the show window.’

(28)，(29) では，Paul から壁，ショーウィンドウに力が及ぶことを表すので，参与者間の意味関係は図 2 に表すビリヤードボールモデルで記述することができる．矢印は力の伝達を表す[7]．

[7] (29b) では目的語の状態変化が含意されるので，正式なビリヤードボールモデルでは状態変化後の状態を表す構造を持つ (第 2 章)．状態変化は参与者間の意味関係ではなくアスペクト構造に関わる特徴なので図 2 では省略してある．

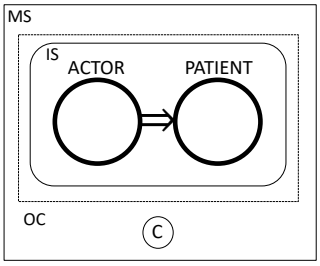


図 2　(28)，(29) の参与者間の意味関係

(28)，(29) が力の伝達に特徴づけられることの証拠として，(30)，(31) に示す動的受動文への置き換えを挙げることができる (cf. Shibatani 1985, Langacker 1987, 2009).

(30)　a. Le mur est gratté par Paul.
　　‘The wall is scratched by Paul.’
　　b. Le mur a été gratté par Paul.
　　‘The wall was scratched by Paul.’
(31)　a. La vitrine est cassée par Paul.
　　‘The window is broken by Paul.’
　　b. La vitrine a été cassée par Paul.
　　‘The window was broken by Paul.’

谷口 (2005) の分析を参考にしてまとめると，力の連鎖は次の 3 つの特徴からなる．1 つ目は各参与者が自立した実体 (entity) であること[8]，2 つ目は参与者同士が相互関係を持つこと，そして 3 つ目はその相互関係が非対称的であることである．(28)，(29) は以上 3 つの特徴を満たすので，力を与える参与者を背景化させて力を受け取った参与者を前景化させる意味操作ができる (動的受動文への置き換え)．問題となる他動詞文が以上 3 つの条件を満たさない場合，動的受動文へ置き換えることはできない．以下の例を見てみよう．

(32)　a. Paul a couru la ville.
　　‘Paul ran around the city.’

[8] 認知文法では，事象に含まれる存在が力の連鎖に関わるような特徴を有する場合に，それらは参与者 (participant) と呼ばれる．つまり「参与者」の定義の中にすでに独立性という概念が含まれていることを意味する．この論理に従うならば，「各参与者が自立性を持つこと」という本文の記述はトートロジーになっているが，本論文では主語，目的語などの文法カテゴリーにプロファイルされる要素をひとまず参与者と見なして，それらの意味論的ステイタスの違いを分析するという手順で分析を行っているので，以上の記述に問題はないことを断っておく．

b. *La ville a été courue par Paul.
'The city was run by Paul.'

(33) a. Trois et cinq égale huit.
'Three and five equals eight.'
b. *Huit est égalé par trois et cinq.
'Eight is equaled by three and five.'

(32a) は「街を駆け回った」という事態を表すが，街は Paul の行為が行われる場所の性質を持ち，力の伝達に参与できる自立した実体としての資格を持たない．そのため (32b) に示すように，動的受動文へ置き換えることができない．(33a) では 3 足す 5 と 8 の間に相互関係はなく, 非対称的な相互関係もないので, (33b) に示すように，こちらも動的受動文に置き換えることができない．

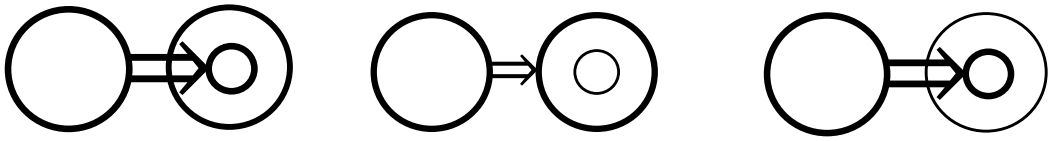
続いて (27a, 27b) のように，行為が有情物の身体部分に及ぶことを表す場合の参与者間の意味関係を検討しよう．フランス語では，身体部分に及ぶ行為を表す構文には 3 つのタイプがある．1 つ目は (34) のように，身体部分が直接目的語に置かれ，所有者が間接目的語 (部分の与格) に置かれるタイプ，2 つ目は (35) のように，身体部分が前置詞句に置かれ，所有者が直接目的語 (対格表示) に置かれるタイプ，3 つ目は (36) のように，身体部分が直接目的語に置かれ，所有者が属格表示されるタイプである．

(34) Paul lui perce les oreilles.
'Paul pierces him/her$_i$ at the ears$_i$.'

(35) Paul le chatouille (aux côtes).
'Paul tickles him/her$_i$ (at-the ribs$_i$).'

(36) a. Paul chatouille ses côtes.
'Paul tickles his/her ribs.'
b. Paul perce ses oreilles.
'Paul pierces his/her ears.'

以上 3 つの構文の違いについて論じる武本 (2002) の議論を見てみよう．図 3a は例 (34)，図 3b は例 (35)，図 3c は例 (36) の参与者間の意味関係を表す．



a. 部分の与格　　b. 対格　　c. 属格

図 3 身体部分へ及ぶ事態を表す構文のスキーマ (武本 2002 : 102)

各図の左の円は主語にプロファイルされる参与者を表し，右の外側の円は身体全体，内側の円は身体部分を表す．左右の円を結ぶ矢印はエネルギーの伝達を表す．(35) の参与者間の特徴を表す図 3b では，身体部分を表す円は細い線で表示されているが，これは前置詞句に置かれる身体部分が省略可能であることを表している．図 3c の身体全体を表す円が細い線になっているのは，(36) において属格表示される身体全体が身体部分の参照点 (reference point) として存在していることを表す．(34)，(35)，(36) の特徴を武本 (2002) は次のように分析する．

(37) 与格表示の人間は，身体部分を通してエネルギーを間接的に受けた参与者としてプロファイルされているのに対し，(…) 属格表示の人間は，プロファイルされた身体部分の参照点 (reference point) になっているだけで，エネルギーを受けた参与者としてプロファイルされているわけではない．(…) 対格構文の場合は，対格表示の人間はその活性領域内の身体部分の参照点になっているだけでなく，エネルギーを直接に受けた参与者としてプロファイルされている．身体部分を表す前置詞句は削除可能な付加的要素である．　(武本 2002 :102)

現実世界において，身体の全体と部分は切り離すことができない．しかし，身体部分へ及ぶ行為が概念化・言語化されるレベルにおいては，身体部分と全体は自立した参与者としてエネルギーの伝達に関わっているため，(35) のように身体全体がエネルギーの受け手として概念化され，部分は削除可能な付加的要素として概念化されるケースや，(34) のように身体部分が直接的なエネルギーの受け手として概念化され，身体全体は間接的にエネルギーを受ける参与者としてプロファイルされるケース，あるいは (36) のように身体全体が参照点として背景化されるケースが生じうるということができる．この特徴は動的受動文への置き換えからも示すことができる．(38)〜(40) は順に (34)，(35)，(36) の受動文である[9]．

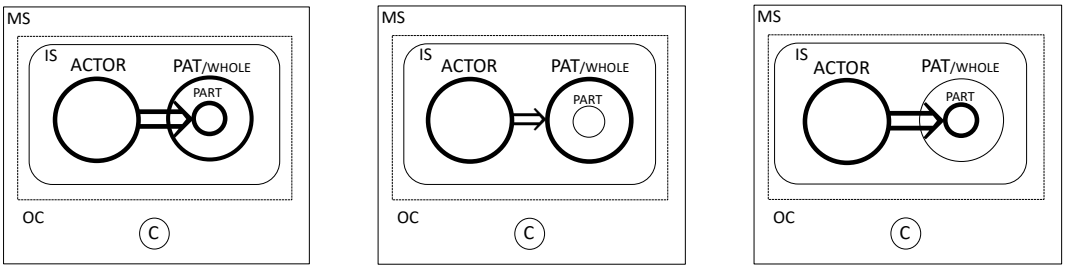
[9] (38) の受動文はインフォーマントに確認したものだが，このような受動文はほとんど使用されることはなく，容認度が低いと判断される可能性があるかもしれない．しかし，以下の議論

(38) Les oreilles lui sont percées par Paul.
‘The ears$_i$ are pierced to him/her$_i$ by Paul.’

(39) Il est chatouillé par Paul aux côtes.
‘He$_i$ is tickled by Paul at the ribs$_i$.’

(40) Ses oreilles sont percées par Paul.
‘His/her ears are pierced by Paul.’

以上の考察を踏まえて, (34), (35), (36) の参与者間の意味関係を図 4 に表す. 図 4a は (34), 図 4b は (35), 図 4c は (36) の参与者間の意味関係を表す. 図 4 は, 図 3 を参考にしたものであるが, 図 3 は構文自体が持つイメージ・スキーマとして提示されている. しかしこのイメージ・スキーマは, 行為動詞の例に則って示されたものであり, 目的語型感覚動詞の参与者間の意味関係までを包括するものではないと考えられる. 以上の理由により本論文では図 4 を行為動詞の参与者間の意味関係の 3 つのタイプとして位置づけることにする. また, 行為動詞と目的語型感覚動詞の参与者間の意味関係の相違点をより詳細に記述するために, 図 3 にはない事象と概念化者の関係を図 4 に加えている.



a. 部分の与格　　b. 対格　　c. 属格

図 4 身体部分へ及ぶ行為を表す動詞の参与者間の意味関係構造

目的語が 1 人称代名詞となる (41) では, 概念化者と 1 人称代名詞は指示対象が同一指示になるので, 参与者間の意味関係は図 5 のようになる.

(41) a. Paul me gratte au dos.
‘Paul scratches me$_i$ at the back$_i$.’
b. Le docteur me pique sur le bras.

において重要な点は, 経験者が与格表示される感覚動詞 (構文タイプ D) では受動文はまったく容認不可となるのに対して, 行為動詞の受動文はそれよりも容認度が高いということである (cf. 4.5.2.1.節, 例 (53)).

‘The doctor pricks me$_i$ on the arm$_i$.’

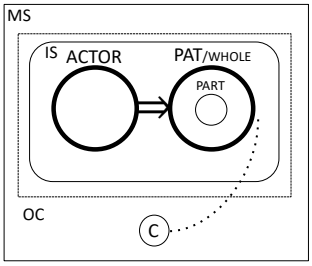


図 5 (41) の参与者間の意味関係構造

概念化者 (C) と PAT/WHOLE を結ぶ点線が同一指示関係を表す．1 人称の経験者が間接目的語 (部分の与格) に置かれる例と属格表示の例も，概念化者と PAT/WHOLE の関係は図 5 と同じ構造になる．

4.5.2. 感覚動詞の参与者間の意味関係

図 4 および図 5 は，行為動詞の意味関係を説明する図式であり，行為動詞が目的語型感覚動詞に拡張された用法記述には十分ではない．本節では，これらの図式を目的語型感覚動詞の参与者間の意味関係記述のために発展させる．

4.5.2.1.節では，4.2.節の考察を踏まえて，目的語型感情動詞の参与者間の意味関係を論じる．4.5.2.2.節では，構文タイプ A が属性解釈と連続性を持つことを示す．

4.5.2.1. 場としての全体と，原因と部分の接触関係

まず動詞が表す作用に対して，身体全体 (経験者) がどのように関わるのかを検討する．(42a)，(43a) は行為動詞の例で，前節で述べたようにこれらは動的受動文 (42b)，(43b) へ置き換えることができる．これに対し，同じ動詞が目的語型感覚動詞として使われる (44a)，(45a) は，(44b)，(45b) に示すように動的受動文に置き換えることができない．

(42) a. Paul me gratte.
‘Paul scratches me.’
b. Je suis gratté par Paul.
‘I am scratched by Paul.’

(43) a. Paul me pince.
‘Paul pinches me.’
b. Je suis pincé par Paul.

‘I am pinched by Paul.’

(44) a. Ah, ce pull me gratte !
‘Oh, this sweater scratches me!’
b. ?? Ah, je suis gratté par ce pull.
‘Oh, I am scratched by this sweater.’

(45) a. Ah, le vent me pince !
‘Oh, the wind pinches me!’
b. ?? Ah, je suis pincé par le vent.
‘Oh, I am pinched by the wind.’

感覚事象では，原因が及ぼす作用は身体部分に及び，経験者 (身体全体) は身体部分に及ぶ作用が成立する場として存在すると考えられる．前節では，*‘Paul a couru la ville.’* (=(32a)) を例に，場所として解釈される要素は力の伝達に参加する参与者としての資格を持たないために, 受動化できないことを示した. (44a), (45a) が動的受動文に置き換えることができないのは, (44a), (45a) の経験者 (身体全体) がまさに場としての特性を持つからだと考えられる[10].

さらに感覚事象において，経験者 (身体全体) は身体部分へ及ぶ作用を感覚として成立させるために不可欠な場として存在する．このことは属格構文へ置き換えられるかどうかによって確かめることができる．構文タイプ D では，(46) のように，身体部分が直接目的語に置かれ，経験者 (身体全体) が間接目的語に置かれる．身体部分に及ぶ行為を表す場合も (47) のように，身体部分を直接目的語に置き，その所有者を間接目的語 (与格表示) に置くことができる．

(46) a. Ah, ça me gratte le dos !
‘Ah, it scratches me$_i$ the back$_i$!’
b. Ah, ça me pique les lèvres !
‘Ah, it pricks me$_i$ the lips$_i$!’

(47) a. Paul me gratte le dos.
‘Paul scratches me$_i$ in the back$_i$.’
b. Le docteur me pique le bras.

---

[10] 影山 (1996a) では，*gratter*，*pincer* のような行為動詞 I (影山の用語では接触・打撃動詞) *hit*, *slap*，*strike*，*kick* が含まれる例 (a) において，目的語に置かれる要素は「場所的な表現」として分析される．この例は Fillmore (1970) から引用されたものである．
(a) I hit / slapped / struck / kick Bill in the leg.
影山 (1996a) が例 (a) の目的語を場所的な表現として位置づけるのは，位置・状態変化が含意される使役動詞の目的語と区別するためである．認知文法の枠組から受動化の問題に注目すると, (a) の目的語は典型的な使役動詞の目的語と同じように, 行為を受ける参与者の資格を持ち, この点において (44a), (45a) に含まれる経験者を場所と見なす本論の分析とは異なる．

‘The doctor pricks me$_i$ in the arm$_i$.’

(46), (47) はどちらも，主語が及ぼす作用が直接目的語に置かれる身体部分に及ぶことを表す．ところが，主語と直接目的語の間で起こる作用に対して，(46) と (47) の間接目的語に置かれる身体全体は異なる関わり方を持つと考えられる．4.5.1.節にて検討した武本 (2002) は，(47) のような例において，「与格表示の人間は，身体部分を通してエネルギーを間接的に受けた参与者としてプロファイルされている (=(37) 抜粋)」と分析する．エネルギー連鎖の中に身体部分と身体全体が位置付けられるということは，両者はそれぞれ自立した参与者として認知されていることを意味する．行為事象においては，身体全体は身体部分から認知的に独立しているため，身体全体はエネルギーを間接的に受ける参与者としてプロファイルされるだけではなく，参照点 (reference point) として機能するだけで，エネルギーを受けた参与者としてはプロファイルされない捉え方も可能である．それが (48) のような属格構文の存在である．(48) において身体全体は，概念化の上で背景化されている．

(48) a. Paul gratte mon dos.
‘Paul scratches my back.’
b. Le docteur pique mon bras.
‘The doctor pricks my arm.’

ところが感覚事象を表す (46) の与格表示の身体全体は，(49) に示すように，属格表示すると感覚を表す表現としては不自然な表現になる．

(49) a. ?? Ah, ça gratte mon dos.
‘Oh, it scratches my back.’
b. ?? Ah, ça pique mes lèvres !
‘Oh, it pricks my lips!’

身体部分に及ぶ作用が感覚として感じられるためには，その作用を感覚として感じる経験者 (身体全体) の存在が必要である．経験者 (身体全体) は，身体部分に及ぶ作用が物理的作用としてではなく，感覚作用として成立するための土台になっている．身体全体 (経験者) が属格表示されると，原因と身体部分の関係だけが切り出されることになり，原因と身体部分の間で起こる作用を感覚作用として成立させる場が後退させられることになる．そのために (49) は，感覚を表す文としては解釈しにくいのだと考えられる．

次に，目的語型感覚動詞において身体部分がどのように関わるか検討する．目的語型感覚動詞では，主語が表す作用は身体部分に及ぶことを表すが，主語と身体部分の間の関係は，エネルギー連鎖に特徴づけられるのだろうか．この問題を検討するために再度，行為が身体部分に及び，その所有者が間接目的語 (与格表示) に置かれる (50) に目を向けてみたい．(51) に示すようにこれらの文は，動的受動文に置き換えることが可能である．

(50) a. Paul lui gratte le dos. (=(47a))
‘Paul scratches him/her$_i$ at the back$_i$.’
b. Le docteur lui pique le bras. (=(47b))
‘The doctor pricks him/her$_i$ at the arm$_i$.’
(51) a. Le dos lui est gratté par Paul.
‘The back$_i$ is scratched him/her$_i$ by Paul.’
b. Le bras lui est piqué par le docteur.
‘The arm$_i$ is pricked him/her$_i$ by the doctor.’

ところが感覚を表す (52) は，(53) に示すように，受動文に置き換えることができない[11].

(52) a. Ce pull me gratte le dos !
‘The sweater scratched me$_i$ at the back$_i$!’
b. Le jus me pique les lèvres !
‘The juice pricks me$_i$ at the lips$_i$!’
(53) a. *Le dos m’est gratté par ce pull.
‘The back$_i$ is scratched to me$_i$ by this sweater.’
b. *Les lèvres me sont piquées par le jus.
‘The lips$_i$ are pricked to me$_i$ by the juice.’

(52) の身体部分は，原因が及ぼすエネルギーを受ける参与者としてプロファイルされており，原因と身体部分は非対称的な相互関係を持つと考えられるので，この点において (52) の主語と身体部分の関係は (50) の主語と身体部分と同じ特徴を持つ．しかし (52) の主語と身体部分は，(50) の主語と身体部分とは異なり，完全に自立した参与者として捉えられていないと考えられる．刺激が身体部分に生じて，それが感覚として知覚されるためには，原因は身体部分と接触関係

[11] ça を主語とする能動文はそもそも受動化しにくい特徴を持つと考えられるので，(46) のままではなく，主語を具体的な名詞句に変更した．

を持ち続ける必要がある (4.1.節). 接触関係が継続する限りにおいて感覚が成立するということは，原因と身体部分は完全には自立した参与者としてのステイタスを持たないことを意味する. 参与者が非自立的であるために, 原因と身体部分の間の作用関係は力の連鎖を表すものとして特徴づけられず, そのために, 動的受動文へ置き換えることができないのだと考えられる.

以上の特徴を認知図式で表す．図 6 は表出型の構文タイプ D の例 (46)，(52) の構造を表したものである.

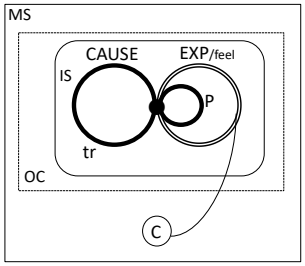


図 6 表出型，構文タイプ D の参与者間の意味関係

右の円の外円は身体全体 (経験者) を表し，内円は身体部分 (Part : P) を表す. 図中の「●」は，動詞がプロファイルする原因 (CAUSE) と身体部分の接触関係を表す．身体全体は，動詞がプロファイルする原因と身体部分の接触関係が成立する場として位置付けられる (二重線表示)．表出型では経験者は感じる主体として存在する (EXP/feel)．実線は概念化者が感じる主体として事象に組み込まれていることを表す．構文タイプ A を除く表出型の構文タイプの事象と概念化者の関係は図 6 と同じ特徴を持つ.

続いて，前置詞句に身体部分を (非) 明示する表出型の構文タイプ B，C の参与者間の意味関係を図 7 に示す．構文タイプ B の例 (54) は，構文タイプ C の例 (55) の前置詞句に置かれる身体部分を省略したものとして位置付けことができるので，2 つの構文タイプは基本的に同じ構造を持つと考えられる.

(54) Ah, ça me gratte ! (=(44a))
‘Oh, it scratches me!’

(55) Ah, ça me gratte au dos !
‘Oh, it scratches me$_i$ (at-the back$_i$)!’

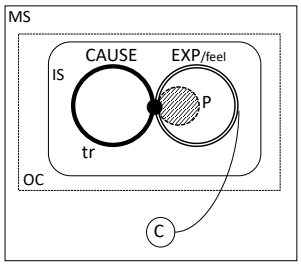


図 7 構文タイプ B，C の参与者間の意味関係

身体部分の外円が点線表示となっているのは，言語的に省略可能である参与者であることを表す．言語的には省略可能であるが，身体部分は原因の作用を受ける参与者として意味解釈上は常に活性化される．斜線表示は，身体部分が意味的に活性化されることを表す．原因と身体部分は，構文タイプ D と同様に接触関係を持つので，原因と身体部分の間の作用関係は「●」で表す．

続いて，表出型の構文タイプ A の参与者間の意味関係の認知図式を示す．

(56) a. Ah, ça gratte ! (=(18c))
b. Ah, ça pique ! (=(18d))
c. Ah, ça pince ! (=(18i))
d. Ah, ça barbouille… (＝(19a))

gratter，*piquer*，*pincer*，*barbouiller* は通常，他動詞として働くので，主語，目的語に 2 つの参与者をプロファイルするが，以上の例では 1 つの参与者のみがプロファイルされている．目的語のスロットは感じる主体によって埋められる．言語化されない感じる主体は，構文タイプ B～D と同様に，場としてのステイタスを持つ．明示されない身体部分も構文タイプ B～D と同じように，原因と接触関係を持つ参与者のステイタスを持つと考えられる．構文タイプ A の参与者間の意味関係を次のように図示する．

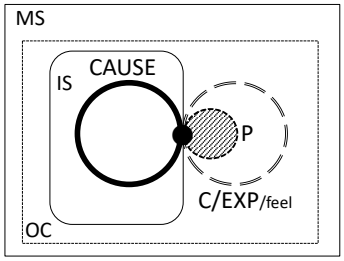


図 8 構文タイプ A の参与者間の意味関係

感じる主体は，接触作用が成立する場として事象に含まれるため，OC 内に含まれるが，言語化されないので IS の外側に置かれる．点線表示は感じる主体が言語化されないことを表している．

次に，描写型 I の構文タイプ B 及び C における参与者間の意味関係について説明する．描写型 I では人称制約が解除されるので，(57) のように目的語には 1 人称だけではなく 3 人称も置くことができる．

(57) a. Ce pull m'a gratté (au dos).
'This sweater scratched me$_i$ (at-the back$_i$).'
b. Ce pull l'a gratté (au dos).
'This sweater scratched him$_i$ (at-the back$_i$).'

描写型 I は心理動詞性 (感覚動詞性) が低下するが，(58) に示すように表出型と同じく受動文へ置き換えることができないことから，参与者間の意味関係は表出型の構文タイプ B 及び C と同じ構造を持つと考えられる．

(58) a. *J'ai été gratté par ce pull (au dos).
'I was$_i$ scratched by this sweater (at-the back$_i$).'
b. *Elle a été grattée par ce pull (au dos).
'She$_i$ was scratched by this sweater (at-the back$_i$).'

これらの特徴は図 9 のようにまとめることができる．

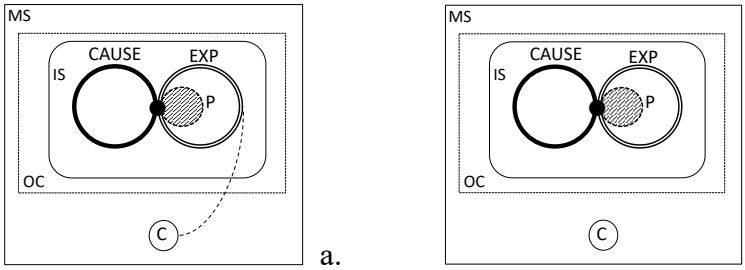


図 9 描写型 I の構文タイプ C，B の参与者間の意味関係

図 9a は (57a) の構造を表す．経験者は概念化者と同一指示関係を持つが，感じる主体ではないので，経験者 (EXP) 役割のみ付与される．

最後に，(59) に例示する描写型 I の構文タイプ D の参与者間の意味関係を説明する．(60) に示すように，動的受動文へ置き換えることができないので，参与者間の関係は表出型の構文タイプ D と同じ構造を持つと考えられる．これらの

特徴を図 10 に表す. 図 10a は (59a), 図 10b は (59b) の参与者間の関係を表す.

(59) a. Le jus m'a piqué les lèvres.
'The juice pricked me$_i$ at the lips$_i$.'
b. Le jus lui a piqué les lèvres.
'The juice pricked him/her$_i$ at the lips$_i$.'
(60) a. *Les lèvres m'ont été piquées par le jus.
'The lips$_i$ ware pricked to me$_i$ by the juice.'
b. *Les lèvres lui ont a été piquées par le jus.
'The lips$_i$ ware pricked to him/her$_i$ by the juice.'

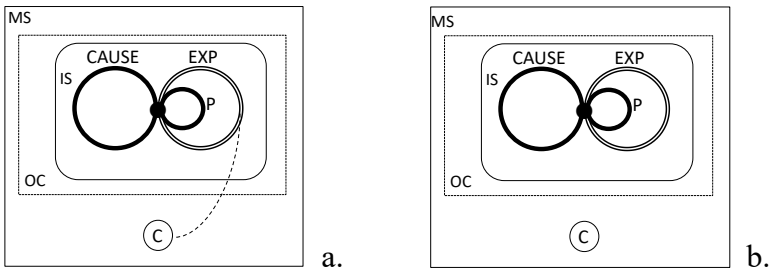


図 10 描写型 I の構文タイプ D の参与者間の意味関係

4.5.2.2. 構文タイプ A と属性解釈の関係

構文タイプ A は, 構文タイプ B〜D では観察されないもう 1 つの解釈がある. (61a), (62a) は,〈いま・ここ〉の〈私〉が感じる感覚を表すだけではなく, ça の指示対象の「痛い」,「熱い」という属性を表す文として解釈することもできる. このような解釈では, *piquer* (to prick), *brûler* (to burn) は, *brûlant* (hot), *piquant* (prickly) のような形容詞的特徴を持つことになる.

(61) a. Ah, ça pique ! (=(18d))
b. Ah, ça me pique ! (=(20c))
(62) a. Ah, ça brûle ! (=(19b))
b. Ah, ça me brûle ! (=(21b))

(61a), (62a) に対して, 構文タイプ B の (61b), (62b) は, 発話者が痛み, 熱さを感じていることしか表さず, 属性解釈を持つことはない. (61a) と (61b), (62a) と (62b) の間でこのような解釈の違いが生まれるのは, 構文タイプ A において経験者がプロファイルされないことに起因すると考えられる. 目的語型感覚動詞は, どの構文タイプでも動詞がプロファイルするのは接触関係である.「(物理

的に) 刺す 」,「(物理的に) 燃やす」のような行為と比較すると，接触関係はより静的な作用として位置づけられる．行為に比べると静的な作用であるが，経験者がプロファイルされる (61b)，(62b) では，作用の受け手となる参与者がプロファイルされるので，主語が表す作用が目的語に及ぶという他動的な関係が残る．ところが (61a)，(62a) では，作用の受け手がプロファイルされないので，他動性は (61b)，(62b) よりも低下する．そのことに連動して，(61a)，(62a) の動詞は，*être* (to be) のような状態動詞に限りなく近くなると考えられる．(61a)，(62a) は，聞き手に注意を促すような場面で発せられると (e.g. *Fais attention, ça pique !* 'Be careful, it pricks!')，主語の性質が焦点化され，属性解釈が前景化するので，参与者間の意味関係は図 (11a) から図 (11b) のように変化すると考えられる[12] [13] [14].

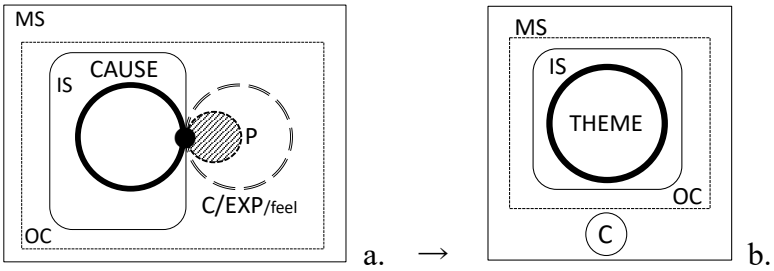


図 11 感覚解釈から属性解釈へのシフト

属性解釈が前景化することにより，経験者とその身体部分の存在は認知的に後退する．ça の指示対象は，感覚を引き起こす原因 (CAUSE) から属性が付与される主題 (THEME) へと変化する．対象の属性を表すということは，自己の内面状態の表出ではなく，描写するという機能を持ち，概念化者は感じる主体から概念化する主体に徹することになるで，概念化者は OC の外へと移動すると考えられる[15].

---

[12] 中村 (2016) では *Ah, ça pince !*に類する日本語の「寒い」という表現を認知モードというモデルから考察し，「寒い」のような主客未分化の現象は Langacker のステージ・モデルでは捉えることができないと論じる．本論では Langacker のステージモデルで記述を行い，中村 (2016) が指摘する問題点については今後の検討課題とする．

[13] 注意喚起という発話機能が ça の指示対象の認知的際立ちを高め，それに反比例して経験者と身体部分の意味的活性化が低下することが，属性解釈の上昇に影響していると考えられる．

[14] 構文タイプ A は，ça の指示対象を具体的名詞句で表した場合 (以下例 a，b)，ça の指示対象のみがより概念化されていることを表すので，属性解釈は (61a)，(62a) よりも前景化する．

(a) Ah, ça gratte, ce pull. 'Oh, it scratches, this sweater.'

(b) Ah, ça pince, ce vent. 'Oh, it pricks, this wind.'

[15] 主語の属性を表す典型的な構文タイプは，*C'est piquant.* 'It is prickly.'，*C'est brûlant.* 'It is hot.'.のような構文である．これらの文も，(聞き手に注意を促す) *Ça pique !*, *Ça brûle !*と同じように使用されるので，その認知構造は図 11b のような構造になると考えられるが，*C'est*

本節の議論をまとめる．4.5.1.節では，行為動詞が力の連鎖に特徴づけられる参与者間の意味関係を持つことを示し，4.5.2.節では，目的語型感覚動詞の参与者間の意味関係は，原因と身体部分が接触関係を持ち，経験者 (身体全体) はその接触関係が成立する場として位置づけられる特殊な構造を持つことを明らかにした．また構文タイプ A では，経験者が感じる感覚解釈と属性解釈が連続性を持つことを論じた．

4.6. アスペクトの考察

本節では，未完了時制 (現在形，半過去形)，完了時制 (複合過去形)，所要時間副詞句を伴う複合過去形の文，継続時間副詞句を伴う複合過去形の文との共起関係と，それらの文の中で持つ解釈に注目しながら，行為動詞 I，II と目的語型感覚動詞が取るアスペクトを分析する．

4.6.1.節では，行為動詞 I と行為動詞 II のアスペクトを記述し，認知的観点からその特徴を考察する．4.6.2.節では，行為動詞 I，II が感覚動詞へ転用されたときに起こるアスペクトの変化を記述し，その特徴を分析する．

4.6.1. 行為動詞のアスペクト

行為動詞 I のアスペクトから検討する．行為動詞 I は目的語の位置・状態変化を含意することはない．そのため (63) に示すように，位置・状態変化が完了するまでの時間をプロファイルする所要時間副詞句を伴う複合過去形の文と共起しない[16] [17]．

(63) a. *Paul a gratté Marie (au dos) en dix minutes.
‘Paul scratched Marie$_i$ (at the back$_i$) in ten minutes.’
b. *Paul lui a tiraillé le bras en dix minutes.
‘Paul tugged him/her$_i$ at the arm$_i$ in ten minutes.’

位置・状態変化が完了するまでの時間がプロファイルされるアスペクトは，達成アスペクトの特徴を持つことになるので，以上の結果から，行為動詞 I は達成ア

---

*piquant.*タイプの属性文と *Ça pique !*タイプの属性文を同じように論じてよいかどうかは今後の検討課題とする．

[16] 所要時間副詞句を伴う文では，開始限界，つまり事象が始まるまでの時間を表す場合もあるが，事象が開始するまでの解釈を持つかどうか，そしてこのような解釈を持つ場合のアスペクトタイプについては本論では問題にしないことにする．

[17] 行為動詞 I でも目的語に置かれる要素の性質によっては，所要時間副詞句を伴う文と共起できる．例えば *Gratter la peinture de tous les murs en une heure*. ‘To scratch the paint of all the walls in one hour.’ ならば容認され，「塗料を削り取る」という状態変化を表すので，ここでは *gratter* は行為動詞 II の特徴を持つ．このような例については本論では扱わないことにする．

スペクトを持つことができないということができる．

続いて，行為動詞 I が複合過去形に置かれた場合の解釈を検討する．行為動詞 I が複合過去形に置かれた場合, 2 つの解釈が観察される. 1 つは (64) のように，継続的な行為を表す解釈である．Paul が Marie の身体に触れるだけでは「くすぐった」とは言えないことから分かるように，身体に触れる行為が何度も繰り返されることで，その行為は「くすぐる」という行為として捉えられる．行為の継続は動的 (dynamic) な特徴を持つので，(64) のアスペクトは undirected activity である (図 12)．*gratter* (to scratch)，*picoter* (to peck)，*tirailler* (to tug) の複合過去形の例も同じ解釈を持つ．

(64) Paul a chatouillé Marie.
‘Paul tickled Marie.’

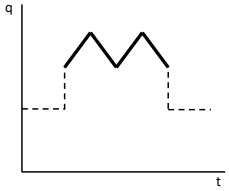
もう 1 つは継続的な行為を表さないタイプである．(65a) が表す「噛み付く」という行為は通常，一回的な行為として解釈されるので，そのアスペクトは cyclic となる (図 13)．ただし (65b) のように，sans cesse ‘constantly’ という副詞句を付加した場合は，「噛み続けた」ことを表すので，undirected activity となる (図 13)[18].

(65) a. Le chien a mordu Paul.
‘The dog bit Paul.’
b. Le chien a mordu Paul sans cesse.
‘The dog bit Paul constantly.’

(65) と同じ解釈を持つ動詞には, *frapper* (to strike), *taper* (to hit), *pincer* (to pinch), *piquer* (to prick) が含まれる．

---

[18] (64), (65b) のような完了時制では，目的語の位置・状態変化は含意されないが，「くすぐる」という行為は発話時点からみて完了している．したがって，そのアスペクトの構造は正確には次のようなものになると考えられる．



活動アスペクトは dynamic，durative，unbounded の 3 つの特徴からなり (cf. 第 2 章)，上の構造は unbounded を満たさないので活動アスペクトの定義に抵触することになるが，この問題は理論的問題として今後の課題とする．

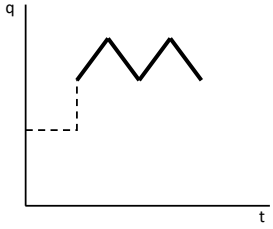


図 12　undirected activity

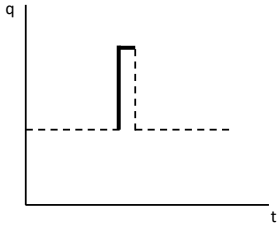


図 13　cyclic

続いて，継続副詞句を伴う複合過去形の例を検討する．継続時間副詞句が付加された場合，「10 分間くすぐり続けた (66a)」，「10 分間噛み続けた (66b)」，「10 分間背中を叩き続けた (66c)」という解釈になるため，アスペクトは undirected activity となる (図 12, 注 18).

(66) a. Paul a chatouillé Marie pendant dix minutes.
‘Paul tickled Marie for ten minutes.’
b. Le chien a mordu Paul pendant dix minutes.
‘The dog bit Paul for ten minutes.’
c. Paul lui a frappé le dos pendant dix minutes.
‘Paul stroke him/her$_i$ at the back$_i$ for ten minutes.’

最後に，未完了時制 (現在形，半過去形) に置かれた場合のアスペクトを見てみよう．未完了時制では，動詞は未完了アスペクトを持つことになる．未完了アスペクトには，活動アスペクトと状態アスペクトがある．(67) の例は状態解釈を持たないので，活動アスペクトだと言える．加えて (67) では，ある終了点に向かう行為を表しているわけではないので，undirected activity であると言える (図 12)[19].

(67) a. L’oiseau lui {picote / picotait} le bras.
‘The bird {pecks/was pecking} him/her$_i$ at the arm$_i$.’
b. Le chien lui {mord / mordait} le bras.
‘The dog {bits/was biting} him/her$_i$ at the arm$_i$.’
c. Paul {tape / tapait} son enfant sur la tête.
‘Paul {hit/was hitting} his child on the head.’

まとめると行為動詞 I は，cyclic と undrected activity の 2 つのアスペクトタイプ

[19] *piquer* (to prick) の半過去形は，行為が行われる寸前の解釈を持ち特殊なアスペクトとなる．e.g. *Le docteur lui piquait le bras.* ‘The doctor was pricking him/her$_i$ the arme$_i$.’ 目的語が複数形の場合は，undirected activity となる．e.g. *Le docteur piquait des enfants.* ‘The doctor was pricking children.’

を取る特徴を持つ.

続いて，行為動詞 II のアスペクトを分析する．行為動詞 II は目的語の位置・状態変化を含意する (ただし文タイプによっては含意されない). (68) に示すように，所要時間副詞句を伴う複合過去形の文と共起すると，位置・状態変化が達成されるまでの過程がプロファイルされる解釈を持つ．その変化は段階性を持つので，アスペクトタイプは incremental accomplishment となる (図 14)[20].

(68) a. Paul a cassé la vitrine en dix minutes.
‘Paul broke the window in ten minutes.’
b. Paul a déchiré le drap en cinq minutes.
‘Paul tore the sheet in five minutes.’

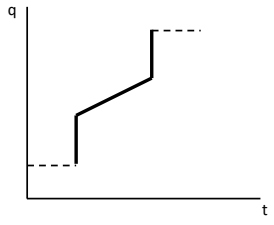


図 14　incremental accomplishment

行為動詞 II は，所要時間副詞句を伴う例では incremental accomplishment を取るが，所要時間副詞句がない (69) では，位置・変化が完了するまでの過程は解釈上，背景化している．したがって (69) のアスペクトタイプは，directed achievement になると考えられる (図 15).

(69) a. Paul a cassé la vitrine.
‘Paul broke the window.’
b. Paul a déchiré le drap.
‘Paul tore the sheet.’

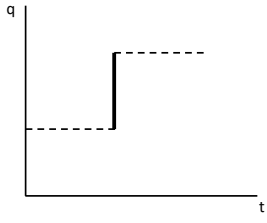


図 15　directed achievement

[20] 目的語に置かれる名詞句の特徴によっては，所要時間副詞句を付加しにくくなる場合もあるが，このような問題については本論文では扱わない．e.g. ??*Paul a cassé le verre en dix minutes*. ‘Paul broke the glass in ten minutes.’

次に，継続時間副詞句を伴う複合過去形の例を見てみよう．(70) が示すように行為動詞 II はこの文と共起できない．

(70) a. *Paul a cassé la vitrine pendant dix minutes.
‘Paul broke the window for ten minutes.’
b. *Paul a déchiré le drap pendant une heure.
‘Paul tore the sheet for one hour.’

継続時間副詞句を伴う複合過去形の文では，事象が継続していることが表される．その場合に生まれるアスペクト解釈は，状態アスペクトか活動アスペクトのどちらかとなる．以上の結果から，行為動詞 II は状態アスペクトと活動アスペクトを取りにくい特徴を持つと言うことができる[21]．

最後に，未完了時制に置かれる場合のアスペクト解釈を分析する．未完了時制では，動詞のアスペクトは状態アスペクトか活動アスペクトのどちらとなる．(71) では位置・状態変化の途中段階がプロファイルされ，その変化が漸次的なものであることを表すので，directed activity となる (図 16)[22]．

(71) a. Paul {casse/cassait} la vitrine.
‘Paul {breaks/was breaking} the window.’
b. Paul {déchire/déchirait} le drap.
‘Paul {tears/was tearing} the sheet.’

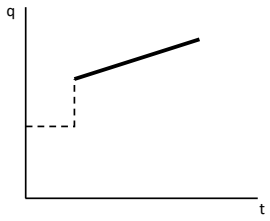


図 16　directed activity

以上の観察から行為動詞 II は，incremental accomplishment, directed achievement,

[21] 目的語の限定詞を不定冠詞複数，部分冠詞に変更すると，「ショーウィンドウを割り続けた」，「シーツを破り続けた」という反復を表し，undirected activity となる．e.g. *Paul a cassé des vitrines pendant dix minutes.* ‘Paul broke show windows for ten minutes’．ただし目的語の位置変化を表す *soulever* (to lift) は，目的語が定冠詞で限定されていても，複合過去形と継続時間副詞句を伴う文と共起できる．e.g. *Paul a soulevé le fauteuille pendant cinq minutes.* ‘Paul lifted the chair for five minutes’．この例では持ち上がった状態が継続することを表す．

[22] 目的語が不定冠詞複数，部分冠詞の場合，位置・状態変化の途中段階ではなく，行為の反復を表す undirected activity となる．e.g. *Paul cassait des vitrines.* ‘Paul was breaking windows.’

directed activity を取るということができる[23]. 認知的観点から見ると，incremental accomplishment，directed activity になるか，directed achievement になるかは概念化の問題と関係する．incremental accomplishment，directed activity において位置・状態変化の過程がプロファイルされるということは，時間の経過に伴って事象の展開が捉えられていることを意味する．これに対して directed achievement では，位置・状態変化までの過程は捨象され，変化が起こったことだけが解釈上，活性化されるので，一歩引いた視点から事象を捉えていることを表す．Croft (2012) は，事象をその内部から捉える概念化を微視的把握 (fine-grained construal) と呼び，事象展開の細部が捨象されて捉えられる概念化を巨視的把握 (coarse-grained construal) と呼ぶ．2 つの用語を用いると，行為動詞 II において incremental accomplishment と directed activity になる場合は，概念化者が事象を微視的に把握していることを表すのに対して，directed achievement では事象が巨視的に把握されていることを表すと考えられる．行為動詞 II はアスペクトの構造を調整できる特徴を持つということができる (cf. Talmy 1985)[24]. 以上の特徴を以下に図示する．

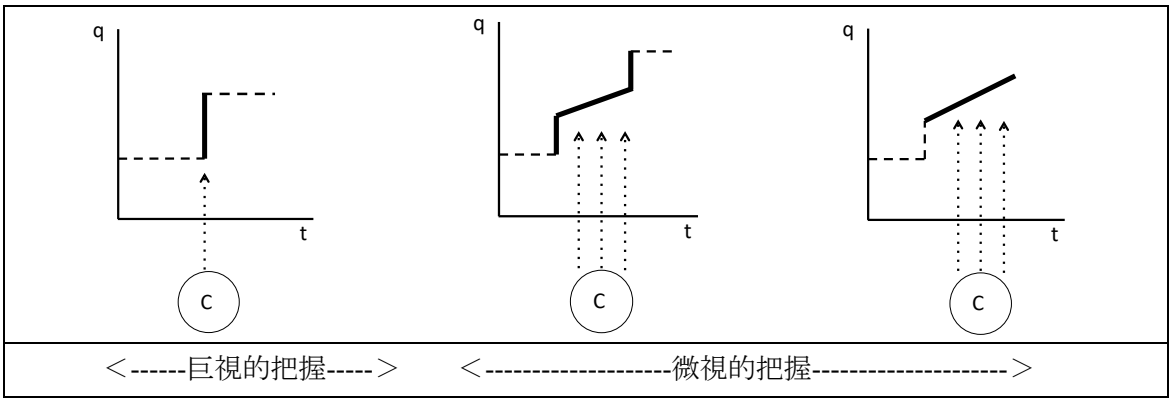


図 17　行為動詞 II のアスペクトの認知的特徴

各アスペクトの構造外に置かれる C は概念化者を表す．概念化者からアスペクトの構造に向かう 1 本の破線矢印は巨視的把握を表し，3 本の破線矢印は微視的把握を表す．

4.6.2. 感覚動詞への転用とアスペクトの変化

4.6.2.1.節では，行為動詞 I および II が目的語型感覚動詞に転用されると，状

[23] 行為動詞 II は目的語が不定冠詞複数，部分冠詞で限定される場合に undirected activity も持つことがあるが，このアスペクトタイプを取ることについては以下の考察では触れない．
[24] 微視的把握は認知文法における sequential scanning，巨視的把握は summary scanning に相当すると考えられる (cf. Langacker 1987).

態アスペクトのみ取り，この状態アスペクトが特殊な特徴を持つことを明らかにする．4.6.2.2.節では，構文タイプ A が属性解釈を持つ場合，経験者が感じる感覚を表す場合とアスペクトが異なることを論じる．

4.6.2.1. 接触による一時的状態性

まず，行為動詞 I から転用された目的語型感覚動詞が未完了時制 (現在形，半過去形) に置かれる例を検討する．

(72) a. Ce pull me {chatouille/chatouillait} (au dos) !
‘This sweater {tickles/tickled} me$_i$ (at-the back$_i$)!’
b. Ce pull me {gratte/grattait} (au dos) !
‘This sweater {scratches/scratched} me$_i$ (at-the back$_i$)!’
c. Le vent me {picote/picotait} la peau.
‘The wind {pekcs/pecked} me$_i$ at the skin$_i$.’
d. Le repas me {tiraille/tiraillait} l’estomac.
‘The meal {tugs/tugged} me$_i$ at the stomach$_i$.’

(72a, b) では，セーターが特定の身体部分に対してひっかくような刺激を与え，身体部分がチクチクしていることを表す．(72c) や (72d) も，風が肌に接触し，つつくような刺激が与えられていることで肌がピリピリしていること，(消化中の) 食事が胃に対してひっぱりあげるような刺激を与え，胃がキリキリしていることを表している．(72) はすべて状態解釈を持つ．これらの例が状態解釈を持つことは，être en train de (be in the process of, be -ing) を伴う文に置くことができるかどうかによって確かめることができる (cf. Legendre 1989)．この文と共起する場合，動的 (dynamic) なアスペクト解釈となるので，動的なアスペクトを取らない動詞はこの文と共起できない．(73a, b) に示すように，*gratter* や *tirailler* が行為動詞として振る舞うときは，この文と共起し，undirected activity 解釈を持つ．ところが (73c, d) が示すように，これらの動詞が感覚事象を表す場合は共起できない[25]．

(73) a. Paul est en train de gratter Marie.
‘Paul is scratching Marie.’

[25] (73a, b) は主語に人間 (human)，(73c, d) では非人間 (non-human) を取るので，この違いが être en train de を伴う文との共起関係を左右していると思われるかもしれない．しかし**Paul est en train d’être sur le lit.* ‘Paul is being on the bed.’も容認されないことから，主語の人間/非人間がこの文との共起関係を左右しているのではないことが分かる．

b. Paul est en train de tirailler ma chemise.
‘Paul is tugging my shirt.’
c. *Ce pull est en train de me gratter (au dos).
‘This sweater is scratching me (in the back).’
d. *Le repas est en train de me tirailler l’estomac.
‘The meal is tugging me in the stomach.’

(73) の結果から，(72) は状態的 (stative) な事象を表すということができる．ただしここで表される状態は，*Elle est française*. ‘She is a French woman.’ という文が表す恒常的な状態ではなく一時的な状態である．よって (72) の動詞のアスペクトは，transitory state になると考えられる (図 18).

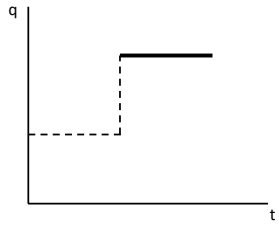


図 18　transitory state

行為動詞 II から転用された目的語型感覚動詞が未完了時制 (現在形，半過去) に置かれる場合も，(72) と同じように一時的状態性を表すと考えられる．

(74)　a. Le soleil me {brûle/brûlait} les yeux.
‘The sun {burns/burned} me$_i$ the eyes$_i$.’
b. Le vent me {coupe/coupait} le visage.
‘The wind {cuts/cut} me$_i$ the face$_i$.’
c. Le repas me {barbouille/barbouillait} l’estomac.
‘The meal {daubs/daubed} me$_i$ at the stomach$_i$.’
d. Le repas me {soulève/soulevait} le cœur.
‘The meal {lifts/lifted} me$_i$ at the heart$_i$.’
e. Les ballerines me {tuent/tuaient} les pieds.
‘The ballet slippers {kills/killed} me$_i$ at the feet$_i$.’

(74a) では，太陽の光によって目が焼かれるような刺激を与えられていることを表している．(74b) では，風が与える，切りつけるような刺激によって顔がひりひりする状態にあることを表す．(74c)，(74d)，(74e) も同じように，食事，バレエシューズが与える作用によって，胃がムカムカする，足が痛いという一時的な

感覚状態にあることを表す.

続いて，複合過去形に置かれた場合のアスペクトを検討する．(75) は行為動詞 I からの転用例，(76) は行為動詞 II からの転用例である．

(75) a. Ce pull m'a gratté (au dos). (=(57a))
b. Le son de cloche m'a frappé les tympans.
'The sound of bell stroke me$_i$ the eardrums$_i$.'
c. Le jus m'a piqué les lèvres. (=(59a))
d. Le repas m'a tiraillé l'estomac.
'The meal tugged me$_i$ at the stomach$_i$.'

(76) a. Le vent glacial m'a coupé le visage.
'The icy wind cut me$_i$ at the face$_i$.'
b. Le soleil m'a cuit les yeux.
'The sun cut me$_i$ at the eyes$_i$.'
c. Le repas m'a tordu les boyaux.
'The meal twisted me$_i$ at the guts$_i$.'

背中がチクチクした (75a)，唇が痛かった (75c)，顔が痛かった (76a)，目がひりひりした (76b) という解釈を持つことから分かるように，(75)，(76) も，身体部分に生じた一時的な感覚状態を表し，transitory state を取る (図 18).

(75)，(76) の解釈において特筆すべき特徴は，行為動詞 I からの転用例でも，行為動詞 II からの転用例でも，状態変化が含意されない点にある．行為動詞 I は，位置・状態変化を含意しえないので，完了時制でも，動詞が表す作用を受ける参与者の位置・状態変化を表すことはない (e.g. *Paul a frappé Marie*. 'Paul struck Marie.')．行為動詞 II は，完了時制において動詞の作用を受ける参与者の位置・状態変化が含意される．たとえば *Paul a coupé le bois*. 'Paul cut the wood.' という文では，木材の状態変化が含意されるし，*Paul a cuit le poisson*. 'Paul grilled the fish.' という文でも魚の状態変化が含意される．ところが (75)，(76) では，行為動詞 I からの転用例でも，行為動詞 II からの転用例でも，動詞が表す作用が及ぶ身体部分の状態変化は含意されない．(75b) では，叩くような作用が鼓膜に及ぶことが表されていて，(75d) ではひっぱるような作用が胃袋に及ぶことが表されているが，それらの作用によって本当に鼓膜が破れる，胃袋が引きちぎられるといった状態変化が表されているわけではない．同様に (76a) では，切れるような作用 (刺激) が顔に与えられていることを表しているだけで，顔が本当に切れたことを表しているのではない．(76b) も，太陽が焼きつけるような作用 (刺激) を目に与えていることを表しているが，実際に目が丸焦げになったことを表

しているわけではない．身体全体 (経験者) に目を向けてみると，こちらも動詞が表す作用によって状態変化するという解釈を持つことはない．4.5.2.1.節で論じたように，身体全体は作用が成立する場所の資格を持つ．場所は状態変化を被るような対象ではないので，(75)，(76) において身体全体 (経験者) が状態変化の対象として解釈されないことは，場所というステイタスと整合性を持つ．

今ここで問題にしている状態変化の含意の有無は，動詞の語彙意味によって指定されるものであるかどうかという意味においてである．再度，先に挙げた例を見てみよう．*Paul a coupé le bois.*という文において木材が被る状態変化は，*couper* が表す語彙意味によって指定され，その結果状態は，*couper* の過去分詞 (coupé 'cut') によって埋められる．*Paul a cuit le poisson.*の場合も同様に，魚の状態変化は *cuire* が表す語彙意味によって指定され，その結果状態は過去分詞 (cuit 'grilled') によって埋められる．これに対して(76a, b) は，顔や目が「切られた (coupé)」，「焼かれた (cuit)」という語彙意味に指定される状態変化を受けたことを表しているのではない．つまり (76a, b) が持つ状態解釈は，状態変化の結果状態としての状態ではないことを意味する．(76a, b) や (75)，(76c) が持つ transitory state 解釈は，原因が身体部分に作用を及ぼしている状態を表していると考えられる．4.5.2.1.節の分析を踏まえて，本論文ではこの状態を接触状態として規定する．ただしこの接触状態は，たとえば木の葉が顔をかすめるような単なる接触ではなく，痛い，痒いと感じるほどの刺激を与える異常な接触である．第 5 章の議論を先取りすると，接触状態という特性において目的語型感覚動詞は目的語型感情動詞と大きく異なる．次章で明らかにするように，(一部を除く) 目的語型感情動詞も transitory state を取る．たとえば (75d) に含まれる *tirailler* は，*Ces nouvelles m'ont tiraillé.* 'These news tugged[plagued] me.' という感情動詞としても使用することができ，この例は過去の一時的感情状態を表す文として解釈される．ところがこの文では，経験者の心理状態は，*tirailler* の比喩的意味 (「苦しめられた」) によって埋められる．つまりこの例文の状態解釈は，動詞の語彙意味が指定する状態変化の結果状態としての状態解釈であり，(75)，(76) の状態解釈とは性質が異なる．

続いて，継続時間副詞句との共起関係とそのアスペクト解釈を検討する．(77) は行為動詞 I からの転用例，(78) は行為動詞 II からの転用例で，いずれもこの文と共起できる．

(77) a. Ce pull m'a gratté (au dos) toute la journée.
'This sweater scratched me$_i$ (at the back$_i$) all day.'
b. Le son de cloche m'a frappé les tympans toute la matinée.
'The sound of bell stroke me$_i$ at the ear drums$_i$ all day.'

(78) a. Le vent glacial m’a coupé le visage au long du trajet.
‘The icy wind cut me$_i$ at the face$_i$ throughout the journey.’
b. Le soleil m’a cuit les yeux pendant une heure.
‘The sun cut me$_i$ at the eyes$_i$ for one hour.’

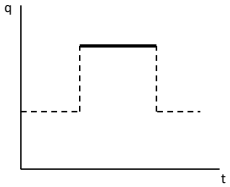
(77) では，継続時間副詞句によってプロファイルされる時間の中で，背中が痒い，耳がキンキンするという感覚状態に置かれていたことが表される．(78) でも身体部分が特定の感覚状態に置かれていたことを表し，アスペクトタイプは transitory state であると言える[26] [27].

最後に所要時間副詞句を伴う複合過去形の文との共起関係を見てみよう．(79) は行為動詞 I からの転用例，(78) は行為動詞 II からの転用例で，いずれもこの文と共起できない.

(79) a. ?? Le son de cloche m’a frappé les tympans en deux minutes.
‘The sound of bell stroke me$_i$ at the ear drums$_i$ in two minutes.’
b. ?? Le repas m’a tiraillé l’estomac en une heure.
‘The meal tugged me$_i$ at the stomach$_i$ in on hour.’
(80) a. ?? Le vent glacial m’a coupé le visage en dix minutes.
‘The icy wind cut me$_i$ at the face$_i$ in ten minutes.’
b. ?? Le repas m’a tordu les boyaux en dix minutes.
‘The meal twisted me$_i$ at the guts$_i$ in ten minutes.’

---

[26] (75)，(76)，(77)，(78) では発話時点から見て感覚事象は完了しているので，そのアスペクトは厳密には (a) 構造を持つと考えられる．



状態アスペクトは，stative，durative，unbounded を特徴とする．以上の構造は unbounded を満たさないが，本論では以上の構造は状態アスペクトに含まれるものと考える．時制自体が持つ完了性と，文の中で動詞が持つ完了性を二次元モデルでどのように記述すべきは今後の検討課題とする．Croft (2012) の記述を見ると，時制の完了性が二次元モデルに反映されているものもあれば，そうではないものもあり，以上の問題は十分整理されていないように思われる．

[27] 主語に置かれる原因の性質と，動詞のタイプによっては，継続時間副詞句を伴う複合過去形の文と共起しにくい感覚動詞もある．e.g. ?? *L’aiguille m’a piqué le doigt pendant une heure*. ‘The needle pricked me the finger for one hour.’ おそらく *piquer* が表す感覚事象は「ちくっとした」という瞬間的に終わる感覚状態なので極めて短い一時的状態性を表し (アスペクトタイプは point state になると考えられる)，そのために継続時間副詞句を伴う複合過去形の文とは共起しにくいのだと考えられる．感覚動詞内のアスペクトタイプの違いは今後の課題とする．

所要時間副詞句を伴う複合過去形の文で使われる動詞のアスペクトは達成アスペクトとなるので，以上の結果から，目的語型感覚動詞はこのアスペクトを持つことはないということができる．

分析をまとめると，目的語型感覚動詞が取り得るアスペクトタイプは transitory state のみとなる．行為動詞 I，行為動詞 II が取り得るアスペクトタイプと比べると，どちらの行為動詞タイプからの転用でも，動詞が取り得るアスペクトは大きく変化すると言うことができる．図 19 は行為動詞 I のアスペクトの変化，図 20 は行為動詞 II のアスペクトの変化を表す．

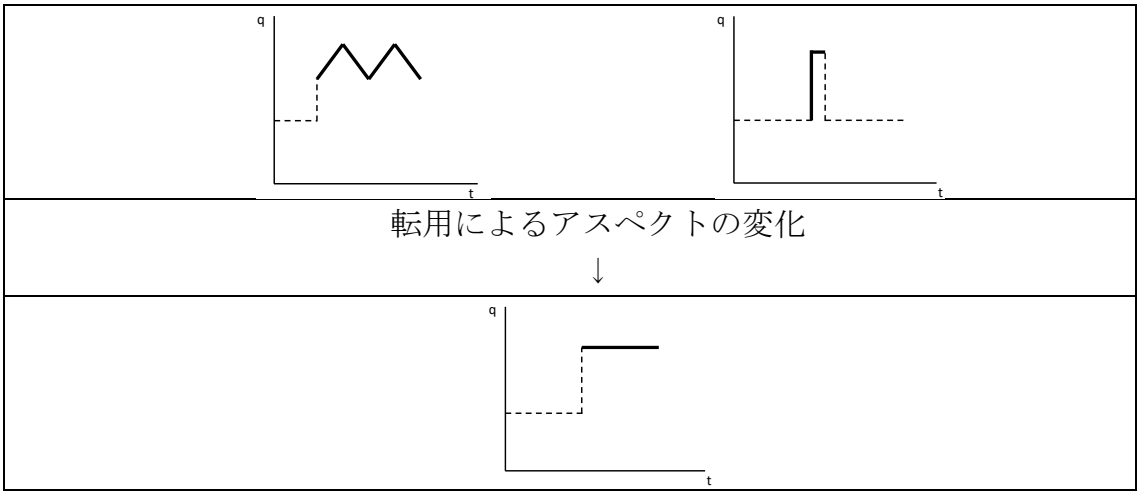


図 19　行為動詞 I のアスペクト変化

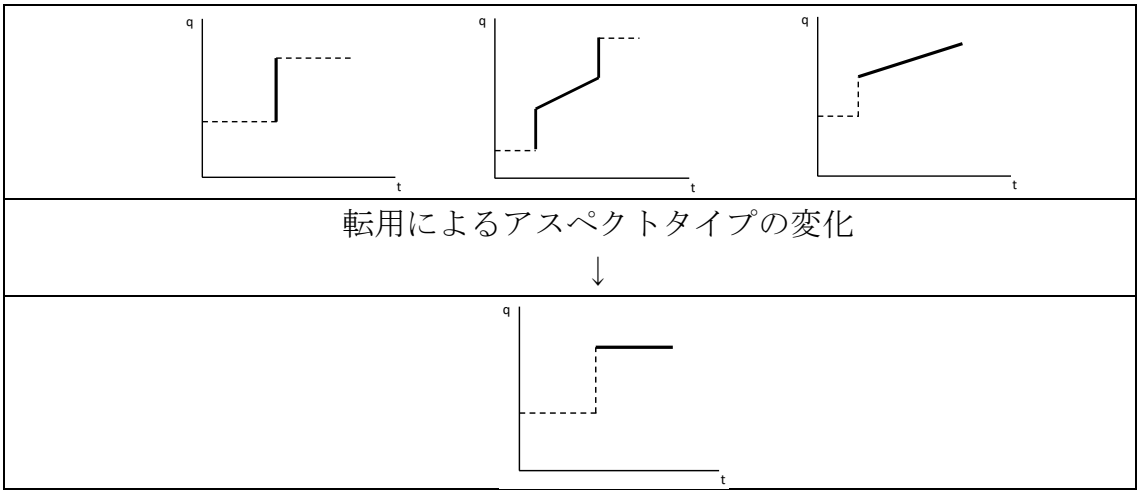


図 20　行為動詞 II のアスペクト変化

複合過去形の現象分析で示したように，目的語型感覚動詞では，原因が表す作用は身体部分に状態変化を引き起こすものではなく，接触という作用であり，目的語型感覚動詞を特徴づける一時的状態は，接触状態という特徴を持つと考えられる．行為動詞 II のように位置・状態変化を含意し得る動詞では，4.6.1.節で論じたように，変化過程を微視的 (cf. incremental accomplishment) に捉えることも，巨視的 (cf. directed achievement) に捉えることもできる．これに対して接触状態は，接触するかしないかデジタル的な性質を持つので，その過程をクローズアップするような認知的操作が介入することはない．状態変化を表さない点において，目的語型感覚動詞は行為動詞 I と共通する．しかし図 19 にまとめたように，行為動詞 I は動的 (dynamic) なアスペクトを持ち，状態アスペクトを取ることはない．この点において，目的語型感覚動詞は行為動詞 I とも異なる特徴を持つ．

目的語型感覚動詞が状態性と強い結びつきを持つことは，時制選択の傾向からも示すことができる．(81) は行為動詞 I および II が感覚動詞へ転用された実例である．(82) は辞書からの例である．(81a) 以外は下線部のみ英語訳をつける．

(81) a. Son barda lui blessait les épaules…　(*Le Chasseur Zéro*)
‘His/her gear hurt him/her$_i$ on the shoulders$_i$.’
b. Le téléphone sonnait toujours à l'extérieur du cabinet de toilette, résonnait dans mon cerveau, <u>les sonneries me brûlaient les tempes,</u> faisaient vibrer la surface de mes nerfs, …　(*Fuir*)
‘The sounds burned me$_i$ at the temples$_i$.’
c. <u>Des courants d'air chaud, brûlant, me cinglaient le visage</u>, je voyais de longues herbes noires le long des talus et des remblais qui se couchaient le log du convoi

sous l'effet de l'aspiration des wagons. (*Fuir*)
'Burning, hot currents of air lashed me$_i$ at the face$_i$.'
d. A cause de tous ces bijoux qui me mordaient la peau, faire l'amour avec elle devenait un véritable supplice, car c'était toujours elle, curieusement, qui jouait le rôle de l'homme. (*Dur dur*)
'Those jewelry bit me$_i$ on the skin$_i$.'
e. Elles en profitaient pour lui toucher les cheveux, et au bout de mes doigts j'éprouvais la finesse de ses cheveux comme si c'était moi qui les touchais. Ça me picotait et me donnait chaud. (*Trembler te va si bien*)
'It pecked me.'

(82) a. Le froid me pique le visage. (『ロワイヤル仏和中辞典』)
'The cold pricks me$_i$ at the face$_i$.'
b. Un froid glacial me mordait le visage. (ibid.)
'An icy cold bit me$_i$ at the face$_i$.'
g. Le soleil me cuit le dos. (ibid.)
'The sun cuts me$_i$ at the back$_i$.'

統計的な分析を目的にしているわけではないが，目的語型感覚動詞の例を観察してみると，(81)，(82) に示すように半過去形や現在形に置かれる傾向が強かった．アスペクトタイプとしては未完了の状態アスペクトである．観察される目的語型感覚動詞の例の多くが現在形，半過去形に置かれているということは，目的語型感覚動詞が未完了アスペクトの１つであるtransitory stateを取るという先の考察と一致しており，目的語型感覚動詞と状態性の結びつきを示す１つの証拠として位置づけることができるだろう．

4.6.2.2. 属性解釈とアスペクト

前節で検討した構文タイプは，現在形と過去形に置くことができる構文タイプ B〜D であった．構文タイプ A の目的語型感覚動詞の例 (83) も，経験者が感じる感覚を表す文として解釈される場合は transitory state となる．ところが構文タイプ A は主語の属性を表す文として解釈することもできる (4.5.2.2.節).

(83) a. Ah, ça pique ! (=(18d))
b. Ah, ça barbouille ! (=(19a))

(84) a. Fais attention, ça pique.
'Be careful, it pricks.'
b. Ne prends pas trop de beurre, ça barbouille.

‘Don’t take too much butter, it daubs.’

(84a) は ça の指示対象 (例えばサボテン) が「痛いものである」ということを聞き手に知らせ，注意を促している発話である．(84b) はバターの属性を伝えることで，過剰摂取にならないよう注意している発話である．属性解釈が顕現するとき，(84) に含まれる動詞のアスペクトタイプは transitory state とは別のタイプへシフトすると考えられる．ça (例えばサボテン) が「痛い」という性質を持つこと，バターが胃もたれを引き起こす性質は，発話時点においてのみ成立するのではなく，恒常的に備わっている性質である．したがって (84) の *piquer*，*barbouiller* のアスペクトタイプは，*Elle est française*. ‘She is a French woman.’ と同じように inherent state であると考えられる (図 21).

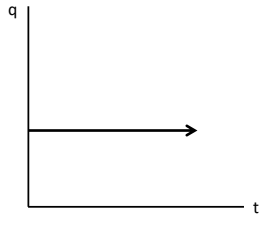


図 21　inherent state

経験者が感じる／感じた感覚を表す場合は一時的状態として解釈されるが，原因となる対象の性質は恒常的なものであると考えられる．前後の文脈から経験者の感覚状態ではなく，原因となる対象に注意が向けられると，その属性解釈が際立つことになるので，アスペクトタイプが transitory state から inherent state にシフトするのだと考えられる．

4.7. 感覚動詞への意味拡張と描写型 II の問題

本節では，行為動詞が目的語型感覚動詞に転用される例と目的語型感情動詞に転用される例の意味拡張の比較を通して，描写型 II タイプの目的語型感覚動詞がないことの要因を探る．

まず，行為動詞が目的語型感情動詞と目的語型感覚動詞へ転用される例を見てみよう．(85) は行為動詞 I *tirailler* (to tug) と行為動詞 II *déchirer* (to tear) の例である．(86) はこの 2 つの動詞が目的語型感覚動詞へ転用された例で，(87) は同じ動詞が目的語型感情動詞へ転用された例である．

(85) a. Paul a tiraillé Marie par la manche.
‘Paul tugged Marie by the arm.’
b. Marie a déchiré la photo en morceaux.

‘Marie tore the picture into pieces.’

(86) a. Le repas me tiraille l’estomac.

‘The meal tugs me$_i$ at the stomach$_i$.’

b. Cette cloche me déchire les tympans.

‘This bell tears me$_i$ at the eardrums.’

(87) a. L’amitié et le devoir m’ont tiraillé.

‘The friendship and the duty tugged[plagued] me.’

b. Cette nouvelle m’a déchiré.

‘This news tore[broke my heart] me.’

(86), (87) では，いずれも動詞の意味が比喩的に変化している．(86a) は (消化中の) 食事が胃に対してひっぱりあげるかのような刺激を与え, 胃がキリキリしていることを表している．(87a) は友情と義務の板挟みにあって困っていることを表している．ところが，目的語型感覚動詞と目的語型感情動詞への比喩的意味拡張は拡張のタイプが異なる．

(87) から見てみよう．目的語型感情動詞への意味拡張では，動詞が表す作用は, 物理的な意味領域で成立するものから, 心理的な意味領域で成立するものへと変化している．つまりメタファーによる意味領域の転換が動詞の意味拡張を支えている．(87a) において「ひっぱりあげる」という作用が働くのは経験者の心理的意味領域である．(87b) が表す「破る」という作用も経験者の心理的領域において成立している．

これに対して，目的語型感覚動詞への意味拡張は，誇張法 (hyperbole) とメタファーの 2 つのプロセスによって成立すると考えられる. (85) と (86) を比較してみると，(85a) の Paul が及ぼす Marie への働きかけと，(86a) の食事が及ぼす胃への作用はどちらも物理的な意味領域で成立している．同様に (85b) が表す写真への働きかけと, (86b) が表す耳への作用も, 物理的な空間で起こっている．つまり行為動詞から目的語型感覚動詞への拡張において，主語が身体部分へ及ぼす作用が成立する意味領域は変化しないことを意味する．意味領域の転換は起こらないが, (85) と (86) では動詞が表す作用は異なる解釈を持つ. (85) は字義通りの解釈を持つが，(86) は起こっている出来事が誇張されている[28]．佐藤 (1987) によると，誇張法とは「ものごとを、度を越して拡大しあるいは縮小し、それらを、あるがままの状態よりもはるかに高い程度に、あるいは低い程度にお

[28] 本論文では字義通りの意味を表さないと考えられる表現をまとめて比喩的表現と呼ぶことにし，メタファーや誇張法などを比喩の下位タイプに位置づける．

いて提示するもの」(ibid.: 177) と定義される[29] [30]．佐藤 (1987) は誇張法の例として次のような実例を挙げる．下線部が誇張法となっている箇所である．

(88) 八時半、まだ《第一つばめ》は入線していない、おそらく発車の十分ほどまえにはいってくるのだろう、そうだとして、それまでにまだ二十分あるわけだ、風はないが烈しい寒気があなたを冷凍し、あなたの内臓まで氷漬けにする…あなたは白いマフラーを巻きなおすと、もう一度新橋寄りの階段をおりていく、下のミルクスタンドで温い牛乳を飲むことだ…　(佐藤 1987 :194, [倉橋由美子『暗い秋』], 下線は筆者による)

下線表示の箇所は，寒気が「あなた」へ作用することを表しているが，「あなた」が冷凍餃子や氷菓子のように実際に凍ってしまうことを表しているのではない．「冷凍する」，「氷漬けにする」と大げさに述べることで，とてつもなく寒い様子が表現されるのである．(86) で表される身体部分への作用も同じように大げさなものとして解釈される．(86a) では，内容物が胃をひっぱるかのように作用していると大げさに述べることで，内容物がただ胃に留まっているのではなく，何らかの刺激を与えていることが表現されている．(86b) も同じように，音波が鼓膜を破るかのように作用していると誇張することで，単に音波が鼓膜に達したことを表しているのではなく，異常なまでの刺激が鼓膜に与えられていることを表現しているのである．

内容物が胃に与える刺激 (86a)，音が鼓膜に与える刺激 (86b) が感覚として解釈されるためには，刺激を感覚として感じる主体が必要である．その役割を担うのが身体部分の所有者である．(86) では与格表示の人間がこの役割を担う．感じるという意味解釈が成立するのは物理的意味領域ではなく，心理的意味領域においてである．そのため，所有者が感じる主体として解釈されるときには，物理的意味領域から心理的意味領域へ解釈領域が変化するメタファーが働くと考えられる[31]．

---

[29] 本文で引用した誇張法の定義は佐藤 (1987) がピエール・フォンタニエ『ことばのあや』から引用したものである．

[30] 誇張法について心理的学的実験を行った Rubio-Fernández, P., Wearing, C. & Carston, R. (2015) は，メタファーとの対比に基づいて誇張法を次のように定義する．'…hyperbole use involeves a shift of magnitude along a dimension which is intrinsic to the encoded meaning of the hyperbole vehicle, while metaphor involves a multi-dimensionam qualitative shift away from the encoded meaning of the metaphor vehicle.' (ibid. : 24).

[31] 目的語型感情動詞の拡張において働くメタファーは，動詞の意味解釈の領域転換を起こすものである．これに対して目的語型感覚動詞は，動詞が語彙的に表すのは，身体部分に起こる異常な接触状態と，その状態がメトニミックな関係によって結ばれる所有者 (場所) において起こっていることで，感じる主体という解釈が成立するのは語用論的な領域であると考えられる．このような違いを考慮に入れると，目的語型感覚動詞への意味拡張において働くメタファ

目的語型感覚動詞の成立に誇張法が関与していることが目的語型感覚動詞に描写型 II がないことの要因になっていると考えられる．ある表現が誇張されたものとして解釈されるためには，典型的な用法と照らし合わせて，意味領域の転換がないことが前提となる．その上で，問題となる表現が典型的な用法から逸脱した用法として解釈されると，誇張という意味効果が生まれる．(89)，(90) に例示する *couper* (to cut) の 2 つの用法を比較してみよう．*couper* の典型的な用法は，行為者がある対象に物理的状態変化をもたらすというものである．物理的作用が及ぶ対象が (89) に示す人間の身体部分であっても，主語が行為者である場合，逸脱した表現として解釈されることはない．(89) は行為者が身体部分を切るという物理的状態変化を表す字義通りの表現として解釈される[32].

(89) Paul me coupe le visage.
‘Paul cuts me$_i$ at the face$_i$.’

ところが (90) では，行為者が置かれるはずの主語位置に非行為者が置かれているため選択制限の違反が生じる．すると「風が顔を切りつける」という作用は，切りつけるかのような強い作用として解釈され，「ひりひりする」という異常な事態が身体部分で起こっていることが表される．

(90) Le vent glacial me coupe le visage.
‘The icy wind cuts me$_i$ at the face$_i$.’

問題となる表現が，身体部分に起こる異常な事態を表す逸脱した表現として解釈されるためには，主語の意味的特徴だけではなく，動詞が表す影響性 (affectedness) もパラメータになると考えられる．(90) と (91) を比較してみよう．

(91) Le vent me caresse le visage.
‘The wind strokes me$_i$ at the face$_i$.’

(90) と (91) はどちらも，風と顔の間に起こる作用を表す．(90) は「ひりひりする」という感覚解釈を容易に得ることができるが，(91) では感覚解釈は前景化

一と，目的語型感情動詞への意味拡張で働くメタファーの関係はより慎重に検討しなければいけないだろう．この問題は今後の検討課題とする．

[32] 部分の与格 (拡大与格) は，語用論的に様々な解釈が補填される可能性を持つので，(89) の与格表示の人間が感じる主体として解釈される余地は残る．しかし (89) の topicality は主語の行為者にあり，与格表示の人間が解釈上，前景化することはないので，(89) の動詞は行為動詞のステイタスを強く持つと考えられる．

しない．このような違いが生まれるのは，「撫でる (caresser)」という事象が大きな影響 (affectedness) を及ぼす作用ではなく，主語が非行為者であっても，小さな作用しか表さず，異常な刺激が起こるという解釈が生まれにくいからだと考えられる．*caresser* と同じように接触・打撃を表す動詞でも，「叩く (frapper, taper)」，「強く打つ (cingler)」のようにより大きな影響性を表す動詞では，主語が非行為者の場合，身体部分に及ぶ作用が異常なものとして解釈されやすくなる．それのことに相関して，(92) では「鼓膜がガンガンする (92a)」，「顔がしびれる (92b)」という感覚解釈が前景化する．

(92) a. Le son de cloche me frappe les tympans.
‘The sound of bell strikes me$_i$ at the eardrums$_i$.’
b. Des courants d'air chaud, brûlant, me cinglaient le visage. (=(81b))
‘Burning, hot currents of air ashed me$_i$ at the face$_i$.’

動詞が表す影響性と感覚解釈の関係の問題は，自動詞においてより顕著となる．以下の例を見てみよう．

(93) a. La boule de neige lui a fondu sur l’épaule. (井口 1989)
‘The snowball melted him/her$_i$ on the shoulder$_i$.’
b. La crème lui a coulé sur la tête. (ibid.)
‘The cream flowed him/her$_i$ on the head$_i$.’

(93a) では雪が肩の上で溶けたこと，(93b) ではクリームが頭についたことが表されているだけで，身体部分に刺激がもたらされるという解釈はほとんどない．自動詞はそもそも他動性が低いので，前置詞句に置かれる身体部分は雪やクリームの通過点という位置づけしかもたない．肩や頭に異常な事態が起こっていると解釈される余地がないので，感覚事象を表す文として解釈されにくいのだと考えられる．

ところで，目的語型感情動詞では，動詞が表す作用は，はじめから心理的意味領域において成立するものとして解釈される．この意味領域の転換には主語の意味的特徴は関与しない．次の例を見てみよう．

(94) Paul m’a blessé.
‘Paul hurt me.’

(94) は，Paul が私を物理的に傷つけたという解釈と私を心理的に傷つけたとい

う 2 つの解釈が可能である．後者の解釈の場合，*blesser* が表す「傷つける」という作用は，心理的意味領域で起こるものとして解釈される．*blesser* (to hurt) が表す作用が心理的意味領域で起こるものとして解釈される限り，その作用を引き起こす Paul は，非行為者 (Paul の言動や行動) として解釈することも，意図性を持つ行為者として解釈することもできる．Paul がどちらに解釈されても，*blesser* の感情動詞のステイタスには影響しない．

また，目的語型感情動詞の成立に関わる意味領域の転換には，動詞が表す作用の影響性も関与しない．(95) を見てみよう．*toucher* (to touch) が行為動詞として使用されるとき，*toucher* が表す事態は対象への軽い接触だけであり，(91) で検討した *caresser* と同じようにその影響性は小さいと言える．これに対して *briser* (to break) が行為動詞として使用されるとき，*couper* と同じように大きな影響性を表す．ところが，これら 2 つの動詞が目的語型感情動詞へ転用される場合，(95) の 2 つの例の比較から分かるように，*toucher* が含まれる例の感情解釈が，*briser* を含む例の感情解釈より劣るということはない．

(95) a. Sa générosité m'a touché.
'Her/his generosity touched me.'
b. Cette nouvelle m'a brisé.
'This news broke me.'

(95a)，(95b) はどちらも等しく経験者の感情状態の変化を表しており，(95a)，(95b) に含まれる動詞の感情動詞のステイタスに違いはないと言える．

4.8. まとめ

本章では，行為動詞と対比させながら目的語型感覚動詞のイベント構造の特徴と，描写型 II を取ることができない問題について考察を行った．

感覚事象は，感覚を引き起こす原因，原因からの刺激を受ける身体部分，その刺激を感覚として知覚する身体全体 (経験者) の 3 つが関与することではじめて成り立つ事象である．3 者の関係は，*Paul a cassé le verre*. 'Paul broke the vase.' が表すようなエネルギーの連鎖に特徴づけられる関係とは異なる特徴を持つ．原因が及ぼす作用が感覚として知覚されるのは，原因と身体部分が接触関係を持つ限りにおいてであり，その関係が解除されると感覚事象も消失する．行為動詞が感覚動詞のステイタスを持つとき，動詞はこのような原因と身体部分の接触関係をプロファイルする．さらに，原因と身体部分の接触関係が感覚事象として解釈されるためには，感じる主体の存在が必要となるが，この役割を担う身体全体 (経験者) は，接触関係が感覚事象として成立するための場として存在する

ことを示した.

アスペクトに関しては, 目的語型感覚動詞は, 一時的状態性という特徴を持つことを明らかにした. 目的語型感覚動詞を特徴づける一時的状態性は, 状態変化によって引き起こされる結果状態ではなく, この点において目的語型感覚動詞は, 状態変化を含意する行為動詞 II とは異なる特徴を持つ. また行為動詞 I と対比すると, 状態変化が含意されないという共通点を持つことになるが, 行為動詞 I は状態解釈を持つことはないので, 目的語型感覚動詞は行為動詞 I とも相違する. 目的語型感覚動詞に認められる状態変化に基づかない一時的状態性という特徴を, 参与者間の意味関係の特異性を踏まえて, 本章では接触状態として規定した.

身体部分に何らかの物理的作用が及ぶとき, その作用は大なり小なり身体部分に刺激を与えることになる. しかしその作用が身体部分に対して異常な刺激を与えない限り, それは異常な接触状態として知覚されることはない. 衣服を着用しているとき, 衣服は常に皮膚へ微量の刺激を与えるが, その刺激が低度のものあれば痒みや痛さとして意識されることはない. しかし衣類の繊維が肌に合わない素材ならば, 繊維が肌触れると, 異常な刺激を引き起こすことになり, 異常な刺激は痛い, 痒いなどの感覚として意識されることになる. このような異常な作用を表すために使用される手段が, 誇張という意味の逸脱である. 行為動詞が表す作用が誇張されたものとして解釈されるためには, 主語が行為者ではないことと, 表される作用が大きな影響性を持つこと, この 2 つの制約が加わる. 目的語型感覚動詞が描写型 II を取ることができないのは, 行為者主語という存在が感覚解釈の妨げになるからであると説明を与えることができる.

第 5 章　感情動詞のイベント構造分析

本章では，目的語型感情動詞のイベント構造を明らかにすることを目的とする．まず，5.1.節にて本章で扱う問題を確認し，5.2.節以降の考察手順を示す.

5.1. 解決すべき問題

表出型と描写型 I の目的語型感情動詞のイベント構造と，描写型 II の目的語型感情動詞のイベント構造の順に問題となる現象を確認する.

第 1 章でまとめたように，目的語型感情動詞は，行為動詞と同じように受動文に置き換えることができる．第 4 章の考察を踏まえると，動的受動文へ置き換えることができるということは，目的語型感情動詞は，行為動詞と同じように力の連鎖のように捉えることができる参与者間の関係を持つと思われる．ところが，目的語型感情動詞は，動的受動文だけではなく，形容詞的受動文への置き換えも可能である (cf. Wasaw 1977, Rappaport 1983，平田 2001，丸田 1998)．ここから，目的語型感情動詞の参与者間の意味関係は，力の連鎖とは異なる関係にも特徴づけられると考えられる．では，目的語型感情動詞の参与者間の意味関係に対してどのような構造を仮定することで，行為動詞との共通点および相違点に対して説明を与えることができるだろうか. これが表出型と描写型 I の目的語型感情動詞のイベント構造に関わる 1 つ目の考察課題である.

続いて，アスペクトに関わる問題を提示する．1 つ目は状態性に関わる問題である．こちらも第 1 章でまとめたように，目的語型感情動詞は，継続時間副詞句と共起可能であることから，状態性を持つと考えられた (cf. 丸田 1998)．しかし第 2 章で論じたように，本論文では動詞のアスペクトにおいて明らかにすべきことは，アスペクトタイプの分類先ではなく，様々な副詞句や特定の時制においてどのようなアスペクトを取るのかという問題であると考える．本章では，第 4 章で明らかにした行為動詞のアスペクトと比べながら，様々な構文環境に置かれたときに，目的語型感情動詞が取るアスペクトの特徴を考察する．また，第 4 章で明らかにしたように，目的語型感覚動詞も状態性 (transitory state) に特徴づけられるが，目的語型感情動詞と目的語型感覚動詞が持つ状態性が同じ性質であるかどうかも検討する.

アスペクトに関わる 2 つ目の問題は，目的語型感情動詞内の問題である．(1) に示すように，目的語型感情動詞の中には継続時間副詞句を付加することができないものがある．(1a) は語彙型，(1b) は転用型の例である.

(1)　a. ?? Cette nouvelle m’a étonné pendant une heure.
　　‘This new surprised me for one hour.’

b. ?? Sa conduite m'a frappé toute la journée.
'His/her behavior struck me all day.'

以上の現象から，目的語型感情動詞には状態性と結びつきにくい動詞もあることが示唆される．では，*étonner* や *frapper* のような目的語型感情動詞は，どのようなアスペクトを取るのだろうか．これが目的語型感情動詞内の問題である．

続いて，描写型 II 目的語型感情動詞のイベント構造の問題を確認する．第 3 章で概観したように，行為者主語の目的語型感情動詞は，(2) に示す受動文への置き換え，(3) に示す継続時間副詞句が付加された場合の解釈において，表出型と描写型 I の目的語型感情動詞とは異なる振る舞いを示す．

(2) a. Paul m'embête !
'Paul bothered me!'
b. Je suis embêté {par / #avec} Paul.
'I am bothered {by / with} Paul.'
(3) Paul m'a embêté toute la journée.
'Paul bothered me all day.'

(2a) において主語が行為者として解釈される場合，(2b) に示すように，動的受動文にしか置き換えることができない．par 以外の前置詞を取ると，対応する能動文の主語は行為者として解釈されなくなる．つまり (2a) の Paul は意図性を持つ参与者としてではなく，Paul の行動や言動などの非行為者主語として解釈される．「#」は対応する能動文の主語が行為者として解釈されないことを表す．

描写型 II の目的語型感情動詞では，(3) のように継続時間副詞句と共起できるものがある．ところがその解釈は，継続時間副詞句と共起した場合の表出型と描写型 I の解釈とは異なる．表出型と描写型 I の目的語型感情動詞が継続時間副詞句と共起すると，上述したように，状態解釈を持つ (e.g. *Ces nouvelles m'ont tiraillé toute la journée.* 'These news tugged[plagued] me all day.')．ところが (3) は，「困らせ続けた」という反復解釈を表し，「困っていた」という状態解釈にはならない．以上，(2)，(3) のような現象をもとにして，主語の行為者性の上昇が，参与者間の意味関係とアスペクトにおいてどのような影響を与えているのかを分析し，描写型 II のイベント構造の特徴を明らかにする．

本章は次の通り構成される．5.2.節では，感情事象の現象面の特徴を分析し，目的語型感情動詞が共起する構文タイプを整理する．5.3.節では，行為動詞 I タイプの *agiter* (to wave)，*chatouiller* (to tickle)，*tirailler* (to tug)，行為動詞 II タイプの *chiffonner* (to rumple), *crisper* (to tense), *dévorer* (to devour), *gonfler* (to inflate),

tanner (to tan) が目的語型感情動詞へ転用される現象に注目して，表出型と描写型 I の目的語型感情動詞の参与者間の意味関係の分析を行う．5.4.節では，転用型だけではなく，語彙型も含めて表出型と描写型 I の目的語型感情動詞のアスペクトの考察を行う．5.5.節では，描写型 II のイベント構造を分析する．5.2.節で明らかにするように，感情事象の現象面での特徴と共起する構文タイプの関係から，目的語型感情動詞は，理論的には構文タイプ D (N_{NOM} $N_{EXP/DATi}$ V ART_{DEF} N_{PARTi}) では使えないはずであるが，実際には，わずかにではあるが以下の例のように構文タイプ D の例も存在する．

(4) Ah, ça me casse les pieds.
‘Oh, it breaks me$_i$ the feet$_i$.’ [It disturbs me.]

5.6.節では，(4) のような現象の意味解釈に注目して，これらが本分析の反例にはならないことを論じる．5.7.節で本章の考察をまとめる．

5.2. 感情事象の特徴と共起可能な構文タイプ

感情事象は，感覚事象には見られない 2 つの特性を持つと考えられる．1 つは作用の全体性である．「*腕がイライラする」とはいえないことから分かるように，感情事象は部分に作用が及ぶことはなく，全体において成立する．経験者が直接目的語に置かれる構文タイプ B の例を見てみよう[1]．

(5) a. Ah, ça me chiffonne !
‘Oh, it rumples[bothers] me!’
b. Ah, ça me gêne !
‘Oh, it blocks[bothers] me!’
c. Ah, ça me gonfle !
‘Oh, it inflates[bothers] me!’
d. Ah, ça me perturbe !
‘Oh, it perturbs me!’
e. Ah, ça me tanne !
‘Oh, it tans[bores] me!’

以上の発話は，ça が指す対象によって経験者が「困る (5a，5b，5d)」，「イライラする (5c，5e)」という感情を感じていることを表す．感覚動詞では特定の身体

[1] 日本語では「腹が立つ」のような表現はあるが，実際に怒り覚えているのは腹の所有者である「私」である．このタイプの表現は本文例 (4) に相当する表現である．

部分が活性化するので，身体部分を前置詞句や直接目的語に置くことができる (e.g. *Ce pull me gratte au dos.* ‘This sweater scratches me$_i$ at the back$_i$.’，*Le vent me picote la peau.* ‘the wind pecks me$_i$ in the skin$_i$.’)．感情事象では特定の部分が活性化することはないので，身体部分を前置詞句や直接目的語にプロファイルすることはできない．つまり目的語型感情動詞は，(6) に示すように基本的に構文タイプ C，D と共起できないことを意味する．

(6) a. *Ah, ça me chiffonne à la tête !
‘Oh, it rumples[bothers] me$_i$ at the head$_i$!’
b. *Ah, ça me gêne l’estomac !
‘Oh, it blocks[bothers] me$_i$ at the stomach$_i$!’

感情事象では身体部分が関与しないので，感情事象に含まれる経験者 (全体) は目的語型感覚動詞の経験者 (全体) のように作用が及ぶ場としてではなく，作用が及ぶ対象として特徴づけられると考えられる[2]．

感情事象の 2 つ目の特徴は因果関係の特殊性に関わる．第 3 章で述べたように感情事象は，*L’eau chaude a fait fondre la glace.* ‘The hot water melted the ice.’ が表すような，ある原因によって引き起こされる，自立的に展開するオンセット使役と類似する特徴を持つ．しかし感情事象は，認知作用によって特徴づけられる点において物理的な因果関係を表す典型的なオンセット使役とは異なる．(8) を見てみよう．

(8) a. Ah, ça me gonfle de penser à mes travaux !
‘Oh, it inflates[bothers] me to think of my works!’
b. L’instituteur m’a dit que mon fils n’était pas présent. Ça me gonfle.
‘The teacher told me that my son was not present. It inflates[bothers] me.’

(8a) では，仕事が「うんざりさせられる」ことの原因になっているわけだが，仕事の存在そのものによって「うんざりさせられる」という感情が成立しているの

[2] Ruwet (1972) は，「感情を感じる主体は，本当の動作主ではなく，場所である (ibid. :187)」という Clédat (1990) の分析を引用して，(主語型，目的語型) 感情動詞の経験者を場所 (lieu) として捉える (邦訳は筆者による)．Ruwet (1972) は場所という概念によって，感情動詞の経験者だけではなく，生理感覚を表す動詞の経験者も捉えている．つまり Ruwet (1972) によって提示される場所概念は，感情事象と感覚事象の相違点を考慮したものではない．第 4 章で論じたように，本論文においては「場」と呼ぶものは，力の連鎖に関与する参与者の資格を持たない要素を指す．この点において Ruwet (1972) が「場所」と呼ぶものと，本論が「場」として捉えるものは同質ではない．

ではなく，*penser à* ‘think of’ という動詞の存在が示すように，経験者自身が原因を知覚・認識するという認知作用も感情事象の成立に関与している．(8b) も同じように，感情事象の原因は息子の欠席にあるが，他人からの報告によって息子の欠席を知らされ，そのことを認識するという認知作用も感情事象の成立に関わっていると考えられる[3]．(8) が表す事態に対して，*L’eau chaude a fait fondre la glace.* ‘The hot water melted the ice.’が表すような物理的事態の展開には，認知作用が介入することはない．

さらに，感情事象の因果関係には自発性という側面もある．*L’eau chaude a fait fondre la glace.* ‘The hot water melted the ice.’において，氷の融解自体は氷の内在的性質によって自立的に展開するが，熱湯と氷の融解の間には一意的な因果関係がある．熱湯をかけることで，氷がさらに固まったり，金属に変化するということはない．ところが，感情事象の原因と結果の間には一意的な関係はない．たとえば，2 人の人間が同じ夕焼けを前にしたとき，一方は感動を覚え，もう一方は郷愁にかられるということは十分ありえる．私たちが何らかの心理を感じるとき，それらを引き起こす原因はきっかけにすぎず，原因と結果は一意的な関係にはなく，きっかけによって生じる感情は何者にもコントロールできない自発的な側面を持つ．

最後に，概念化の問題に関わる感情事象の特徴を指摘しておきたい．第 3 章，第 4 章で述べたように，感覚事象は構文タイプ A によって表現されることがある (e.g. *Ah, ça pique !* ‘Oh, it pricks!’)．ところが感情事象を表す構文は，構文タイプ B のみで，(5) の構文タイプ B から経験者を省略した構文タイプ A に置き換えてみると，(9) に示すようにいずれも容認度が低い (cf. 第 3 章，3.4.1.節)．

(9) a. ?? Ah, ça chiffonne.
‘Oh, it rumples[bothers].’
b. # Ah, ça gêne !
‘Oh, it blocks[bothers]!’
c. ?? Ah, ça gonfle !
‘Oh, it inflates[bothers]!’
d. ?? Ah, ça perturbe !

---

[3] 第 4 章で検討した感覚事象では認知作用が介入することはない．(a) では「紙が頬に触れること」が感覚の生起に関与している．この接触作用を他者から知らされるという構造に変えてみると，(b) のように非文となる．

(a) Des morceaux de papier frottent ma joue. Ça gratte. (*Appel du pied*)
‘Pieces of paper rub my cheek. It scratches.’

(b) *Marie m’a dit que le papier touchait ma joue. Ça gratte.
‘Marie told me that the paper was touching my cheek. It scratches.’

‘Oh, it perturbs!’
e. ?? Ah, ça tanne !
‘Oh, it tans[bores]!’

(9b) は非文ではないが,〈いま・ここ〉の〈私〉が感じる感情を表す文ではなく，例えば身につけている靴のサイズが合わなくて「きつい」という感覚を発話者が感じていること表す文として解釈される．(9) から,〈いま・ここ〉の〈私〉が感じる感情を表すときには経験者の言語化が必須であるということができる[4].

感覚事象は, 原因と身体部分が接触関係を持つことで起こる心理事象で, この関係は同じ時空間で成立する. 原因が身体部分と接触し, その瞬間に感じる感覚を表す場合，その事象は十分概念化されない状態で言語化されることになるので，目的語スロットが埋められない構文タイプ A によって表現される．ところが感情事象は, 原因となる事象と感情が同時に展開することはない. 先に述べたように感情事象は, 原因を経験者が知覚・認識するというプロセスが関与する．そのため, 感情を引き起こす原因自体と経験者は, 原理的には時空間的に離れていてもよい. 加えて原因を知覚・認識するということは, 原因がどのようなものであるかは, 経験者の頭の中ですでに概念化されていると考えられる. つまり感情事象は, ある原因が生じて, それと同時に感情が引き起こされるということはない. 感情は咄嗟に起こるものではなく, ある程度概念化された状態で経験される心理事象だと考えられる．感情事象が構文タイプ A と共起しにくいのは，感情事象が〈いま・ここ〉の感情であっても，ある程度概念化された事象として経験されるため，目的語スロットが埋まっていない未完全な文とは相性がよくないからだと考えられる.

5.3. 参与者間の意味関係の考察

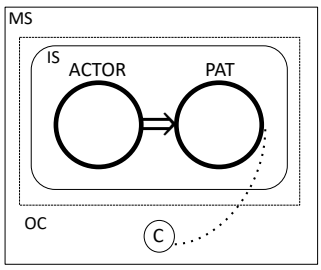
本節では，行為動詞が感情動詞へ転用される過程で参与者間の意味関係にどのような変化が起こるかを論じる. まず, 行為動詞の参与者間の意味関係を確認し，行為動詞と目的語型感情動詞の受動文の具体例を確認する.

第 4 章で述べたように，行為動詞は，エネルギーの伝達によって特徴づけられる参与者間の意味関係を持つ. そのため行為動詞の能動文 (10) は, (11) のように, エネルギーを受ける参与者を認知的に際立たせ, エネルギーの送り手を背景化させる動的受動文に置き換えることができる. 図 1 は (10) の参与者間の意味関係を表す.

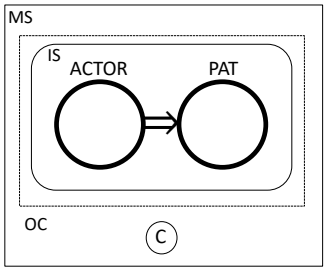
[4] 第 4 章で論じたように，目的語型感覚動詞の中には構文タイプ A と共起できない動詞もあるが，動詞個々の問題はここでは置いておく.

(10) a. Paul me tiraille par la manche.
‘Paul tugs me by the sleeve.’
b. Le lion dévore la proie.
‘The lion devours the prey.’
c. Paul tanne la peau.
‘Paul tans the hide.’

(11) a. Je suis tiraillé par Paul par la manche.
‘I am tugged by Paul by the sleeve.’
b. La proie est dévorée par le lion.
‘The prey is devoured by the lion.’
c. La peau est tannée par Paul.
‘The hide is tanned by Paul.’



a.



b.

図 1　行為動詞の参与者間の意味関係

図 1a は (10a) の参与者間の関係を表す．(10a) の 1 人称は 3 人称に置き換えることができ (e.g. *Paul le tiraille par la manche.* ‘Paul tugs him by the sleeve.’)，認知的には図 1b に表す (10b, c) の被動作主と同じステイタスを持つ．行為者から被動作主に向かう二重線矢印はエネルギーの伝達を表す．

(10) に含まれる動詞が目的語型感情動詞へ転用されると, 受動文は (11) とは異なる特徴を持つ．以下の例を見てみよう[5].

(12) a. Ces nouvelles me tiraillent.
‘These news tug[plagues] me.’
b. L’avenir de mon fils me dévore.
‘The future of my son devours me.’
c. Ses parole me tannent.
‘His/her speeches tan[bore] me.’

[5] 受動化の問題を検討するために，主語には ça ではなく具体的な名詞句を置くことにする．

(13) に示すように, (12) は動的受動文だけではなく, par 以外の前置詞を選択し, (14) に示す典型的な形容詞文と共通点を持つ[6].

(13) a. Je suis tiraillé {par / avec} ces nouvelles.
'I am tugged[plagued] {by / with} these news.'
b. Je suis dévoré {par / avec} l'avenir de mon fils.
'I am devoured {by / with} the future of my son.'
c. Je suis tanné {par / avec} ses paroles.
'I am tanned[bored] {by / with} his/her speeches.'

(14) Je suis très contente de ces nouvelles.
'I am very content of these news.'

先に挙げた行為動詞の受動文 (11) の前置詞を avec に変更すると非文になる. *tirailler* の例だけ挙げておく.

(15) *Je suis tiraillé avec Paul par la manche.
'I am tugged with Paul by the sleeve.'

本論文では，5.2.節で検討した認知作用と自発性が，目的語型感情動詞の参与者間の意味関係を特徴づけ，これが受動文の特異性に関わると考える．しかし感情動詞を巡る様々な議論の中で，認知作用と自発性はすでに言及されており，この 2 つの概念は新しい視点ではない．5.3.1.節では，認知作用に注目して目的語型感情動詞の参与者間の意味関係について論じた先行研究を検討し，その問題点を示す．5.3.2.節では，自発性に関わる概念から目的語型感情動詞を論じた研究を検討し，この分析によって 5.3.1.節で提示する問題の解決を図ることができることを述べる．5.3.3.節では，以上 2 つのアプローチを統合するかたちで，目的語型感情動詞の参与者間の意味関係を表す認知図式を提案する．

5.3.1. Langacker (2009)：認知作用

認知作用という概念を組み込んで目的語型感情動詞の特徴について論じた研究には，Ruwet (1993, 1994, 1995)，Arad (1999)，Croft (2012) などがあるが，ここでは Langacker (2009) の分析を見てみたい.

Langacker (2009) は，経験者が主語に置かれる *like* のような主語型の感情動詞

[6] 感情動詞の受動文での前置詞の選択については Martin (2002) が詳細に論じている.

の参与者間の意味関係を図 2 のように規定し, *please* のように経験者が目的語に置かれる目的語型の参与者間の意味関係を図 3 のように規定する (ibid. : 9)[7].

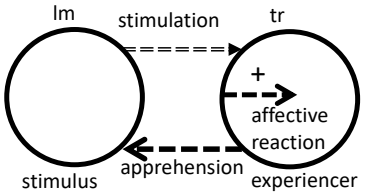


図 2　like の認知構造

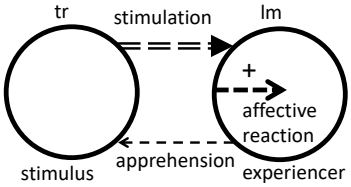


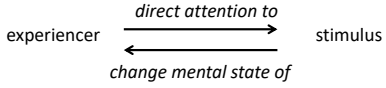
図 3　please の認知構造

Langancker によると，*like* と *please* は刺激 (stimulus) と経験者 (experiencer) という 2 つの参与者から特徴づけられ，刺激は何らかの方法で経験者に影響を与え，経験者はそれを知覚あるいは把握し，感情的反応 (affective reaction) を持つという. *like* のような動詞では，このような相互作用の中で経験者役割が焦点化されるため，経験者がトラジェクター (tr) となるのに対して，*please* では刺激が焦点化され，これがトラジェクターとなる. つまり *like* では経験者による刺激の知覚，把握がプロファイルされるのに対して，*please* では刺激が経験者に与える刺激がプロファイルされる. *like* と *please* は同じ作用関係によって特徴づけられるが，刺激から経験者に向かう作用と経験者から刺激に向かう作用のうちどちらの作用がより焦点化されるかによって，主語位置にプロファイルされる参与者が異なる. *please* に対して提案されている認知構造に注目してみると，経験者から原因 (刺激) へ向かうという作用は，物理的因果関係を表す行為動詞の認知構造には含まれない作用であり，目的語型感情動詞の参与者間の意味関係の特異性に関わる重要な側面であると言えるだろう.

しかし図 3 は，*like* との違いを説明するために提示された目的語型感情動詞の参与者間の意味関係を表した図であり，目的語型感情動詞がなぜ 2 つの受動文へ置き換え可能であるのか，そして，受動文の選択がどのようなメカニズムによるのかという問題に対して説明を与えるものではない. 加えて図 3 では，刺激から経験者に向かう作用が，行為動詞において主語にプロファイルされる参与

---

[7] Ruwet (1993, 1994, 1995) は志向性 (intentionnel) 概念 (cf. 第 3 章)，Arad (1999) は perception of stimulus という概念から，経験者による原因の知覚・認識を表す. Arad (1999) の議論は 5.4.1.節で触れる. Croft (2012) では direct attention to という概念が提案されており，主語型と目的語型の感情動詞を包括する意味構造を以下のような図によって表す (ibid. :233). この図は本文の図 2，3 を統合した図として捉えることができる.



者から目的語にプロファイルされる参与者に向かう作用とどのような点で異なるかについてははっきりとは論じられていない.

次節では，様態副詞句との共起関係に着目して行為動詞と目的語型感情動詞の違いについて論じた Voorst (1995) の考察を手かがりにして，目的語型感情動詞の主語から目的語に向かう作用の特性を探る.

5.3.2. Voorst (1995)：コントロールの不在

Voorst (1995) はコントロールの不在という点から，目的語型感情動詞の主語が目的語に及ぼす作用の特徴について論じる．コントロールが不在である他動的な事態とは，5.2.節で述べた，自発性の問題と表裏の関係にあると考えられる.

Voorst (1995) は，主語が及ぼす作用が目的語と結合 (cohésion 'cohesion') 関係にあるとき，主語は事態の展開をコントロールすることができるという．そして，主語が事態の展開に対して何らかのコントロールを持つとき，その展開を様態副詞句によって修飾することができると論じる．結合関係を持つ典型的な他動詞は，たとえば (16) のような行為動詞である．事態の展開 (ここでは状態変化) が様態副詞句 violemment によって修飾されている[8].

(16) L'armée a détruit violemment tout le village.
'The army destroyed violently whole the village.'
(Voorst 1995: 19, 訳は筆者による)

これに対して目的語型感情動詞では，主語が表す作用と目的語の間の結合が欠如しているので，主語が表す作用は目的語の心理状態へ影響を持つが，心理的過程の展開をコントロールすることはできないと分析される．その証拠として Voorst (1995) は，(17) のように，目的語型感情動詞は様態副詞句と共起させることができないことを挙げる.

(17) *La présence de Jean dans cette réunion a lentement humilié Babette.
'The presence of Jean in this meeting slowly humiliated Babette.'
(Voorst 1995: 21, 訳は筆者による)

以上の分析を踏まえて Voorst (1995) は，目的語型感情動詞の特徴を図 4 のよ

[8] Voorst (1995) では，lâchement 'coward (ly)'，méchamment 'viciously' という副詞句も様態副詞句の例として挙げているが，これらの副詞句は展開する事態の様態を修飾するというよりも，主語志向副詞の性質が強いと考えられるので，これらの副詞が含まれる例文は本文では引用していない.

うにまとめる．thème psychologique は主語に置かれる原因を表し，lieu psychologique は目的語に置かれる経験者に相当する．主語から目的語に及ぶ矢印は，主語が及ぼす作用を表す．作用と目的語の間にある schisme (乖離) が結合の欠如を表す．乖離があるために，経験者の中で展開する心理的状態の変化に対して主語は介入できないことが表されている[9].

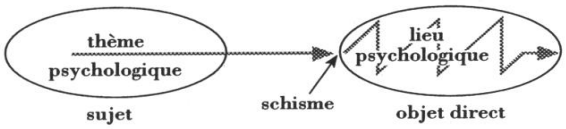


図 4　Voorst (1995 : 24)

tirailler, *dévorer*, *tanner* の行為動詞用法と目的語型感情動詞用法で，様態副詞句のテストをしてみると，(18) に示すように，行為動詞用法の例では様態副詞句による修飾が可能だが, (19) に示すように, 感情動詞用法では容認されない.

(18) a. Paul me tiraille vigoureusement par la manche.
‘Paul tugs me vigorously by the sleeve.’
b. Le lion dévore promptement la proie.
‘The lion devours the prey promptly.’
c. Paul tanne la peau soigneusement.
‘Paul tans the skin carefully.’

(19) a. *Ces nouvelles me tiraillent vigoureusement.
‘These news tugs[plague] me vigorously.’
b. *L’avenir de mon fils me dévore promptement.
‘The future of my son devours me promptly.’
c. *Ses paroles me tannent soigneusement.
‘His/her speeches tan[bore] me carefully.’

以上の分析を踏まえると，5.3.1.節において指摘した問題に対しては次のように答えを与えることができる. 行為動詞と目的語型感情動詞は, 主語の作用が目的語に何らの影響を与えることを表すという点において共通するが，行為動詞

[9] 乖離という用語は使用していないが，中村 (2003) でも，目的語型感情動詞の主語と目的語の間には直接的な関係がないと分析されている (ibid. :68)．この特徴を捉えるために，中村 (2003) は CAUSE という述語関数を規定する．この関数は，第 2 章で検討した，使役動詞全体に共通する述語関数ではなく，目的語型感情動詞特有の述語関数として規定されている．

が表す作用は目的語に直接及ぶのに対して，目的語型感情動詞の主語が及ぼす作用は目的語に直接及ぶものではないという相違点を持つ．

しかし図 4 によって捉えられる構造だけでは，目的語型感情動詞が 2 つの受動文を選択できる現象に関して説明を与えることができない．もし，目的語型感情動詞が形容詞的受動文のみ選択可能であるならば，受動化の問題において，目的語型感情動詞と行為動詞の共通点はなくなるので，行為動詞の参与者間の意味関係は結合関係があるのに対して，目的語型感情動詞の参与者間の意味関係は結合関係がないという違いが様態副詞句の問題だけではなく受動文の相違に対しても関与的であると説明を与えることができるかもしれない．しかし，目的語型感情動詞は，形容詞的受動文だけではなく，動的受動文にも置き換えることができ，この点において行為動詞と同じ特徴を持つ．したがって，目的語型感情動詞の受動化の問題を説明するためには，行為動詞との相違点と共通点を捉えることができる構造と受動文への置き換えメカニズムを検討する必要がある．次節では，図 3 と図 4 を統合させた認知図式から，以上の問題の解決を図る．

5.3.3. 2 つの作用から特徴づけられる参与者間の意味関係

目的語型感情動詞の参与者間の意味関係を図 5 のように表す[10]．図 5 は表出型の認知図式である．

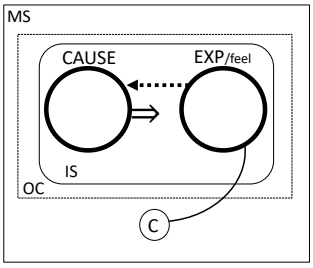


図 5 表出型の目的語型感情動詞の参与者間の意味関係

二重線矢印は，原因 (CAUSE) から感じる主体 (EXP/feel) に及ぶ作用を表す．この作用は感じる主体に直接的に及ばないので，矢印と EXP/feel の間には隔たりがある．この隔たりによってコントロールの欠如と，それと表裏関係にある自発性が捉えられる．破線矢印は感じる主体による原因の知覚・認識などの認知作用を表す．

[10] 日本語の使役文において感情述語が特異な振る舞いを示すことに注目して，原因と経験者の関係について論じた研究に定延 (2000) がある．定延 (2000) は，感情事象には何者にもコントロールすることができない過程があると仮定し，この関係は力の連鎖から参与者間の関係を記述するビリヤードボールモデルで捉えることはできないと述べ，「カビ生えモデル」という新たな記述モデルを提唱する．図 5 は定延 (2000) の考察からも着想を得ている．

2 つの受動文の選択には，次のようなメカニズムが働くと考えられる．目的語型感情動詞の参与者の意味関係は，2 つの作用に特徴づけられており，どちらの作用がより際立ちを持つかによって選択される受動文が決まる．1 つ目の作用は，主語にプロファイルされる参与者から目的語にプロファイルされる参与者へ及ぶ作用で，この作用は力の連鎖に類似するものである (二重線矢印)．概念化者がこの作用を際立つものとして捉えた場合，主語と目的語は力の連鎖のような関係を持つものとして概念化されるために，受動文では動的受動文の形を取る．ただし，主語から目的語に及ぶ作用は，力の連鎖として概念化されるわけではない．様態副詞句との共起関係で示されたように，そこには何者にもコントロールすることができない隔たりがあり，主語の作用が直接的に目的語に及ぶことはない．

目的語型感情動詞の参与者間の意味関係を特徴づけるもう 1 つの作用は，目的語から主語に向かう認知作用である．概念化者がこちらの作用を際立つものとして捉えると，受動化は力 (に類似する作用) を受ける経験者を前景化するという意味操作ではなく，知覚や認識といった経験者の認知的側面を際立たせる意味操作にシフトするため，行為者を背景化させる動的受動文ではなく，形容詞的受動文の形を取ると考えられる[11] [12]．

(20) は描写型 I の例である．(21) と (22) に示すように，描写型 I の目的語型感情動詞も形容詞的受動文が可能で，様態副詞句と共起させることができないことから，その参与者間の意味関係は図 5 と基本的に同じ構造を持つと考えられる．(20) の参与者間の意味関係の認知図式を図 6 にまとめる．

(20) a. Ces nouvelles m’ont tiraillé.
‘These news tugged[plagued] me.’
b. Ces nouvelles l’ont tiraillé.
‘These news tugged[plagued] him/her.’

(21) a. Je suis tiraillé {par / avec} ces nouvelles.

---

[11] ビリヤードボールモデルは通常，力の連鎖を表す二重線矢印が単独で使用されることはなく，力が発散される過程を表す一重線矢印とともに使用される．しかし一重線矢印は，力の伝達によって引き起こされる位置・状態変化を表し，これはアスペクトの特徴に関わるので，図 5 には含めていない．

[12] 力の連鎖によって捉えられる事象の意味記述において，力を表す矢印は基本的に被動作主 (に類する参与者含む) に達するものとして表示される．本論文では Voorst (1995) の議論を踏まえて，原因から伸びる矢印が経験者に届かないモデルを提案したが，このモデルの妥当性を示すためには，様態副詞句以外の現象説明にも適用可能かを検討する必要があるだろう．たとえば定延 (2000) は，力の連鎖の問題に関わる日本語の感情述語の使役構文の特異性について論じている (cf. 使役接辞-(s)ase)．このようにフランス語以外の心理動詞研究に目を向けることで，図 5 のモデルの精緻化を図ることができるだろう．この問題は今後の課題とする．

‘I am tugged[plagued] {by/with} these news.’

b. Il/elle est tiraillé(e) {par / avec} ces nouvelles.

‘He/she is tugged[plagued] {by/with} these news.’

(22) a. Ces nouvelles m’ont tiraillé vigoureusement.

‘These news tugged[plagued] me vigorously.’

b. Ces nouvelles l’ont tiraillé vigoureusement.

‘These news tugged[plagued] him/her vigorously.’

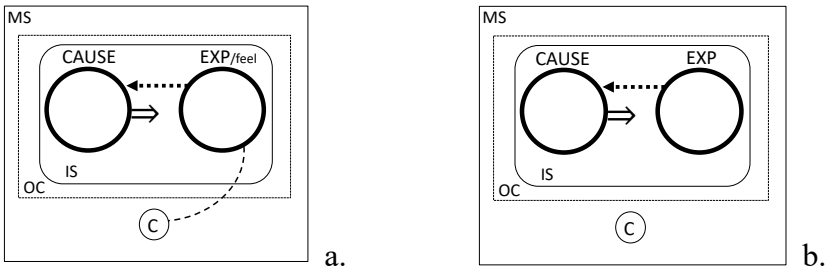


図 6　描写型 I の目的語型感情動詞の参与者間の意味関係

図 6a は経験者が 1 人称の (20a) の図で，図 6b は (20b) のように経験者が 3 人称の例の参与者間の意味関係を表す．点線は経験者と概念化者が同一指示関係にあることを表す.

5.4. アスペクトの考察

本節では，表出型と描写型 I の目的語型感情動詞のアスペクトについて論じる. 5.4.1.節では, 目的語型感情動詞と状態性の結びつきについて考察する. 5.4.2.節では，目的語型感情動詞には，状態性と結びつくタイプだけではなく，状態変化が焦点化されるタイプがあることを論じる．5.4.3.節では，アスペクトタイプの分化が表される感情事象の意味タイプと相関していることを明らかにする.

5.4.1. 状態変化による一時的状態性

第 4 章で明らかにしたように, 行為動詞 I は, cyclic または undirected activity, 行為動詞 II は，directed achievement，directed activity，incremental accomplishment を取ることができる．本節では，未完了時制 (現在形，半過去形)，完了時制 (複合過去) に置かれたときに観察されるアスペクト解釈の特徴と, 複合過去の文において, 所要時間副詞句や継続時間副詞句と共起できるかどうか, そして共起できる場合のアスペクト解釈に注目して，行為動詞 I と行為動詞 II が感情動詞に転用されたときに起こるアスペクトの変化を分析する．分析対象とする行為動詞 I タイプの動詞は *agiter* (to wabe)，*chatouiller* (to tickle)，*tirailler* (to tug)，行為

動詞 II タイプの動詞は *chiffonner* (to rumple), *crisper* (to tense), *dévorer* (to devour), *gonfler* (to inflate), *tanner* (to tan) とする．

未完了時制 (現在形，半過去形) の例から検討しよう．(23) は行為動詞 I からの転用例，(24) は行為動詞 II からの転用である[13].

(23) a. Les remords m'{agitent / agitaient}.
'The remorse {waves[troubles] /waved[troubled]} me.'
b. Cette nouvelle me {chatouille / chatouillait}.
'This new {tickles /tickled} me.'
c. Ces nouvelles me {tiraillent / tiraillaient}.
'These news {tug[plagues] /tugged[plagued]} me.'

(24) a. Cette histoire d'impôt me {chiffonne/chiffonnait}.
'This story of tax {rumples[bothers]/rumpled[bothered]}me.'
b. Son attitude me {crispe/crispait}.
'His/her behavior {tenses[irritates]/tensed[irritated]} me.'
c. Ah, ça me dévore de penser à l'avenir de mon fils.
'Oh, it devours me to think of the future of my son.'
d. Ah, ça me gonfle de penser à mes affaires !
'Oh, it inflates[bothers] me to think of my affairs!'
e. Ses paroles me {tannent/tannaient}.
'His/her speeches {tan[bore]/tanned[bored]} me.'

以上の例では主語が表す原因によって，目的語に置かれる経験者が一時的に特定の感情状態に置かれている／いたことを表すので transitory state である (図 7).

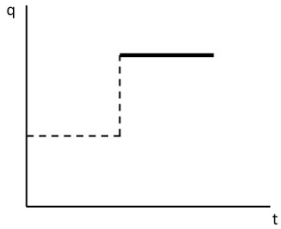


図 7　transitory state

ここで注目したい変化は，行為動詞 I からの転用例 (23) で観察される変化である．行為動詞 I は位置・状態変化を含意することはなく，未完了時制では行為の継続 (undirected activity) を表すが，行為動詞 I が目的語型感情動詞として使

[13] (24c)，(24d) のように ça を主語とする場合は，発話時の感情を表し，過去の感情を表しにくいので，現在形のみとする．

用される (23) では，目的語に置かれる経験者の感情状態は動詞の語彙意味によって指定されている．つまり目的語型感情動詞への転用によって，動詞は状態変化動詞へと変化し，(23) においてプロファイルされる状態解釈は状態変化の結果状態としての状態である．状態変化の結果状態を表す点において，第 4 章で検討した目的語型感覚動詞とは異なる．*tirailler* を例に見てみると，*tirailler* は目的語型感情動詞へ比喩的に拡張すると，「苦しめる」という動詞へ変化する．(23c) が表す一時的状態は，「苦しんでいる／苦しんでいた」という解釈を持つことから，*tirailler* の比喩的な語彙意味によって指定されていることが分かる．これに対して (25) に示す目的語型感覚動詞の例では，作用を受ける身体部分の状態変化は語彙意味によって指定されていない．動詞が表す比喩的意味は，食事が胃袋をひっぱりあげているかのような作用であり，状態変化は含意されていない．

(25) Le repas me {tiraille / tiraillait} l'estomac.
'The meal {tugs/was tugging} me_i at the $stomach_i$.'

状態変化動詞へ変化するということは，目的語型感情動詞は行為動詞 II と共通点を持つことを意味する．ところが，(24) に含まれる *chiffonner* (to rumple), *crisper* (to tense), *dévorer* (to devour), *gonfler* (to inflate), *tanner* (to tan) は，行為動詞 II として使用されるとき，未完了時制に置かれると，状態変化達成に向けた途中段階がクローズアップされる directed activity 解釈を持つのに対して，(24) において以上の動詞は transitory state 解釈を持つ．したがって行為動詞 II も，目的語型感情動詞へ転用されることでアスペクトが変化するということができる．

続いて，完了時制 (複合過去形) でのアスペクト解釈を検討する．行為動詞 I は，未完了時制では cyclic または undirected activity となる．行為動詞 II は，変化過程が捨象された変化側面がプロファイルされる directed achievement となる．(26) は行為動詞 1 からの転用，(27) は行為動詞 II からの転用の例である．

(26) a. Cette nouvelle m'a agité.
'This new waved[troubled] me.'
b. Cette nouvelle m'a chatouillé.
'This news tickled me.'
c. Ces nouvelles m'ont tiraillé.
'These news tugged[plagued] me.'

(27) a. Cette histoire d'impôt m'a chiffonné.
'This story of tax rumpled[bothered] me.'
b. Son attitude m'a crispé.

‘His/her behavior tensed[irritated] me.’
c. Ça m’a dévoré de penser à l’avenir de mon fils.
‘It devoured me to think to the future of my son.’
d. Ça m’a gonflé de penser à mes affaires !
‘It inflated[bothered] me to think to my affairs!’
e. Ses paroles m’ont tanné.
‘His/her speeches tanned[bored] me.’

(26) では，「動揺した (26a)」，「苦しんだ (26c)」，「困った (27a)」などの解釈を持つことから分かるように，経験者の状態変化が含意される．では，これらの文に含まれる目的語型感情動詞のアスペクトは，同じく状態変化が含意される行為動詞 II の完了時制と同じアスペクトタイプ (directed achievement) だろうか．*gonfler*，*tanner* を例にして，これらが行為動詞 II として使用されるときに，完了時制に置かれた場合の解釈を確認しておく．以下の例では，風船が膨らんだこと，皮がなめされたことを表しており，解釈上焦点化されるのは状態変化の側面である．

(28) a. Paul a gonflé le ballon.
‘Paul inflated the balloon.’
b. Paul a tanné la peau.
‘Paul tanned the hide.’

ここで，目的語型感情動詞のアスペクト解釈について論じた Arad (1999) の分析に目を向けてみたい．Arad (1999) は，*frighten* が過去形に置かれる例を対象にして目的語型感情動詞には 2 つのアスペクト解釈があると論じ，その特徴を次のように分析する．ObjExp verb とは本論文の目的語型感情動詞に相当する．

(29) In this section I show that ObjExp verbs such as *frighten* can have either an agentive or a stative reading. The two readings differ as for whether there exists an agent, who aims to bring about a mental state, and whether there is a change of state in the experiencer. The agentive reading has both an intentional agent and change of state in the experiencer:

(2) Nina frightened Laura deliberately.

ObjExp verbs can also have a stative reading. This reading has neither an agent nor a change of state in the object. It involves a perception of a stimulus (the subject) by the experiencer (the object). This perception triggers a mental

state in the experiencer:

(3) John / John's behavior / nuclear war frightened Nina.

(Arad 1999 : 3)

Arad (1999) が動作主解釈 (agentive reading) として分析する例 (29-2)は，筆者が描写型 II と見なす現象である．この現象については 5.5.節で詳しく論じる．ここで注目したいのは，主語が非行為者として解釈される過去形の例 (29-3) に関する Arad (1999) の分析である．Arad (1999) によると，(29-3) は状態変化がなく (no change of state)，経験者が刺激 (stimulus) を知覚し，そのことによって経験者の中に心理状態が引き起こされる (triggers a mental state) 解釈を持つという．つまり非行為者主語では，過去形において状態解釈を持つと Arad (1999) は分析している．

ところで，状態変化はないが状態が引き起こされるという Arad の分析は，一見すると矛盾するように思われるかもしれない．しかしフレームとプロファイルという概念を導入すると，(29-3) のような非行為者主語の感情動詞の過去形では，状態変化側面が背景化 (フレーム化) され，結果状態側面が前景化 (プロファイル) されるため，transitory state 解釈を持つと考えると，Arad (1999) の分析に矛盾はないと言うことができる．

話題を戻そう．フランス語の目的語型感情動詞でも，完了時制において状態解釈を持つかどうかを調べるために，複合過去形に置かれた目的語型感情が状態変化解釈と状態解釈のどちらになるかどうかをインフォーマントに調査してみた．すると，Arad (1999) が分析するように状態解釈になるという明確な結果を得ることはできなかったが，優先度という点から見ると (26)，(27) の例では，変化解釈よりも状態解釈が優位になることが分かった．以上の観察を踏まえ，(26)，(27) では directed achievement よりも transitory state が優先される特徴を持つと言うことができるだろう (図 10)．不等号「<」は directed achievement よりも transitory state が優先されることを表す[14]．

[14] Arad (1999) では状態変化は有るか無いかの二分法的なものとして捉えられている．しかしこのような捉え方はやや強すぎると本論では考える．(26)，(27) を対象にした調査から，結果状態がプロファイルされる解釈が優勢になると言うことはできても，状態変化解釈がないと言い切ることはできないことが分かった．フレームという概念から変化側面が背景化されていると考えると，以上の問題を回収することができるだろう．

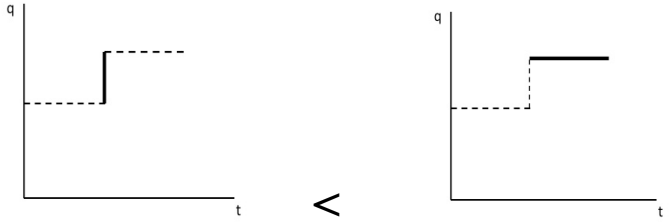


図 8　(26, 27) の優位なアスペクト解釈

未完了時制および完了時制で観察されるアスペクト解釈から，*agiter*，*chatouiller*，*tirailler*，*chiffonner*, *crisper*, *dévorer*, *gonfler*, *tanner* が目的語型感情動詞として機能するとき，状態性と結びつくということができる．このことは，継続時間副詞句との共起関係からも確認することができる. 行為動詞 I は継続時間副詞句を伴う文と共起すると，undirected activity を取る．ところが，目的語型感情動詞の例では解釈が変化する．(30a) では経験者が一時的に動揺していたことが表されており，transitory state を取る．行為動詞 II は継続時間副詞句を伴う複合過去形の文と共起できないが，目的語型感情動詞に転用されると，(30b) から分かるように，この副詞句と共起できるようになる[15]．そしてここでも，経験者が一時的に感情状態に置かれていたことを表すので，アスペクトタイプは transitory state になると考えられる (図 7).

(30)　a. Cette nouvelle m’a agité toute la journée.
‘This news waved[troubled] me all day.’
b. Cette histoire d’impôt m’a chiffonné pendant les vacances.
‘This story of tax rumpled[bothered] me during the vacation.’

最後に，所要時間副詞句との共起関係を見てみよう．行為動詞 I はこの副詞句と共起できないが, 行為動詞 II は共起でき, その場合, incremental accomplishment となる．ところが以下の例から，行為動詞 I，II が目的語型感情動詞として使用されるとき，いずれも所要時間副詞句と共起できないことが分かる．

(31)　a. *Cette nouvelle m’a agité en une heure.
‘This new waved[troubled] me in one hour.’
b. *Cette histoire d’impôt m’a chiffonné en une heure.
‘This story of tax rumpled[bothered] me in one hour.’

[15] 行為動詞 II タイプに含まれる行為動詞には *emprisonner* のように継続時間副詞句と共起可能な動詞もある．しかし特定の構文内で動詞が持つアスペクトの点からみると，*emprisonner* タイプの行為動詞と目的語型感情動詞のアスペクトタイプは同じではない (cf.第 2 章，2.3.1.節)

所要時間副詞句を伴う複合過去形の文では，位置・状態変化が完了するまでの過程がプロファイルされる達成アスペクトとなる．したがって以上の結果から，*agiter*，*chiffonner* が目的語型感情動詞として機能するとき，incremental accomplishment とはならないと言うことができる．

まとめると，行為動詞 I に含まれる *agiter*，*chatouiller*，*tirailler*，行為動詞 II に含まれる *chiffonner*, *crisper*, *dévorer*, *gonfler*, *tanner* が目的語型感情動詞に転用されると，アスペクトタイプは以下のように変化する．図 9 は行為動詞 I のアスペクト変化，図 10 は行為動詞 II のアスペクト変化を表す[16]．

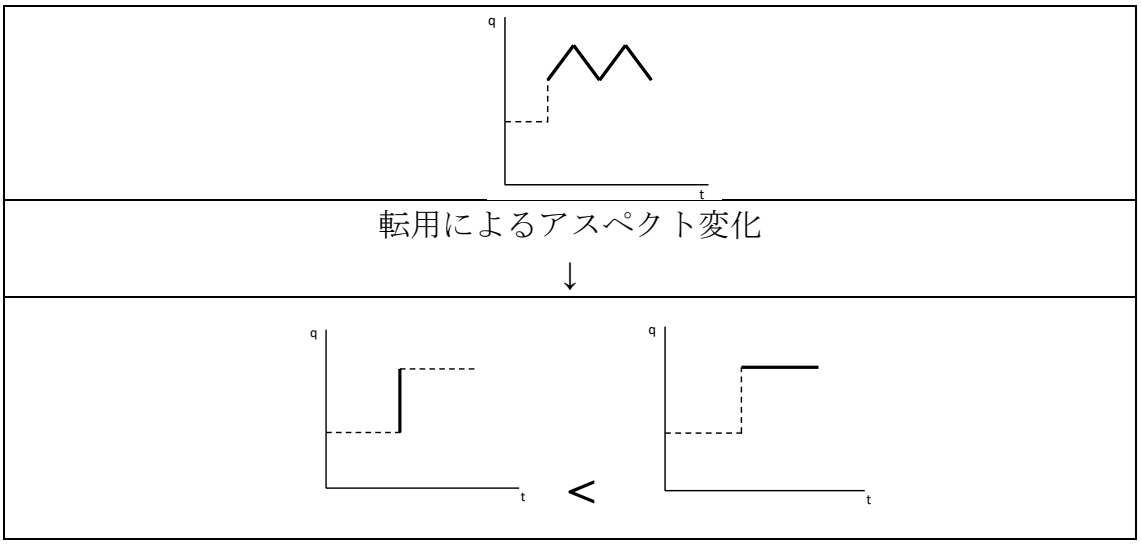


図 9　行為動詞 I から感情動詞への転用によるアスペクト変化

[16] 行為動詞 I に含まれる動詞は undirected activity 以外に cyclic を取ることができる動詞もあるが，本節で検討した *agiter*，*chatouiller*，*tirailler* はいずれも undirected activity のみ取るので，図 9 では，転用前のアスペクトタイプとして undirected activity のみ提示する．

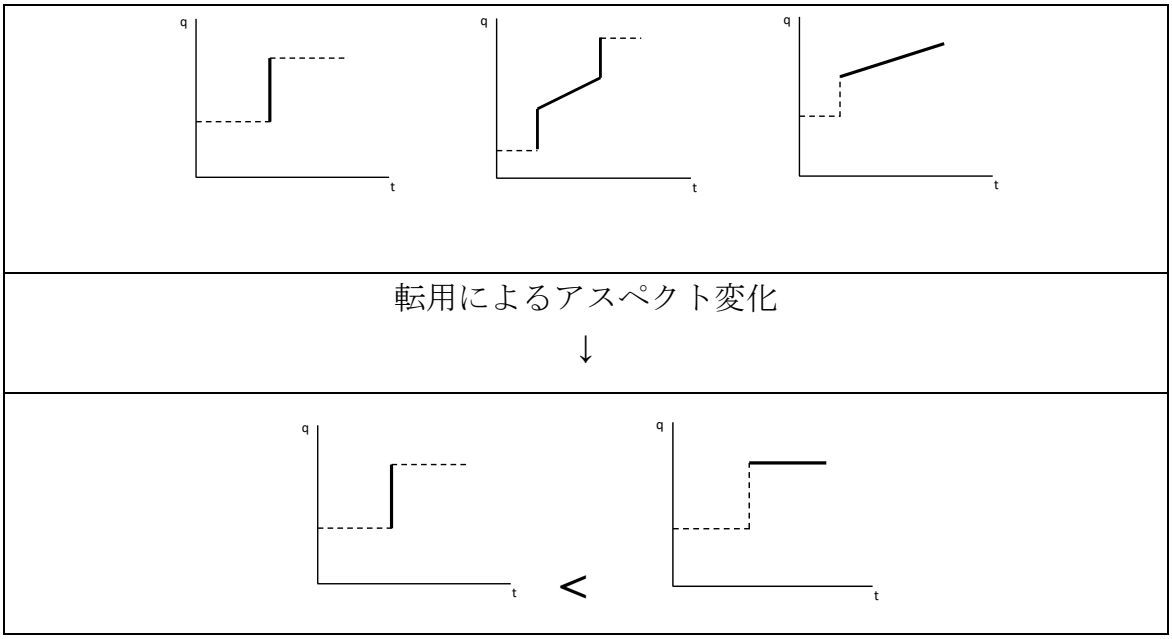


図 10　行為動詞 II から感情動詞への転用によるアスペクト変化

第 1 章で述べたように，目的語型感情動詞が状態性と結びつくことは先行研究でも示されてきたことである．しかし本節の分析から，目的語型感情動詞はいかなる構文環境においても，状態解釈を持つという補足を加えることができる．また，目的語型感情動詞は，状態変化を含意する点において行為動詞 II と共通点を持つが，行為動詞 II は directed activity，incremental accomplishment を取ることによって位置・状態が達成されるまでの過程をクローズアップして捉えることができるのに対して，目的語型感情動詞ではこのような微視的な状態変化の把握を許さず，その変化は発生として捉えられる．この特徴には経験的な裏付けもある (cf. Langacker 1987, Lakoff & Johnson 1980)．我々が「動揺させる (agiter)」，「イライラさせる (gonfler)」，「困らせる (chiffonner)」という感情を抱くとき，「りんごを半分食べた」という事態とは異なり，「*半分動揺させられる」とは言えないことから分かるように，感情を抱くということは，0 か 1 かのデジタル的な性質を持つ[17]．加えて「動揺させる (agiter)」，「イライラさせる (gonfler)」，「困らせる (chiffonner)」という感情を感じるとき，その感情は一瞬で消えるもので

[17] 「デジタル的性質」はドイツ語の知覚動詞について論じた高橋 (2008) の分析から着想を得たものである．高橋 (2008) は，到達動詞に含まれてきた知覚・認識動詞が，到達動詞に含まれてきたその他の動詞 (*mourir* ‘to die’，*gagner* ‘to win’，*arriver* ‘to arrive’など) と異なる振る舞いを示すことに注目して次のように論じる．「(認識・知覚は) いわばデジタル的なもので段階性を一切有しない．(…) 本来的にデジタルな性質を持つ状態の発生は時間軸に沿った『変化』として見立てることにより，その唐突な『変化』があたかも瞬間的であるかのように立ち現れてくるのである．(…) 他方 (…) これらの動詞 (*mourir*, *gagner*, *arriver*) が表す変化はいわばアナログであり，時間幅がどれだけ短いものであろうと，その変化はあくまで時間の推移に沿って展開するものだと見なすことができる」(高橋 2008 : 39，括弧内の補足は筆者による)．

はなく, ある程度継続する心理状態として経験される. *agiter*, *chatouiller*, *tirailler*, *chiffonner*, *crisper*, *dévorer*, *gonfler*, *tanner* などが感情事象を表すとき，デジタル的な状態変化を表し，変化結果としての一時的状態性がプロファイルされる特殊なアスペクトを持つ基盤には以上のような身体的経験があると考えられる.

5.4.2. 状態焦点型と状態変化焦点型

目的語型感情動詞の中には，状態性ではなく状態変化の側面がプロファイルされやすいタイプがあると考えられる. 本節では, 語彙型の目的語型感情動詞も合わせて，目的語型感情動詞には 2 つのアスペクトタイプがあることを明らかにする.

まず, 完了時制 (複合過去形) に置かれる (32), (33) の解釈を見てみよう. (32) は転用型，(33) は語彙型の例である.

(32) a. Cet échec l'a brisée.
'This failure broke her.'
b. Cette nouvelle l'a foudroyée.
'This news struck her down.'
c. Cette nouvelle nous a sonnés.
'This news rung[stunned] us.'
d. Cette nouvelle l'a frappée.
'This news struck her.'

(33) a. Cette nouvelle l'a atterrée.
'This news shocked her.'
b. Sa conduite l'a estomaquée.
'His behavior astounded her.'
c. Cette nouvelle l'a choquée.
'This news shocked her.'
d. Cette nouvelle l'a épatée.
'This news amazed her.'

これらの例も, 前節で検討した目的語型感情動詞の未完了時制の例 (26), (27) と同じように，経験者の心理状態の変化が含意される．ところが，(26)，(27) に対して行った調査を (32)，(33) に対しても行い，状態変化と結果状態のどちらが優先されるかを調べてみると，(32)，(33) では状態変化の側面が焦点化される解釈のほうが優先される傾向にあることが分かった．ここから，(32)，(33) に含まれる目的語型感情動詞は，transitory state ではなく，directed achievement が優先さ

れるということができる．

さらに，(32)，(33) で使われている動詞は継続時間副詞句と共起しにくいという特徴を持つ．

(34) a. ?? Cet échec l'a brisée toute la journée.
'This failure broke her all day.'
b. ?? Cette nouvelle l'a foudroyée toute la journée.
'This news struck her down all day.'
c. ?? Cette nouvelle nous a sonnés toute la journée.
'This news rung[stunned] us all day.'
d. ?? Cette nouvelle l'a frappée toute la journée.
'This news struck her all day.'
e. ?? Cette nouvelle l'a atterrée toute la journée.
'This news shocked her all day.'
f. ?? Sa conduite l'a estomaquée toute la journée.
'His behavior astounded her all day.'
g. ?? Cette nouvelle l'a choquée toute la journée.
'This news shocked her all day.'
h. ?? Cette nouvelle l'a épatée toute la journée.
'This news amazed her all day.'

継続時間副詞句と共起する動詞のアスペクトタイプは，状態アスペクトか活動アスペクトのいずれかである．表出型と描写型 I の目的語型感情動詞では，主語が行為者ではないために，活動アスペクトになることなく，継続時間副詞句と共起する場合，アスペクトは状態アスペクトを取る．(34) に含まれる目的語型感情動詞が継続時間副詞句と共起しにくいという特徴は，これらの動詞が状態性と馴染みくいことを示す証拠として考えることができる．

状態性との親和性の低さを示すもう 1 つの根拠は未完了時制との相性の悪さである．(32)，(33) に挙げた動詞のうち，*atterrer* (to shock), *estomaquer* (to astound), *briser* (to break)，*foudroyer* (to strike down)，*sonner* (to ring) は，半過去形に置きにくい (現在形については次節で論じる)．

(35) a. ?? Cette nouvelle l'atterrait.
'This news shocked him/her.'
b. ? Sa conduite l'estomaquait.
'His behavior astounded him/her.'

c. ?? Cet échec le brisait.
'This failure broke him.'
d. ? Cette nouvelle le foudroyait.
'This news struck him down.'
e. ?? Cette nouvelle nous sonnait.
'This news rung[stunned] us.'

これら以外の動詞では，半過去形に置きにくいということはないが，実例を見てみると選択される時制に一定の傾向がある．(32)，(33) に挙げた動詞と同じ振る舞いをする，*étonner* (to surprise)，*blesser* (to hurt)，*surprendre* (to catch) を含めて，筆者が収集した *choquer*，*épater*，*frapper*，*étonner*，*blesser* が含まれる実例の時制に注目してみると，すべて完了時制 (複合過去形) に置かれていた．(38a) 以外は下線部のみ英訳する．

(36) a. Quand je lui ai dit que la mode était passée, ça l'a choqué.
'When I told him that the mode had passed, it shocked him.'
(*Quelques nouvelles d'un mode sans étoiles*)
b. J'ai ajouté : « A ton avis, elle garde encore un reste de conscience ? » -Non, certainement pas. Clair est nette, <u>sa réponse m'a étonné</u>. (*Dur, dur*)
'His response surprised me.'
c. Le môme, là, <u>il m'a épaté</u>. C'est pas Pierre qui m'aurait dit au revoir Monsieur, ravi de vous revoir, comme ça, hein ?
'He amazed me.'
(*Le temps des cerises : récit d'une vie écrite à l'encre des souvenirs*)
d. C'est seulement quand il m'a déclaré : « Maintenant tu es un vrai copain » que <u>cela m'a frappé</u>. (L'*Étranger*)
'This struck me.'
e. Comme nous échangions ces mots dans la voiture bien chauffée, soudain <u>une chose m'a frappée</u>. Une fois de plus, je venais de vivre des instants heureux.
'One thing struck me.' (*Dur, dur*)
f. Bon d'accord, ça a l'air plein de bon sens quand on y réfléchit, mais n'empêche, <u>tu crois que ça ne m'a pas blessée</u> ? (*Trembler te va si bien*)
'You believe that this didn't hurt me?'
g. <u>La guerre m'a surprise</u> à Beyrouth en ce mois de juillet 2006. Mon monde se réduit à un ordinateur, seule fenêtre qui me lie aux autres, sous la menace d'une coupure de courant. (*La guerre m'a surprise à Beyrouth*)

‘The war surprised me.’

これに対して，前節で検討した状態性と親和性を持つと考えられる *agiter* や *chiffonner* と同じ振る舞いをする目的語型感情動詞 (語彙型を含む) が含まれる実例を観察してみると，複合過去形ではなく半過去形に置かれる例が多く観察された.

(37) a. Il y avait quelque chose qui me gênait concernant Kurumi, mais…
‘There were something which blocked[troubled] me.’
(*Trembler te va si bien*)
b. On aurait dit qu’elle (=sa silhouette) allait se volatiliser. La voir ainsi m’inquiétait, me faisait peur. (*Dur, dur*)
‘To see it (=the silhouette) like that, worried me, frightened me.’
c. Dans tous les cas, le fait que quelqu’un puisse l’écouter jouer du piano l’angoissait, le terrifiait et le plongeait dans la confusion.
‘The fact that someone could listen to him play the piano worried, terrified him.’
(*Les tendres plaintes*)
d. Allait-il revenir ? La question m’oppressait.
‘The question oppressed me.’ (*La cravate*)

完了性の点から時制と動詞のアスペクトの関係を考えると，未完了時制では未完了アスペクト, 完了時制では完了アスペクトが選択される. 前節で検討した目的語型感情動詞と同じ振る舞いをする動詞の多くが未完了時制に置かれるということは，これらの動詞が状態アスペクトと結びつくことのもう 1 つの証左であると言えよう．反対に，(32)，(33) に含まれる目的語型感情動詞 (及び同じ振る舞いを持つ感情動詞) の多くが完了時制に置かれるということは, これらの動詞が未完了アスペクトよりも完了アスペクトと相性がよいことを示している.

ところで完了アスペクトには，directed achievement だけではなく，accomplishment も含まれる．(32)，(33) に含まれる目的語型感情動詞は，accomplishment を取ることはできるのだろうか. これは所要時間副詞句との共起関係から確かめることができる.

(38) a. *Cette nouvelle l’a frappé en dix minutes.
‘This news struck him in ten minutes.’
b. *Ces histoires l’ont vraiment sonné en dix minutes.
‘These stories really rung[stunned] him in ten minutes.’

(39) a. *Cette nouvelle l'a atterrée en dix minutes.
'This news shocked her in ten minutes.'
b. *Sa conduite l'a estomaquée en dix minutes.
'His behavior astounded her in ten minutes.'

(38)，(39) の結果から，(32)，(33) に含まれる目的語型感情動詞 (及び同じ振る舞いを示す動詞) は，incremental accomplishment を取ることができないことが分かる．

以上の分析から，目的語型感情動詞はすべて一時的状態性が優先されるのではなく，状態変化のプロファイルを好む動詞もあると結論づけることができる．状態性が優先されるタイプを状態焦点型，状態変化が優先されるタイプを状態変化焦点型と呼ぶことにする．

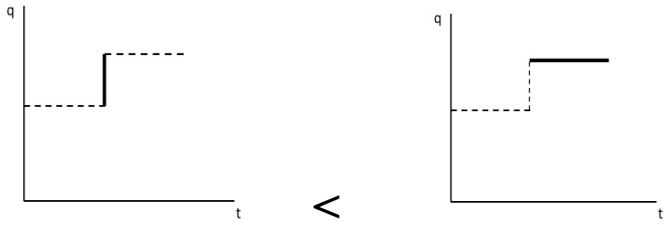


図 11　状態焦点型

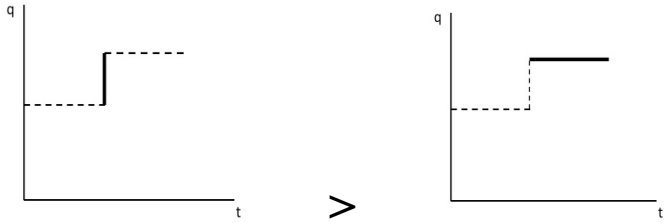


図 12　状態変化焦点型

図 11 は状態焦点型のアスペクトの特徴，図 12 は状態変化焦点型のアスペクトの特徴を表す．不等号はアスペクトタイプの優先度の違いを表す[18].

[18] 感情動詞によって優先されるアスペクト解釈が異なることは Arad (1999) でも示唆されている．'…while √frighten can be interpreted as both stative or non-stative, √surprise almost forces a non-stative interpretation. The verb *surprise* is very hard to construct as stative, in which the object experiences a feeling of surprise as long as the stimulus is present. Other verbs, such as *worry* or *concern*, tend to force a stative interpretation. They are more readily interpreted as having a "spell" of worry or concern than undergoing change of state from "unconcerned" to "concerned"(ibid.: 17)'．以上の記述は大変示唆に富むものであるが，根拠となる現象が提示されていないため仮説に留まるものとなっている．なお，non-stative とは本論の状態変化焦点型解釈に相当する．また引用文中の「√」は語彙情報として備わる特性を指す．このような語彙素が仮定されていることから，Arad (1999) ではアスペクトの問題は動詞の語彙情報に還元されるものとして見なされていることが窺える．

5.4.3. アスペクトタイプと感情事象の意味タイプ

本節では，状態焦点型の特性を持つ動詞と状態変化焦点型の特性を持つ動詞が表す感情事象の意味タイプに注目し，アスペクトタイプと感情事象の意味タイプの間の関係について考察を行う．

まず，転用型と語彙型の目的語型感情動詞を対象にして，状態焦点型と状態変化焦点型のどちらの特性を持つかを検討した．判断基準は以下の通りである．

(40) 状態焦点型の判断基準
- a. 複合過去形の解釈：状態が可能または優位
- b. 複合過去形における形との共起：可能
- c. 未完了時制での使用：可能

(41) 状態変化焦点型の判断基準
- a. 複合過去形の解釈：状態変化が優位
- b. 複合過去形における継続時間副詞句との共起：不可または低容認度
- c. 未完了時制での使用：不可，または共起可能でも完了時制が優位

状態焦点型と状態変化焦点型に含まれる動詞は，それぞれ表 1 および表 2 に示す通りであった[19] [20]．

---

[19] 分析は，第 1 章で取り上げた 233 の動詞を対象に行った．分析対象とした動詞の中には，複合過去形では状態解釈が優先されるが，継続時間副詞句を伴う複合過去形の文とは共起できない動詞や，複合過去形で状態変化解釈が優位になるが継続時間副詞句を伴う複合過去形の文と共起できる動詞もあった．これらの動詞は基準 (40)，(41) に照らし合わせると，状態焦点型，状態変化焦点型のどちらにも分類できない中間的なタイプと言える．表 1，2 では中間的なタイプは除外されている．表 1 には 153 の動詞が挙げられているので，分析対象とした動詞のうち 80 個 (約 30%) の動詞が中間的なタイプとなる．

[20] 表 1，2 の転用型には，転用前の用法が行為動詞 I，II には分類できない動詞も含まれる．例えば *travailler* (to work)，*appâter* (to lure)は，「勉強する」，「餌でおびき寄せる」という事象を表し，事物への接触・打撃や対象の物理的な位置・状態変化を表す行為動詞 I，行為動詞 II とは異なる事象を表す．このように (転用前の用法において) 行為動詞 I，II とは表される事象の意味タイプが異なる動詞は，行為動詞 I，行為動詞 II とは異なるイベント構造を持つ可能性がある．行為動詞 I，行為動詞 II に分類されない動詞の転用前のイベント構造と，目的語型感情動詞への転用によって起こるイベント構造の変化については今後の検討課題とする．

語彙型 (30)	転用型 (49)
agacer, amuser, angoisser, apeurer, barber, captiver, chagriner, décourager, démoraliser, divertir, effrayer, embêter, emmerder, enchanter, ennuyer, exaspérer, exciter, fâcher, fasciner, importuner, impressionner, inquiéter, passionner, préoccuper, tarabuster, terrifier, terroriser, tracasser, tranquilliser, turlupiner	adoucir, agiter, anéantir, apaiser, assombrir, bassiner, bercer, calmer, chatouiller, chiffonner, contrarier, crisper, déprimer, dérider, déranger, déséquilibrer, désorganiser, désorienter, dévorer, distraire, embarrasser, embrouiller, empoisonner, endormir, énerver, étouffer, étourdir, excéder, fatiguer, gêner, gonfler, incommoder, intriguer, irriter, oppresser, perturber, pomper, raser, ravager, remonter, retourner, tanner, tenailler, tenter, tirailler, torturer, tourmenter, travailler, troubler

表 1 状態焦点型の動詞リスト

完了時制が優位な動詞 (49)		未完了時制では使いにくい動詞 (25)	
語彙型	転用型	語彙型	転用型
affoler, ahurir, allécher, choquer, consterner, dépiter, épater, étonner, horrifier, méduser, offenser, offusquer, rebuter, révolter, scandaliser, sidérer, stupéfier, vexer	abasourdir, abrutir, appâter, attirer, aveugler, blesser, bouleverser, déchirer, démonter, dérouter, désarçonner, désarmer, éblouir, écraser, emballer, enflammer, enivrer, entortiller, flatter, frapper, froisser, glacer, hérisser, heurter, provoquer, regonfler, renverser,, saisir, scier, suffoquer, surprendre	atterrer, brimer, éberluer, effarer, époustoufler, estomaquer, hébéter, interloquer, ulcérer	alarmer, briser, conquérir, décomposer, démolir, dépayser, doucher, figer, foudroyer, outrer, piquer, poignarder, refroidir, sonner, souffler, subjuguer

表 2　状態変化焦点型の動詞リスト

次に，状態焦点型と状態変化焦点型に含まれる目的語型感情動詞が表す事象の特徴を分析する. 前節で取り上げた状態変化焦点型の *frapper*, *blesser*, *sonner*, *atterrer*, *estomaquer*, *épater* は，精神的衝撃や驚きを与えること，心理的に傷つけることを表す．表 1 および表 2 に列挙した動詞のうち，驚き・衝撃，傷心といった意味を表す動詞を調べてみると，(42)，(43) に示すように，状態焦点型ではわずか 2 例であったのに対して，状態変化焦点型では実に半数以上にのぼることが分かった. ここから，これらの意味を表す動詞が状態変化焦点型に集中しているのは偶然ではないと考えることができる.

(42) 状態焦点型 (2 例)

a. 驚き・衝撃：impressionner (to impress), retourner (to turn[to shake])

b. 傷心：0

(43) 状態変化焦点型 (46 例)

a. 驚き・衝撃：ahurir (to stun), choquer (to shock), consterner (to consternate), épater (to amaze), étonner (surprise), horrifier (to horrify), méduser (to dumbfound), offusquer (to shock), révolter (to revolt), scandaliser (to outrage), sidérer (to astonish), stupéfier (to astonish), abasourdir (to deafen), abrutir (to stupefy), frapper (to strike), glacer (to freez[to transfix]), heurter (to strike), renverser (to knock over[to astound]), saisir (to catch[to strike]), scier (to swa[to astonish]), suffoquer (to choke), atterrer (to shock), éberluer (to dumbfound), effarer (to alarm), époustoufler (to amaze), estomaquer (to astound), hébéter (to surprise), interloquer (to stun), doucher (to shower[to surprise, to shock]), figer (to congeal[to surprise]), foudroyer (to strike down), outrer (to exaggerate[to shock]), sonner (to ring[to stun]), souffler (to blow up[to stagger])

b.傷心：offenser (to offend), vexer (to upset), blesser (to hurt), bouleverser (to to turn upside down[to hurt]), déchirer (to tear[to hurt]), écraser (to crush), froisser (to crease[to hurt]), brimer (to hurt), ulcérer (to hurt), briser (to break), démolir (to shatter), poignarder (to stab)

続いて，5.3.1.節で取り上げた状態焦点型の動詞が表す事象の特徴に注目してみると，*tirailler*, *chiffonner*, *crisper*, *dévorer*, *gonfler*, *tanner*, *embêter*, *ennuyer*, *angoisser*, *inquiéter*, *préoccuper* では，苦しめること，困惑させること，不安やイライラ与えること，心配させることを表す．表 1 および表 2 に列挙した動詞のうち，苦しめること，困惑させること，不安を与えること，イライラさせるといった意味を表す動詞を調べてみと，(44)，(45) に示すように，状態変化焦点型

ではわずか 2 例であったのに対して，状態焦点型では 36 例にも及んだ．以上の結果から，これらの意味を表す動詞が状態焦点型に多く観察されることも偶然ではなく，アスペクトタイプと表される感情事象の意味タイプは緩やかな相関関係にあると言うことができる．

(44) 状態焦点型 (36 例)
agacer (to annoy), angoisser (to worry), barber (to bore), chagriner (to grieve), emmerder (to annoy), énerver (to irritate), ennuyer (to bore), importuner (to bother), inquiéter (to worry), préoccuper (to worry), tarabuster (to bother), tracasser (to bother), turlupiner (to bother), agiter (to wave[to trouble]), chiffonner (to rumple[to bother]), contrarier (to impede[to annoy]), crisper (tense[irritate]), déranger (to mix up[to bother]), dévorer (to devour), embarrasser (to obstruck[to embarass]), empoisonner (to poison[to bother]), endormir (to send to sleep[to bore]), étouffer (to smother[to embarrass]), fatiguer (to tire[to annoy]), gêner (to block[to bother]), gonfler (to inflate[to bother]), incommoder (to make someone feel unconfortable[to bother]), oppresser (to oppress), perturber (to perturb), raser (to shave[to bore]), tanner (to tan[bore]), tirailler (to tug[to plague]), torturer (to torture), tourmenter (to torment), travailler (to wark[to worry]), troubler (to blur[to trouble])

(45) 状態変化焦点型 (2 例)
entortiller (to twist[to embarrass]), alarmer (to worry)

ところで，5.4.2.節では，状態変化焦点型が半過去形に置きにくいことから，状態変化焦点型は未完了時制とは馴染みにくいことを論じたが，未完了時制には現在形も含まれる．状態変化焦点型が未完了時制と馴染みにくいということは，現在形の表出型をとりにくいことが予想されるが，予測の通り，状態変化焦点型には表出型をとりにくい動詞が多く存在する．(46) は「驚き」を表す動詞，(47) は「傷心」，「衝撃」を表す動詞を表出型においた例で，すべて容認度が低い．(46a) と (46b) には，「驚き」の表出ではなく，「まさか」という疑いを表現する場合では容認される[21]．「#」は「驚き」の表出として解釈されないことを表す．

(46) a. # Ah, ça m’étonne !
‘Oh, it surprises me!’

[21]「驚き」を表す動詞すべてが表出型を取ることができないわけではない．*épater*, *sidérer*, *scier*, *souffler* は表出型に置くことができる．

b. ?? Ah, ça m’époustoufle !
‘Oh, it amazes me!’
c. ?? Ah, ça m’estomaque !
‘Oh, it surprises me!’
d. ?? Ah, ça me stupéfie !
‘Oh, it astonishes me!’
e. ?? Ah, ça me frappe !
‘Oh, it strikes me!’
f. ?? Ah, ça me renverse !
‘Oh, it knocks over[astounds] me!’
g. * Ah, ça me saisit !
‘Oh, it catches[strikes] me!’
h. # Ah, ça me surprend !
‘Oh, it catches[surprises] me!’

(47) a. ?? Ah, ça m’ulcère !
‘Oh, it sickens me!’
b. ?? Ah, ça m’atterre !
‘Oh, it shocks me!’
c. ?? Ah, ça me blesse !
‘Oh, it hruts me!’
d. ?? Ah, ça me foudroie !
‘Oh, it strikes down me!’
e. ?? Ah, ça me froisse !
‘Oh, it creases[hurts] me!’
f. ?? Ah, ça me heurte !
‘Oh, strikes me!’

第 3 章で論じたように，心理事象は〈いま・ここ〉において成立する事象である．とすると，(46)，(47) のように，「驚き」や「傷心」，「衝撃」を表す目的語型感情動詞が表出型を取りにくいという事実は，「驚き」や「傷心」，「衝撃」は，〈いま・ここ〉に位置づけられない事象であることを意味するのだろうか．おそらくそうではない．状態変化焦点型は，変化側面がプロファイルされる解釈を持つが，所要時間副詞句との共起関係で示されたように (cf. 例 (38)，(39))，変化の過程をクローズアップして捉える微視的把握を許さない特徴を持つ．つまり

その変化はデジタル的な性質を持つ[22]．経験的に見ても，驚きや，衝撃などの感情事象は，一瞬で起こる感情状態の崩壊として感じとられるものである．概念化の観点からみると，瞬間的な出来事とは究極の〈いま・ここ〉であり，もっとも概念化を拒むものである．「驚き」，「衝撃」などの感情は点としての〈いま・ここ〉で経験されるので，そのような事象を概念化し，言語化しようとすると，概念化を行う段階ではすでに過去の出来事として位置づけられることになる．点としての〈いま・ここ〉で起こる「驚き」や「衝撃」を表すことができるのは，言語記号と非言語記号の中間的な存在である，*Ah !* ‘Oh !’ のような感嘆詞を用いた一語文だろう．言語記号で表すことができるまでに概念化された時点で，「驚き」，「衝撃」は，すでに過去の出来事として位置づけられると考えられる．状態変化焦点型の多くが表出型を取りにくいのは，点としての〈いま・ここ〉を動詞文では捉えることができないからだと考えられる．

状態焦点型が表す「困ったなぁ (*Ah, ça m’embête.* ‘Oh, it bothers me.’)」，「もう，イライラする！(Ah, ça m’énerve ! ‘Oh, it annoys me!’)」という感情もまた〈いま・ここ〉において経験される出来事であるが，その〈いま・ここ〉は点的なものではなく時間幅をもつ．時間幅があるということは概念化の対象になりうることを意味する．そのために状態焦点型の感情動詞は表出型に置くことができるのだと考えられる．

以上の考察を踏まえると，(42)〜(45) で示したアスペクトタイプと感情事象の意味タイプとの相関関係に対しても，意味的説明を与えることができる．驚きや傷心，衝撃を表す目的語型感情動詞が一瞬で起こる変化を表す directed achievement を好むのは，これらの感情事象が瞬間的に経験される心理だからであり，反対に，困惑，不安，イライラを表す目的語型感情動詞が瞬間的変化側面ではなく，状態性を表す transitory state を好むのは，これらの感情事象が瞬間的な出来事としてではなく，時間幅を持つ心理状態として経験される心理だからだと考えることができるだろう．

---

[22] デジタル的な状態の発生は感情や感覚だけではなく，知覚や事象を表す動詞にも共通する特徴であると考えられる．*voir* (to see)，*remarquer* (to recognise) などは伝統的アスペクト分類では，*arriver* (to arrive)，*gagner* (to win)，*mourir* (to die) などと共に瞬間的に成立 (終了) する事象を表す特徴を持つ到達動詞に分類される傾向にあった (cf. Vendler 1967)．ところがフランス語では，これらの動詞を半過去形に置くと，*voir*，*remarquer* は *arriver*，*gagner*，*mourir* とは異なる解釈を持つ．

(a) Elle arrivait à la gare. ‘She was arriving at the station.’

(b) Je voyais Paul. ‘I was seeing Paul.’

(a) では到着寸前という解釈になるのに対して，(b) では過去の一時的状態を表し，(半過去形と共起できる) 感情動詞と同じ解釈を持つ．以上の特徴から知覚，認識を表す動詞は状態変化を含意するが，その変化過程がプロファイルされることのないデジタル的な特徴を持つということができる．

5.5. 描写型 II の目的語型感情動詞のイベント構造分析

本節では，描写型 II の目的語型感情動詞のイベント構造を分析する．5.5.1.節では，アスペクトの分析を行い，5.5.2.節では，参与者間の意味関係を考察する．これらの考察を通して，描写型 II は，行為動詞のイベント構造に近い構造を持つが，完全に同じ特徴を持つわけではないことを明らかにする．

5.5.1. アスペクトの考察

5.5.1.1.節では，状態焦点型の目的語型感情動詞，5.5.1.2.節では，状態変化焦点型の目的語型感情動詞がそれぞれ描写型 II においてどのようなアスペクトになるかを検討する．5.5.1.3.節では，描写型 II と行為動詞のアスペクトの対比を行う．

5.5.1.1. 状態焦点型

状態焦点型の描写型 II が未完了時制 (現在形, 半過去形) に置かれた場合の解釈から見てみよう．(48) は発話者が仕事をしている最中に Paul が邪魔しようとする様子を表したものである．

(48) a. Paul m' {embête/embêtait}.
'Paul {bothers/bothered} me.'
b. Paul me {gonfle/gonflait}.
'Paul {inflates/inflated}[bothers /bothered] me.'

描写型 II では主語の主題性が上昇し，それに連動して文解釈の焦点は主語に置かれる．そのため (48) のアスペクト解釈は，Paul の動的な動きを軸にしたものとなる．その根拠として動的 (dynamic) な解釈が生まれる副詞句 en train de 'in the process of, be -ing'との共起関係を挙げることができる (cf. Legendre 1989)．まず，行為動詞 I，行為動詞 II が副詞句 en train de を伴う文と共起する以下の例を見てみよう．

(49) a. Paul {est/était} en train de me frapper.
'Paul {is/was} striking me.'
b. Paul {est/était} en train de gonfler le ballon.
'Paul {is/was} inflating the balloon.'

(49a) では Paul が私を叩き続けていることを表し，undirected activity になる (図 13)．(49b) も Paul の動的な動きを表すが，風船が膨らむという完了点に向かっ

て事態が段階的に展開していることを表すので directed activity になる (図 14).

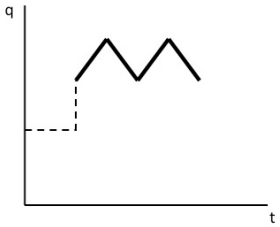


図 13 undirected activity

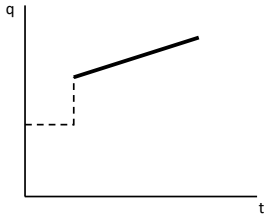


図 14　directed activty

描写型 II が en train de と共起できるかどうかを調べてみると，(50) に示すように，(49) の行為動詞と同じように共起可能であることが分かる．ここから，描写型 II のアスペクトが動的なアスペクトと結びついているということができる[23].

(50)　a. Paul {est/était} en train de m'embêter.
　　'Paul {is/was} bothering me.'
　　b. Paul {est/était} en train de me gonfler.
　　'Paul {is/was} bothering me.'

(50) の解釈を見てみると，Paul が私を「困らせる」,「イライラさせる」ために働きかけている様子を表している．経験者はすでに「困る」,「イライラする」という状態に置かれているので,「困らせる」,「イライラさせる」という状態変化達成に向けた行為ではなく,「困らせる」,「イライラさせる」ことを引き起こす行為が繰り返し行われていることを表す．したがって (50) は undirected activity になると考えられる (図 13).

続いて，描写型 II が複合過去形に置かれた場合を検討する．

(51)　a. Paul m'a embêté.

---

[23] 表出型と描写型 I の目的語型感情動詞は (a) に挙げるように，être en train de とは共起できない．(b-i) と (b-ii) の対比から，être en train de と共起できないのは，主語に有情物が置かれるかどうかという問題とは関係ないことが分かる．(b) が非文となるのは，*être* が動的なアスペクトを取らないことによる．

(a)　*Ses comportements {sont / étaient} en train de m'embêter.
　　'His/her behaviors {are / were} bothering me.'

(b)　i. *Le livre est en train d'être sur le lit.
　　'The book is being on the bed.'
　　ii. *Paul est en train d'être sur le lit.
　　'Paul is being on the bed.'

‘Paul bothered me.’
b. Paul m’a gonflé.
‘Paul inflated[bothered] me.’

5.4.1.節で取り上げた Arad (1999) は，主語が動作主解釈 (agentive reading) となる (52) では，状態変化解釈になると分析する．

(52) Nina frightened Laura deliberately. (=(29-2))

状態焦点型である *embêter*，*gonfler* は，描写型 I の複合過去形の例では，5.4.1.節で検討したように一時的状態解釈が焦点化される．ところが (51) では，Arad (1999) が述べるように，経験者の感情状態の変化という解釈が優位となる．つまり directed achievement を取る (図 15).

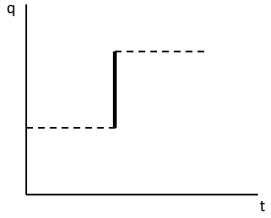


図 15 directed achievement

(51) に状態解釈の余地があるならば，継続時間副詞句を伴う文と共起させて，感情状態の継続性を表すことができるはずである．しかし継続時間副詞句と共起させると，(53b) は容認度が低い．(53a) は容認されるが，Paul の働きかけの反復解釈が優位となり，「困っていた」という状態解釈が前景化することはない．この構文環境においても描写型 II のアスペクトは undirected activity であると考えられる (図 13).

(53) a. Paul m’a embêté toute la journée.
‘Paul bothered me all day.’
b. ? Paul m’a gonflé toute la journée.
‘Paul inflated[bothered] me all day.’

最後に，所要時間副詞句との共起関係を見てみよう．

(54) a. *Paul m’a embêté en dix minutes.
‘Paul bothered me in ten minutes.’

b. *Paul m'a gonflé en dix minutes.
'Paul inflated[bothered] me in ten minutes.'

所要時間副詞句を伴う文では，位置・状態変化の過程がプロファイルされるので，以上の結果から状態焦点型／描写型 II は incremental accomplishment を取らないことが分かる．

5.5.1.2. 状態変化焦点型

状態変化焦点型の描写型 II では，描写型 I と比較した場合，アスペクト自体に変化はない．複合過去形の例から確認しよう．

(55) a. Le ministre a affolé les citoyens.
'The minister terrified the citizens.'
b. Paul a vexé Marie en public.
'Paul upset Marie in public.'
c. Paul a offensé Marie en public.
'Paul offended Marie in public.'
d. Un élève a choqué ses camarades pour se faire remarquer.
'A student shocked his classmates in order to be recognized.'

状態変化焦点型が描写型 I をとる場合，文解釈の焦点は目的語の経験者に置かれ，複合過去形では，経験者の状態変化の側面が活性化する (cf. 5.4.2.節)．描写型 II の (55b) では，「ポールが公衆の面前でマリを傷つけた 」ということを表し，文解釈の焦点は主語のポールにあるという点で描写型 I と異なる．しかしアスペクトの点では，描写型 I と同じように状態変化解釈を持ち，directed achievement となる．

未完了時制 (現在形，半過去形) の例を見てみると，以下の結果から分かるように，描写型 I と同じように描写型 II も未完了時制とは馴染みにくい[24]．

(56) a. ?? Le ministre {affole/affolait} les citoyens.
'The minister {terrifies/was terrifying} the citizen.'
b. ?? Paul {vexe/vexait} Marie.
'Paul {upsets/was upsetting} Marie.'
c. ?? Paul {offense/offensait} Marie.

[24] (56a) は，度重なる政策の失敗に民衆を不安させているという習慣文のように解釈するならば容認度は上がると考えられる．

‘Paul {offends/was offending} Marie.’
d. ?? Un élève {choque/choquait} ses camarades pour se faire remarquer.
‘A student {shocks/was shocking} his classmates to be recognized.’

所要時間副詞句および継続時間副詞句との共起関係においても，状態変化焦点型の描写型 II は，描写型 I と同じ結果を示す．(57) は所要時間副詞句を伴う例，(58) は継続時間副詞句を伴う例であるが，いずれも容認度が低い．

(57) a. *Le ministre a affolé les citoyens en une heure.
‘The minister terrified the citizens in one hour.’
b. *Paul a vexé Marie en public en cinq minutes.
‘Paul upset Marie in public in five minutes.’
(58) a. ? Le ministre a affolé les citoyens pendant une heure.
‘The minister terrified the citizens during one hour.’
b. ? Paul a vexé Marie en public pendant cinq minutes.
‘Paul upset Marie in public during five minutes.’

以上，描写型 II の状態焦点型と状態変化焦点型のアスペクトの特徴を，描写型 I の特徴と合わせて図 16 と図 17 にまとめる[25].

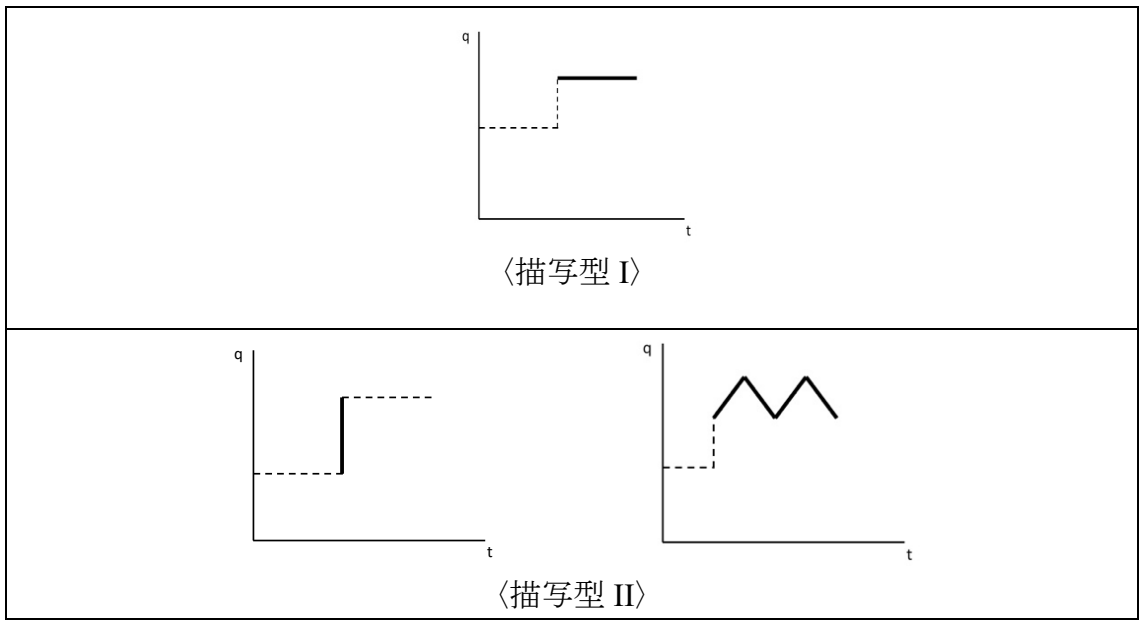
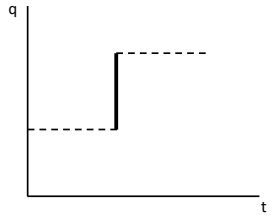


図 16 状態焦点型の描写 I と描写 II のアスペクト

[25] 描写型 I のアスペクトタイプは，優先されるアスペクトタイプのみを表示することにした．



〈描写型 I〉，〈描写型 II〉

図 17 状態変化焦点型の描写型 I と描写型 II のアスペクト

5.5.1.3. 行為動詞と描写型 II の比較

Arad (1999) は，主語が動作主解釈 (agentive reading) となる目的語型感情動詞 (=描写型 II) は，典型的な他動詞のように振る舞うと論じる (ibid. : 11). 図 16 と図 17 から, 描写型 II の目的語型感情動詞は動的 (dynamic) な特徴を持つアスペクトタイプを取り，状態的 (stative) なアスペクトタイプを取らない点で典型的な他動詞である行為動詞 I, 行為動詞 II と共通することが分かる．しかし図 16, 17 と表 3 から，行為動詞 I と II のアスペクトと比較してみると，少なくもフランス語においては描写型 II と行為動詞は同じ特徴を持つと言うことはできない.

	描写型 II の目的語型感情動詞		行為動詞 I	行為動詞 II
	状態焦点型	状態変化焦点型		
状態性 (stative)	×	×	×	×
動性 (dynamic)	○	○	○	○
反復解釈	○	×	○	×
変化過程のプロファイル	×	×	×	○
状態変化の含意	○	○	×	○

表 3　行為動詞と描写型 II のアスペクトタイプ

描写型 II／状態焦点型は，未完了時制と継続時間副詞句の解釈において行為の反復解釈を持ち，この点において行為動詞 I と共通点を持つ．しかし描写型 II／状態焦点型では状態変化を含意するのに対して，行為動詞 I では含意されず，この点では両者は相違する．つまり状態変化の含意に関しては，描写型 II／状態焦点型は行為動詞 II と共通することを意味する．しかし状態変化の過程をプロファイルすることができない点において，描写型 II／状態焦点型は行為動詞 II と相違する．描写型 II／状態変化焦点型では，状態変化が含意され，反復解釈が容認されない点において行為動詞 II と共通する．しかし状態変化の過程をプロ

ファイルすることができない点において描写型 II／状態変化焦点型は行為動詞 II とは異なる．以上の考察から，描写型 II／状態焦点型も，描写型 II／状態変化焦点型も，状態変化の過程をプロファイルできない点において描写型 I と共通する (5.4.節)．つまり主語に行為者が置かれても，経験者に起こる感情状態の変化のデジタル性は残ることを意味する．

本節の分析をまとめる．行為者性の上昇により描写型 II は，動的なアスペクトを取るようになり，行為動詞 I および II に近いアスペクトを持つようになる．しかしそのアスペクトは，行為動詞 I とも行為動詞 II とも完全に一致するわけではなく，動的アスペクトに特徴づけられつつも，感情状態変化が発生的な特徴を持つことからその特異性は残る[26] [27]．

5.5.2. 参与者間の意味関係の考察

ここからは，描写型 II の参与者間の意味関係を検討する．5.3.節では，表出型と描写型 I の目的語型感情動詞の参与者間の意味関係が 2 つの作用から特徴づけられることを論じた．描写型 II はどうだろうか．(59) は描写型 II／状態焦点型，(60) は描写型 II／状態変化焦点型の例である．

(59) a. Paul m’embête !
‘Paul bothers me!’
b. Paul m’ennuie !
‘Paul annoys me !’

(60) a. Paul a vexé Marie en public.
‘Paul upset Marie in public.’
b. Paul m’a froissé.
‘Paul creased[hurt] me.’

---

[26] 5.4.3.節の表 1，表 2 にまとめたすべての動詞が描写型 II で使用できるわけではない．以下の例のように，描写型 II とはなじまない動詞もある．「#」は主語を行為者として解釈した場合に容認されにくいことを表す．
(a) # Paul me préoccupe ! ‘Paul worries me!’
(b) # Paul m’angoisse ! ‘Paul distresses me!
(c) # Paul m’inquiète ! ‘Paul worries me!’
描写型 II の使用を調べてみると，状態焦点型では 49 例が描写型 II で使用可能であるのに対して，29 例は使用不可であることが分かった．状態変化焦点型では，31 例が描写型 II で使用可能であるのに対して 43 例が使用不可であった．この結果から，状態焦点型に含まれる動詞のほうが状態変化焦点型よりも描写型 II と共起しやすいと言うことができるが，この違いが何を意味するのかは今後の検討課題とする．

[27] Grimshaw (1990) は，行為者主語解釈とならない英語の感情動詞として，*worry*，*concern*，*perturb*，*preoccupy* などを挙げている (ibid. : 113).

主語が行為者として解釈される以上の例は受動文に置き換えると次のような特徴を持つ.

(61) a. Je suis embêté {par/#avec} Paul.
‘I am bothered {by/with} Paul.’
b. Je suis ennuyé {par/#avec} Paul.
‘I am annoyed {by/with} Paul.’
(62) a. Marie a été vexée {par/*avec} Paul en public.
‘Marie was upset {by/with} Paul in public.’
b. J’ai été froissé {par/#avec} Paul.
‘I was creases[hurt] {by/with} Paul.’

(61), (62b) において前置詞 avec を選択すると，Paul の行動や言動などを知覚・認識するという 1 人称主語の認知作用の側面が強調される解釈となる．つまり行為者主語の能動文 (59), (60b) に対応する受動文である (61), (62b) の受動文としてではなく，非行為者主語の受動文として解釈される (「#」はこのことを表す). (59), (60b) の受動文として解釈されるためには前置詞 par を選択する必要がある．(60a) は「公衆の面前で (en public)」という副詞句によって，主語の行為者解釈が強化されているため，(62a) のように受動文へ置き換えた場合，前置詞 avec の選択はほぼ不可となる．

受動文の結果から描写型 II は，状態焦点型も状態変化焦点型も，行為動詞と同じ振る舞いをする．しかし描写型 II が表す事態は，行為動詞が表す事態とまったく同じように概念化されるわけではないと考えられる. (59), (60) では,「困らせる」,「イライラさせる」,「気分を害す」ということが行為者によってももたらされていることを表すが，行為者はその事態を意のままに操作できるわけではない．その証拠に描写型 II は様態副詞句と共起させることはできない．(63) と (64) を比較してみよう．

(63) a. Paul me tiraille vigoureusement par la manche.
‘Paul tugs me vigorously by the sleeve.’
b. Le lion dévore promptement la proie.
‘The lion devours the prey promptly.’
(64) a. ?? Paul m’embête {vigoureusement/promptement}.
b. ?? Paul a vexé Marie en public {vigoureusement/promptement}.

Voorst (1995) は，様態副詞句との共起関係は，主語が及ぼす作用が，目的語が含

まれる事態の展開に対してコントロールを持つかどうかを図るテストとして提示する (cf. 5.3.2.節). (63) に示すように，行為動詞 1 および行為動詞 II は様態副詞句と共起できるが，(59a)，(60a) に様態副詞句を付加した (64) は容認度が極めて低い．ここから目的語型感情動詞では，主語の行為者性が上昇することにより，参与者間の意味関係は行為動詞のそれに近いものにシフトするが，何者にもコントロールすることができない感情の自発性という側面は残ると考えられる．

行為動詞，表出型および描写型 I の特徴をあわせて，描写型 II の参与者間の意味関係を図 18 のように表す．以下の図は目的語が 1 人称の例の図である．

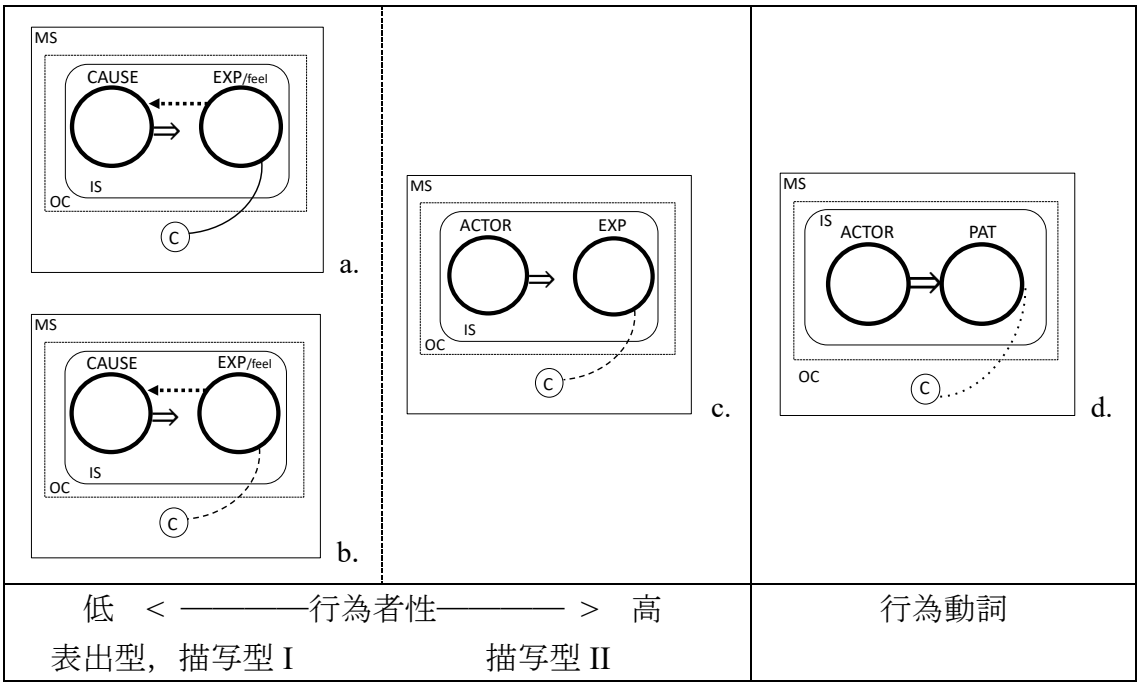


図 18　目的語型感情動詞と行為動詞の参与者間の意味関係

表出型 (図 18a) と描写型 I (図 18b) は，参与者間の関係は 2 つの作用から特徴づけられる (cf. 5.3.3.節). 1 つは原因 (CAUSE) から経験者 (EXP/feel) に向かう作用である．この作用は力の連鎖に近いものであり，この側面に際立ちが置かれると動的受動文が選択される．しかしこの作用は，経験者に直接的に作用することはないので，完全な力の連鎖ではない．作用と経験者の間の隔たりがコントロールの不在／自発性を表す．もう 1 つの作用は経験者から原因に向かう認知作用である．この側面の際立ちが高くなると，その受動文は形容詞的受動文となる．表出型と描写型 I では，以上 2 つの捉え方が潜在的に可能であるが，主語の行為者性が上昇すると (CAUSE から ACTOR へのシフト)，力の連鎖に近い作用が前景化する (図 18c). それに連動して認知作用は後退すると考えられるので，

形容詞的受動文への置き換えが難しくなると考えられる．行為者から経験者に延びる作用は，行為者性の上昇により強化されるが，様態副詞句との共起関係が示すように，行為動詞の参与者間の関係 (図 18d) のような力の連鎖に完全に同化することはない．

描写型 II では (59), (60b) のように，現在形，1 人称目的語代名詞であっても，目的語に置かれる経験者は，内的状態を感じる主体よりも，主語行為者が行う行為に含まれる描写対象としての側面をより強く持つ EXP のステイタスを持つと考えられる．つまり (60a) の目的語代名詞の 3 人称と同じステイタスを持つと考えられる．(60a) の参与者間の意味関係は，図 18c の経験者と概念化者 (C) の同一指示関係を表す点線がない構造で表される．

本節の分析をまとめよう．行為者性の上昇によって描写型 II の目的語型感情動詞の参与者間の意味関係は，行為動詞のそれに限りなく近づくが，感情事象に特有の状態変化のデジタル性，コントロールの不在／自発性は残るため，行為動詞の参与者間の意味関係に完全に一致することはない．

5.6. 構文タイプ D と感情動詞

最後に，身体部分がプロファイルされる構文 (構文タイプ D) によって感情事象が表される現象について考察する．

5.2.節では，感情事象は全体に作用するという特徴を持ち，身体部分が関与することはないと論じた．ところが感情事象を表す動詞文には，(65) のような現象が存在する．それでは，(65) のような現象は，感情事象は全体に作用するものである本論文の主張に対する反例なのだろうか．以下このタイプの現象には日本語訳を添える．

(65) — Quelle horreur ! Cette histoire commençait vraiment à me casser les pieds.
「「そんなぁ。」私はいやになってしまった」
‘What a horror. this story was really beginning to break me$_i$ the feet$_i$[=bother].’
(*Dur, dur,* 日本語訳は『ハードボイルド／ハードラック』より引用)

この問題に答えるためにまず，(65) と同じ構文形式によって身体部分に起こる行為を表す例と感覚事象を表す例の意味解釈を確認する．

(66) a. Paul lui a coupé les cheveux.
‘Paul cut him/her$_i$ the hair$_i$.’
b. Paul m’a cassé le bras avec un marteau.
‘Paul broke me$_i$ the arme$_i$ with a hammer.’

(67) a. Le vent me coupe le visage.
‘The wind cuts me$_i$ at the face$_i$.’
b. Le bruit me casse les tympans.
‘The sound breaks me$_i$ at the eardrums$_i$.’

図 19a に示すように，(66) タイプの例では，主語が及ぼすエネルギーが直接目的語にプロファイルされる身体部分に及び，与格表示の人間はそのエネルギーを間接的に受ける参与者として位置付けられる (cf. 第 4 章，4.5.1.節). これに対して (67) タイプの例では，図 19b の通り，原因と身体部分が接触することで刺激が起こり, 与格表示の人間はその刺激が成立する場として位置づけられる (cf. 第 4 章，4.5.2.節). 以上の違いは，主語の行為者性の低下によって起こる参与者間の意味関係の構造変化として捉えることができる.

a.エネルギー連鎖　　行為者性低下→　　b.　接触関係

図 19　行為者性の低下と参与者間の意味関係の変化

(65) では，参与者間の意味関係は，図 19 では捉えることができない特徴を持つと考えられる. (65) では, 主語に置かれる話が字義通り足を折っていること，話が足に刺激を与えていることを表しているわけではなく，「嫌気を抱かせる，困らせる」という意味を表しており，文の意味が構成的 (compositional) ではないことが分かる[28]. 分解的に捉えることができない動詞と直接目的語の関係全体が, 与格表示の人間に感情状態を引き起こすという構造を持つと考えられる. 文法カテゴリーのスキーマ的意味では, 間接目的語は, 主語と直接目的語の間で起こる作用を直接的には受けない要素がプロファイルされる文法カテゴリーと見なされる. (66) の間接目的語はエネルギーを間接的に受ける参与者として，(67) の間接目的語は場としてのステイタスを持ち，間接目的語のスキーマ的意味に反するものではない. ところが (65) において活性化しているのは，間接目的語に置かれる人間の状態であり，意味的には作用を直接的に受ける参与者をプロファイルする直接目的語的なステイタスを持つと考えられる. つまり統語的には構文タイプ D の特徴を持つが，意味的には構文タイプ B の特徴を持つと考えられる.

[28] *casser les pieds* では，les pieds (足) の変わりに頭 (la tête ‘the head’)，睾丸 (les couilles ‘the testicles’) に変更しても「嫌悪を抱かせる，困らせる」という意味を表すことができる.

以下に例示する現象も (65) と同じように，間接目的語に置かれる人間が経験する感情事象を表し，この事象も主語と目的語が表す意味の総和として捉えることはできない．

(68) a. Ces nouvelles m'ont coupé les bras. 「その知らせに呆然とさせられた」
'These news cut me$_i$ at the arms$_i$ [=to stun].'
b. Cette nouvelle m'a coupé le souffle. 「その知らせに驚かされた」
'This news cut me$_i$ at the breath$_i$ [=to stun].'

感情事象を表す構文タイプ D には，直接目的語に具体的な身体部分を取る (65)，(68) のような現象だけではなく，心理的な部分を取る次のような現象も観察される．(69) は転用型の例，(70) は語彙型の例である．

(69) a. Cette nouvelle me brise le cœur. 「その知らせに胸が苦しめられた」
'This news breaks me$_i$ at the heart$_i$.'
b. Cette nouvelle me déchire le cœur. 「その知らせには胸が痛められた」
'This news tears[hurts] me$_i$ at the heart$_i$.'
c. Ce livre lui a frappé l'esprit. 「その本に彼は心が打たれた」
'This book struck him/her$_i$ at the spirit$_i$.'
d. Son attitude me crispe les nerfs. 「彼女の態度にはイライラする」
'His/her behavior tenses[irritates] me$_i$ at the nerves$_i$.'
(70) a. Son retour m'a réjoui le cœur. 「彼／彼女の帰還は私の心を喜ばせた」
'His/her return delighted me$_i$ at the heart$_i$.'
b. Une autre idée me préoccupe l'esprit. (Sketch Engine)
「別の考えが私の精神を心配させている」
'Another idea worries me$_i$ at the spirit$_i$.'
c. Votre âme tourmentée et égarée me navre le cœur. (Sketch Engine)
「苦しみ困惑したあなたの魂が私の心を悲しませている」
'Your tormented and lost soul upset me$_i$ at the heart$_i$.'

(69), (70) では，直接目的語にプロファイルされる要素は心理的側面であり，(65) や (68) の直接目的語のような身体部分ではない．直接目的語にプロファイルされるこの心理的側面は，統語的には間接目的語とは区別されるが，意味的に与格表示の心理主体と同じ価値を持つ．心理的側面であるが故に，身体部分と全体の分離不可能所有関係などではなく，心理主体と心理的側面はほぼ一体のものだと考えられる．つまり (69)，(70) に含まれる直接目的語は余剰的な

要素として存在する．そのため (71)，(72) に示すように，(69) と (70) は身体部分を削除して，構文タイプ B に置き換えることもできる．

(71) a. Cette nouvelle me brise.
‘This news breaks me.’
b. Cette nouvelle me déchire.
‘This news tears[hurts] me.’
c. Ce livre l’a frappé.
‘This book struck him.’
d. Son attitude me crispe.
‘His/her behavior tenses[irritates] me.’

(72) a. Son retour m’a réjoui.
‘His/her return delighted me.’
b. Une autre idée me préoccupe.
‘Another idea worries me.’
c. Ce livre l’a tourneboulé.
‘This book upset him.’
d. Votre âme tourmentée et égarée me navre.
‘Your tormented and lost soul upsets me.’

以上のような構文交代の可能性からも，感情事象を表す構文タイプ D において，間接目的語に置かれる経験者が意味的には直接目的語的なステイタスを持つと言うことができるだろう．

まとめると，(65)，(68) のような現象も，(70)，(71) のような現象も，部分を表す名詞句に何らかの作用が及ぶことを表しているのではなく，間接目的語に置かれる人間に起こる感情事象を表しているので，これらの現象は感情事象は全体に作用するものであるという本論の主張の反例にはならないと言うことができる．

5.7. まとめ

本章では，行為動詞と対比させながら目的語型感情動詞のイベント構造について論じた．

主語に非行為者が置かれる表出型および描写型 I では，原因から経験者に及ぶ自発性／非コントロール性に特徴づけられる作用と，経験者による原因の知覚・認識という 2 つの作用に特徴づけられる．前者の作用が前景化すると，力の連鎖のような事態として捉えられることになるので，動的受動文が選択されるが，

後者の側面が前景化すると，形容詞的受動文が選択されることになる．

加えて表出型および描写型 I では，感情の変化は，家の建設が除々に進展してくような段階性を持たないデジタル的な変化として捉えられる特徴を持つ．この特徴を軸にして，表出型と描写型 I のアスペクトは 2 つのタイプに分かれる．1 つは状態解釈が優位になる状態焦点型，もう 1 つは状態変化解釈が優位になる状態変化焦点型である．そして 2 つのアスペクトタイプは，表される感情事象の意味タイプと無関係ではなく，困惑，不安などを表す場合は状態焦点型，驚き，衝撃などを表す場合は状態変化焦点型になる傾向にあることを明らかにした．また，衝撃を受ける，驚きを覚えるという感情事象は，点としての現在に根ざす事象であるため，概念化，及び言語化を拒む特性を持つ．ゆえに動詞文で表そうとすると，驚きや衝撃は，過ぎ去った事象としてしか捉えることができず，これらの感情事象は完了時制で表現されやすい傾向にあることも示した．

主語に行為者が置かれる描写型 II では，文解釈の焦点は経験者から行為者にシフトする．これに連動してイベント構造の特徴も変化する．参与者間の関係では，表出型と描写型 I で見られた 2 つの作用の選択性はなくなり，力の連鎖に近い作用 (原因から経験者に及ぶ作用) が前景化し，行為動詞の参与者間の関係に近い特徴を持つようになる．アスペクトに関しては，状態性との結びつきはなくなり，動的 (dynamic) な構造を持ち，行為動詞に近い特徴を持つようになる．ただし，感情の自発性／非コントロール性と変化のデジタル性は残るので，描写型 II のイベント構造は行為動詞のイベント構造と全く同じ特徴を持つわけではないことを明らかにした．

事象の性質から，感情事象では，感覚事象のように身体部分が活性化することはないが，経験者が間接目的語 (与格表示)，身体部分が直接目的語に置かれる構文タイプ D によって感情事象が表される場合がある．しかし構文タイプ D の感情事象表現では，直接目的語にプロファイルされる身体部分は，命題内容の構成的な要素としては組み込まれておらず，命題の重要な要素は間接目的語に置かれる人間の感情状態であり，間接目的語に置かれる人間は意味解釈上，直接目的語のようなステイタスを持つ．ここから構文タイプ D の感情事象表現は，感情は身体全体に及ぶ事象であるという本論文の主張への反例にはならないことを示した．

第 6 章　結論

本論文では，経験者が (直接・間接) 目的語に置かれるフランス語の感情動詞と感覚動詞に焦点を当て，心理動詞の定義と，心理動詞の抽象的な意味構造―イベント構造―に関する諸問題の認知意味論的分析を通して，感情事象および感覚事象の概念化の特徴と言語化の仕組みの考察を行った．

6.1.節では，第 5 章までの議論をまとめる．6.2.節では，本論文の貢献について述べ，6.3.節では今後の課題と展望を示す．

6.1. 考察のまとめ

第 1 章で立てた問いに答えるかたちで，本論文での分析をまとめる．問 1 から見てみよう．

問 1　a. 行為動詞から転用によって目的語型心理動詞が増加するのはなぜか.
　　b. 心理動詞性はどのような構文論的条件の下で発現するのか.

心理動詞を特徴づける特殊な因果関係と段階的な心理動詞性をキーワードにして，第 3 章でこの問いの答えを示した．

哲学上の問題に踏み込むことなく，素朴な直感によれば，悲しみや喜び，驚きなどの感情や痛みや痒みなどの感覚は，〈私〉のみが感じる事象で，他者と共有することはできない主観的な特性を持つと言える．しかし，心理事象の特性を考える上で忘れてはならないのは，心理事象が生起する時空間的特徴である．私的な事象として我々が感情や感覚を「感じる」とき，それは，〈いま・ここ〉という時空間に縛られる．過去に経験された悲しみや痛みを回想することはできるが，そこで表現されるのは，悲しみや痛みの痕跡のみであり，悲しいと感じることや痛いと感じることの中核的意味は抜け落ちている．加えて心理事象は，何らかの原因によって引き起こされるという側面もある．しかし，心理事象を特徴づける因果関係は，物理的な因果関係とは異なり，〈特殊な因果関係〉を持つ．

心理事象を特徴づける因果関係に注目すると，統語的観点から観察される心理動詞の不均一な広がりが意味的に動機づけられたものであることが分かる．フランス語では，心理動詞は，経験者が置かれる統語的位置から，主語型と目的語型に大別されてきた．ところがこの 2 つの心理動詞は均等に存在するわけではなく，主語型に比べて目的語型が多く，その大部分が *couper* (to cut)，*brûler* (to burn)，*frapper* (to strike)，*gonfler* (to inflate)，*pomper* (to pump)，*tanner* (to tan)，*tirailler* (to tug) などの行為動詞からの転用に支えられている．このような現象が起こるのは，心理事象が因果関係を特徴とし，行為動詞もまた因果関係を表す動

詞であることに起因すると考えられる．心理事象は因果関係に特徴づけられる側面を持つが，その因果関係は視覚的に捉えることができない抽象的なものである．抽象的な物事の理解には，具体的な物事による見立てが必要となる．そこで利用されるものが，行為動詞が表す具体的な因果関係である．行為動詞が表す物理的な因果関係から，エネルギー連鎖というスキーマが抽出され，そのスキーマになぞらえるかたちで，何らかの原因によって引き起こされる内面状態の変化が概念化され，理解されるのである．目的語型心理動詞と行為動詞の間には多義的な関係があると考えられ，行為動詞からの転用によって目的語型心理動詞の数が増え続ける理由には以上のような意味的動機づけがある．これが問 1-a に対する答えである．

行為動詞が目的語型心理動詞に転用されるとき，その意味変化は，比喩的拡張によって支えられる．それに加えていくつかの構文論的パラメータを満たす必要があり，それら構文論的パラメータをどれほど満たすかによって，心理動詞性の大きさが左右される．つまり問 1-b に対しては範疇的に答えることはできず，プロトタイプとして答えることになる，ということである．上述したように心理事象は，〈特殊な因果関係〉に基づいて〈いま・ここ〉の〈私〉において経験されるという特性を持つ．ある文がこれら現象面の特徴をすべて満たすとき，機能的観点から見るとその文は，発話時において自己の内面で感じられる状態や変化を発露する表出機能を持つ．このような文に含まれる動詞を本論文では心理動詞性のもっとも高い表出型の目的語型心理動詞とした．表出型の目的語型心理動詞が生み出されるためには，1 人称目的語代名詞，現在形を満たすことが重要な条件となる．しかし，発話者が内面で感じる心理を表出する文として解釈されるためには，以上の条件に加えて非行為者主語というパラメータを満たす必要がある．非行為者主語を選択することで，目的語の主題性が上昇し，目的語に置かれる人間の状態に文解釈の焦点が置かれるようになるからである．また，それに連動して他動性が低下し，特殊な因果関係を表すための素地が生まれるのである．

目的語 1 人称代名詞，現在形が満たされない場合，〈いま・ここ〉の〈私〉が感じる心理を表さず，心理事象の現象面における重要な側面が失われることになるので，そのような文に含まれる動詞の心理動詞性は表出型よりも小さくなる．この変化は経験者のステイタスと発話機能の変化とも連動する．心理事象を経験する人間のステイタスは，感じる主体から単なる経験者へと変化し，心理事象を描写する文へと変化する．このような文に含まれる動詞を描写型 I の目的語型心理動詞とした．感じる主体を含まない点において，描写型 I は表出型よりも心理動詞性は低くなるが，主語に非行為者が選択される限り，目的語に置かれる経験者に起こる心的変化や状態に焦点が置かれることになる．ところが，主語に

意図性を持つ行為者主語が置かれる場合，目的語に置かれる経験者の心的変化や状態よりも，主語の行為を表すことが焦点化されるので心理動詞性はさらに低下する．このような文に含まれる動詞を描写型 II の目的語型心理動詞として規定した．

問 2 を解く鍵は，感情事象が経験者全体に及ぶ事象であることに対して，感覚事象は経験者の部分に及ぶ事象であるという感情と感覚の違いにある．

問 2　心理動詞性の獲得によって動詞のイベント構造はどのように変化するのか．行為動詞との対比において，目的語型心理動詞のイベント構造はどのような特異性を持つのか．

a. 目的語型の感情動詞と感覚動詞のイベント構造は，どのような共通点，及び相違点を持つのか．

b. 感情動詞のイベント構造は 1 つしかないのか．それともいくつかのタイプに分かれるのか．

第 4 章で行った，行為動詞との対比から見える目的語型感覚動詞のイベント構造の分析からまとめる．行為動詞の参与者間の意味関係は，力の連鎖によって特徴づけられる構造を持ち，この特徴は動的受動文への置き換えという統語的振る舞いに現れる．これに対して目的語型感覚動詞は，主語に置かれる原因と原因が及ぼす作用を直接受ける身体部分は，接触関係を持ち，それぞれ自立した参与者としては概念化されていない．加えて経験者 (全体) は，接触関係を感覚として成立させる場として概念化されていると考えられる．力のやり取りに関わる要素は，自立した参与者であることが条件となる．原因と身体部分が接触関係を持つということは，両者は完全に自立してないことを意味する．また，経験者 (全体) を特徴づける場は，力の伝達に関わることができるような参与者ではない．これらの特徴を総合すると，目的語型感覚動詞の参与者間の関係は，力の連鎖とは異なる構造を持つことになる．そのために目的語型感覚動詞は，力の連鎖を条件とする動的受動文へ置き換えることができないことを論じた．

原因と身体部分の接触という特殊な関係は，アスペクトの特異性とも関連することも明らかにした．行為動詞は，位置・状態変化が含意されるかどうかによって行為動詞 I と行為動詞 II の 2 つのタイプに分けられる．目的語型感覚動詞は，原因の作用を直接受ける身体部分の状態変化が含意されることはなく，この点において，位置・状態変化が含意されない行為動詞 I と共通点を持つ．しかし，行為動詞 I は動的なアスペクトを取るのに対して，目的語型感覚動詞はどのような構文環境においても一時的状態 (transitory state) 解釈を持つという違いがある．さらに目的語型感覚動詞は，身体部分の状態変化を含意しないので，目的語

型感覚動詞が持つ一時的状態解釈は，状態変化の結果状態として位置づけることはできない．本論文ではこれを，原因が身体部分に接触することで起こる一時的状態と規定した．状態変化の結果状態ではないので，目的語型感覚動詞では一時的状態に至るまでの過程がプロファイルされることはなく，その一時的状態解釈は 0 か 1 かのデジタル的な性質を持ち，概念化者によるアスペクトの構造調整を許さない特徴を持つことを示した．

続いて，第 5 章で論じた目的語型感情動詞のイベント構造の分析をまとめよう．目的語型感覚動詞とは異なり，目的語型感情動詞では，参与者はすべて自立しており，その関係は力のやり取りに近い関係を持つと考えられる．そのため目的語型感情動詞では，動的受動文への置き換えが可能となる．しかし目的語型感情動詞の参与者間の関係は，力の連鎖として捉えられているわけではない．力の連鎖として概念化されている場合，事態の展開は，様態副詞句によって修飾可能となる．しかし感情は，何ものにもコントロールすることができない自発的な側面を持つので，感情事象は完全な力の連鎖として概念化されることはない．ゆえに目的語型感情動詞は様態副詞句と共起できない．さらに目的語型感情動詞の参与者間の意味関係は，経験者から原因に向かう認知作用という特殊な作用関係も持つ．概念化の段階で，主語から経験者に向かう作用が際立つものとして捉えられた場合，その受動文は動的受動文の形をとることになるが，認知作用がより焦点化されると形容詞的受動文になることを示した．

次に，アスペクトの分析をまとめる．目的語型感情動詞は，経験者の状態変化が含意されるため，位置・状態変化が含意される行為動詞 II に近い特徴を持つ．しかし行為動詞 II は，置かれる構文環境によって位置・状態変化の構造調整を行うことができることに対して，目的語型感情動詞では経験者の状態変化は 0 か 1 かのデジタル的な性質を持ち，*inquiéter* (to worry)，*angoisser* (to worry)，*gonfler* (to inflate[to bother])，*tanner* (to tan[to bore]) のような動詞では，どのような構文環境においても状態変化後の状態側面が活性化される一時的状態解釈を持つ．一時的状態解釈を有する点において，目的語型感情動詞は目的語型感覚動詞と共通するが，目的語型感覚動詞の一時的状態が接触状態であるのに対して，目的語型感情動詞の一時的状態は変化結果としての状態であり，この点において 2 つの心理動詞のアスペクトは大きく異なる．

これらの考察を通して明らかにした目的語型感覚動詞のイベント構造と目的語型感情動詞のイベント構造の共通点および相違点が問 2-a に対する答えである．

目的語型感情動詞の中には，*frapper* (to strike[to surprise]) や *étonner* (to astonish) のように，変化結果の状態側面よりも変化側面が活性化されやすい動詞がある．その証拠に，完了時制において変化解釈が優先されやすいこと，状態側面がプロ

ファイルされる構文環境や未完了時制に置きにくいという特徴が挙げられる．ここから目的語型感情動詞のアスペクトタイプには, *inquiéter*, *angoisser*, *gonfler*, *tanner* のように状態解釈が優先される状態焦点型と，*frapper*，*étonner* のように状態変化解釈が優先される状態変化焦点型があることを明らかにした．加えて，困惑や不安などを表す動詞は状態焦点型の特徴を持ちやすく，衝撃や驚き，傷心を表す場合は状態変化焦点型の特徴を示しやすい傾向にあり，目的語型感情動詞内に観察されるアスペクトタイプの分化は，表される感情事象の意味的特徴と緩やかな相関関係にあることも論じた．以上が問 2-b に対する答えである．

以上の考察は, 主語に非行為者をとる表出型／描写型 I の目的語型感覚動詞と目的語型感情動詞のイベント構造に関するものである．第 3 章，問 1-b の考察で明らかにしたように，心理動詞には主語に行為者をとる描写型 II もある．描写型 II では，目的語の主題性の低下に伴い心理動詞性が大きく低下する．しかし描写型 II に見られる変化はこれだけではない．目的語型感情動詞では，心理動詞性の低下に連動して, そのイベント構造が表出型と描写型 I の目的語型感情動詞のそれとは異なるものに変化することを第 5 章の後半で論じた．アスペクトでは，状態アスペクトを取ることはなくなり，行為動詞 I と行為動詞 II と同じように動的アスペクトのみ可能となる．しかし, 状態変化のデジタル性という特異性は残るため，行為動詞 I と行為動詞 II とまったく同じアスペクトを持つわけではない. 参与者間の意味関係に関しては, 原因から経験者に向かう力の連鎖に近い作用のみが焦点化されるようになる. そのため, 形容詞的受動文への置き換えは不可となり，動的受動文のみが許されるようになる．しかし，様態副詞句と共起できないことから, 感情の自発性という性質は残ると考えられる. 以上の分析から，他動性と主語の主題性の上昇によって，描写型 II のイベント構造は行為動詞のイベント構造に近いものになるが，それが完全に行為動詞のイベント構造に一致することはないことを明らかにした．

さらに，第 3 章では，問 1-b の考察を通して，目的語型感情動詞は描写型 II を取ることができるのに対して目的語型感覚動詞は描写型 II を取ることができないという発見があった．第 4 章の後半では，行為動詞が目的語型感情動詞に意味拡張するメカニズムと，目的語型感覚動詞に意味拡張するメカニズムの比較を通して，目的語型感覚動詞が描写型 II をとることができない要因を探った．行為動詞が目的語型感情動詞に拡張するとき，動詞が表す作用が成立する意味領域の転換 (メタファー) が起こる. 動詞の表す作用が心理的意味領域で起こるものとして解釈される限り, 主語に行為者が置かれても, 目的語に置かれる人間は経験者として解釈できる．これに対して行為動詞が目的語型感覚動詞へ拡張するとき, 主語に置かれる原因が身体部分へ及ぼす作用は, 行為動詞として使用されるときと同じように, 物理的意味領域で成立するものとして解釈される. た

とえば *La fumée me brûle les yeux.* ‘The smoke pricks me$_i$ in the eyes$_i$.’ では，煙と目の間の作用関係は物理的意味領域で起こるものとして解釈される．しかし上記の表現は，煙によって目に異常な刺激が起こることを表していて，煙が実際に目を焼いていることを表しているのではない．行為動詞の使用によって身体部分で起こっている出来事が誇張 (hyperbole) されることで，その出来事が異常な刺激 (接触作用) として解釈される．それに加えて身体部分の所有者が心理的主体として解釈されることで (ここにはメタファーが関与すると考えられる)，感覚動詞への意味拡張が成立する．目的語型感覚動詞の成立には，誇張法が重要な鍵となるが，主語に行為者が置かれると，動詞が表す作用が誇張されたものとして解釈されることはなく，たとえその作用が身体部分に及ぶものであったとしても身体部分に及ぶ物理的作用として解釈されるので，身体部分の所有者は経験者として解釈されにくくなる．目的語型感覚動詞が描写型IIを取りにくいのは，誇張法が働くからであると論じた．

6.2. 本研究の貢献

本研究の貢献は大きく 3 つある．1 つ目は，Ruwet (1994) で検討された心理動詞の定義に関する問題を現象面の特徴と機能面の特徴をあわせて，認知意味論的枠組から捉え直したことにある．第 1 章，第 3 章で述べたように，従来の心理動詞研究では，心理動詞の定義について論じた研究はほとんどなく，共通基盤のない状態で議論が進められてきた．その中で Ruwet (1994) は，感じる事象としての心理の特異性に注目し，この特徴から心理動詞カテゴリーの境界線を見極めようとした．Ruwet (1994) はこの特性が語彙の中にあるものと考えるが，それを見出す方法が提案されることはなかった．それはある意味で当然の帰結である．というのも，内側に何かを感じるということは，どこかにあるものではなく，時間，空間，自己という 3 つの要素の存在によって文の中でゲシュタルト的に生まれる意味効果のようなものだからである．加えて，語彙の中に心理動詞の特性があるという前提の上では，心理動詞であるかどうかは二分法的に分けられることになるが，語彙から文に視点を移して意味効果として捉えると，心理動詞というカテゴリーは，心理動詞性としてプロトタイプ的に捉えるべきカテゴリーにシフトすることになる．このように心理動詞の存在を文レベルで捉え，それが明確な境界線を持つものではなく，段階的な広がりを持つカテゴリーであることを示しつつ，形式的にも分析可能な構文論的特徴によっていくつかの段階があることを提案した本論文の考察は，これまでの心理動詞研究にはない新しいアプローチであると考えられる．ある動詞が「心理動詞であるかどうか」という問いの立て方から「心理動詞性を帯びるとき，構文にはどのような特徴があるか」というように問い方を変えたことにより，言語現象をより精密に記述する

ことができるようになったと言えるだろう．

2 つ目の貢献は，心理動詞性という問題がイベント構造の問題と関わることを示したことにある．繰り返し述べてきたように，非行為者を主語とする目的語型感情動詞は，参与者間の意味関係においてもアスペクトにおいても，典型的な他動詞，つまり行為動詞とは異なる特徴を持つことがこれまでの研究で示されてきた．しかしそれと同時に，主語に行為者が選択される場合には，目的語型感情動詞は，行為動詞に近いイベント構造を持つことも報告されてきた (Arad 1999, 中村 2003)．目的語型感情動詞は 2 つの異なるイベント構造を持つと考えられてきたのである．ところが，先行研究の多くは，生成文法的枠組の中で発展してきたために，主語の特性によって目的語型感情動詞は 2 つの異なるイベント構造を持つものだと考えられ，語彙特性の問題として処理される傾向にあり，それが一体何を意味するのかということまで考察されることはなかった．しかし，本研究の考察で明らかにしたように，イベント構造の相違は，語彙特性の問題に回収される現象ではなく，心理動詞性の変化 (低下) の問題と密接に関わる現象なのである．このような関連性もまた，心理動詞の定義に関わる議論がないと見えてこない問題であると言えよう．

本研究の 3 つ目の貢献は，Postal (1970, 1971) 以降，顧みられることのなかった目的語型感覚動詞の存在を掘り起こし，感情動詞と感覚動詞の違いを明らかにしたことである．継続時間副詞句との共起関係で見たように，目的語型感覚動詞も，(一部の) 目的語型感情動詞も，状態性というアスペクトと強い結びつきを持つ．この点だけに注目するならば，状態性に特徴づけられる心理動詞には，感情事象を表す動詞だけではなく，感覚事象を表す動詞もあると脚注などで簡単に触れるだけでよく，目的語型感覚動詞をわざわざ心理動詞の問題として取り上げる必要性はないだろう．しかし，本論文の考察から，2 つの心理動詞は参与者間の意味関係において違いを持ち，そのことに関連して 2 つの心理動詞が持つ状態解釈の性質も異なるものであること明らかにした．目的語型感覚動詞と目的語型感情動詞の比較を通して，心理動詞のイベント構造が多層的なものであることを示した本研究の考察は，一面的に論じられる傾向にあったこれまでの心理動詞研究を大きく前進させたと言えるだろう．

6.3. 課題と展望

最後に，残された課題と展望を述べ，本研究を締めくくる．

Postal (1970, 1971) では，知覚や認識などを表す動詞も心理動詞として扱われた．これらの動詞を除く，感情動詞と感覚動詞に関わる問題に限定して見ると，第 1 章で述べたように，感情動詞と感覚動詞には経験者が目的語に置かれるタイプだけではなく，経験者が主語に置かれる次のような現象もある．

(1) a. J'aime bien le vin blanc.
'I like the white wine.'
b. Je regratte d'être venu ici.
'I regret having come here.'
(2) J'ai {chaud/froid}.
'I am {hot/cold}.'

(1a) は Paul が白ワインを好きなこと，(1b) は Marie がその場に来たことを悔やんでいることを表している．(2) では発話者が暑い／寒いと感じていることが表現されている．心理を感じることが特殊な因果関係に特徴づけられており，このことが，経験者が目的語に置かれることの意味的動機づけである，という分析が本研究の主張の 1 つであった．ところが (1)，(2) では，経験者が主語に置かれているので，これらの現象をどのように回収するのかが 1 つの課題となる．

現象面において心理は，〈原因〉→〈結果〉という構造を持っている．このすべてを概念化し，言語化したものが，目的語型の感情動詞と目的語型の感覚動詞である．つまり目的語型心理動詞では，形式と意味 (心理事象の構造) が，類像的な関係にあることを意味する．しかし，事象の切り取り方によっては，〈結果〉側面を際立たせて〈原因〉を背景化させることも可能である．このような意味操作の代表的な現象が受動化である．本論文の考察で，目的語型感情動詞は 2 つの受動文に置き換えられることを示してきたが，(1b) は前置詞 de を伴うことから，形容詞的受動文 (e.g. *Je suis vraiment emmerdée avec ces affaires.* 'I am realy bothered with these matters.') に近い特徴を持つと考えられる．つまり (1b) では原因よりも，経験者により際立ちが置かれている現象として考えることができる．しかし *regretter* は，経験者が目的語に置かれる統語構造を取ることはできない．これが「悔やむ」という意味的特徴に動機づけられているのか，あるいは別の要因によるのかという問題を検討する必要がある．そのことに関連して *regretter* タイプの動詞がどのようなイベント構造を持つかという問題も合わせて考察する必要があるだろう．

感覚事象を表す (2) では，原因となる事象が完全に背景化されているので，(1b) とはまた異なる特徴を持つ．本研究で扱った現象では，感覚をもたらす原因は，風，煙，衣類など，特定しやすい原因を含む例であったが，(2) が表す暑さや寒さなどは，その場全体が感覚の原因となっており，原因として認識するにはあまりにも漠然としている．(2) において原因が言語化されないのは，単に原因が背景化されているということではなく，そもそもの原因が特定しにくいという性質に起因すると考えられる．このことは，(2) が天候や気温を表す非人称

構文 (e.g. *Il fait {chaud/froid}*. 'It is {hot/cold}.') と交代可能であることと何らかの関連性を持つと考えられる．しかし，〈原因〉→〈結果〉という認知構造では，非人称構文との接点も含めた感覚動詞の広がりを捉えることは難しいだろう．この問題を考察するためには，ビリヤードボールモデルという力のやり取りに依拠した事象の概念化モデルとは別のモデルを検討するところからはじめる必要があると考えられる．

残るは (1a) のような現象であるが，このタイプの現象はさらに別の問題を孕む．というのも (1b)，(2) では，発話時において，経験者が悔しい，暑いと感じていることを表し，アスペクト的には一時的状態 (transitory state) である．ところが (1) のように好悪に関わる事象は，発話時にのみ成立するような事象ではない．(1a) は，(1b)，(2) と同じように状態アスペクトであると考えられるが，それは一時的な状態ではなく，恒常的な状態 (inherent state) を表すと考えられる．つまり (1a) は〈いま・ここ〉において〈私〉が感じる心理ではなく，*Je suis française*. 'I am French.' と同じように主語に置かれる参与者の属性を表す．発話時という時空間的特徴を軸に心理の特性を考えるならば，*aimer* のような動詞を心理動詞と見なしてよいのかという問題が提起されることになる．この問題を掘り下げるためには，本論文で検討した表出と描写の区別を支える発話機能という概念をより理論的に整備する必要がある．

主語型心理動詞の問題に加えて，目的語型の感情動詞と感覚動詞の間にも考察すべき課題が残されている．本研究では，感情事象は全体に作用し，身体部分をプロファイルすることはなく，感情と感覚が明確に分けられるものとして分析を進めてきた．しかし痛みを感じることが，不快という感情として経験されることもあれば，不安などの感情が，胃の痛みとして経験されることもある．現象レベルで見ると，感情と感覚の間には接合点のようなものがあると考えられる．(3) のような現象はこのような特性の言語的現れとして捉えることができる．

(3) L'angoisse me tordait le ventre. (『ロワイヤル仏和中辞典』)
'The anxiety twisted me$_i$ in the stomach$_i$.'

第 5 章，5.6.節では，経験者が部分の与格表示される構文タイプ D の感情事象表現について論じたが，これらの現象が完全にイディオム化されておらず，わずかならも生産性を持つことにも，感覚と感情の関連性に関わる意味的動機づけが働いている可能がある．この点を明らかにするためには，通時的な変化も視野に入れて，*Ça me casse les pieds*. 'It breaks me$_i$ in the feet$_i$.'などの表現の成立メカニズムを検討する必要があるだろう．

以上の問題に加えて，理論面に関わる分析方法の課題も残されている．本論文

は，Langacker (1987, 1991, 2005, 2008) の構文観を枠組とするものであった．この言語観に従うと，lexicon と構文の間に明確な境界線を引くことはできず，言語的要素はどのような単位であれ，それぞれが 1 つの意味を持つ記号として連続性を持つものとして考えられる．便宜的な区別であるとはいえ，「転用型」というカテゴリーを設けるという方策は，心理動詞が構文レベルで発現する現象であるという本論文の主張に反して，その存在を再び構文とは切り離された lexicon の中に押し戻しかねないものであることを認めざるを得ない．つまり本論文が依拠するはずの言語観に背いてしまう可能性があることを意味する．この問題を解決するためには，扱う現象自体を再検討する必要がある．本論文では *frapper* (to strike) など，転用型の用法が定着しているもの (辞書において転用型用法が上位項目に記載されているもの) を中心に転用型の現象を論じたが，心理動詞性が生まれる構文論的条件を満たすならば，転用型の用法が定着していないような行為動詞も心理動詞として使用することができるはずである．実際，*pomper* (to pump) の転用型の用法は定着したものではないが，「退屈させる」という心理動詞として使用することが可能である．*pomper* のような定着度の低い行為動詞が心理動詞として使用される現象に注目することで，心理動詞が構文レベルで立ち現れてくるという本論文の主張をより確かなものとすることができるだろう．また，心理動詞用法が定着している動詞において心理動詞用法が定着するようになった通時的変化の研究も行うことで，構文論的心理動詞研究としてさらなる貢献が期待できるだろう．

参考文献

Arad, M. (1999), “What counts as a class? The case of psych verbs”, *MIT Working Papers in Linguistics* 35, 1-23.

Baker, M. (1988), *Incorporation: A theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press.

Barnes, B.-K. (1985), “A functional explanation about French nonlexical datives”, *Studies in Language* 9-2, 159-195.

Belletti, A. & L. Rizzi. (1988), “Psych-verbs and θ-theory”, *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.

Bloomfield, L. (1933), *Language*, Holt Rinehart and Winston.

Bouchard, D. (1995), *The Semantic of Syntax: A Minimalist Approach to Grammar*, University of Chicago Press.

Bühler, K. (1934), *Sprachtheorie*, Gustav Fischer Verlag. (脇坂豊・伊藤晃他訳 (1983)『言語理論：言語の叙述機能上巻』クロノス)

Carlson, N.-G. (1977), *Reference to Kinds in English*, Ph. D. thesis, University of Massachusetts.

Clédat, L. (1990), “*De* et *par* après les verbes passifs”, *Revue de Philologie française* 14, 218-233.

Coppieters, R. (1993), “La théorie conceptuelle de l’individu et son rôle dans l’analyse sémantique”, *Recherches linguistiques de Vincennes* 22, 7-30.

Croft, W. (2012), *Verbs: Aspect and Causal Structure*, Oxford University Press.

Croft, W. & D.-A. Cruse (2004), *Cognitive Linguistics*, Cambridge University Press.

Dahl, Ö. (1985), *Tense and Aspect Systems*, Basil Blackwell.

Dhorne, F. (1998), “La structure linguistique d’une sensation”, *Japon Pluriel 2*, Editions Philippe Picquier, 313-319.

Dowty, D. (1979), *Word Meaning and Montague Grammar*, D. Reidel.

Fillmore, C.-J. (1970), “The grammar of *hitting* and *breaking*”, R. Jacobs & P. Rosembaum (eds), *Reading in English Transformational Grammar*, Ginn, 120-133.

Givón, T. (1976), “Topics, pronoun and grammatical agreement”, C. Li (ed), *Subject and Topic*, Academic Press, 149-189.

Goldberg, A.-E. (1995), *Construction: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press.

Grimshaw, J. (1990), *Argument Structure*, MIT Press.

Gross, M. (1975), *Méthodes en syntaxe : Régime des constructions complétives*, Hermann.

Gruber, J. (1976), *Lexical Structures in Syntax and Semantics*, North-Holland.

Hale, K. & S. Keyser (1987), “A View from the Middle”, *Lexicon Project Working Papers 10*, MIT Press.
Haspelmath, M. (1999), “External Possession in a European Areal Perspective”, D.-L.Payne & I. Barshi (eds), *External possession*, John Benjamins, 109-136.
Herslund, M. (1988), *Le datif en français*, Edition Peeters.
林博司 (1993)「“Affectedness”について—その問題点と展望—」『日本語•日本文化研究』3, 大阪外国語大学, 49-66.
林博司 (1998)「二次叙述構文と拡大与格」『国際文化学研究』10, 神戸大学, 61-92.
平田一郎 (2001)「名詞」平田一郎・丸田忠雄著『語彙範疇(II) 名詞・形容詞・前置詞』研究社, 1-78.
Hopper, P & S.-A. Thompson (1980), “Transitivity in grammar and discourse”, *Language 56*, 251-291.
井口容子 (1989) 「拡大与格と体の部分の所有者を表す与格」『フランス語学研究』23, 63-73.
井口容子 (1993)「en の遊離と反対格仮説」『フランス語学研究』27, 19-26.
井口容子 (2000)「フランス語の分離不可能所有与格と拡大与格」『言語文化研究』26, 広島大学, 63-82.
井口容子 (2003)『フランス語の構文分析』駿河台出版.
井口容子 (2005)「所有の与格の諸相」『stella』24, 九州大学, 37-51.
Jackendoff, R. (1990), *Semantic Structures*, Cambridge, MIT Press.
Jackendoff, R. (1996), “The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even qualification in English”, *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 305-54.
ジョン・R. サール (2011) 山本貴光・吉川浩満訳『MIND 心の哲学』朝日出版.
影山太郎 (1996a)「活動動詞の意味構造」『人文論研究』45, 関西学院大学, 99-115.
影山太郎 (1996b)『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版.
川上夏林 (2013)「部分の与格構文にみる感覚動詞への意味拡張—対格構文との対比を通して—」『フランス語学研究』47, 1-15.
川上夏林 (2014)「フランス語の心理・感覚動詞再考—心理・感覚の主体とは何か？」『フランス語学研究』48, 1-18.
川上夏林（2015）「フランス語の心理・感覚動詞の意味構造と内的経験の認知パタンについて」『フランス語学研究』49，23-42.
川上夏林 (2018)「心理事象を表す部分の与格構文についての考察」『フランス語学研究』52，1-23.
Kayne, R. (1977), *Syntaxe du français*, Seuil.
Kuroda, S.-Y. (1973), “Where epistemology, style and grammar meet”, S.-R. Anderson

& P. Kipirsky (eds), *A Festschrift for Morris Halle*, Holt Rinehart and Willson, 337-391.

Lakoff, G. (1970), *Irregularity in Syntax*, Holt Rinehart and Winston.

Lakoff, G. & M. Johnson (1980), *Metaphor We Live By*, University of Chicago Press.

Langacker, R.-W. (1985), ‘‘Observation and speculation on subjectivity’’, J. Haiman (ed), *Iconicity in Syntax,* John Benjamins, 109-150.

Langacker, R.-W. (1987), *Foundations of Cognitive Grammar, vol.1. Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.

Langacker, R.-W. (1990a), ‘‘Subjectification’’, *Cognitive Linguistics* 1-1, 1-38.

Langacker, R.-W. (1990b), *Concept, Image, and Symbol: the cognitive basis of grammar*, Mouton de Gruyter.

Langacker, R.-W. (1991), *Foundations of Cognitive Grammar*, *vol.2: Descriptive Application*, Stanford University Press.

Langacker, R.-W. (2005), ‘‘Construction grammar: cognitive, radical, and less so’’, F.-J. Ruiz de Mandoza Ibáñez & M. Sandora Peña Cervel (eds), *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*, Mouton de Gruyter, 101-159.

Langacker, R.-W. (2008), *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.

Langacker, R.-W. (2009), *Investigation in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter.

Leclère, C. (1978), ‘‘Sur une classe de verbes datifs’’, *Langue françaises 39*, 66-75.

Legendre, G. (1989), ‘‘Inversion with certain French psych-verbs’’, *Languages* 65-4, 752-782

Levin, B & M. Rappaport Hovav (1995), *Unaccusativity : At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press.

Levin, B & M. Rappaport Hovav (2005), *Argument Realization*, Cambridge University Press.

McCawley, J. (1971), ‘‘Prelexical Syntax’’, *Report of the 22nd Annual Roundtable Meeting on Linguistics and Language Studies*, Georgetown University Press, 19-33.

McCawley, J. (1976), ‘‘Remarks on what can cause what’’, M. Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Construction*, Academic Press, 117-129.

Martin, F. (2002), ‘‘La préposition *de* du ‘complément d’agent’ des verbes psychologiques causatifs : un génitif’’, *Scolia* 15, 57-70.

丸田忠雄 (1998)『使役動詞のアナトミー』松柏社.

丸田忠雄・平田一郎著 (2000)『語彙範疇（II）名詞・形容詞・前置詞』研究社

松本マスミ (2002)「心理動詞と中間構文—Arad(1998a, 1999)の little v 分析による

1 つの帰結―」『大阪教育大学英文学会』, 大阪教育大学, 135-148.
益岡隆志 (1997)「言語表現の主観性」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版, 1-11.
Melis, L. (1996), "The dative in modern French", W.-V. Bell. & W.-V. Langendonck (eds), *The Dative: Descriptive Studies 1*, John Benjamins, 39-72.
Michaelis, L.-A. (2004), "Type shifting in construction grammar: an integrated approach to aspectual coersion", *Cognitive Linguistics* 15, 1-67.
三原健一 (2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社.
中島平三編 (2001)『最新英語構文事典』大修館書店.
中村芳久 (2009)「認知モードの射程」坪内篤郎他編『「内」と「外」の言語学』開拓社, 353-393.
中村芳久 (2016)「Langacker の視点構図と(間)主観性」中村芳久・上原聡編『ラネカーの(間)主観性とその展開』開拓社, 1-51.
中村捷 (2003)『意味論—動的意味論-』開拓社.
中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店.
西尾寅弥 (1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.
三宅健一 (2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社.
Rubio-Fernández, P., Wearing, C. & R. Carston (2015), "Metaphor and Hyperbole: testing the Continuity Hypothesis', *Metaphor and Symbol*, 30-1, 24-40.
Perlmutter, D.-M. & P.-M. Postal (1984), "The 1-Advancement Exclusiveness Law", D.-M. Postal & C. Rosen (eds), *Studies in Relational Grammar* 2, University of Chicago Press.
Pesetsky, D. (1990), "Experiencer Predicates and Universal Alignment Principles", unpublished manuscripts, MIT Press.
Pesetsky, D. (1995), *Zero-Syntax: Experiencer and Cascades*, MIT Press.
Pinker, S. (1989), *Learnability and Cognition*, MIT Press.
Postal, P. (1970), "On the surface verb *remind*", *Linguistics Inquiry*, 1-1, 37-120.
Postal, P. (1971), *Cross-Over Phenomena*, Holt Rinehart and Winston.
Pylkkänen, L. (2000), "On stativity and causation", C. Tenny & J. Pustejovsky (eds), *Events as Grammatical Objects*, CSLI Publications, 417-444.
Rappaport, M. (1983), "On the Nature of Derived Nominals", L. Levin, M. Rappaport & A. Zaenen (eds), Papers in Lexical-Functional Grammar, Indiana University Linguistic Club, 113-142.
Rappaport, M. & B. Levin (1988), "What to Do with Theta-Roles", W. Wilkins (ed), *Syntax and Semantics 21: Thematic Relations*, Academic Press, 7-36.
Ruwet, N. (1972), *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Seul.

Ruwet, N. (1993), “Les verbes dits psychologiques ; trois théories et quelques questions”, *Recherches Linguistiques* 22, 95-124.

Ruwet, N. (1994), “Être ou ne pas être un verbe de sentiment”, *Langue française* 103, 45-55.

Ruwet, N. (1995), “Les verbes de sentiment forment-ils une classe distincte dans la grammaire ?”, H.-B. Shyldkrot & L.Kupferman (eds), *Tendances récentes en linguistique française et générale*, John Benjamins, 345-362.

定延利之 (2000)『認知言語論』大修館書店.

佐藤信夫 (1987)『レトリック感覚』講談社.

Shibatani, M. (1985), “Passive and related construction: A prototype analysis”, *Language* 61, 821-848

Shibatani, M. (1996), “Aplicatives and benefactives: A cognitive account”, M. Shibatani& S.-A. Thompson (eds), *Grammatical Constructions, Their Form and Meaning*, Oxford University Press, 157-194

高橋亮介 (2008)「到達動詞と「瞬間性」に関する予備的考察」『ドイツ語圏研究』25, 上智大学, 27-46.

武本雅嗣 (2002)「概念化と構文拡張—中心的与格から周辺的与格へ—」生越直樹編『対照言語学：シリーズ言語科学 4』東京大学出版会, 145-160.

寺村秀夫 (1971) 「“タ”の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文論的位置づけ」『言語学と日本語問題』くろしお出版, 313-358.

谷口一美 (2004)「行為連鎖と構文I」中村芳久(編)『認知文法論II』大修館書店, 53-87.

Talmy, L. (1985), “Force dynamics in language and thought”, Papers from the parasession on causatives and agentivity at the Twenty-first regional meeting, Chicago Linguistic Society 21, 293-337.

Timberlake, A. (1985), “The temporal schemata of Russian predicates”, S.-F. Michael & R.-D. Bretch (eds), *Issues in Russian Morphosyntax,* Columbs, 35-57.

Togo, Y. (2006), “Les verbes de sentiment en français et en japonais : autour de la prédication épistémique”, J. Kawaguchi, K. Kida & K. Maejima (eds), *Cognition et émotion dans le langage*, Keio University Press.

角田太作（1991）『世界の言語と日本語 :言語類型論から見た日本語』くろしお出版.

Tsunoda, T. (1999), “Transitivity and intransitivity”, *Journal of Asian and African Studies* 57, 1-32.

Van Valin, R. -D. & R. -J. LaPolla (1997), *Syntax: Structure, Meaning and Function*, Cambridge University Press.

Vendler, Z. (1967), *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.
Verkuyl, H.-J. (1993), *A Theory of Aspectuality-The Interaction between Themporal and Atemporal Structure*, Combridge University Press.
Voorst, J.-V. (1992), "The Aspectual Semantics of Pychological Verbs", *Linguistics and Philosophy* 15, 65-92.
Voorst, J. van. (1995), "Le contrôle de l'espace psychologique", *Langue française* 105, 17-25.
Wasaw, T. (1977), "Transformation and the Lexicon", Peter, W.-C., T. Wasaw &A. Akmajian (eds), *Formal Syntax*, Academic Press.
渡邊淳也 (2007)「間一髪の半過去をめぐって」『文藝言語研究　言語篇』52, 筑波大学, 151-175.
Wierzbicka, A. (1979),"Ethno-Syntax and philosophy of grammar", *Studies in Language* 3-3, 313-383.
山岡政紀 (1998)「感情表出動詞文の分類と語彙」『日本語日本文学』8, 創価大学, 1-17.
山岡政紀 (2002)「感情描写動詞の語彙と文法的特徴」『日本語日本文学』12, 創価大学, 23-54.
山岡政紀 (2008)「発話機能の歴史」『日本語日本文学』18, 創価大学, 49-64.
山梨正明 (1995)『認知文法論』ひつじ書房.
山梨正明 (2005)『認知構文論：文法のゲシュタルト性』 大修館書店.
Zubizarreta, M.-L. (1992), "The lexical encoding of scope relations among arguments", T. Stowell & E. Wehrli (eds), *Syntax and Semantics 26, Syntax and the Lexicon*, Academic Press, 211-258.

実例資料

Camus, A. (1990 [1942]), *L'Étranger*, Édition Gallimard.
Boustani, C. (2010), *La guerre m'a surprise à Beyrouth*, Karthala.
Flasar, M.-M. (2014), *La Cravate*, Points.
Ogawa, Y. (2010), Makino-Fayolle, R.-M. & Kometani, Y. (trans), *Les tendres plaintes*, Actes Sud (小川洋子『やさしい訴え』文藝春秋).
Morgan, A. (2012), *Quelques nouvelles d'un mode sans étoiles*, Publibook.
Roze, P. (1996), *Le chasseur zéro*, Édition Albin Michel.
Sketch Engine: https://www.sketchengine.eu
田村毅・倉方秀憲・恒川邦夫編『ロワイヤル仏和中辞典　第 2 版』旺文社

Toussaint, J.-P. (2009), *Fuir,* Minuit.

Wataya R. (2005), Honnoré, P. (trans), *Appel du pied*, Picquier (綿矢りさ『けりたい背中』河出書房新社).

Wataya, R. (2013), Honnoré, P. (trans), *Trembler te va si bien*, Picquier (綿矢りさ『勝手にふるえてろ』文藝春秋).